
魔法少女ガラミン

からっかす

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女ガラミン

【Nコード】

N6195P

【作者名】

からつかす

【あらすじ】

女子高生が、変身魔法少女になって、化け物と戦う作品。

ドジっ子少女がおねえ様と出会い、彼女の前で転んだ事で、普通では見る事が出来ないモノが見える様になる。化け猫に触れられ、身の危険にさらされた彼女は魔法少女へと変身するのだった。彼女が魔法少女になった事で、おねえ様と友好的な化け物達と友達になり、勉強に苦しみながら、おねえ様と友好的な化け物達に囲まれ、のほほんと学園生活を送る話。現在の処、魔法少女に関する伏線はほとんど無く、ダラダラと学園生活と化け物達との交流を書い

ています。

登場人物

成美矢 朋 なるみや とも

高校一年生だが、中学一年生に間違われるぐらいに身長が低い。家の近くにある私立進学高校に何とか合格するも成績はドベに近い。運動オンチ。

桜間 美由 さくらま みゆ

私立進学高校に通う高校三年生の女性。ウドの大木で、性格はおとこ女。目立つのが苦手で、目立たない様に本人なりに努力しているが、身長の高さと良くドジを踏むため目立ってしまう。考え方がおっさん臭く、ファッションに全く興味が無い。ひたすら勉強と自主トレを行い灰色の高校生活を送っている。

芹ヶ野 加奈 せりがの かな

1年女子。怪しげな噂をばら撒く。

鈴木 あずさ

1年女子で朋の友達であり同じクラス。現代社会が得意

佐藤 絵里 さとう えり

1年女子で朋の友達であり同じクラス。朋を撫でたがる。

田中 佐和 たなか さわ

1年女子で朋の友達であり同じクラス。美由より身長が高い。胸が豊満

須王寺 麗菜 すのうじ れいな

学園最大派閥の長ちやう

近藤 ジェミニこんどう

学園2番目の派閥の長ちやう

日本人とイギリス人のハーフ

片奈 麻奈加かたな まなか

学園3番目の派閥の長ちやう

桐野 舞奈きりの まいな

3年。体育を除いては学年トップのガリ勉少女。

おねえ様との出会い

私立武沱^{むはんべつ}辺津高校という学校がある。

この学校がある県では、それなりに名の通った私立の進学校だ。関東の場合は公立より私立の方が人気があるらしいのだが、武沱^{むはんべつ}辺津高校がある県では私立より公立の方が人気があり、ある程度の私立高校が公立に落ちた場合の滑り止めとして扱われている状態だった。

そういつた公立に行けなかった場合の保険という立ち位置から抜け出すため、私立高校は独自ブランドの確立にやっきになっているが、一流大学まっしぐらの勉強漬けの学校や、スポーツがやたら強い学校や、箱入り娘が行くための女子高、看護系の女子高や、やたらお金がかかるおぼっちゃん学校ぐらいのもので、県下にある大抵の私立高校がその立ち位置から抜け出せずにいた。

この武沱^{むはんべつ}辺津学校もそう言った側面から抜け切れておらず、近くにある公立の普通科より上へ行ける学力はあるものの最上位の高校に行くまでではない人たちが通う学校という感じであった。

武沱^{むはんべつ}辺津高校は共学であるが、女子に人気があり、男子と女子の比率が3：7と、女子が圧倒的に多い状態にある。それにはそれなりに理由があり、こちら辺で頭の良い女子が公立以外で行きたい学校となると、この学校ぐらいしか無いというのがあった。

武沱^{むはんべつ}辺津学校より学力が上の高校は、私立では男子校か元男子校ばかりで、男子校に女子は行けないし、元男子校は女子に人気が無いため、どうしても頭の良い女子がこの学校に集中してしまうのであった。

それにこの学校の外観が女子が好みそうな感じであるのも女子が集まる理由であった。校舎は白いヨーロッパ風の造りで、学校の外周はブロンズ製の唐草の装飾がなされたフェンスで囲まれていた。

私立武沱^{むはんべつ}辺津高校は街から少し離れた山手に建っており、周囲に

あるのは道路と草が伸び放題の荒地と山ぐらいのものである。

こんな郊外に建っているために近くに駅はなく、徒歩で15分程歩く必要があった。ただ、学校の横には国道が通っており、当然、市営バスも走っているの、そこまで交通の便は悪くなかった。

ゴールデンウィークが終わり、中間テストを目前に控えた平日の金曜、私立武汎^{むはんへつ}辺津高校では、持久走大会が開かれていた。

この学校がある地域での持久走大会は3学期の寒い時期にやる処が多いのだが、武汎^{むはんへつ}辺津高校は大学進学を売りとしている私立なので受験に影響が出る三学期を避け、まだ暑くないゴールデンウィーク明けに開催することにしていた。

この学校の持久走大会は、男子が20Km女子が15Kmの距離を走り、校庭からスタートして学校の裏手にある山へと向かって走り、山中に設定された折り返し地点まで行って、また学校へと戻って来るコースを走る。山の中を走ることになるので、当然、高低差が多い坂道ばかりになっており運動慣れした人でも結構ツライ道のりであった。コースの難易度が高い事は皆理解しているので、活躍出来ればヒーローになれるので運動が出来る人たちは張り切っているが、それ以外の生徒にとってはただ憂鬱でしかないコースだった。

男女共に既にスタートが切られており、生徒達は山道を走り続けていた。

武汎^{むはんへつ}辺津高校の体育服は、汗をたっぷり吸っても大丈夫な厚手の白い生地で、左の胸元には学園のマークと自分の名前が縫い付けられている。男子用の体操服は紺色の丸縁で、女子用には襟がついている。下は男子がゴワゴワの紺の短パンで、女子が柔らかい紺色の短パンである。

そんな学校指定の体操服に身を包んだ人たちの中に成美^{なるみ}矢^や 朋^{とも}と
いう女の子が走っていた。

彼女はこの学校の1年生であったが、高校1年生というより中学1年生に見える外見をしていた。背は低く、運動をあまりしていない。髪は黒髪で腰まであり、髪質は細くポリウム感の無い綺麗なストレートヘアで、髪を一本に束ねてポニーテールにしていた。

朋は、馬のしっぽのような髪を左右に振りながら、荒い息遣いで走っていた。

彼女なりに一生懸命走っているのだが、後ろから簡単に数えられる順位であった。

後ろにいる生徒は、最初からやる気が無く、教師が見ている処以外では歩きを決め込んでいる人達ばかりで、最初から歩いている人達と大して変わらないので、泣きそうになっていた。

『あー。みんな、一緒に走ってくれてるって言ったのに、先に行っちゃったよー。私なりに一生懸命走っているのに。』

朋は、遅くても、みんなでゴールすれば憂鬱な気分にならないですむという希望を抱いていただけに、自分だけ置いてけぼりにされたガツカリ感は相当なものだった。

朋は足を止め、前かがみになり、目蓋を閉じて荒く呼吸をする。

汗だくになった顔からポツポツと汗が滴り落ちて行くのを感じた。『すぐ、苦しくなって、足が止まっちゃうよ。みんな、何であるに走り続けられるんだろう?』

立ち止まっている朋の横を折り返してきたトップの女子が走り抜けていく。

朋は目を閉じていたが、足音とすれ違う時に起こる風圧でそれを感じ取っていた。

『私、まだ5キロしか走ってないのに、もう帰ってきたんだ。』

そう考えているうちにも、何人かの女子生徒が朋の横を走り抜けていく。

朋は走らなきゃと思うのだが、なかなか足が前に出なかった。

その時だった。

今まで走っていた一人が足を止める。

「大丈夫？」

それは、女性の声だった。

朋は目を開け、汗だくになった顔を手で拭い、声がした方に顔を向けた。

そこには身長が高めの女子が立っていた。

彼女は高校生にしては少し大人びた綺麗な顔立ちをしており、顔にはそれなりに汗をかいていた。セミロングの黒髪を後ろに2本に束ねていて、Dカップはありそうな胸の上に桜間さくらま 美由みゆと刺繍が縫い付けられていた。

高い身長と大人びた顔立ちは、中学生にしか見えない朋にとって素敵なおねえさんに見えた。

『王子様みたい・・・。』

朋は無言で、ボーっと彼女の顔を見つめていた。

「本当に大丈夫？」

背の高い女性は、何もリアクションを起こさないうで自分を見つめている小さな少女に聞き返した。

「だ、だ、大丈夫です。わ、私、走るのが苦手で、息があがって・・・その」

背の高い女生徒は可愛らしく慌てる朋を見て、笑みを見せる。そして短パンにあるポケットからハンカチを取り出して朋にそれを差し出した。

「はい」

ハンカチを握った彼女の手は、朋ともの手より大きな手で、安心する手だと感じた。

「あ、ありがとうございます」

朋はハンカチを受け取り、汗だくになっている自分の顔を拭ふく。

「じゃ、頑張つて」という言葉を残して彼女は走り出した。

朋は美由のハンカチを持っていたことに気づく。

「あ、待つてください・・・。」

そう言いながら美由を追いかけ様とした瞬間に足がもつれて、何の抵抗も出来ないまま大きな音を立てて道路に倒れ、おでこをぶつけてしまった。

その音に気づいた美由は振り返ると、そこにはハンカチを握り締めながら、つぶれたカエルの様に倒れている朋がいた。

美由は朋のもとへ走り寄り、彼女を包み込む様に腕を回して、うつぶせになっている朋を仰向けにする。朋は痛さをこらえて、まぶたをぎゅーっと閉じており、おでこには傷ができていた。

朋は美由の柔らかい体に抱きかかえられながら、申し訳ない気分です。はいになった。

美由は上位を走っていたのに足を止めさせたうえに、自分のドジで心配をかけさせている。

朋は、片目を開けて「ごめんなさい、せつかく前の方を走っていたのに」と、申し訳なさそうに答えた。

「気にしない。それより、おでこに傷ができてる。」

美由は朋の手に握られていたハンカチを手にとり、朋のおでこにある傷口に充てた。

朋は自分の左手をおでこに持っていき、ハンカチを押さえる役を変わる。

フリーになった美由の手は人差し指を立てて、ハンカチに優しく触れ、指の先で撫でながら「痛い痛い飛んでけー」と呪文をかけた。すると不思議とおでこの痛みが和らいだ気がした。

「なんてね。」

そう言いながら美由は笑顔を浮かべた。ちょっと恥ずかしそうにしている美由の笑顔を見て、朋も自然に笑顔になった。

「それより、立てる？」

「はい、大丈夫です。」

朋はそう言っ、ゆっくりと起き上がった。

「駄目なら、先生のところまで付き添うけど。」

「大丈夫です。最後まで頑張ってみます。」

「そう、無理をしないでね。」

美由は、学校の方へと走り始めた。

朋は逆の折り返し地点に向かって、ハンカチでおでこを押さえながら、ゆっくりと歩きはじめた。

彼女は少しおでこに痛みを感じながらも、ニヤケていた。

「えへへ、素敵なおねえ様にあつちやつた。」

釣りをしているカエルと噂好きの少女

朋は息を切らせながら山道を歩いていた。

先ほどコケて怪我をした事と、目の前に延々と続く上り坂を目の当たりにすると走ろうとする気持ちが折れてしまうのだった。

彼女が今いる場所は、アスファルトで造られた道路と杉林が広がる以外は何も無い処で、歩いても歩いても似たような風景が延々と続く。

道の勾配が結構あり、カーブが多いために遠くまで道が見えず、カーブを曲がっても曲がっても、まだ、女子の折り返し地点は見えてこなかった。

随分前から、男子が朋の横を走り抜けていた。男子の折り返し地点は女子より2・5 Km程遠くであり、そこから折り返してきた男子が戻ってきたのだった。

女子のすれ違う人達は、走り疲れて歩いている人ばかりになっている。

少し前に、朋の友達3人とすれ違って「朋がんばれー」と応援して貰ったが、3人とも仲良くしゃべりながら歩いていたので、正直、羨ましかった。

機械的に山道を歩き続けていると、道路の一部が橋になっている場所が見えた。

橋の下には小さな川があり、綺麗な水が流れていた。

ずっと似たような景色だったので、自然に川の方に目が行く。朋は、そのまま水の流れを見ながら橋を渡っていると、何かが気になった。

不思議に思い、よく見ると、川岸に何か茶色い塊の様なものがあることに気づいた。

その塊を、よく確認してみると、それは30センチはあろうかと

いう大きなガマガエルだった。

大きなガマガエルと目が合い、朋の足は自然に止まる。

『このカエルさん、何か変だ。』

このガマガエルは大きいだけではなく、あぐらをかき、釣りをしているのだった。

白いブヨブヨとしたお腹をさらし、球状になった指先で竹の枝を握り糸を川に垂らしている。

カエルは動かなかった。

朋は動かないので陶器の置物かと思ったが、表面はヌメヌメしているし、良く見ると口が反芻するように僅かにモニュモニュと動いている。

『生きてる……。』

この謎のカエルの発見に朋はプチパニックを起こし、どうして良いのか判らず、動く事が出来ない。

カエルはカエルで蛇に睨まれたカエルの様に動かない。

お互い、その場から動けず、見つめ合いを続けていると、朋に誰かがぶつかって来た。

朋は「っは」となり、ぶつかって来た相手の方へ振り返る。

「痛いなあ。そんな処にボーっと、突っ立てないですよ。」

朋の後ろを歩いていた女子生徒の一人がぶつかってきたのだった。

「ご、ごめんなさい。大きなカエルがそこにいたんで……。」「

「カエル？」

女子生徒は朋が先程まで見ていた場所を見るが、そこには何もいなかった。

「そんなの、いないじゃん。」

「え、そんな」

朋はカエルが居た場所を見返すが、確かに居ない。

「え、確かに大きなカエルさんが釣りをしてたのに。」

朋のその発言に、相手の女生徒は、ピンと来てない様子だった。

「変な事言うわね。走り疲れて、幻でも見たんじゃない？」

朋は自分が変な目で見られている事に気づき「気のせいだったのかな？」と、とぼけた。

「それより、あんた、一緒に走らない？走りというより、歩きだけ。しゃべる相手がいないと、ほんとやってられなくて」

正直なところ、あまり気乗りはしてなかったが、断るほど嫌な気持ちがあつたわけでもないの、彼女の誘いを受け入れ、一緒に走る事にした。

朋は彼女の胸に刺繍された名前を覗きこむ。

そこには「芹ヶ野 加奈」と書かれていた。

「お、おのがの・・・さん？」

「違う違う『せりがの』『せりがの かな』」

「ごめんなさい。」

「気にしない、気にしない。良く間違われるから慣れっこよ。」

「わ、わたしは・・・。」

「知ってる。成美矢朋でしょ。」

「何で私の名前？」

「ああ、あんた、1年の女子で結構、噂になるから。」

「え？私？」

「ドジで伝説を作る少女ってんで、結構、有名よ。」

「あー」

「と、言うより、入学式の時コケて、全校生徒の前でパンツ見せとして、名前が知られてないとも思ってた？」

朋の顔が赤くなり、下を向く。

「忘れてたのに。」

「まあ、今どき、パンツぐらいで気にする必要ないって、3年生の一部なんて、普通に立っているだけでパンツ見えてる人とかいるし。」

「あれは凄いやね。恥ずかしくないのかな？」

「さあ、でもあれって、多分、仕立て屋に頼んだ時に採寸間違えて、短くし過ぎただけだと思うよ。あそこまで短くしていると折っ

てるわけじゃないだろうから、一度、切ってしまえば元には戻せないし。スカート高いから買いなおすのも難しいしね。」

「そう、だよね。」

「私、ミニには憧れるけど、あのデッカイパンツが出るまでミニにするのは嫌だな。」

「だよねえ。」

「あれって、見てて見苦しいわよね。私なら、少し前に、かがんだぐらいでは、パンツは見えないぐらいの丈にするね。」

「私は今の丈のままでもいいかな。」

「そんなことより、あんた桜間先輩と話してたでしょ？知り合い？」

「違うよ。私が足を止めて辛そうにしていたら、声をかけてくれたの。その時、転んじゃって、おでこに怪我したの。」

朋は前髪を掻き揚げる

「ほら」

加奈は朋のおでこをジーっと見つめる。

「赤くはなってるけど、怪我なんてしてないじゃん。大げさだな

ああ。」

「え、だって」

朋は自分のおでこを撫でるが、確かに傷ができている感触は無い。朋はポケットにしまったハンカチを取り出し確認すると、確かに血がちょんちょんとついていた。

『血はついてるのに、傷が無い……。』

これ以上、変な子と思われるのも嫌なので、反論しない事にした。

「えっと、加奈ちゃんでもいいかな？」

「お、いいよ。私も朋ちゃんと呼ぼう。」

「桜間先輩の事、知ってるの？」

「ぜんぜん」

「だって、名前、知っていたし。」

「ああ、私、噂好きなのよ。人の情報を聞くのも良いんだけど、自分で探して人に教える、あの喜びのために学園生活を送っている

と言っても過言ではないのよ。」

「そうなんだ。」

「えっへん。で、学校に入ってすぐに、話題に上ったら面白そう
な人は、全員、顔と名前は覚えたわ。」

「凄い情熱の傾け方だね。その中の一人が、桜間先輩なの？」

「そう、あの人、美人じゃん。絶対、面白そうなおネタがあると思
ったんだけど、今のところ特に無し。あれだけの美人なら男どもか
ら告白されたとか、ありそうなんだけど、それも皆無。」

「へええ、もてそうなのに。」

「そんな時、ひ弱そうな女の子を抱きかかえている桜間先輩がい
るじゃん。これは事件よ。」

「あー。」

「ま、そんな事より、折り返し地点と先生たちが見えたわよ。話
は後、先生の前では走ってるフリをしないと。ほら行くよ。」

二人は、ゆっくりと折り返し地点に向かって走り出した。

恥ずかしがりな女の子

桜間 美由（みゆ）は一恥ずかしがり屋な女性だった。

そのゆえに出来る限りスポットライトを浴びたくないと思っており、彼女なりに目立たない様に努力していた。

美由が目立たない努力をしているのには性格的な面もあるのだが、それとは別の理由もあった。

彼女には不思議な力がある。

美由は自分の小さな世界を守っていきたくて考えており、この力を誰にも知られてはならないと思っていた。そのためには目立たない様にして生きていくのが一番だと考えていた。

しかし、美由のそんな考えとは裏腹に彼女は目立つ女性であった。なにせ、彼女は女子の中では背が高く、それなりに人を引きつける容姿をしているために、ただ、立っただけで目立つのであった。

それに、彼女はどこか抜けており、失敗を良くしてしまう処があった。そのためにも思わぬ処で人の注目を集めてしまうのだった。

そのたびに恥ずかしい思いをするので、ますます目立ちたくないと思うようになっていた。

持久走で上位に入ると目立つと判断した美由は、丁度良いところに、気分の悪そうな少女を見つけて順位を落とすきっかけを手に入れた。

そのため、30番目という目立たない順番でゴールする事ができた。彼女の的にはこのまま持久走大会が終わる予定でいたのだが、ゴールした直後に美由に話かけてくる人物がいた。

「桜間さん。お疲れ様。」

声の主は、須王寺 麗菜というクラスメイトだった。

彼女は美由と親しい仲ではない。と、言うより、なるべく近づき

たかないので、美由は距離をとっている人物だった。

須王寺^{すおうじ} 麗菜^{れいな}はお人形さんみたいに綺麗な女性だった。

綺麗な白い肌で、少々キツイ性格という印象を与える顔立ちをしていおり、肩まである髪の毛一本一本は太く、軽くパーマがかかっているためポリウムがある綺麗な黒髪をしており、美由ほどではないが、女子の中では背が高い方で、体格は普通ぐらいだが背のおかげで細身に見えた。

また、一番ではないものの運動も勉強もかなりの上位におり、生徒会の副会長で、この学校女子内に存在する派閥の長をしていた。そういった彼女の外見や能力や地位だけでも十分に目立つのだが、話術や立ち振る舞いに華があり、そこにいるだけで自然に人の注目を集める女性だった。

美由は彼女が嫌いではないし、「素敵だな」と憧れも抱いているのだが、なるべく目立たない様に生きて行きたい美由にとっては近くにいたくない人物であった。

「ありがとうございます。須王寺^{すおうじ}さん。」

美由はちよつと壁のある感じでそう答えた。

「聞きましたわよ。」

須王寺^{すおうじ}は意地悪な笑みを浮かべながらそう言った。特に心あたりのない美由はキョトンとした顔で彼女を見て、一拍空けて口を開いた。

「何をですか？」

「転んだ一年の女子を、お姫様抱っこして、起こしてあげたそうじゃない。」

一瞬、美由は須王寺^{すおうじ}が何を言っているか理解できなかった。

「はい？」

「女子の間で、さつきから噂になってますわよ。桜間さんが王子様のように、かわいい女の子をいたわってあげていたと。」

美由はその言葉を聞いて頭が真っ白になった。

美由には不思議な力がある。

そのひとつに自分を視認し難くするという能力があった。

この能力を使っている間は、他人は彼女の存在に気づかない、または誰か居るぐらいにしか思わなくなるのだが、積極的に何かを探そうと感覚を研ぎ澄ましている人や、自分に注目している人物に対しては、ほとんど効果がなかった。実際は、自分を積極的に探しても、ほとんど認識出来ないぐらいまで存在を消す事もできるのだが、今の美由にはそこまでは出来なかった。

美由はこの能力を使い、目立たない様に高校生活を送ってきた。女子にしては身長がある彼女が目立たずに来れたのも、この能力のおかげだった。でも、今はこんなに注目を浴びているため、能力を使って逃げ出す事が出来ない。

それに、今の状況は美由にとって好ましくなかった。このまま放置しておくわけにはいけないので、どうかして解決しなければならぬ。

『私が王子様でか弱い少女をお姫様だっこしたって、明らかに話に尾ひれがついている。ひとまず、尾ひれだけは修正しとかないと』

美由は軽く息を吸い、話はじめる。

「あ、あれは、彼女の体調が悪そうだったので、先生の所まで連れて行こうと声をかけて、その時、ハンカチを貸してあげて、彼女がハンカチを返そうとしたとき転んでしまっただけで、その時、起こしただけで、お姫様抱っこ何かしてません。」

美由の反論した後、周りにいた女子から「キャー」と黄色い声が聞こえた。

『なぜ？黄色い声・・・？と、いうより、周りの子たち、距離をとっているフリをしながら聞き耳立ててる・・・。』

「まあ、お優しいこと。あの時、私の少し後ろ、確か5番手ぐらいを走ってらしたのに。あのまま行けば、もしかすれば、私を抜いて3番ぐらいにはなれたかもしれないのに、それを捨てて、いたいけな少女を助けるなんて。」

美由は彼女のこの話を聞いて始めて自分のミスに気づいた。順位よりこっちの方が、より目立つ行為だったことに。

須王寺すおうじにしてみれば、体調が悪そうな彼女の姿を見ているわけで、彼女に手を差し伸べるよりも、順位を優先した事になる。

そんな中、順位を捨てて体調の悪い少女に手を差し伸べた人がいて、その人物が噂になっているとなると、彼女の心境が良いはずがない。

派閥の長である彼女が派閥の統制を保つためには自己の能力の優位性をアピールして周囲をねじ伏せる必要がある。

だから運動能力の優位性を証明する持久走大会の順位は彼女にとつては重要なものなのだ。目論見が間違っていたとはいえ、目立たないために順位を簡単に捨てられる美由とは価値が違うのだ。

美由はあくまで打算でやった事であつて、決して褒められるような行為ではない。その事を自覚しているだけに、心がイタかつた。

「あんた、本当に何も知らないのね？」

芹ヶ野せりがの 加奈かなは、一緒に歩いてる朋ともに、そう言った。

2人は折り返し地点を通過して、学園へと向かい、下り坂を歩いている。

加奈が言っているのは、学校の女子内に出来ている勢力図の話だった。

朋は友達と毎日楽しくできたらそれで良いという考えしか無かったので、自分がいる仲良しグループの外の状況にはあまり興味が無かった。それに入学してまだ一ヶ月ちよつとしかたっていない。そんな感じだったので、学校内の内輪ルールを知るはずもなかった。

「まあ、いいわ。女子は群れたがる生き物だから、当然、仲良しグループというのが出来るわけ。それとは別に一定の目的を持って

集まる派閥ってのがあるのよ。」

「はああ……。派閥……。そんな昔の少女漫画みたいなの。」

「まあ、そういうツツコミは無しの方で、厳然とウチの学校にはあるんだし。ひとまず、ウチの学校の女子の一部は同じ考えを持つ人が集まって大きな組織を作っているのね。」

「その人たちって何で派閥を作っているの？」

「さあ、詳しくは知らないけど、人数を集めればそれなりに力があるじゃん。力と言っても暴力とかじゃなくて、発言する時とか、それにトラブルとかあれば派閥に頼る事が出来て便利じゃん。」

「そつか。えーと、その人たちって、普段、何かしてるの？」

「部室棟に大きな部屋があるんだけど、そこで良く集まってお茶会とかしてるわね。」

「そんなことして先生に怒られないのかな？」

「大丈夫みたいよ。良くは知らないけど、大きな派閥については、学校側も認めているみたいだし。」

「へええ。先生たちを納得させるぐらい力があるんだ。」

「大きい処はそうみたいだね。」

「でも、良くそんなに人数を集められるね。」

「ああ、この学校の派閥は組織がしっかりしていて、中心となっていた生徒が卒業しても、残った生徒が派閥を引き継ぐみたいだよ。」

「引き継ぐ？」

「派閥の人集めをするにしろ、派閥をまとめるにも、権威つてのが必要なのよ。」

「権威？」

「歴史があるってだけで、派閥に箔がつくでしょ。人数だって最初からある程度引き継げるわけだし、歴史があれば、派閥内にかき混ぜる人が出てきても壊れ難いしね。言ってみればブランドよ。良く、テレビで女性コメンテーターが男は権威に弱いなんて言っているけど、別の特集で、ブランドを買いあさる女を見てると、女も

充分、権威に弱いと思うよ。」

「あはは。」

「実際、歴史が無い派閥って、駄目になりやすいのよ。派閥を作ろうとして、駄目だった先輩を知ってるし。」

「へえええ。」

「で、今、学校内では大きい勢力が3つあるわけ。その中の最大勢力が須王寺麗菜おねえ様の派閥ね。」

「へええ。私、知ってる、生徒会の副会長さんだよ。綺麗な人。」

「そうそう、成績トップクラスで運動もトップクラス。まあ、少女漫画みたいに、どっちも1番じゃないけど、それでも総合すれば一番飛び抜けているから、歴史があって権威もある今の派閥を引き継ぐ事が出来たのよ。」

「なるほど。」

「朋ちゃん。この学校で華のある人は大抵、派閥に属しているから、覚えておいた方が色々とおもしろいと思うよ。」

「なるほど。そういえば、桜間先輩も派閥に入っているの？」

「ああ、あの人は派閥には入ってないのよ。私の情報網に引つかからないのも、そのせいなんだけど。」

朋は加奈と一緒にゴールを切った。

加奈は朋の肩を「ポン」と叩き「じゃあね。」と、言って、笑顔で手を振りながら去っていった。

その後、すぐに朋の友達の三人が朋に走りよってきた。

名前は鈴木 あずさ・田中 佐和・佐藤 絵里。3人はいじわるそうな笑顔を浮かべている。

「聞いたよ、朋。あの、クールな桜間先輩にお姫様だっこされたって。」

美由が須王寺すおうじした反論は意味をなさず、話に尾ひれがついていたままになっていた。

「お姫様だっこはされてないよ。転んだ時、起こしてもらっただけだつて。それより酷いよ。一緒にゴールしてくれるって言ったの。」

「はいはい、ごめん、ごめん。そのおかげで、桜間先輩に優しくしてもらえたんだから、むしろ感謝して欲しいくらいだ。」

「あうー。」

持久走大会が終わり、解散となった。

桜間美由は、学校指定のジャージ姿で、肩を落とし、存在を薄くする能力を使いながらトボトボと校門を出た。

「つかれた。」

美由の口から思わず、独り言が漏れた。

ゴールした後須王寺すおうじと話していると、他の三大派閥の長の二人もやって来て、三人で自分を褒めてながら、色々と聞いてくる。褒められ慣れていない自分にとって、褒められることが苦痛であったし、高嶺の花の人達との会話も苦痛だった。何より苦痛だったのは、静かなる派閥争いの中心に立たされている事だった。まるで、針のむしろに座らせられている様な気分だった。

正直、すぐにでも逃げ出したいと思っていたのだが、不仲であると思われるわけにもいかないのが来るまで待つしかなかった。

美由はため息をついた後、顔をあげて、両手でぽっぺを叩く。

「さて、うちに帰って勉強しないと。」

ハンカチの染み抜き

朋はウチに帰って来た。朋のウチは少し古くなった公営住宅の団地の中にあつた。

朋はウチの入り口の扉を開ける。

「ただいまあ。」

「はあああい」

間髪入れずに母親の声が聞こえた。

「ママ、帰ってきてるの？ねえ、染み抜きのやり方教えて？」

朋は美由にハンカチを返すのを口実にして、お近づきになるため、自分で洗濯しようと考えていた。

中学校の時の技術の家庭科時間に一応、染み抜きを習ったが、洗濯なんてほとんどママに任^{まか}せっぱなしだったので、全く身につけていなかった。

「染み抜き？」

「うん、今日の持久走大会で、ハンカチ借りたの。ちょっと、汚れちゃったから洗濯して返そうと思って」

「はいはい、良いですよ。お風呂場で待^まってなさい。」

朋は玄関の横にあるお風呂場に入る。

お風呂場は白いタイルが張られており、ぎゅうぎゅうになれば、何とか大人二人が入れ^はる洗い場と、足を伸ばすことが出来ないユニットバスがあつた。

お母さんは染み抜きの道具を持って、お風呂の入り口にまでやってくる。

「ママ、これなんだけど」

そう言つて、朋は母親にハンカチを見せた。

「あら、ちよつとだけど、血がついてる。あなた転んだの？」

「うん、その時、ハンカチを貸してもらつて」

「そう、でも、どうしようか。血つて、薄くは出来るけど、あん

「まり落ちないのよね。」

「そうなの？」

「まあ、やるだけやってみましょう。」

「うん。」

母親は、食器用の液状洗剤と、洗濯機用の粉洗剤を朋に渡す。

「その二つを汚れている場所の裏と表に塗りこんで」

朋は言われた通り通り小さな手で塗りこんでいき、母親に二つの洗剤を返す。

今度は母親が先が開き切った歯ブラシを渡す。

「これで、汚れをゴシゴシこすって見て」

朋はゴシゴシと歯ブラシでこする。

「それくらいでいいかな？ 一度、水洗いして。」

朋は蛇口をひねり水でハンカチを洗い確認する。

「ちよつと、落ちたけどあんまり落ちないね。」

「血だからね。でも、もう少し頑張ってみましょ。また、洗剤を塗りこんで」

「うん」

母親は今度はヘラを渡してきた。

「これで、表面を掻き落としてみて。」

やっってはみたが、あまり落ちない。

「うーん。後は漂白剤を使うしかないわね。幸い白のシンプルなハンカチだし。原液を汚れに垂らしてみましょ。水で濡らしているから、原液でもそこまで生地は痛まないと思うし。1時間ほど置いて駄目ならそれ以上は無理だから。」

「はい。」

「ちゃんと、1時間したら水洗いして、洗濯機の中に入れとくのよ。漂白剤は生地を痛めるから、ママしらないわよ。」

「わかった。」

夜にカエルと話をする。

夜になっていた。

桜間 美由は、白いピッチリとした長袖のランニングシャツと、白の玉虫色に光を反射するウインドパンツという姿で、持久走大会の時のコースと同じ坂道を走っていた。

美由は格好から入るタイプではないし、ファッションにこだわるタイプでもない。でも、こういう風に格好を決めて走るのには、彼女なりの理由があった。

正直、学校指定のジャージでも良いと思っているくらいなのだが、それでは問題があった。

まず、学校みんなに走っている姿をあまり見られたくないというのがあったので、「その学校の生徒です」と主張する格好は出来ない。

美由の能力である、存在を薄くするという手もあるのだが、車に跳ねられる危険性があるので、その手は使えない。

当然、走っている姿をあまり見つけたく無いので、見え難い夜間を走る事になる。

この夜間というのが、また厄介で、夜間の車くるまというのは、そこに人間がいらないと思いこんで走ってくる事が意外と多く、早めに存在を認知させないと跳ねられる危険性があるのだ。だから、夜間でも発見しやすい白色を選んだ。

次に問題なのが警察で、明らかに体力づくりで走っていますという服装でアピールしながら走らないと、職務質問を受けることがあるのだ。

ピッチリした体のラインが出るシャツも嫌なのだが、汗をかくと緩みがあるシャツだと、濡れた感じが気持ち悪いうえに、汗を効率よく吸収してくれないので機能的にどうしても、ピッチリしたランニングシャツになるのだ。

正直、張り切ってますアピールをしている格好なんて、したくないのだが、しょうがなかった。

山道を走っていると、声が聞こえてくる。

「お嬢さん、こんな夜中に、女性の一人歩きは危険ですよ。」

美由の足が止まり、声がした方へ体を向ける。

「何です？蛙主^{かえるぬし}。」

そこには、今朝、朋が見た大きな茶色いガマカエルがいた。手には酒が入っている、ひょうたんが握られている。

「ふうっいいい。いやああ、お主はいつもここを走っているから、ここで待つておった。」

「そうですか。それより、今朝、女の子たちが走っているのを覗^{のぞ}いてましたよね？」

「覗^{のぞ}きとは失礼な。ただ、めんこい子たちが生足を出して走っている姿を見てみたかっただけじゃ。第一、堂々と見ていたぞ。」

「このスケベガエルが。」

美由は吐き捨てる様に言った。

「姿・形が違う生き物に欲情しないでください。」

「酷い事を言うのう。30年も生きていたら、ストライクゾーンも広がるのがわからんのか？」

「わかるわけがないでしょ。第一、年をとれば性欲は減退するのが普通でしょ。それに、堂々と見ていたって言ったって、あなた、普通の人間の目には見えないじゃないですか。」

「まあ、わしが長生きしたため化け物になれて、存在が薄くなっただから、まだ、こうして生きてられるじゃがなあ。せつかく、長生きして手に入れた力なんじゃから、使わなきゃ損じゃる。」

「やっぱり、覗^{のぞ}きの自覚はあるんですね。」

一瞬、会話が止まり、切り返すように蛙主^{かえるぬし}は話を始める。

「そうそう、で、お主に用事があったな。」

「何です？突然、話題を変えて。」

「お前さん以外に、わしの姿が見えていた女の子が一人おったぞ。」

「???。本当に消えてたんですか?」

「わしはお主と逆で、存在を強くする方が力を使うんじゃ。覗きのぞやっっているのにわざわざ、存在を強めるか。」

「そうでしたね。それと、やっぱり覗きだっただんですね。それで?」

「で、その女の子というのが、確か、お主がお姫様抱っこをしたとかいう女の子だったかな?」

美由が一瞬固まる。

「み、見てたんですか?てか、お姫様抱っこなんてしていません。」

「うんにゃ、若いカエルから聞いた。と、言うより、わしらの間で噂になってるぞ。」

美由は足の力が抜け、崩れ落ち、両手をアスファルトにつけた。

一瞬間が空き、美由は蛙主かえるぬしを、「つき」と、睨にらみつけた。

「てか、なんで、みんな、そう噂好きなんですか。それより、何で私があなた達の間で噂になっっているんですか。」

「そりゃ、暇だから?てか、いじると面白いから?」

「私を暇つぶしの道具にするのは辞めてください。」

「それは無理だろ。お主はわしら化け物の中では有名なうえに話題にし易やすいのだから。」

「くううう。」

「そんな事より、魔法少女の姿を見せてくれ。」

「………。なんですか?唐突に。」

「いや、目の保養に。」

「いやです。誰が、そんな理由であんな恥ずかしい格好に。」

「どうせ、これだけ平和だと、変身する必要なんて無いんじゃないか
ら、たまにはええじゃろ。」

「良く、ありません。」

「第一、魔法少女が活躍するような化け物の暴走があったとしても、むしろで何とかするから、そうそう出番なんて無いぞ。」

「嫌です。」

「しかたないのう。諦めるか。」

「当然です。」

「そうそう、最近、腰が痛いのだが、治してくれんか?」

「駄目です。と、言うより、私は軽い怪我が治せるだけで、腰痛は無理です。」

「役に立たん、魔法少女だの。」

「それを言わないでください。」

筋肉痛と補習の朝。

持久走大会の翌日の朝になった。

朋は目を覚さます前に、自分の体の不快感を感じる。

体が重いのだ。

眠気で目蓋まぶたを開けられない状態で自分の記憶を辿ってみると、昨

日、持久走大会があったことを思い出した。

「ああ、私、筋肉痛なんだ。」

幸い今日は土曜日なので学校は休みだ。

「良かった。ゆっくり休めるよ。」

と、言うよりも、持久走大会の疲れをとるために、休日の前日に持久走大会が設定されているわけだが。

そういう考えにいたり、朋は何の迷いもなく深い眠りにつこうと思ったが、その次の瞬間、体の筋肉痛とは違う不快感を感じた。

「朋、起きなさい。休みだからって、ダラダラしないの。父さんはとっくの昔に出かけたし、ママも、もう出るのよ。」

仕事へ向かうため準備を整えた母親が、ダラダラ寝ている朋をゆすっていたのだ。

「あー、ママ。昨日は持久走大会で、今、筋肉痛だから勘弁して。」

土曜日は普通、学校は休みだ。

でも、この学校のセールスポイントは、県内トップクラスでは無いものの上位に名を連ねる私立進学高校である。

大学進学率は学校命運を左右する大事なセールスポイントなのだ。そのため2年生の後半から土曜日は特別授業という名の受験に向

けた特別授業がある。

特別授業の建前は自由参加であったが実際は半強制であった。

実際の処、通常で設定されている授業時間では教科書レベルの基礎をやるだけで手いっぱい、大学受験をするには最低限、知っておかなければならない基本レベルや、地方国立大受験には必須になる応用レベルをこの特別授業でやるため、大学に行きたければ参加するしかないのだった。

美由はクラスでは現在、数学ではなく算数をやっていた。

「いいか？今日は数学ではなく算数の授業、小学校3年生レベルの授業をやる。」

教師は1m定規を取り出し、黒板に1mの線を引く。

「さて、その昔、円周率は3だと教えていた頃があったが、それ以外の時代では $3 \cdot 14$ と教えている。何故だか説明する」

教師は紐を取り出し黒板に描かれた1mの線を基準にして3mを計りハサミで切断した。

「この紐は3mある。少なくとも、黒板に描かれたこの線の3倍の長さではある。円の外周 \parallel 直径 \times π なわけで、 \parallel 3であるであれば、この黒板に描かれた1mの直線を基準にこの紐で円を作れば、円に見えるはずだ。」

教師は二人の生徒を前に呼び出し、3人がかりで黒板に描かれた1mの線を基準に3mの紐を使って円を描き、磁石で紐を固定するが、出来た円はかなりいびつな円であった。

完成した円は理論上は円にならなくてはならないはずなのに、どう見ても横長い楕円であった。

教師は紐を外し、定規で黒板に描かれた線の真ん中を求め、三角定規を使い直角を求め、それを基準にして1m定規を使い1m縦線を引いた。

黒板上には丁度真ん中で交わる横1m縦1mの十字ができていた。この縦横1mの十字線を基準に丁度3mの紐を使い円を描いてい

ると、四隅が丸みを帯びた四角ぽいものができた。

「まあ、ここの視覚で見て貰えばわかると思うが、直径を基準にして円周を直径の3倍で描くと、円に見えないわけだ。これってかなり致命的だと思わないか？」

月曜日の朝

月曜日の朝になった。

朋は、机の上に置かれたハンカチを手にとり、それを見つめ不敵な笑みを浮かべる。

「ふっふふ。これを先輩に返して、お近づきにならないと。」
そう言つて、ハンカチを学校指定のカバンに詰め込み、学校へと向かった。

美由は歩いて登校している。家は自転車で登校する許可が下りる距離にあるのだが、体力づくりのために歩きを選んでいいる。

校門の前で美由にとっては不思議な出来事が起こった。

「おはようございます。桜間おねえ様。」と、女子生徒から声をかけられたのだ。

美由は一瞬、何を言われたのか理解できなかった。

「おはようございます?」 「おねえ様?」

存在を薄くしているはずなので、普段なら挨拶あいさつすらされないはずなのだが、明らかに今、挨拶あいさつをされた。これは、要するに、自分に興味をもたれているという事を意味する。

しかも、いつの間にか「おねえ様」にされている。

返事をしないで悪い印象を持たれるのも嫌なので、引きつった笑顔無理やり作り「ごきげんよう。」と、片言で返事をする。そして言い終わった瞬間、「っは」とする。

『なぜ、おはようございます。でなく、ごきげんよう。と言つてしまったんだ私は。』

その場を立ち去ろうと、急いで歩く。

「まああ、見て、桜間おねえ様が、さっそうと歩いてらっしゃる。素敵ね。」

という声が聞こえてきた。

『いいえ、そんな事ございません。私は身長が高くて骨太な、ただのウドの大木でございます。』

教室につくまでの間に、何人かの後輩女子が挨拶をしてきた。

まさか、こんなに注目されているとは思っても見なかった。土日の二日間は3年だけだったので、気づかなかつたが、どうも一部の後輩女子の間で自分はおねえ様にされてしまっている様だった。

ホールルーム前だった。

朋は学校で仲良が良い、三人に囲まれていた。

鈴木 あずさ・田中 佐和・佐藤 絵里の三人だ。

「今日のお昼休みに、桜間先輩のクラスに行つて、ハンカチ、返しにしようかと。」

恥ずかしそうに3人の前でそう宣言をした。

「ほうほう、今、1年女子の間で人気上昇中の、あの桜間先輩にアタックするか。」

そう言ったのは、鈴木 あずさだった。

彼女はクラス内で身長順に並ぶ時、朋の後ろになるくらい背の子だった。このクラスの女子で朋が一番、背が低いので、当然、彼女も背が低い。でも、朋とくらべると2・3センチは違うので、朋から見れば、自分より背が高い子に違いは無かった。

「アタック、何て、しないよう。ただ、ハンカチを返しにいくだけだもん。」

朋は少し嘘をついた。出来ればお近づきになりたいとは思っていたが、恥ずかし過ぎて、とても言えない。

「それより、3年の教室に行くのか。3年の教室だと、われわれが覗きに行け無いではないか。」

田中 佐和はそう言った。

彼女はクラス女子の中では一番背が高い。3年の美由よりも背が高い。朋からみれば大人な女性の身長である。

朋的に彼女が好きな処は、朋の目線の高さに合わせて、かがまなともい事だった。

身長が低い事にコンプレックスを抱えている朋にとって、かがまねるのは、正直、屈辱だった。

「見にくなくていいよう。」

「でも、われわれが居なくて大丈夫か？」

そう言ったのは佐藤 絵里だった。

彼女はクラス女子の中では、真ん中ぐらいの身長だった。それでも、朋にとっては身長が高い子だった。

「大丈夫だってええ、一人で出来るよう。」

「心配だ。」

「心配だな。」

「うぬ、心配だ。」

ホームルームの鐘の音が聞こえた。

昼休みになった。

朋は仲良しの3人に見送られクラスを出る。

「朋、がんばれー。」

と、無責任な応援を受けた。

ドキドキしながら、3年の教室までやってきた朋は、たまたま、その時、クラスから出てきた一人の女子生徒に声をかける。

「あ、あの、さ、さくらま、先輩は居ますか？」

顔を認識しないまま、そう言ったが、声をかけたのは、学園最大派閥の長である須王寺麗菜おねえ様だった。

「あなた、桜間さんに、どういった用件なの？」

「あ、あの、持久走大会のときに、わ、私、転んで、その時、ハンカチを借りたので、そ、その。」

須王寺おねえ様は意地悪な顔をしながら

「桜間さん。持久走大会の時に、あなたがお姫様抱っこした女の子が来てるわよ。」

桜間 美由は別に人嫌いではない。

気の合うクラスメイトと休み時間に話すのは好きだし、イベント行事に参加するのも好きだ。

ただ、自分にスポットライトが当たるのが異常に嫌なだけであり、傍観者として、みんなの輪に加わっているのは好きだった。

昼休みに入り、お弁当も終わり、クラスで仲の良い友達と話しているところ

須王寺さんが大きな声で

「桜間さん。持久走大会の時にあなたがお姫様抱っこした女の子が来てるわよ。」

と、言ってきた。

美由の顔から笑顔が消え、無言になり、席を立ち上がって、ツカと教室の出口にいる須王寺さんの元へと移動する。

「なんでしょ？須王寺さん？」

須王寺は朋を指さす。

「この子が、あなたにハンカチを借りたから返したいって。」

「まあ、あの子が、桜間さんが助けた子？かわいい子ね。」

そんな声が美由の後ろから聞こえてくる。

彼女達の反応から自分が注目を浴びているのが判る。嫌ではあるが彼女（朋）には罪は無い。だが、よりもよって須王寺さんすおうじに声をかけなくてもとも思う。彼女がいる事でより注目度が増すではないか。ひとまず、テンパっている自分の頭を整理するため、一回大きく深呼吸をし、笑顔を作つて、彼女を見た。朋は緊張でガチガチになつて美由を見上げている。

『可愛い。』

と、思つた瞬間、自然に自分の右手が動き、朋の頭を優しく触れるように撫でていた。

「どうしたの？緊張しないで。」

「あ、あのおお。桜間先輩。持久走大会の時はありがとうございました。」「

「いえいえ、どういたしまして。」

『私が助けた子つて、こんなに可愛かつたんだ。』

朋は両手で握っていたハンカチを前に出す。

「あの、あの時、ハ、ハンカチ、借りたので、洗濯して返しに。」

美由は右手で優しく受け取る。

「ありがとうね。」

「あの、血がついてしまつて、それで、落とそうと頑張つたんですけど、あんまり落ちなくて、その、すいません。」

美由はハンカチを見る。確かに、血の跡が少し残っている。

「いいのよ。そんな事、気にしなくて。」

「あら、桜間さん。この子のお名前お聞きならないの?」

二人の横に居た須王寺すおうじから声が聞こえてくる。

彼女の声で『っは』とする、朋の可愛らしさに気を奪われて、彼女がいる事を忘れていた。

朋は須王寺すおうじさんの方を見る。

「1年の成美矢 朋と言います。」

「成美矢さん。私を伝言係に使うなんて、良い度胸をされてらっ

しやるのね。でも、おかげでいいものが見れましたわ。いつもクールな桜間さんが、あんなに優しい顔をするなんて、これは新たな発見ですわ。」

『私は普段、彼女にどう思われているのだろう?』と、美由は思った。

朋は慌てて。「すいませんでした。ありがとうございます。」と言つて、大きく一礼した。

「いいのよ。小さい子を優しく撫でる桜間さんが見れたのだから。むしろ、ありがたいくらいだわ。」

彼女の言葉が美由の心をえぐる。無意識とは言え、みんなの前で自然に彼女を撫でてしまった。それが、どうも、みんなの目に新鮮に映るらしい。ふかんで朋を撫でたシーンをイメージしてみると確かに恥ずかしい。しかも、大勢の人が見ている前で。

『私はまたやつてしまったらしい。』

美由は落ち込み、目を下にやると、何かが廊下を駆け抜けて行くのが見えた。何であるかを確認するため駆け抜けたモノを視線で追う。

美由の視線の移動につられ、朋もそちら側に顔を向けた。

『茶トラの猫?』と、美由は思った。

「猫さん?」と、朋はつぶやく。

「猫?そんなのいないわよ。」

と、須王寺おねえ様は後ろを振り返りながら言った。

その瞬間、廊下にいた一人の女子生徒が崩れる様に膝をつき、倒れた。

倒れたのはこの学校の三年で一番の成績を誇る桐野舞奈という美由と同じクラスの女子だった。

美由は見ていた。茶トラ猫が桐野の足に抱きついた次の瞬間に彼女が倒れたのを。

それは『精神吸収』という能力だった。美由は蛙主が以前、使っ

ている処を見た事があるので知っていた。蛙主に聞いた話だと『精神吸収』の攻撃を受けると、普通はけだるさを突然感じたりするだけだが、たまにショックで気絶したり、極まれにだがショックで死ぬ人がいるという。

猫は美由達三人と逆側へと逃げだしていた。

美由は駆け足で、倒れた桐野の元へと駆け寄り、彼女の横へと座り、彼女を仰向けに寝かす。

『息はある。』

彼女の手首を握り、脈をさぐる。

『脈も大丈夫』

須王寺さんも、隣に座り、彼女の顔を手で触る。

「大丈夫そう?」

「息もしてますし、脈も大丈夫です。頭をぶつけたわけではないので、大丈夫だとは思いますが……。でも、保健の先生を連れてきた方がいいかも。」

「そうね。すみません。誰か、保健室に行つて先生を連れてきてもらえますか?」

「はい、私、行きます。」

そう、言つて一人の女子生徒が走りだす。

「大丈夫かしら?」

「……。貧血か何かだと思つんですけど。」

美由の話聞いて、朋は『違う、あの猫さんが何かをしたんだ。』と思つたが、他の人にはあの猫は見えて無いようだった。『自分だけが見える猫さん……。』

しばらくすると、彼女が意識を取り戻し、目を開ける。

「大丈夫?」

そう須王寺は言つた。彼女は須王寺をぼんやりと見つめたあと、美由を見て、また須王寺を見つめた。

「私、気を失つてたんですか?」

「そうみたいね。」

「いきなり、体が重くなったと思ったら、周りが暗くなって、目覚めたら須王寺すおうじさんがいて。」

保健の先生と呼びにいった生徒が走りよってくる。寝ている彼女に対し、指を一本立てる。

「これ何本？」

ちよつとの間、桐野は無言だったが「1本です。」と、答えた。

今度は3本立てる

「これ何本？」

「3本です。」

「どこかしびれる処とか、感覚がおかしいところとかある？」

「頭がボーっとするぐらいで、特には。」

「では、両腕を上げてみて。」

すると、彼女は両腕を上げる。

「では、今度は手を開いてみて・・・。」

しばらく、保健の先生は、彼女に何かをさせた後、

「多分、貧血だとは思うけど、一応、念のため精密検査をしまし

よう。」

保健の先生は携帯電話を取り出し、救急車を呼ぶ。

救急車で運ばれるのを見送った後、美由は、残り少ない昼休み時間を使い猫探しを始めた。

魔法少女ガラミン

美由は猫を探しのため、まず、学校の裏手にある排水路にやってきた。

排水路に沿って早歩きで歩きながら中をなめるように見ていく。

「いた。」

彼女が見つけたのは蛙だった。

美由は足を止め、その場にかがみこむ。

「かえるさん。かえるさん。三上みかみのかえるぬしの蛙主かえるぬしに、伝言を伝えて欲しいんだけど。」

三上みかみというのは、持久走大会の日に会った蛙主かえるぬしがいた場所の地名だ。

蛙は、美由を見つめながら、おなかを一瞬膨らませ。「げー」と鳴いた。

「私のいる学園に、化け猫が現れた。一人、被害を受けた。猫を探すのを手伝って欲しい。特徴は茶色のトラ柄の猫。以上。」

それを聞いた蛙はお腹を激しく、膨らましたり、へこましたりして、鳴き始めた。

「お願いね。」

そう言っつて、美由は蛙の前から走り去る。

蛙はずっと鳴き続けていた。

美由は正直なところ、焦あせっていた。顔にも動きにもかなりの焦あせりの色を感じる。

実は倒れた女子生徒の様態を確認した後、すぐにも猫を追いかけたいと、何度も思ったのだが、どうしても、彼女のそばから離れる事が出来なかった。

突然、倒れて、意識がハッキリしない彼女を置いて、離れられる程、美由は冷たくなれなかった。

自分の頭の中で、『ここに居たい。』と思う気持ちと、『猫を探さなければならぬ。』という、葛藤がせめぎあっていた。

結局、美由は結論を先送りにしながら、救急車で運ばれるまで、彼女のそばに居る事になった。

気がつけば、昼休みは残り少ない。もうすぐ授業が始まる。昼休みまでには決着がつかない。

そう考えると、ますます焦りが出てくる。

美由が学校を走り回っていると、後ろから、声が聞こえてきた。

「こら、その魔法少女。ちったああ、おちつけ。」

美由は声の方向へ顔を向ける。

「蛙主……。」

「目の前にわしが居るのに気づかんで、そのままスルーするとは、よっぽど焦っておるのじゃな。」

「すいません。」

「今のお前じゃあ、存在の薄い化け物が目の前にいても見つけれないだろ。ワシらが探しておいてやるから、もう少し状況を詳しく説明せい。」

確かに今の美由では探すのは無理だった。

美由の存在の薄い化け物を見る能力はそこまで強くない。ある程度、離れた距離から、ちゃんと彼らの姿が見える様にするためには、一定の集中力を彼らを見る事に割く必要がある。

自分は、今、とても、焦っており、見る事に集中力を割けないでいる。

現に、蛙主が存在をだいたい強めて自分の前に現れたのに、それに気づかず、見落すぐらいなのだ。

確かに、今の美由では探す事ができない。

美由は大きく息を吸い、心を落ち着かせ、話始める。

話を聞き終わった、蛙主は口を開く。

「ふむ、役に立たん、魔法少女だのう。」

「……それは言わないでください。」

「ちなみに、むしろ蛙は探す事は出来ても、手出しは出来ないぞ。」

と、蛙主は言う。

「なぜ？」

「猫だからじゃ。あいつらは、ワシら蛙をいじり倒して、疲れた処を踊り食いするのが好きだからのう。恐ろしくて動けん。」

「天敵だったんですね……。すいません。私が他に知っているウサギ主やタヌキ主とは連絡の取り様がなかったんで。」

「ええ、ええ。せつかくの魔法少女の頼みだかのう。それより、お前さん、猫を見つけてどうするつもりじゃ？ 駆逐するのうか？」

「え？」

「考えておらんかったようじゃな。」

「……。はい。でも、このまま放置するわけにもいかないのうで。」

「やつが、精神吸収をやったのは一人じゃ。単純に肉体を維持したかったのかもしれないし、何か複雑な事情があるのかもしれない。」

「ですね。暴走であるんなら、もっと無差別に人を襲うでしょうし。」

「それに、もうこの学校におらんかもしれん。自分の縄張りになりそうな土地を探して、たまたま学校に来てただけかもしれないし。」
昼の授業のチャイムが鳴る。

「ほら、授業の時間じゃ。詳しい事はしらべといてやるから、授業に行つて、その間、頭を冷やしとれ。」

朋も猫を探していた。

誰も見えてはいない。でも、自分には見える。何とか出来るのは自分だけだ。そういう思いが、朋を猫探しに駆り立てていた。

昼の授業が始まるチャイムの音が聞こえてくる。授業にいかなく

てはならない。

『きつと、もう、学校でちゃったんだよね。』と、自分にいいわけしながら、クラスへ戻ろうとしたとき、階段の下で震えている、大人の茶トラの猫を発見する。

「大丈夫だよ。こつちにおいで。」

おそろおそろ、朋は猫に近づいた。

美由は蛙主と別れ、クラスに戻ろうとしていた時、階段の下で、何かをしている朋を見かけた。

彼女の前には、探していた猫がいる。

『あの子、見えてるの?』

「駄目、触っちゃ。」

大声で朋に呼びかける。

「えつ。」

と、美由の方に首を向けた瞬間。

猫が朋に飛びついてきた。

美由はつまる処、ミスを犯していた。蛙主から、朋が存在の薄いモノが見えるという忠告は受けていたし、朋は猫が駆け抜けた時『猫さん。』と、言っていた。気づくべきだったし、あの時、こつそり忠告しておくべきだった。近づくなと。

猫は朋に触れた瞬間、精神吸収を行う。朋の体に強力な電気ショックが走ったような痛みを覚え、体がエビゾリになる。

次の瞬間、朋の胸の辺りが強い光を放ち、青白いシャボン玉のような光の球が彼女を包み込み猫を弾き飛ばす。猫はコンクリートに叩きつけられ、気を失った。

『魔法少女のシールド?これって、私の時と同じ……。』
朋の全体が強い光を放ち、光の塊となった。

凄い風圧が美由を襲う。

『何？私の時とはまるで、力が違う。』

朋の体の光が徐々に弱くなり、朋の姿が確認できるようになる。

「魔法少女ガラミン……。」

朋は魔法少女に変身していた。

白のスクール水着の様な厚手の生地のような素材で作られたバトルスーツだ。

彼女はエビゾリになりながら、宙に浮き、体全体から輝きを放出しながら、気を失っている様だった。

美由は気づく。彼女の肉体が徐々に薄くなっている事に。

『力を放出して、存在が薄くなつたいるんだ。このままいけば……』

「いけない、このまま行けば、彼女が消えてしまう。」

彼女は大声で叫ぶと同時に、自分も魔法少女に変身し、朋の下へと走り出すため、一步を踏み出し、地面を蹴り付ける。その時、破裂音の様な独特の音が鳴り響いた。

それは美由が魔法少女になった時に仕える、超加速という技を使う時に出る独特の音だった。物体が止まっている状態から、動き出す時、加速度を加える必要がある。止まっている状態から、いきなり急激なスピードを出すためには、かなりの力を地面に伝える必要がある。この時、地面に伝える力はかなりのものだ。地面に伝える力は美由の体にそれと同じダメージを与える。このダメージを減らすために、魔法力で、足の周りに力場を作り、足が地面から数センチ離れた状態でも力を伝えられるようにしてクッションをつくり、また、魔法力で足の周りに力場をつくり、実際の足より大きな足にすることで設置面積を広げ、確実に地面に力を伝える効率をあげる事でダメージを減らしていた。そのため、地面を蹴りつける時に独特の破裂音の様な音が鳴り響く。

美由は4歩地面を蹴った後、10センチ程浮きながら、滑る様に

移動し、右手を前に差し出す。

朋は体から強い力を全体に放出しており、美由が近づくとつれ押し返されそうになる。それを超加速の蹴り足を使い強引に入りこもうと前へと進む。

美由はやっとの事で、彼女の右手首をつかむ事が出来た。

強引に彼女の手首を引っ張り、自分の体を朋にくっつけ、左腕を彼女の首に回して朋から離れない様に抱きしめる。

魔法少女と魔法少女と蛙と猫

朋のバトルコスチュームは解除された。

美由は学校の制服に戻った朋を抱きながら

「大丈夫？」

と、言った。うつろな顔をしながら朋は

「はい。でも、力が抜けちゃって、体に力がはいらないです。」

「待ってて、今、力を少し分けるから。」

バトルコスチュームのままの美由の両手が緑色の光で包まれ、朋の頬ほほに触れている左手と朋の手を握っている右手から力が注がれる。朋の顔が、うつろな表情から、だんだん、ハッキリした表情へと変化する。

「立てそう？」

「はい、だいぶ、力が入るようになりました。」

そういつて、朋は起き上がる。それを確認して美由も学校の制服姿すがたに戻った。

後ろから声が聞こえてくる。

「派手な音が聞こえたと思って来てみれば、魔法少女がもう一人増えてるとは。」

それは蛙主だった。蛙なのに二本足でぺたぺたと、二人に歩み寄ってくる。

「持久走大会の時の蛙さん……。」

「おう。お嬢ちゃん、お久しぶりだの。それより、かなり、大きな音がしたから、こっから逃げろ。先生達がくるぞ。話は学校が終わったら、またここに集まればええじゃろう。」

朋はコンクリートに叩きつけられ、伸びている猫を見つめ

「猫さんはどうするんですか？」

と、言った。

「ひとまず、わしが、こいつを動けない様にしておく。」

「それは困りますね。」

二人と一匹の背後から声がする。彼女等は声がした方を向く。そこには、黒い傷だらけの大きな黒猫がいた。

「その猫は、私達、猫に渡して貰います。」

「お主、ここら辺を縄張りに行っているボスか？」

「いいえ、私は使いつぱしりです。」

「それで、何故、この猫を引き渡せと？」

「猫には縄張りがあります。こいつは勝手な事をしました。こいつがやった事は我々化け猫を危険にさらします。落とし前をつけないと我々の身も危ないんですよ。」

「しかたないのう。」

『何がしかたないんだろう？』と朋は思ったが、『落とし前』という言葉の方が気になった。

「いじめるんですか？」

「少しは罰ばつを与えないといけません。殺しはしません。我々化け猫社会を守るためには必要なのです。」

「この子は、ただ、怯えていただけなんです。」

「わかってますよ。こいつは、この学校の生徒が餌を与えるもんだから、ここら辺を根城にしていた猫なのですが、今日、突然、化け猫になったらしく。どうして良いかもわからず、学校内を彷徨たぐひつていたら、いつも、餌をくれる女子を見かけて飛びついたりしたみたいなんです。それだけで、あれだけの事件になる。だからこそ、こいつに化け猫社会のルールを教える必要があるんですよ。」

「あんまり、酷い事をしないのなら渡します。約束して下さい。」

「約束しましょう。」

二人と二匹は、その場を離れる。

去り際に、傷だらけの黒猫は二人の魔法少女に対し捨て台詞を吐く。

「そうそう、魔法少女のお二方おふたかた、以後、お見知りおきよ。」

朋も美由も猫の捨て台詞に無言のまま、歩き続ける。

美由は朋と一緒に歩きながら、朋の顔を見る。

「朋ちゃん。存在を薄くできるよね？」

「え？……」

朋はそんな事知らないと思ったが、何故か知っている事に気づく。

「はい、わかります。」

「だったら、先生に見つからない様に、存在を薄めて。」

「え？はい。」

朋は歩きながら目を閉じ、力を集中する。そして、普通の人では認知できないぐらいまでに、存在を薄めることが出来る。

『この子……。私より姿を薄く出来るのか。私は集中してもここまで出来ない。』

朋は美由を見つめる。

「こんな感じでいいでしょうか？」

「いいわよ。とつても。私より上手かも」

「そんなああ。」

「私も消えるわ。」

そう言つて、美由は存在を薄める。美由は朋を見つめる。

「私の事、見えてる？」

「はい、なんとか。」

大きな音がした事を確認してきた先生が、向こうから歩いてやって来るのが見えた。

朋は先生の姿を見て一瞬びっくりするが、美由が背中を「ポン」と叩いてくれたので安心することが出来た。

二人は、先生をやり過ごす。

「ありがとうございます。かなりドキドキものでした。」

「そう、それより、授業に遅れちゃったわね。そっちの言い訳の方が大変そうだけど。」

「そうですね。」

「こう言いなさい。3年の教室に行っていたら、突然女子生徒が倒れるの偶然見て、救急車で運ばれる生徒を見ていたら、気分が悪

「くなってトイレの中にいたと。」

「わかりました。でも、私、嘘が苦手で」

「後は、ひたすら謝って、沈黙を通しなさい。」

「はい。」

「後、話が在るから、放課後さっきの階段の処まで来なさい。」

「わかりました。」

朋の嘘

朋は教室に戻ってくる。

教室の扉を開け、中に入りるなり、先生に向かい、大きく頭を下げた。

「先生。すみません。昼休み、3年の教室に行ったら、突然、人が倒れて、救急車で運ばれるの見た後、ちよつと、歩いていたら、気分が優れなくなったので、トイレで気分を整えていたら、遅れましました。すみません。」

朋はまた、頭を大きく下げた。

「はいはい、わかった。わかった。とにかく席に座れ。」

「ほんと、すみませんでした。」

朋は、もう一回、大きく頭を下げ、自分の席についた。

授業は何事も無かったかの様に進む。

朋はてんやわんやで、黒板にビツシリ書かれた文字を書き写す。

朋は文字を書くのが早い方ではない。慌てに慌てて、先生の話など聞いていない。

先生は黒板消しを握り、一気に黒板の半分を消す。

『うー。間に合わなかったよー。後で、ノート借りないと。』

美由は何事も無かった様に、授業を受けていた。

朋と違い、美由は筆記速度が速い。黒板の文字を難なく写し取っていた。

5時間目の授業が終わり、休み時間になった。

職員室では、学校のすみで起こった破裂音については、特に異常

を発見できなかったので、学校の外で何かの作業中に出た音として処理されていた。

授業が終わるとすぐに、朋と仲の良い3人が朋の席に集まって来る。

「ねえねえねえ。桜間先輩にハンカチ返しにいったんでしょ。どうだった？」

「ハンカチは返せたよ。」

「で、それで？」

「それで？つて、それだけ。」

「それだけつて。」

「だつて、その後、すぐに3年生が倒れて、桜間先輩、須王寺先輩と一緒に、その人を介抱かいほうしに行ったから。」

「ああああ。朋、ついてない。」

「二人が介抱しているのを見て、救急車で運ばれる処まで見てたけど、その後、話しかけられるきっかけが無かったから。そしたら、ちよつと気分が悪くなつて。」

「そして、トイレで泣いてたら、授業に遅れたと。」

「泣いてないよー。」

「はいはい、そういう事にしよう。朋が桜間先輩をそんなに思つていたとは。」

「あうー。そんなんじゃないよー。」

「気にしない、気にしない。学校が終わったら、パーッと遊ぼうじゃない。」

朋はその言葉に「っは」とするが、一瞬間の間を置き

「ごめん、私、家の用事があつて、抜け出せそうにないんだ。」

「そつか、そつか、朋の慰め会は後日という事で」

「それよりーノート貸して。私、半分しか黒板、書き写せなくつて。」

「お、いいよ。」

鈴木あずさが自分の席からノートをもってきてくれた。

「ありがとう。」

「いえいえ、どういたしまして。」

6時間目が終わり、皆が席を立ち、帰りの準備をはじめ。

「パタパタパタ」と、誰かが走る音が、廊下から聞こえてくる。

その音が止まったかと思うと、物凄い勢いで、教室の扉が開いた。

「すいません。成美矢 朋さんは、まだ、いますか？」

そう、大声で叫んだのは芹ヶ野 加奈だった。

彼女は大声で叫んだ後、激しく、息を切らせていた。

朋は彼女が出てきた扉の方を振り返り、慌てて、彼女の元に走り寄る。

「加奈ちゃんどうしたの？そんなに、息を切らせて。」

加奈は朋の両肩をガツしりと掴み、不適な笑みを浮かべて、朋と顔をあわせる。

「き、聞いたわよ。持久走大会の時に美由先輩に借りた、ハンカチを昼休みに返しに行つて、その時、須王寺おねえ様が立ち会つたそうじゃない。」

「う、うん。そうだけど」

「その後、あなた、美由先輩に頭を撫でられた、そうね？」

「うん。撫でられたよ。」

「その後、すぐに、3年の先輩が貧血で倒れて、お二人が介抱した。間違い無いわね？」

「う、うん。その通りだけど。」

「詳しく、そこをもっと詳しく聞きたいの。ちょっと来て。」

加奈は朋の手を物凄い握力で握り、朋を引きずる様にして廊下の隅へと連れて行った。

朋は加奈の質問攻めに遭う。朋の友達3人は、聞き耳をたててい

る。

猛烈な質問攻めを行う、加奈に朋の頭の中はグルグル回っていた。答えられる部分は答え。答えられないところは、知らない、わからないで、何とか切り抜けた。

芹ヶ野 加奈は、実際の処、朋には興味は無かった。

彼女が興味があるのは、桜間 美由が、王子様のな優しさを、「可愛らしい後輩」と「貧血で倒れた同級生」に対して、どう發揮したか？という事と、もうひとつは、美由が学園のおねえ様として急激に株を上げており、他のおねえ様派閥との関係だった。

よって、朋の、少々の嘘に気づくはずが無なかった。

「加奈ちゃん。随分、嬉しそうだね。」

「今の派閥は、昔からの派閥を引き継いでいるから、どうしても気品に溢れるお嬢様タイプの人たちばかりだけど、ここに来て、王子様タイプのおねえ様様の登場よ。ワクワクしない方がどうかしてるわ。朋ちゃん、ありがとうね。私は尾ひれをつけて、学校中に学園のニューヒロインの登場を伝えなくちゃならない指名があるから、それじゃあねえ。」

そう言って、加奈は去っていく。

朋は『迷惑じゃないのかな？』と思ったが、言い出せずにいた。

加奈が去ると聞き耳を立てていた、朋の友達三人が走りよって来る。

「おお、朋。何で桜間先輩に頭を撫でられた事を隠していた。」

「別に隠してないよー。ただ、言いそびれただけで。」

「そんな萌える展開を隠していたとは、こおおの、ちびっ子め。」
そう言って。田中 佐和が朋を抱きしめる。佐和は美由より身長が高い、朋はクラス一身長が小さい。朋の顔は佐和の豊満な胸に埋まる。

「あうー。苦しいよー。」

佐藤 絵里は、佐和の胸に沈む朋の頭を撫でる。

「よしよし、不幸な事件があつて桜間先輩と仲良くはなれなかつたけど、頭を撫でられただけでもめっけもんだって。」
「うー。」

蛙と魔法少女その1の朋への忠告。

朋はやつと、仲良し三人から抜け出し、美由と約束した階段へと向かっていた。

階段が見えるところまで来ると、美由と蛙主が立っているのが見える。一人と一匹は朋の気配に気づいて、彼女の方を振り向き、蛙主は右手を挙げる。

「よう。お嬢ちゃん。遅かったのう。」

「すいません。友達に捕まっただんで。」

美由の顔が少し曇る。それを感じた朋は慌てて

「あ、大丈夫です。美由先輩にハンカチを返した時に、頭を撫でられた事と、須王寺おねえ様が立ち会った事と、二人が3年生を介抱した事に興味があつたみたいで、新しい王子様タイプのおねえ様の誕生したって言ってました。だから、猫とか、返信のことが特に触れられることはなかったです。」

美由は、うつむき、肩を落としている。

「王子様……。王子様タイプのおねえ様……。」

と、独り言をつぶやいた。

「よかったのう。これで、お主も晴れて学園のアイドル。」

美由は顔をあげ、蛙主を睨む。

「良くありません。せっかく、学園の女子Aという立ち位置を頑張つて確立してきたのに。」

大声で反論するが、蛙主はニヤニヤしている。

「いいではないか。わしらも話題が増えるし。」

「私をあなた達の暇つぶしの道具にしないでください。」

朋は二人の会話を、不思議そうな顔をして聞いていた。

「あ、あのー。どうしたんですか？」

蛙主は朋の不思議そうな顔を見る。

「お、そうか、お主は知らなかったのか。こいつは極度の恥ずか

しがり屋さんで、目立つのが嫌いなんじや。」

「へええ。そんな風に全然みえないのに。」

「そのくせに、こやつはドジっ子スキルを持っておってな。思わぬところでドジを踏んで目立つのじや。それをからかうと、良いリアクションをするのじや。」

「そんな事、言わないでください。てか、やぱっぴり、からかつているんですね。」

「先輩がドジっ子だなんて驚きです。イメージと凄いギャップがあつて。」

朋は真剣なまなざしを蛙主に向けながらそう答えた。

「そうじやろ。それよりもだ、魔法少女その2よ。」

「あはは。『魔法少女その2』ですか。」

蛙主は美由に顔を向ける。

「こいつが、魔法少女その1で、お主が後から魔法少女になったから、魔法少女その2じや。」

「はい。わかりました。」

「魔法少女その2よ。まず、わしの名前から言っておらんかったな。わしは、学園の後ろにある山の蛙の主をやっている、『蛙主』という。土地名をとって『三上の蛙主』とも呼ばれとる。」

「三上の蛙主様……。ですね。」

「そうじや。で、その魔法少女その1とも話したのじやが、お主はこれ以上、わしら化け物と関わるな。」

「はい、そうした方がいいんですか？」

「もちろん、そうしたほうが良い。おぬしはどうやら、存在の薄化け物を見る力が強いようだし、魔法少女だが、大人の事情のが複雑に絡み合い、時に命の危険や恨みを買う危険性のある化け物と付き合わんが、良いと思うわけじや。」

「魔法少女は、子供の頃憧れたけど、命の危険や恨みを買うのはいやですねえ。私、大人の人の事情とか良くわからないし。」

「もうひとつ、お主がわしら化け物と関わるべきではないと考え

ているのが、お主と魔法少女との相性の悪さじゃ。」

「相性？」

「化け物と関われば、命の危険や恨みを買って、魔法少女に変身する必要性がでてくるじゃろ。お主が魔法少女に変身した時を思い出せ。あとちよつとで、存在が薄くなりすぎて死ぬ処じゃったんだぞ。」

朋は思い出してみる。あの時、美由先輩がいなければ、自分は魔法少女になったために死でいたのだ。

「うー。」

美由は朋に語りかける。

「朋ちゃん。魔法少女の力は、自分の体内にある精神エネルギーと自分の存在を犠牲にすることなの。私の場合、発動出来る力が弱いから、存在の犠牲はほとんど無いけど、朋ちゃんの場合は、力が強過ぎるから、魔法少女になっただけで精神エネルギーと一緒に存在も強く犠牲にしてしまうの。」

蛙主は朋を心配そうに見つめる。

「お主は、魔法少女その１と違って、体を全く鍛えとらん。精神エネルギーは肉体を鍛えれば有る程度、伸びるからう。今のお前さんは、精神エネルギーの器が小さすぎる。魔法少女になるにはお話ならんくらいにう。」

「はい。心にとどめておきます。処で、魔法少女って、何ですか？」

朋は真剣な顔で一人と一匹に聞く。

彼女等はお互い見つめあい、何か間の抜けた顔をしていた。

しばらくして、二人は同じタイミングで首を横にひねり

「さあ。」

と、同時に答えた。

「し、知らないんですか？」

「だって、魔法少女は、ワシが便宜上、そう読んただけであつて、魔法少女その１がそう名乗った分けでは無いしう。」

「私の変身後の名前はテラミルですからね。それより、蛙主、いい加減、魔法少女という呼び方やめてもらえませんか？もう、私、高三で少女という年齢ではありませんし。」

「まあ、そう気にするな、魔法少女その1よ。これだけ大人ぽいお前さんを、からかっているだけじゃから。」

「そうだったんですか？」

「何じゃ、気づいて無かったのか？わし的に、かなりスパイスを効かせて言っていたつもりだったんじゃないか」

美由は右手を顔に押し当て、前髪をぐしゃりと握る。

「私を魔法少女と呼んでた時に、みんな、心の中では、ほくそえんでたんですね。高三にもなって、魔法少女もなかるうにと。」

「まあ、今、ここに、高校1年にして、まるで、中学一年生の様な子が魔法少女になったわけだし、別に魔法少女でええじゃろ。」

「つく……。」

「あははは、確かに私、子供っぽいですね。」
と、朋は苦笑いを浮かべた。

「私、子供の時、魔法少女にちょっと憧れてましたけど、中学生になった時、流石にもう立派な中学生なのに魔法少女に夢見るのはどうかناと思って、離れたんですよね。」

「こやつは、こんなに大人っぽいのに、高校生にもなって、リアル魔法少女だからのう。しかも、変身時には、あんなに恥ずかしいコスプレだし。他の人が見たら、どれだけ、冷たい目を向けられるか。」

「蛙主、私をいじめないでください。」

「まあ、魔法少女に変身すると、常人では見えないから大丈夫だろうって。気にするな。」

「え？そんなんですか？」

と、朋は驚く。

「そうじゃ。むしろ、化け物にはハッキリ見える様になるが、常人の目には見えん。ただ、強い力が発動した場合、微かに見える事

もあるし、自分から姿を見せようとするれば、人にも見える。」

「あと、カメラも変身時は写らないみたい。」

「試したのか？」

「……はい。」

「部屋で、魔法少女のコスプレで写真撮影大会……。後で、皆に報告せねば。」

「報告しないでください。でも、完全に写らない場合と、透明だけどぼやける時と、強い光を放って、見えない場合があつて、姿は写らないけど、完全に写らないわけではない場合が結構あります。」

「結構？……何回にも渡って試しているんじゃない？」

「……。た・ただの、じ、実験ですよ。監視カメラに写っても嫌じゃないですか。」

「あははは。美由先輩、面白い。」

「ああ、朋ちゃんまで。それより、本当に私も知らないの。私が知っているのは、私の変身時がテラミルで、朋ちゃんがガラミンだつて事ぐらい。」

「魔法少女みたいに、魔物と戦ったりとかはしないんですか？」

美由と蛙主はまた、間抜けな顔をしてお互いを見詰め合う。

「しない。しない。だって、化け物を殲滅が私の使命だなんて啓示なんて与えられて無いし。正義の心で化け物を殲滅なんて、感情も全くわいてこないし。朋ちゃんだってそうでしょ？目の前にいるこの蛙の化け物を虐殺したいという感情はわかないでしょ。」

朋はかがんで蛙主をジーっと見つめる。そして、蛙主の頭を撫でて、ほつぺをツンツンする。

「ぜんぜん、わかないです。」

「でしょ？私がそういつた戦闘になつたのは1回だけで、その時も殺して無いし。」

「でも、化け物さん達からすれば、魔法少女って敵なんじゃないんですか？」

「この嬢ちゃんを、ワシらは敵とは思つたらんし、別にワシらに

害があるわけでもない。何故、敵対する必要がある。」

「そうですね。」

「こやつは魔法少女じゃが、ただ、そこに居るだけじゃ。たまたま、ここにいるだけであって、それはお互い様であって、仕方の無い事じゃ。何故、ワシらがこの小娘を襲う必要がある。化け物も生きておる。生きていくためには生活をせねばならん。別にわしらに害が無いのじゃから、そんな無駄なことに時間を割く暇は無い。」

「私の噂をばらまく、暇はありますけどね。」

「それは、娯楽じゃ。年寄りの楽しみというやつじゃ。」

「ところで、お二人はどうやって出会ったんですか？」

「それは、ワシが、こいつの足が綺麗じゃったんで、タッチしたら、何故か、精神吸収の能力が勝手に発動してのう。」

「このスケベ蛙が。」

「そしたら、こやつ、魔法少女にいきなり変身してのう。一発、蹴りを喰らってしまったんじゃ。普通は、自分で発動しようと思わないと発動せんのだが、あの時は何故か発動したのじゃ。」

「私の時と同じだ。」

ウサギが筋トレをする。

美由は、いつもの白いランニングウェアに水色のリュックサックを背負って、夜の山の斜面を登っていた。

周りは植林により植えられた高い杉林に囲まれており、地面は腐葉土で覆われている。

腐葉土は柔らかいため足が埋まり、滑りやすい。そんな足場の悪い斜面を彼女は必死に登っていた。

そんな彼女の目の前に、大きな何かが現れる。

それは、体長が3m程ある、野ウサギだった。大きいのは身長だけでは無く体格も太い野ウサギだった。

野ウサギの体格が太いのは脂肪がついてそうだったので無く、茶色い毛の上から見てもわかる、筋肉のせいで太いのだった。

その野ウサギは、もの凄いスピードで腹筋をしていたが、美由が近づいて来たのに気づき、腹筋をやめて起きあがり、前足で自分の顔の汗をぬぐった。

「おお、魔法少女ではないか、聞いたぞ、もう一人、魔法少女が現れたんだってな。」

「はい、ウサギ様。もう、噂がここまで流れてきているんですか。」

「おう、お前さんが、部屋でコスプレして楽しんでいる話と一緒に。」

美由の顔が紅くなる。

「何で、みんなそっちも興味があるんだ。新しい魔法少女の話だけで……。」

ブツブツと美由はつぶやく。

「まあ、趣味は人それぞれだ。わしの趣味は筋トレだし、三上の蛙主は人間の若い女に興味がある。まあ、趣向はそれぞれあるものだ。」

「私は別に趣味でやったわけじゃありません。」

美由は思わず、大声で反論した。

「それに、化け物化しているのに、何で、筋トレなんかしてるんですか？化け物化すれば、肉体維持が難しいのに。」

「そりゃ、趣味だからに決まっております。」

「言っておきますが、肉体を太くすれば、太くする程、肉体維持は難しくなるんですよ？」

「そんなことは、化け物でない、お前さんに言われとうはない。

わしは、三上の蛙主に相撲で負けるのが嫌なのじゃ。」

「何です、その鳥獣戯画的争い。」

「わしは、魔法力が弱い。だが、あの力エルは魔法力強い。わしがあやつに勝つためには肉体を鍛えるしかないのだ。」

ウサギは、自分の筋肉美を美由に見せつけるために、ポージングを行い、力を込める。すると、ただでさえ、太い筋肉が更に膨らむ。

「相変わらず、凄い筋肉ですね。」

ウサギ主はポージングを変える。

「そうじゃろ。」

美由は肩に背負っていたリュックを地面に下ろし、チャックを開け、中からモノを取り出した。

「ウサギ主様、これ、お土産です。」

そういって、差し出したのは4Kの粉末プロテインだった。

「おお、いつもすまんな。蟻や昆虫や山魚も良いが、筋肉にはこいつが一番でな。不自然な強い甘い臭いがあるのはいただけんが。」

「山魚って、ウサギ主様はウサギですよね？」

「そうだが？それが何か？」

「ウサギって、ふつうドングリとか野菜とか食べませんか？」

「それだけは、この美しい筋肉美を維持できんぞ。」

「もう、いいです。」

「それより、ウサギ主様。イメージ戦闘がしたいのですが？」

イメージ戦闘とは、魔法少女や有る一定のレベルに達した化け物

が、お互いの思考を繋ぎ、想像の中で現実に近い空間を作り、そこで戦闘を行うというものである。

「ん？お前は、イメージ戦闘の時はワシの所に来るが、お前は蛙主と仲がよからう。ヤツとやらんのか？」

「蛙主は、戦闘を真面目にしないでただけではなく、私にセクハラしてくるので。」

「仕方ないやつじゃのう。」

「すいません。」

美由は正座して背筋を伸ばし、目を閉じ、想像の空間へともぐる。

想像の空間の中は真っ暗だが、地面が光を放っており見る事が出来る。地面はどこまでもまっ平らに続いている。

美由は魔法少女テラミルとなっていた。テラミルもウサギ主も微かな光を放ち見る事が出来る。

テラミルは構える。

「いきますよ。ウサギ主様。」

「いつでもこい。」

テラミルは超加速で地面を蹴りつけ、ウサギ主の懐に飛び込んだ。彼女が跳びながら、パンチを繰り出そうとした瞬間、大きな前足で横からはたき落とされる。魔法少女のシールドが球体に発動するが、その球体がグニヤリと歪む。テラミルは地面に叩きつけられ、一回バウンドした後、地面を滑っていく。

「こら、魔法少女。いつも言っておるだろ。相手が既に戦闘態勢に入っていたら、むやみやたらに、しかも、まっすぐに突っ込むなと。」

「はい。」

そういって、テラミルは上半身を起こし、右手の甲で、顔を拭う。「返事はいつも良いが、ちーっとも、次にいかされとらん。わし

が飛び道具を持っていたら、その瞬間蜂の巣にされとるぞ。」

テラミルは起き上がり、また、超加速で突っ込んでくる。

「全く反省しとらんみたいだの。」

ウサギ主は、前足で張り手を繰り出す。テラミルは、それをカウンターでモロに喰らってしまう。球体のシールドが歪み、後方へとはじき飛ばされる。

「魔法少女よ。何回言えばわかる。超加速は確かに凄い技だが、ただ、まっすぐ突っ込んだら、簡単にカウンターを喰い、相手の攻撃と自分が移動している時の力が自分に全て帰ってきてダメージを受けると。お前さんがやっているのは、自分に向けられている槍に自分から飛び込んで刺さりに言っているようなもんじゃ。」

「はい。でも、私、これぐらいしか技がなくて。」

「技が無くても、魔法少女で強化されたパンチがあるじゃろ。足も強化されてるから、それなりの足さばきもできるじゃろ。」

「やってみます。」

テラミルは立ち上がり、すばやい足さばきで、ウサギ主を中心に反時計回りに回りながら、距離を詰めていくが、ウサギは突然動きだし、前足を横に開いてラリアットをする。テラミルは両手で亀ガードをして攻撃を受けるが、やはり飛ばされる。

「ただ、突っ込むだけよりはマシじゃが、単調に同じ動きを続けていけば、喰らって当たり前じゃろ、もう少し体を左右に振って、リズムを読ませない複雑な動きで、懐にはいらんか。」

眠たい朋

朋は家に帰ってきていた。まだ、朋以外の家族は帰って来ていない。

今日はいろいろな事がいっぱいあり、下校中から朋は眠たくなっていた。畳の上に倒れて、まぶた瞼を閉じ、横になって、体を猫の様に丸めて寝始めた。

夜になり、買い物袋を両手に抱えた母親が帰ってきて、家の電気を点ける。制服のまま猫様に幸せそうに寝ている朋を発見した。

母親は買い物袋を机に置き、朋をゆする。すると、朋は目を開け、母親を見る。

「ああ、ママ。」

「もう、この子だったら、服も着替えないで。」

朋は上半身を起こし、目をこする。

「だって、眠たかったんだもん。」

「ほら、立った、立った。服を着替えて、お風呂入れなさい。」

「はい」

朋は立ち上がり、お風呂場へと向かった。お風呂の栓を締め、蛇口をひねった後、自分の服が入っているタンス棚に行き、服を取り出す。

「ママ。お風呂にすぐ入るから、その時、着替えるよー。」

「はいはい、わかった。わかった。」

母親はご飯作りで急がしそうだった。

朋はお風呂に入り、部屋着に着替え、母親と一緒にご飯を食べる。

「お父さん、今日は遅いね。」

「電話で、残業で遅くなるってたわよ。」

「へええ。大変だね。」

「そうそう、朋ちゃん。ご飯食べたなら、ゴミ袋をコンビニに買い

に行ってくれる？明日ゴミ出しの日でしょ。」

「ええええ。私、眠い。」

「だったら、朋ちゃんがお茶碗洗って、洗濯物畳む？」

「うー。だったら、行ってくる。」

傷だらけの猫との再会と依頼

テラミルはウサギ主と共に、まだ、イメージ戦闘を続けていた。彼女は素早い足さばきを使いながら自分の体を左右に振り回し、ウサギ主の大きな懐に入り込み、左右のパンチを連続で打ち込むが、両前足のガードに阻まれる。テラミルが強いパンチを打ち込もうと大降りをした瞬間、横から、ウサギ主のフックが飛んできて、横に飛ばされるが、倒れない様に踏ん張り、何とか立っている事が出来た。

「魔法少女よ、お前さん。攻撃に集中すると、滅茶苦茶、視野が狭くなるぞ。」

「はい」という声と共にウサギ主の懐へともぐりこむ。そして、右のパンチを打ち込むが、前足ではたきおとされる。間髪入れずに左を打ち込み、それが相手の腹に当たる。更に右を繰り返すとした瞬間、テラミルは突然、自分の足が無くなったみたいな感覚に襲われた瞬間、地面に倒れていた。

ウサギ主が左腕を軽くひっぱり、足を払っていたのだ。
「魔法少女よ。強くない相手ならイノシシの様にひたすら突撃でもかまわんが、ある程度、強い奴には、その程度の連続攻撃では勝負にならないぞ。」

ウサギ主は倒れているテラミルを見下ろしながら、そういった。彼は何か気づき、不信な表情を浮かべる。

「誰か、来たみたいだ。ここを出るぞ。」
「は、はい。」

テラミルは息を大きく切らせながらそう答えた。

『気配……。確かに何か近づいている。でも、こうやって感覚を研ぎすましているから判るけど、ウサギ主様は私との戦闘中に気づいた。こんなに差があるのか……。』

テラミルがそう思っている間に、ウサギ主は現実の世界に戻った。

テラミルも後を追うように現実の世界へと戻る。

現実の世界へと意識を戻した美由は、正座をしたまま、気配の方へと顔を向けた。

そこには昼に会った、傷だらけの黒猫がいた。黒猫は二人の元に歩み寄って来る。

「お主、どこの猫だ？山を縄張りにしている奴等ではなさうだが？」

そう、ウサギ主は切り出す。

「はじめまして、ウサギ主様。私は街の方の猫で、街で一番、大きい勢力の使いっ走りをやっております。昼に、その魔法少女様とはお会いしました。」

「あの噂の新しい魔法少女に関わった猫か？」

「いいえ、私は、その猫を引き取っただけで。魔法少女とは、そんなに関わってはおりません。」

「その猫が、他の猫の縄張りを越えてまで、ワシに合い来たのは何じゃ？」

「いいえ、あなた様には、用はありません。私は、その魔法少女様に用があつて来ました。」

「私に、ですか？」

「ええ、昼に私どもが、引き取った猫のことです。」

「はい。何でしょう？」

「まずい事になりました。どうも『暴走』が始まるみたいなんです。」

「暴走ですか？」

美由は正座をしたまま黒猫に聞き返す。

「はい。それを、魔法少女である、あなたに止めて欲しいのです。」

「

「ちよつと、待^まった。」

ウサギ主が割り込んでくる。

「猫には確か、猫の暴走についてのルールがあったはず。そのルールを守らず、何故？魔法少女に頼む。」

「すいません。今回の件は、私が個人的に魔法少女にお頼みしているだけでなのです。」

「化け猫社会のルール破りは、かなり厄介と聞く。この魔法少女が介入して恨みを買うのを見過ごしてはおけん。」

「その点は大丈夫です。ボスには内密に話をつけてありますので、今回の件に介入しても問題はありません。」

「だが……。」

「あのー。すいません。猫社会の暴走についてのルールって何ですか？」

申し訳なさそうに美由が聞く。

「……ふん。『消滅』させるのだ。」

「消滅……。殺すって事ですか？」

「まあ、そうとも言つ。」

「暴走を止める手段を持たない我々は、そうするしか無いわけですが、先日、魔法少女が特殊な力を使つて、相手を消滅させずに暴走を止めたと聞いたものですから。」

「ああ、あれは、私だけの特別な力ではないですよ。私は蛙主にやり方を教えて貰ったので、やり方さえわかれば、出来ると思いますが。」

「そうなのですか？」

期待を込めて、猫は美由に聞き返すが、ウサギ主がそこへ割り込む。

「うんにゃ。あれは、誰でもは出来ん。細かい力の操作と強い魔力が必要になる。第一、あの方法で、は全ての暴走は止められんな。」

「そうなのですか。ひとまず、今は、魔法少女に頼るしかなさそ

うだというのはわかりました。」

ウサギ主は話始める。

「それより、お主、何故そこまでして、その猫を助けたい？」

「幾つか理由はありますが、一番は、新しい魔法少女に『酷い事はしない』と約束したからです。私はどうも、あのお嬢ちゃんに苦手みたいで、約束を守れない事に後ろめたさがあったものですから。他にも、魔法少女と縁を作っておけば、後々、我々に有利に働く事もあるだろうというのと、魔法少女の強さというのを知っておきたいというのもあります。もうひとつ、暴走を止める方法を、この目で確認したいというのがあります。」

「なるほどな。」

『何が「なるほど」なんだろう？』と、美由は思った。

「要するに、この魔法少女を試したいという事か？」

「そう、とつて貰って構いません。」

『試すも何も、私はただの小娘なのだが。』

良く意味を理解できない美由の姿を見て、ウサギ主が語り始める。

「要するに、猫達は、お前さんを警戒しているのだ。」

「何故ですか？」

「そりゃ、化け物を倒す、魔法少女だからだろ。」

「その意見は最もな気もしますが、私は理由もなく、みなさんを倒したりしません。」

「そう思っているのはお前さんだけだ。」

良く考えてみれば確かにその通りではある。

得体の知れない謎の存在が突然現れて、あいさつも無しに近くにいられては、確かに脅威に感じるのも仕方無い。

「猫どもは、今回の暴走を利用して、お前さんが化け猫どもにとつて、どういった存在なのか知りたいと思っておる。」

「なるほど。」

「ところで、どうする？行くか？」

ウサギ主は美由に問う。

「行きます。」

美由は何の迷いもなく、そう答えた。

「ありがとうございます。魔法少女様。」

「それより、その猫はどこに？」

美由は猫に尋ねる。

「魔法少女様の通われている学校にいます。」

「わかりました。」

ウサギ主は二本の足で立っていたが、体を倒し、4本の足で立つ。

「魔法少女よ。乗れ。そこまで行ってやる。お主の足では、1時

間以上かかる、ワシなら10分でつく。」

「ありがとうございます。ウサギ主様」

そういつて、美由はウサギ主のこつい体にまたがる。

「その猫も、わしの体に乗れ。そつちの方が楽しやる。」

「……では、お言葉に甘えて。」

そういつて、黒猫もウサギの背中に飛び乗った。

「いくぞ。」

ウサギ主は、二人が自分の背中に乗った事を感じ取ると、物凄いスピードで杉林を駆け始めた。

「猫よ？お主話して無い事があるじゃろ？」

「何でしょうか？ウサギ主様」

「お前さんが、用意した舞台についてじゃよ。」

美由は二人の会話の意味が良くわからなかった。それより、風圧と上下に揺れる震動のために振り落とさない事だけで精一杯だった。

「良く、おわかりで、今回、猫達は、被害がある程度が出るまで手出しはしません。今回の暴走は皆知らなかつた事になっています。見てはいますが、見てないふりをしているわけです。ですが、我々が考える限度を超える被害が出れば我々も身の危険があるので、その時は手を出します。」

「魔法少女聞いておるか？」

「はい？なんですか？つかまっているだけで、精一杯で」

「良く聞け魔法少女。猫は今回、手を出さん。」

「はい。それはわかります。」

「それでも猫が手を出してきた時は、お前さんは猫に見限られたという事になる。それは、お前さんが助けようとしている猫を殺すと決断したいことじゃ。それと同時にお前さんは猫達に悪い印象を与えたという事になる。」

何か飛んでも無い事をこの状況ですつらと言われた気がした。

「はい、頑張ります。」

と、答えるしかなかった。

夜の学園と蛙主と猫

今夜の学園は生徒も先生も全て帰宅したため、暗く、静まりかえっていた。

学園は郊外に建っているため、街灯が少なく、人通りは全く無かった。たまたに学校前の道路を車が駆け抜けるだけである。

グラウンドの片隅にある水飲み場の横の地面がドロドロに濡れており、不自然な盛り上がりが出ていた。その盛り上がりも、もぞもぞと動き、中から30cmぐらいの茶色い塊が姿を現す。

それは蛙主だった。

『ふー。この土は寝るのにはイマイチだのう。さて、もう、こんなに遅い時間か。』

蛙主は自分がぐちゃぐちゃにした地面を平らにならしはじめる。

『魔法少女1にバレると口五月蠅いからのう。面倒じゃが、こうして隠蔽しとかねば。』

地面を有る程度平らにすると、今度は、水のみ場に飛び乗って、水道の蛇口をひねり、頭に水が当たる位置に移動する。

『ふう、気持ちさええのう。』

上から滝の様に降り注ぐ水を浴びながら、両手を器用に使い、体の泥を落としていく。

『さて、学園を散策してから帰るかのう。』

蛙主は水を止め、地面に降り、グラウンドをピョンピョン飛び跳ねて移動する。

『しかし、ここは、砂漠の様なところじゃのう。良く、こんな水気の無いところに人は住めるもんじゃ。』

学校の中庭に來ると、芝生が張られている処があった。草は綺麗に刈られているが、生徒がショートカットで歩くため、一部剥がれて地面がむき出しになっている処もあった。

蛙主はそこで、虫を見つめる。すばやく舌を伸ばし、その虫をキ

ヤツチした。

「全く、ここは虫が少ないのう。これでは、腹の足しにもなりやせん。」

蛙主は、虫を探そうと、辺りを見渡すと、何か動き続けている音に気づく。

その音がする方へと、蛙主は移動する。

そこに居たのは、昼に魔法少女その2を襲った、茶トラの猫だった。彼は苦しみ、もがく様にその場で暴れている。

「いかん。暴走がはじまるぞい。」

蛙主は思わず、大声を上げてしまった。

その声に気づいた猫は、突然、4本足で立ち上がり、蛙主を睨んだ。蛙主は蛇に睨まれた蛙の様に動けなくなってしまう。

そして、猫は、いきなり蛙主に飛び掛ってきた。

猫が両前足を前に出しながら蛙主に飛び掛ってくる。

蛙主は大きなレンズの様な緑色のシールドを展開し、猫をはじきとばす。猫は宙を舞ったが、素早く地面に着地し、間髪入れずに突っ込んできて、低い位置から左前足を横に振る。

『シールドが間に合わん。』

蛙主は両腕でその攻撃をガードするが、横に飛ばされる。猫は素早く蛙主の横へと回りこみ、また低い位置から前足を横に振り、蛙主が飛ばされ、地面を回転しながら転がる。

「つく」

なかなか起き上がれない蛙主にじわりじわりと猫は近づき、一気に飛び掛る。

蛙主は体勢を低くしながら横へと移動して攻撃をかわしながら、相手の腹に一撃を加える。その一撃で猫は後ろへと飛ばされた。

「ふう。」

猫は起き上がり、首を横に振った後、動かなくなった。

『なんじゃ？こいつ急に動かなくなったぞ？』

そう思った瞬間、猫の顔つきが凶暴になり、体が巨大化して大型犬ぐらいの大きさになった。

『まずい、にげるぞ。』

蛙主は、後ろを振り向いて、必死にピョンピョン逃げ始めた。

猫は猛スピードで走りだし、あっさりと蛙主に追いつき、飛び掛る。蛙主は、素早く体を横に転がし、攻撃をかわし、また、逃げ始めた。

「このままではジリ貧じゃ。」

そう思った時、目の前に学園と道路を分ける金網を見つける。蛙主は金網に飛びつき、必死によじのぼる。猫は蛙主のお尻めがけジャンプし、噛み付こうとするがお尻に鼻先が思いつきり当たっただけで、失敗する。

蛙主はフェンス頂上まで、のぼり、すぐに道路へと着地し、猫をみつめる。

『ふう、助かった。』

そう、思った瞬間、猫はフェンスに体当たりし、金網を突き破ってきた。

「うそ、じゃろ。」

蛙主は道路の植え込みや街路樹を盾に逃げ始める。逃走中、車が何台か過ぎさる。そして、前から自転車に乗った男がやってくる。彼には二人は見えて無いので気づいてないのでかなり無防備だ。暴走中は無差別に生物を襲う。蛙主は『まずい』と思ったが、猫は人間をスルーし、目標を蛙主から変えようとしなない。

「何故、わしだけなんじゃああ。」

二人の追いかけっこは続いていた。

学園についたが、猫がいない。

美由は、傷だらけの黒と共にウサギ主にまたがって、学園を目指していた。

ウサギ主の荒い走りにも、次々と迫り来る杉の柱にも慣れ来ていた。

「ところで、猫よ。魔法少女の居場所が良くわかったな。お主の縄張りから随分離れているというに。」

「ああ、猫には独自のネットワークがあるんですよ。我々は縄張り争いでいつも反目し合ってますが、争っているだけではお互いが疲弊するだけですし、相手側の情報が入って来なくます。情報が入って来なくなるというのは、近くに危険が迫っているのに縄張りの外だから、その情報が手に入れられなくなります。だから、裏で繋がりを持ち、情報を共有してるんですよ。」

「猫は複雑だのう。」

「魔法少女は我々にとっては危険要因ですから、彼女には常に目を光らせているんですよ。だから魔法少女の情報は簡単に手には入りません。」

「私って、猫に監視されてたんですね。」

「お気づきになってなかったの？」

「通学路で良く、猫は見かけてましたけど・・・。」

「多分、それはただの普通の猫でしょ。あなたは、存在を薄める事に安心して、その他の事に気を配らないから、見つかった事は無いと言ってましたし。」

「そうなんですか・・・。」

「そんな事より、もうすぐ学校だぞ。」

ウサギ主は、杉林から車が一台通れそうな道路へと出る。学校の裏にある坂道だ。急坂に強引に民家が密集して建っており、何軒かの家には明かりがついている。

この先に確かに学園はあるが、この道からだと、崖沿いに沿って学園を半周程回る必要がある。

ウサギ主の足は止まらない。目の前には転落防止用のフェンスと崖がある。

「ちよつと、ウサギ主様。目の前は崖です。」

「飛び越える。しっかり掴まっておれ。」

「うそ……。」

美由はウサギ主に体を密着させ、毛をしっかりと握る。ウサギ主は加速をつけ、ジャンプをし、フェンスを超え、崖下へと落ちていく。

崖は5mほどであったので、落ちるのは一瞬のはずだが、美由には1分ぐらいに感じた。

学園の裏庭へと無事に着地するが、その時、物凄い振動が起こった。

「さて、ついたぞ。その猫は、どこにいる？」

「中庭の方にいるはずですが。」

そう、傷だらけの黒猫が言っている最中に、何かが近寄ってきた。猫だ。

黒猫はウサギ主の背中から降り、現れた猫と何か話しをはじめ。そして、二人の方を見る。

「まずい事になりました。今から5分程前に暴走がはじまった様で、そこにたまたま、三上の蛙主が居たようで、あの方を追って学園の外に出たみたいです。」

「何やってるのだあいつは。」

ウサギ主はため息交じりに言う。

「どうも、まだ、追いかっこをしているみたいです。急ぎましよつ。」

朋と蛙が猫に襲われる。

朋はゴミ袋を買ったためウチを出る。団地の階段を下り、駐車場を抜けて、コンビニへと向かう。

ショートカットのため、子供が数人で野球するには十分なスペースのある公園を抜け、10m程道を歩くと、二車線の国道に出た。ここをまっすぐ15分程歩けば学校に行ける。

朋は学校の方へと歩き始める。学校へ行くためではなく、こっちの方にコンビニがあるからだ。

朋が歩道を歩いていると、30cmぐらいの物体がピョンピョン自分の方へと向かって飛んでくる。

その物体は朋の顔にへばりつく。

「むー。」

何かぶよつとしたものが朋の口を塞いだために声が出ない。それは、バタバタと動き朋の頭へよじ登ろうとしている。

「お、良くみたら、魔法少女その2ではないか。」

「え？蛙主様ですか？」

「ちようどええ、今、追われとる。」

「え？追われてるって、何ですか？」

「目の前を見てみい。」

目の前には大型犬ぐらいの大きさの茶虎の猫が早足で二人に迫って来ていた。

蛙主は朋の頭を手ではたく。

「何しとる、はよ、逃げんかい。」

猫は、早足から一気に駆けだし、朋に向かい飛びかかり噛みついてくる。

朋は素早く反応して、攻撃を交わし、公園の方へと走り出す。

「なんですか、あれ？」

朋は頭に蛙主を乗せて走ったまま、話始める。

「昏にお前さんを襲った猫じゃ。」

「ええ？だって、姿形が全然違うし、あんな凶暴じゃなかったですよ？」

「暴走したんじゃ。」

二人は公園の藪をつつきり、トイレの裏手に隠れる。

「はああああ、暴走ってなんですか？」

朋は瞳を上にして話はじめる。

「我を失って、見境無く生き物を襲う様になるんじゃ。」

「じゃあ、ここは住宅地だから、放って置いたら大変な事になるじゃないですか？」

「普通は猫どもが、すぐに消滅させにくるんじゃが、学校からここまで、その気配は無かったのう。」

「え？学校からここまで、歩いて15分はかかりますよ。ずっと逃げてたんですか？」

「そうじゃ。数人の人間とすれ違ったが、やつはそいつらには目もくれず、わしだけを追ってきてるのじゃ。」

「ぶよぶよして、おいしそうですからね。」

蛙主は上を向く、トイレの上に猫がいた。

「魔法少女、上におるぞ。」

朋はトイレの上から飛びかかってきた猫を前転して交わした後、公園の真ん中に向かって走り出す。

「何とかならないんですか？」

「誰かが奴の動きをしばらく止めて置けば可能じゃが、こんなに暴れていては無理じゃ。」

「だったら、転ばせるとかする魔法は無いんですか？」

「お、それは名案じゃのう。」

蛙主は朋の頭の上で魔法を唱え発動する。

すると、猫はコケた。でも、一瞬で起き上がり、二人に向かって走り出してくる。

「効果はあまりないようじゃのう。」

「ええええ。」

「しかたない。このままでは二人ともお陀仏じゃ。お前さん。魔法少女になれ。」

「でも、私になつても力が暴走するだけで……。」

「わしがお前さんの力を押さえ込み、コントロールしてみる。」

「大丈夫なんですか？」

「わからん。でも、選択肢はなさそうじゃぞ。」

朋は蛙を頭の上に乗せた間抜けな姿だったが、魔法少女ガラミンに変身した。

蛙主が踏ん張り、暴走を止めている。

「むむ、こりゃ、凄い力だのう。押さえ込むだけでやっとなじや。」

「ど、どう、どうすればいいんですか？」

「戦おうと思つな、かわせ。」

「え？」

猫はガラミンに飛びかかってくる。もう回避できない。すると、魔法少女の球体のシールドが発動する。

そのシールドは猫と蛙主と一緒に弾き飛ばした。

ガラミンは力の抑制を失う。突然、体が熱くなり、体が言う事をきかなくなる。そして地面に倒れ込んだ。そこに猫が飛びかかってくる。蛙主は素早く転倒の魔法を使い、猫を転ばせると、ガラミンの頭の上のり、力のコントロールをはじめめる。

「すいません。カエルさん。」

猫は二人を中心として時計まわりに、ゆっくり移動しながら距離を詰めてくる。

「いいか、魔法少女よ。良く聞け。猫は強いが、その分、全力で動ける時間は短い。すでに奴は長距離を移動し、長い時間戦つて、随分疲れとる。もう少しすれば、肉体の限界がきて、奴の動きは鈍くなる。その時まで、がんばれ。」

「はい、頑張ります。」

猫はに飛び掛る。ガラミンは猫の攻撃を何手かかわしたが、戦闘経験が乏しいガラミンが上手くかわせるわけもなく、横から飛んできた前足の攻撃をくらう。

一瞬、シールドが自動的に発動しそうになったが、蛙主の事が頭に浮かび、シールドを解除したため、まともに食らい、体ごと飛ばされ、地面を2m程滑る。

ガラミンは起きあがろうと力をこめるが、体が言うときかない。猫は動かないガラミンに飛びついてきた。

『もうダメだ。』

そう思った瞬間、猫とガラミンの間に巨大なものが落ちて来て、間を隔てた。

「蛙主よ。お主、何をやっておる。」

そのには、巨大な筋肉質の茶色の毛をしたウサギが立っていた。

ウサギ主は、猫の首元と腕を握り動きを抑えていた。猫の瞬発力はウサギ主より強く、だんだん、押されはじめる。

「魔法少女、はよせい。このままではもたんど。」

テラミンは超加速を使い加速しジャンプし、猫の横腹にケリを入れた。猫は横へと飛ばされる。ウサギ主は倒れた猫の首を掴み、袈裟固めに入り押さえ込む。

猫は押さえ込まれながらも、更に暴れ、押さえ込みが解けそうになるが、何とか踏ん張る。

「蛙主、はよ、こいつを魔法で縛れ。長くは押さえてられんど。」

ガラミンの頭にとつたままの蛙主は「っは」とする。

「嬢ちゃん。変身を解いとくれ、このままでは、あの猫を押さえこめん。」

「は、はい。」

ガラミンは変身を解き、朋に戻る。

蛙主が魔法を唱えると、光輝くロープが空中に現れ、そのロープが自動的に猫をグルグル巻きにした。ウサギ主はロープに巻き込ま

れない様に体を放す。

猫はロープから抜け出そうと、もがくが、ほとんど動くことが出来なかった。

「ふう。」

「カエルさん。こんな力があるなら、始めから使えばよかったのに。」

「この技、そう、便利でも無いのじゃ。使うのに時間がかかるし、動いている相手には全く役にたたん。」

朋は縛れた猫に近づき、頭を撫でる。

「ごめんね。」

「それより、何で朋ちゃんが、ここに？
テラミルが朋に質問する。」

「私、ママにゴミ袋を買いに行くように言われて、そしたら、カエルさんが私に飛びついてきて、この猫さんに追われたんです。」

「蛙主。何で、朋ちゃんを巻き込んだんですか？」

「いや、わしも巻き込むつもりはなかったのじゃが、必死に逃げたら、たまたま目の前に魔法少女その2がおってな。」

その時、公園の近くの家の玄関が開く音がする。どうも、猫と格闘した時に出した大きな音を不審に思い外に出てきたらしい。

「ああ、朋ちゃん。見えてる。存在を消して。」

「あ、はい。」

朋は姿を消した。下駄のつかつかという音が聞こえて、人の姿が現れ、公園を見渡す。

当然、彼らの姿は見えない。

「朋ちゃん。まずいことになってきたから。ゴミ袋を買って、早くおうちに帰りなさい。人に見つかるはずだし、この猫は大丈夫だから。」

「はい、判りました。」

そう言って、朋はコンビニの方へと去っていった。

その後、すぐに別の家の人も外に出てきて、公園を見渡していた。

「さて、幾ら我々が人間に見えないとはいえ、ここはまずそつだ。大きな音も立てたしな。」

そう言いながら、ウサギ主は猫を担ぎあげる。

「学校に戻ろう。」

「それは困りますね。」

どこからともなく、声が聞こえてきた。

彼らの目の前に3匹の猫が現れた。

猫の縄張り（2話終わり）

「お初にお目にかかります。ウサギ主・蛙主・魔法少女。」
3匹の真ん中にあるボス格の猫が挨拶をする。

「お前さん。あの傷だらけの黒猫のボスか？」

「ああ、あいつは、別の縄張りの猫ですよ。ここいらを仕切っているのは我々です。まあ、そいつが、先ほど内密にその猫について目をつぶって欲しいと頼まれたのですが、我々が聞いてやる義理はありません。」

「ようするに、こいつを引き渡し、お前達に処分させると。」
蛙主がいう。

「まあ、平たく言えばそうですが、我々の願いを聞いていただければ、別です。」

「なんじゃ？」

「ここで、暴走を治める治療をしてもらいたい。」

「？何故じゃ。」

「暴走を治める手があるんなら、我々も知っておきたいんですよ。今後のために。化け猫は幾らでもいるわけじゃないので」

「やり方がわかったからとて、おぬしらでは難しいと思うがなあ」

「あのおお。本当にここでやるんですか？人が見えますけど。」

「ここで、お願いします。どうせ、人には我々は見えないのですから。」

「やってあげてください。」

後ろから声が聞こえてきた。皆、声の方を向くと、傷だらけの黒猫がそこにいた。

「彼らにも面子というのがあります。縄張りを荒らされたわけですから。彼らの顔を立てるためにも。」

「人間については、後ろの二匹が何とかします。」

と、ボス猫がいうと、二匹は存在を強め、駆け出し喧嘩をはじめ

た。

ウサギ主は猫をトイレの隅まで運び下ろす。

「ほら魔法少女、二人でやるぞ。はよ、来い」

そう蛙主は言って、猫の頭を触る。蛙主は魔法を唱えると、手が緑色に光る。すると、縄に縛られもがいていた猫が徐々に瞼を閉じ、完全に眠ってしまう。

「これは何をしてるの？」

ボス猫が蛙主に質問する。

「眠らただけじゃ。暴走は体のコントロールが利かなくなっ
て自分の体を太らせるために生き物を襲うじゃ。要するに意識が飛
んでしまって、ただ、食うことしか考えられなくなっているのじゃ。
じゃから、意識が戻れば問題は無いというじゃ。」

「一旦、眠らせれば、意識が戻るとい事ですか？」

傷だらけの黒猫が今度は質問する。

「それで、回復するやつもいるが、大抵の場合、そうではない。
暴走は大抵の場合、力が暴走して、意識を失い、体のコントロール
が利かなくなり、意識を無くすわけじゃから、要は体の外から力を
コントロールして、暴走を抑え込めばいいわけじゃ。」

「なるほど、で？どうするんですか？」

「魔法少女よ。こいつの力を抑えこんでくれ。」

テラミルは猫の手を握り、力を押さえ込む魔法を唱える。

「駄目です。力が強すぎて私では無理そうです。」

「しかたないのう。精神吸収を使って、少し力を抜こう。」

「暴走中に精神吸収をして大丈夫なんですか？」

「大丈夫ではないが、これをやらんと力が抑え込めんな。ま
あ、コツがあるからそこまで害は無いじゃ。」

テラミルと蛙主はゆっくりと、相手の力を吸収していく。

そうこうしていると、パトカーがやってきて、警官二人が降りて
きた。そして、公園を搜索する。

喧嘩している二匹の猫が、警官をこっちへ近づけない様に立ち振

る舞うが、いかんせん五月蠅かった。

警察が回転灯を切らずにパトカーを降りた為に、他の近所住民も公園に集まってきた。

蛙主とボス猫と傷だらけの猫は、治療の話をしつつ何やら、別の話が始める始末。

ウサギ主はウサギ主で、あまりに暇なので公園の遊具を使って筋トレを始める始末。

『こっちは精神を集中してるんだから、みんな静かにして欲しい。』

テラミルの心の声とは逆に、猫の喧嘩のボルテージはますます上がっていく。

彼女があたりを見回すと、朋がゴミ袋を抱いて帰って来ていたが、警官二人が公園を搜索しているうえに激しく喧嘩している猫二匹に筋トレしている大きなウサギという、なかなかシユールな状態なので、他人のふりをされた。

仕方ないとはいえ正直、心が傷ついた。

「こら、魔法少女よ。集中せんか！」

「はい」

力により巨大化した猫は、力を吸収され普通サイズの猫に戻っていた。猫を縛っている縄はサイズの変化に合わせて、縮小していく。

「ほれ、起こすぞ。はよ、力を抑え込む魔法を使わんかい。」

テラミルは力を抑え込む魔法を再度使った。

「今度は、大丈夫そうです。」

「後は、こいつを目覚めさせて、意識を取り戻してくれればいいじゃが」

蛙主は、目覚めの魔法を唱える。猫は目を覚ましたが、暴れ始めた。

「駄目じゃの。こりゃ、時間がかかりそうじゃ。」

テラミルは夜空を見上げた。

『私は、今日、家に帰れるのだろうか？』

「こら、よそ見するな魔法少女よ。」
「はい。」

テラミルはやけくその返事をした。

1話終わり。

猫の縄張り（2話終わり）（後書き）

某有名小説に猫をエナジードレインで治めるといふのがあり、精神吸収によって暴走を止める当初の設定では、問題があると判断したため、力をコントロールして意識を回復させるという手に変更しました。

3-1 眠たい登校

朝、美由は学校に向かって歩いていった。

いつもは、早歩きはやあそで登校するのだが、今日は、顔を下に向け、ソノソと歩いていった。

昨日、猫の暴走を止める治療が遅くなり、2時間しか寝ていない。頭が回転してないらしく、今日は存在を薄めてない。

美由はあくびをする。誰かが、パタパタと、走って来る音が聞こえる。

「桜間先輩。おはようございます。」

という、声と同時に、足音も止まった。

美由は、眠そうな顔で相手を見た。そこには、別の道からやってきた朋がいた。

「ああ、朋ちゃん。おはよう。」

「おはようございます。桜間先輩。」

美由は朋の「桜間先輩」という言い方に何だか違和感を感じた。

「美由でいいよ。」

美由は何と無しに言ったただだったが、朋は笑顔になる。

「えへへ、では、美由先輩。猫はどうでしたか？」

美由は一瞬、間を置いた。

猫に何かあったわけじゃなく、頭が回らず、思い出すのに時間がかかっていたからだだった。

「えーと、猫は無事、治せたよ。」

「良かった。」

「そのおかげで、私はほとんど寝られなかったけど。」

「大丈夫ですか？」

「大丈夫。大丈夫。多分。」

美由は昨日の治療中に、朋が他人のフリをした事を思い出す。

「それより、朋ちゃん。昨日、戻って来た時、他人のフリをした

でしょ。」

「ごめんなさい。何か、公園に帰って来たら、凄い事になってたんで、他人のフリをするのが一番かなと思ったんで……。」

「まあ、確かに凄かったよね。警察は居るし、近くの家の人たちは見てるし、猫が2匹暴れてるし、おつきなウサギが筋トレしてるしで。それより、おウチの人心配しなかった？」

「少し、遅くなりましたけど、コンビニで立ち読みしてたと言ったら大丈夫でした。」

「そっか、そっか。そういや、朋ちゃんのおウチは、あそこの公園の近くなんだ。」

「はい、あそこの近くにある公営団地に住んでいます。」
「なるほど。」

二人は、ちよつとの間、無言になった。その時、「桜間おねえ様。おはようございます。」と、言う声が聞こえてきた。

美由は「おはよう。」と答えた。美由は「おねえ様」と呼ばれるのは、凄く嫌だが、訂正するワケにもいかないので、そのまま受け入れる事にした。

声をかけた女子は「キャー」という黄色い声を出して、走り去っていった。

朋は美由の顔を見つめる。

「あの一。美由先輩。」

「ん？何？朋ちゃん。」

「私も美由おねえ様と呼んだ方が、良いのでしょうか？」

美由の足が止まり、朋の肩をつかむ。

「お願い。朋ちゃん。あなただけは、おねえ様と呼ばないで。」

朋は、実は美由をおねえ様と呼ぶ事に憧れがあったので、自己限定で、否定されてガツカリだった。

「どうして、私だけ？」

「朋ちゃんに呼ばれるのが嫌なんじゃなくて、おねえ様と呼ばれる事、自体が嫌なの。他の人にいちいち、『おねえ様と呼ばな

いで』と、言うワケにはいかないけど、朋ちゃんは親しいから。親しい人にまで、言われるのは、もの凄く苦痛なの。」

朋はがっかりしたが、美由が嫌がっているので、諦める事にした。

「美由先輩。分かりました。」

そう言った時、「桜間おねえ様。おはようございます。」と三人の女子が言った。美由は「おはよう。」と声をかける。朋は正直、羨ましかった。

学校の校門が近づいて来る。校門の前には、黒塗りの高級車が止まっている。

その前に、数人の女子が並んで立っている。車の扉が空き、出てきたのは須王寺 麗菜だった。

並んでいた女子が一斉に「おはようございます。須王寺おねえ様」と言った。彼女の派閥に属している人たちの朝のお出迎えだった。須王寺は、すました顔で「ごきげんよう」と答えた。

美由は思った。「彼女は何のために、この学校に来たんだろう」と。

うちの学校は、確かに上位に名を連ねる進学校で、女子をターゲットにしている中では一番上だが、お嬢様・おぼっちゃま学校では無い。

ここからだいぶ距離があるが、車で通学するるのであれば、問題無い距離に、お嬢様・おぼっちゃま学校はある。

彼女はその中等部から、この学校にやって来た。

そのまま居残れば、エスカレーター式に大学まで行けたのにだ。しかも、そのの大学は世間的には二流大学（一流大は東京六大学と京都大の7校のみ。メジャーで無い地方国立大が三流と言われるので、二流はもの凄い評価の高い大学）と、認知されている。

正直、こんな中間層の頭の良い女子を相手にしている学校に来なくても思ってしまう。

この学校は何故か、毎年、その学校の中等部から、こっちにや

つてくる生徒が結構いる。

ちなみに学校の派閥の長の3人も、その中等部から流れて来た人たちだ。

どういう、カラクリなのかは知らないが、ウチの学校から、結構、その大学に行く人が多い。

美由が知る限り、派閥の長の多くが一流大か、メジャーな女子に人気の高い二流大か、その大学に行っている。まあ、学校には学校の事情があるのだろうし、彼女等には彼女等なりの理由があるのだらうと思う事にする。

「わああ。凄いですね。須王寺お姉様。」

「そうねええ。」

まあ、凄いとは思うが、正直な処、美由は羨ましくも何とも無い。目立つ事に人一倍抵抗感のある美由にとってみれば、毎日あんなに注目を浴びるのは地獄だからだ。

ただ、彼女の取り巻きとなり、憧れの対象として、みんなで彼女をモテはやすのは、楽しそうだとは思う。ただ、積極的に参加したいと思うほどでもない。

美由はあくびをまたした。目には涙が溜まっている。

「あら、桜間さん。ごきげんよう。それに成美矢さんでしたっけ？ごきげんよう。仲がよろしくてね。」

「お、おはようございます。須王寺おねえ様。」

突然、声をかけられたので朋は慌てて、返事を返す。

「おはようございます。須王寺さん。」

「それより、桜間さん。学園の華である、『おねえ様』と呼ばれる方が人前であくびをしてはいけませんわよ。」

美由は、『別に頼んだ覚えは無いし、出来る限り呼んで欲しくはないのだが』と、思った。

三人は一緒に靴棚までの道を歩き始める。

「すいません。でも、今は名前が一人歩きしてる様ですが、私は本当は、何の取り得もないガッツな女なので、そのうち、みんな、

私が駄目な女だつてだつて分かるでしょうから、メツキがはがれて、呼ばれなくなると思えます。それに、正直な処、『おねえ様』と呼んで欲しくないんです。いちいち、そう呼ぶ後輩に『辞めて欲しい』と言つのも何なので、あえて言つてませんが、正直、重荷で……」

須王寺は少し顔色を曇らせる。

「あら、そうですか。」

須王寺は後ろを振り向く。

「みなさん。お聞きになりました？桜間さんは、おねえ様と呼ばれる事が重荷に感じてらっしゃる様ですよ。」

彼女の取り巻きが、いつの間にか三人を取り囲み話を聞いている。

「はい、須王寺さん。正直、意外でございました。あれだけ目立ってらっしゃるのですから、新たな派閥を立ち上げるものとはかり……」

美由は、自分の行動の何処を取れば、そんな結論に辿り着けるのか、正直、疑問に思った。

「あなたなら、良いライバルになると思っていたのに。」
そう須王寺は言う。

「いえいえ、そんな、私がライバルだなんて、トンでも無いです。私は自分の事だけで手いっぱい……。派閥なんてトンでも無いですし、それに、私、目立つのが苦手なんです。」

「あら、そうでしたの？でも、昨日も持久走大会の時も、倒れた人を助けたじゃありませんか、十分目立ってましてよ。」

「あの時は、須王寺さんも、一緒に助けたので、分かると思いますが、突然、倒れた人を見捨てるわけにはいかなかっただけで……」

「確かにそうですわね。」

「たまたま、倒れた人を助けただけで、派閥を作る意志があると思われるのは、正直迷惑としか……」

「でも、お気をつけになった方がよろしくてよ。そういう噂が流れてますし。」

「私は派閥なんて作りません。学校の勉強だけで正直手一杯ですし。」

「そう思っているのはあなただけかもしれませんよ？私は共に居たから、分かりますが、噂だけ聞いた人の中には、あなたの名が拳がっている事に不愉快な思いをされている方もいらっしゃるのです。」

「教えて貰って、ありがとうございます。」

美由は不条理だと思った。偶然、その場で困っている人を助けただけで、妙な勘違いと恨みを買ってしまったているらしいという事に、朋はオロオロしていた。靴棚の前まできたので、朋は「では、失礼します。」と、言って、走って離れた。

美由は朋に、こんな嫌な話を聞かせて悪い事をしたなと思った。

朋と加奈 美由の話

朋は、自分の靴箱の前にやってきた。

大きく息を吸い。深く息を吐き出す。

その時、後ろから背中を叩かれる。

「おはよう、朋ちゃん。」

朋は後ろを振り返り、相手を見る。そこに居たのは加奈だった。

加奈は少し意地悪な笑顔を浮かべている。

「あ、加奈ちゃん。おはよう。」

「見たわよ、聞いたわよ。須王寺おねえ様と桜間先輩と一緒に

登校。」

「あはは、恥ずかしい処、見られちゃったね。」

「何、言っているの、今をときめく、学園のアイドル二人と、一緒に登校なんて、羨ましい。」

朋は自分の靴箱を開け、上履きを取り出す。

「あうー。でも、ああいう話は苦手で、私、逃げちゃた。」

朋は革靴（かわぐつ）を脱ぎ、上履きを履き、靴をトントンする。

「朋ちゃんは、それでいいのよ。可愛いから。」

「あうー。」

朋は、革靴を拾い、下駄箱に入れ、フタを閉めた。

二人は1年の教室に向かい歩きはじめる。

「ああ、でも、失敗したなあ。まさか、あの噂で恨みを買っていたなんて。」

「もしかして、広めたの加奈ちゃん？」

「ふっふっふ。秘密。」

「駄目だよ。美由先輩は、すつごく、恥ずかしがり屋さんだから、クールに受け流している様に見えても、内心では『おねえ様』と呼ばれるのを凄く嫌がっているんだから。」

「それ、さつき、朋ちゃん達が三人で歩いている時に聞いたわよ。」

まさか、恥ずかしがり屋さんとはねええ。クールなもの、照れ隠し
つてわけだ。」

「がっかりした？」

「まさか。全然。^{ぜんぜん}恥じらいは萌えよ。」

「萌えつて……。」

朋は『加奈ちゃんには、美由先輩がどう見えているんだろう？』
と、不思議に思った。

「今の3大派閥のおねえ様方は、気品に溢れるけど、目立つ事
に終始して、恥じらいというのが欠けていたのよ。ここに来て、
恥じらいの有る、おねえ様の登場よ。かなり、萌える展開でしょ。」

朋には良くわからなかった。恥ずかしがり屋さんというので、が
っかりはしなかったし、むしろ、自分と近い処ところがあつて、安心感を
覚えたが、『萌え』という感情は浮かんでこなかった。

「加奈ちゃん。美由先輩は『おねえ様』って呼ばれる事も、注
目を浴びるのも、凄く嫌がつてるよ。私だって、さつき、美由先輩
に、『絶対、おねえ様と呼ばないで』って、釘を刺されたし。私
だって、呼びたかつたのに。」

朋は少し顔を膨れさせた。

「そっか、そっか。でも、もったい無いなああ。あれだけ才能が
あつて、学園のアイドルにならないなんて。」

「才能？」

「私も、知らなかったから、詳しく調べてみたんだけど、そした
ら、学園の3年女子で、色々と総合すればナンバーズリーNO3の実力があるのよ。」

「3年、女子の中で3番目？」

「そうそう、3年女子の中で3番目。この学校つて、女子が7割
で男子が3割だけど、男子が頑張るから、上位つて男子じゃん。だ
から、目立たないけど、男子を除いて考えれば総合点では、桜間先
輩つて3位なのよ。」

「へええ、しらなかつた。」

「でしょ。私も、この事実を知った時、驚愕したわよ。まあ、私も昨年度の成績表を職員室で隠れて覗いたから、知ってるんだけど。」

「加奈ちゃん危ない事するね。先生に見つかったら大変だ。」

「それくらい、しないとねえ。」

加奈の教室の前についた。

「じゃあ、またね。朋ちゃん。」

「うん、また。加奈ちゃん。」

3 - 4 いじめられる美由

昼休みになった。

美由は、お弁当も食べずに、自分の机でうずくまりながら、寝ていた。今日は2時間しか、寝ていないので、とても眠かったのだ。授業中、寝るわけにもいかないの、ずっと、眠気と戦い、休み時間の僅かな時間わずを使って眠り、絶えに耐えた午前中であった。

待ちに待った昼休みである。ここで、お弁当を食べずに寝れば、午後の授業も耐えられる。そう思っていたが、昼休みに入り、しばらくして、別のクラスの女子が寝ている美由の周りを取り囲む。

美由はぼんやりした顔で、取り囲んだ人たちを見た。
知らない方々である。

「なんでしょ？」

美由は心当たりが無いのでたずねる。

「桜間さんちよつと、来ていただけるかしら？」

「は、はああ。」

ぼんやりとした頭で、彼女達の後をついて行く。

『なんだろう？』

その光景を、須王寺すおうじは遠くから見つめていた。

『あれは、確か別の派閥の子達・・・』

美由が連行される姿を、加奈は発見し、後をつけていった。

『これは事件の臭い。』

美由は、学校の隅にある、ガラミンが誕生した階段下まで連れてこられた。

『私は、どうも、この階段と縁があるらしい。』と、どうでも良い事を思ってしまう。

美由は階段を背に周りを、その集団に囲まれ、逃げられなくされ

る。

『はて？私は、何故^{なぜ}困まれているんだらう？』

眠気で頭が回らない美由は、それ以上思案できなかつた。

集団に囲まれても美由は怖くなかつた。

彼女は普通の姿であつても、鍛えているから十分強いし、戦闘経験もそれなりに積んでいる。ここにいる女子を倒すわけにはいかないが、ここにいる女子ぐらいなら困まれているも逃げ切る自信がある。今よりピンチの状況は何回かあつたんで、恐怖も沸いてこない。『それより、教室に帰って寝たい。』と、思っていると、リーダー格の女子が威圧的に話しはじめた。

「あんた、最近、生意気なのよ。」

美由は、黙っていた。というより、頭が回らないので、突然、脈略の無い事を言われても理解できない。

「何、黙ってるのよあんた。」

リーダー格の女子が、美由の肩を突き飛ばした。後ろの壁にぶつかる。

「何とか言いなさいよ。」

『何とかと言われましても、意味がわからないのだが……。面倒くさいなあ。仕方ない』

「すいません。おっしゃっている意味がわかりませんが、あなたは、私に『ついてきて』と『なまいき』と『何を黙っているのか』と『何とか言いなさい』しか言つてませんよね？私にそれでどう理解しろというのか説明を求めます。」

「何、言っているの馬鹿じゃないの？」

「馬鹿な事を言っているのはあなただと思いますが？あなたは、まだ、『ついてきて』と『なまいき』と『何をだましているのか』と『何とかいいなさい』と『馬鹿じゃないの』しか、私に発言してませんよね？あなた、高校の生徒でしょ？ここに合格できた頭があるのなら、もっと、相手に理解できるように、ちゃんと説明をなさいと云っているんですよ。私は。」

美由は自分のいやらしい言い方に自分でも嫌になっただが、向こうの意見を理解できるレベルで聞かないと、話にもならない。まず、その内容では、理解できないと相手に気づいて貰う必要があったので、仕方が無かった。

「生意気でむかつくといっているのよ。」
と、言って、美由の肩をまた突き飛ばす。

「むー。どうも、彼女はそれ以外を言うつもりは無いらしい。どうも、このまま行くと私はいじめられるらしい。さて、どうしよう。」

美由はこういった時の最善の対処法を知っていた。

それは、歯向かう事だった。
負けてもいいが、こっちに手を出せば痛い目を見ると相手の体と心に刻みつける事である。

ここで引くと、いつまでも、いじめられ、潰される。

当人達は集団にいるから、いじめている認識を持たないが、時間がたてばたつほど、いじめは深刻化する。そうならないために、早い段階で歯向かう必要があるのだ。

実は、これは犬猫の調教法であった。

犬や猫を教育する時、兄弟と共に育てるのが一番効率が良い。それは、相手を攻撃したら、相手は反撃してくるからだ。お互い痛い目にあい、相手を傷つける事は自分もリスクを負うというのを学んでいくのだ。

痛みを教える手は幾らでもある。一番利くのは相手の親を巻き込み、警察沙汰をちらつかせる事だが、なるべくそこまでもって行きたくない。

大声を出し、逃げて、先生を巻き込むというのもあるが、問題の先送りにしかならない。

暴力に訴えるのは、こっちが不利になる可能性がある。

美由に残された手は、口で相手の正義を潰し、相手の人格を徹底的に潰すして行くしかなかった。

本人達は軽いつもりなのだろうが、実際、彼女等は自分に対して戦争をしかけてきてきているのだ。戦争をしかけられたら、しかけられた方は、相手を潰し、自分も傷つく覚悟をもたなければ終わらせる事が出来ない事を美由は知っていた。

美由は、大きく息を吸い込み、一言目を吐こうとした瞬間、猫が喧嘩の時にあげる鳴き声が聞こえてきた。そこにいたのは、存在を強くして普通の人でも見えるようになった、傷だらけの黒猫だった。全員が、その猫を見る。

猫は、女子の集団の中へ、襲い掛かる声を発しながら、入ってくる。女子の集団を抜け、体をひるがえし、女子の集団に威嚇の声をあげる。そして、美由に向かって飛び掛ってくる。猫は、わざと、美由にあたらないように攻撃をはずす。その瞬間猫は、美由に向かって、ウイंकをした。体をひるがえし、今度は女子集団のリーダーに飛び掛る。

美由はこの攻撃は当たると、瞬時に判断し、猫にタックルして抱きかかえる。

美由は襲われたリーダーの女子の方を向き「大丈夫？」と、声をかけた。相手は、真っ青になり何も言わない。

猫は美由の胸元で暴れ美由の手を引つかいた。

「イッタ。」

美由は猫を思わず放してしてしまった。猫は猛スピードで去って行く。

美由の指から血が出ている。

美由は立ち上がり、指を口でくわえ、血を吸って、ツバを吐き出す。口で指をくわえながら美由は話をはじめ。

「私、消毒のために、保健室に行きたいんだけど。話があるなら早くしてくれるかな？」

「もういい。話は終わりよ。」

そういって、女子たちは去っていった。

美由は、保健室に向かう。

それを加奈は隠れて見ていた。「ふっふっふ、良いもの見た。」

3 - 5 放課後に流れた噂

学校が終わり、美由は急いで帰ることにした。昼休みのトラブルの事もあったが、早くウチに帰って寝たいというのもあった。

校門を過ぎると、存在を薄めた傷だらけの猫がテケテケと美由に走りよってくる。

「魔法少女様。今日の昼は大変でしたね。」

「おかげで、怪我しましたよ。見てくださいこの指。」

美由の指にはガーゼが巻かれている。

「そのくらいで済んで、良かったじゃありませんか。あの後、反撃するつもりだったんでしょ？口にしる、暴力にしる、あなたが反撃すれば、お互いその程度の傷ではすみませんよ。私があそこで暴れて、暴れる猫から彼女達を救ったという恩ができたから、あなたは解放されたんです。むしろ感謝して欲しいものです。」

「それも、そうですね。でも、何故？私を助けたんですか？」

「昨日の恩があるのと、あなたに恩を売っておけば後々何か役にたつかもしいれないのと、あなたに潰れて貰っては困る。というあたりですか。」

「そうですね。」

「？。……。魔法少女様は、頭が良さそうに見えて、そうでもないんですね。」

「私は頭が良いなんて思った事は無いです。いつも、私の前には私の遙か前に人が立っているのです。正直、劣等感でいっぱいです。」

「そう言う事を言っているのではなく、相手の意見の表面だけ捉えるだけで、その向こう側にあるものを考えようとしません。」

「駄目ですか？」

「駄目ではないです。むしろ、良い事だと思いますよ。大抵のこととは、自分に振ってくる火の粉を落としていれば、解決しますから。」

「それより、私を囲んでいた女の子を襲った時、危なかったでしたよ？もう少して彼女が怪我をするところでした。」

「ええ、本気で襲いましたから。」

「本気って……。」

「必ず、あなたが止めるだろうと、確信してましたから。もし、傷つけても、引っかけ傷がつくだけでしたし。」

美由は「私は、あそこでも試されていたんだな。」と、思った。パタパタと誰かが後ろから走ってくる音が聞こえてくる。

「みゆせんぱーい。」

朋の声だ。美由と猫は後ろを振り返る。朋は二人の元までやってきて、息を切らしている。

「美由先輩と、それと猫さん、こんにちわ。」

「はい、こんにちわ。」

「魔法少女様こんにちわ。」

二人と一匹は歩きはじめる。

「猫さん。あの猫さんはどうですか？」

「ええ、無事に回復してますよ。」

「よかった。」

朋は笑顔になる。美由はその笑顔に癒された。

美由と朋は、学校を早く出たので知らないが、美由を集団で取り囲み、猫が割り込んで、彼女達を美由が猫から救ったというウワサは放課後、瞬く間に学校中に広がった。加奈が広めたのだった。

このウワサは、ある疑惑を呼ぶ事になる。学園の派閥の下っ端の人たちが起こした事件だったが、学園3番目の派閥に属している子

が多かった。そのため、黒幕がいるのでは？という憶測が生まれた。

そのウワサを聞いた須王寺すおうじは、一言「馬鹿な子」と呟いた。

『だから、あなたは、3番目までにしか、なれないのよ。』

3 - 6 数学の参考書

「そう言えば、朋ちゃん。来週から中間テストだね。」

美由は下校中の道を歩きながら、朋にたずねる。

「あー。私、全然、勉強してません。テスト期間中は一夜漬けの毎日です。」

「あらあら。うちに帰ったら、勉強する癖はつけたほうが良いわよ。」

「はー。判っているんですけど。美由先輩は一夜漬けとかしないんですか？」

「しないよ。と、言うより、私は一夜漬けに向かないタイプだから。」

朋は美由の言っている意味が分からなかった。

「『向かない』って、どうしてですか？」

「私、物凄く要領が悪いのよ。みんな、山が当たったとか言うんだけど、どうやって、そういう目星をつけて勉強が出来るかわからなくて。」

「意外です。」

「うーん。朋ちゃんの意外が何を指しているのか、良くわかんないけど、黒板に書かれている内容と教科書に書いてある内容をただ単に暗記したって、テストには何の役にも立たないと思うんだけど……。」

「そんな事はないです。それは美由先輩が先生の話を、ちゃんと聞いていないからです。先生は優しいので、『ここテストにでるぞー』と教えてくれるのです。丸暗記しておけば、その問題が必ず出るんです。」

美由は自分の11年間の学校生活を思い返すが、そんな優しい先生に出会った記憶はなかった。

『どうも、私は運が悪いらしい。』

「それにですね。友達のネットワークを使えば、どこが出ると、教えてもらえるのです。」

「そう朋は力説する。」

『私の友達には、そういう友達はいなかったなあ。』

「ええつとね、朋ちゃん。ウチの学校は進学校で、大学に行くのが目的の学校なわけ。そういう、やり方では、大学にはいけないと思うのよ。」

「あうー。確かに、そうですね。」

「朋ちゃん、何の課目が苦手？」

「全部苦手ですけど、得に数学が苦手です。」

『数学か……。』

「朋ちゃん。数学、どんな勉強してる？」

「教科書とかノートとか使うけど、全然だめで、問題集買ってきても、何が書いてあるのかさっぱりで……。」

『教科書を使っているのか……。それは、確かに駄目だな。』

「えつとね。朋ちゃん。教科書で勉強しても、数学は駄目だよ？」

「え？そんなんですか？」

「教科書には解き方も、問題の答えも書いて無いから。教科書は、先生の教えを聞かないと理解できない作り方をしているから、家で、教科書を使って勉強しても何の役にも立たないよ？」

「あうー。」

「そのために、参考書というのがあるわけで、参考書には問題の解き方も答えも書いてあるから、自分で勉強するには必須なの。問題集なんかは、参考書の内容をある程度理解した後、ミスを減らすためのもので、参考書をまずマスターしないと何の役にも立たないよ。」

「私、勉強の順番が違っんですね。」

「朋ちゃんには特別に私の数学の参考書をあげよう。」

「いいんですか？」

「私は、今は、もう一ランク上とそのひとつ上の参考書を使って

いるから、もう使わないし。まあ、あげても、どうせやらないとは思うけど、気休めぐらいにはなるから。」

「うー。数学の参考書は3つもランクがあるんですね。」

「私が使っているのは、3つじゃなくて、4つあるよ。私は赤本まではやる予定は無いから。と、言うより、黄色が後少しで、受験までに緑が終わるかどうかが怪しい状態だけだ。」

「赤本ですか・・・。」

「白・黄色・緑・赤の順であって、白が一番簡単で、赤が一番難しいのね。白は先生に教えられなくても、自分で数学の基礎を学べる様に作られてるんだけど、白を一通りやっても、黄色には歯が立たないの。で、白の隅っこに書かれている難しい問題がある程度解けるようになれば、黄色に入れるようになるって、感じかな。」

「先は長そうです。」

「この学校のテスト問題だと、黄色ぐらいまでは解ける様にならないと、良い点は無理かなあ。白までやれば、赤点は無いと思うけど。」

呪いの指輪

深夜の事だった。

街から少し離れた郊外に西洋風の豪邸が立っていた。

その豪邸の隅にある物置に、一人の女性が入ってくる。

彼女は見た目は高校生ぐらいで、ピンクのシルクで作られた、フリルが大量にある、ボリユームのある寝巻きを着ている。

彼女は物置の隅に置かれている、1m程ある大きな古ぼけた金庫に近づき、その金庫のダイヤルを紙見ながら回し、鍵を使って開けた。

そこには、大量の古本と共に、お札の貼られた紺の指輪箱が入っていた。

彼女はその指輪箱を手にとり、お札をはがす。すると、小さな鍵穴が出てきた。

彼女はポケットから、小さな鍵を取り出し、指輪箱の差し込み、施錠をはずし、フタを開ける。

そこには、古いデザインの緑の宝石に金のリングがつけられた指輪が入っていた。

「これね、我が家の家宝。呪いの指輪。願った相手を呪うという。」

彼女は何の迷いもなく、その指輪を指にはめる。

『私は、許せないの。聖セイントエルナル学院の人間で無い人が、おねえ様様の地位につくなんて、あんな、どこの馬の骨ともわからない、平民の子が、私と同じ地位にすることが許せない。』

多すぎる参考書

朝、登校中、美由は朋を発見する。

「おい。朋ちゃん」

朋はそこ声に気づき、直ぐに笑顔になって手を振る。

「美由せんぱーい。おはようございます。」

美由と朋は、一緒に学校に向かって歩き始めた。

美由は学校指定の革カバンを明け、数学の参考書を4冊取り出す。

「はい、朋ちゃん。約束の参考書。」

「4冊あります。全部カバーが白いのですが、もしかしてこれが、白・黄色・緑・赤なんですか？」

「まさか、この4冊で白よ。数学？・数学？・数学A・数学Bの4冊。」

「もしかして、この4冊の上に黄色い4冊があつて、緑があつて赤があるんですか？」

「違うよ。4冊なのは黄色までで、緑と赤には更に幾何とか微分積分とかあるよ。昔は数？とかあつたらしいけど。」

「あー。そんなにいっぱいあつたら、高校3年間で終わらないです。」

「私もそう思う。正直、ある一定レベル以上の大学に行きたければ、本当に毎日勉強漬けになっておかないと、無理だと思うよ。それに、この学校で数学で良い点とりたければ、授業でやったところを、白・黄色と順に押さえておかないと厳しいけど、まあ、白だけでも赤点は多分免れると思うし。」

「ありがとうございます。美由先輩からの初めてのプレゼントです。」

そういって、朋は4冊の参考書を受け取った。

「まあ、使い古しの参考書がプレゼントとして成立するかどうかは疑問だけだね。」

「いいえ、私、大事に使います。」

「期待はしてないけど、頑張つてね。」

美由はこの手のものを相手に渡して、相手が1ページでも読む事など、極めてまれな事だと知っている。

「はい。」

朋は、いそいそと、カバンに4冊の参考書をしまつ。その時、朋は後ろから肩を叩かれる。

「よ、朋ちゃん。」

朋は相手を見る

「ああ、加奈ちゃん。」

「おはよう。美由先輩もはじめまして、おはようございます。」

「はい、はじめまして、おはようございます。朋ちゃん、この子、朋ちゃんの友達？」

「は、はい。持久走大会の時、美由先輩と別れた後すぐに、友達になりました。」

「へええ。加奈ちゃんだっけ？朋ちゃんをよろしくね。」

「ええ、もちろん。」

美由は、ここ数日の学園内でのトラブルが、加奈の噂が原因だという事を知らない。加奈は当人にそれを伝えるつもりはない。今回、朋に声をかけたのも、美由とお近づきになって、情報収集をしたかったからだった。

「それより、朋ちゃん」

「何？加奈ちゃん？」

「持久走大会で話した派閥についてなんだけど、私、間違つた事を教えてたみたいなの？」

「どんな？」

「私も入学して一ヶ月ぐらいで、みんな、そういう事を話たがらなかつたから、知らなかつたんだ。でも、違和感を感じてたのよ。変な事いうなって、で、昨日、ちょっと調べたら驚くことが分かったのよ。」

「?? よくわかんないよー。」

「実は、派閥に属している半分くらいの子って、正式にはうちの生徒じゃないのよ。」

「はい?」

「朋ちゃんセイント聖エルナル学院って知ってる?」

「しらなあーい。」

「まあ、宣伝とかしてないからねええ。ここら辺のお嬢様・おぼっちゃんに通う、小中高大一環のエリート学校よ。」

「へええ、そんなのがあるんだ。」

「彼女等は、そこから来た交換学生なのよ。交換とは言ってもこっちから向こうに行っている人は一人もないけど。」

「交換学生?」

「何でも、籍はあちらにあるんだけど、わざわざ、こっちに来てで勉強してるんだって。」

美由はなるほどと思った。中等部出身者が多いのも、卒業後あちらの大学に入学する生徒が多いのも、そういうカラクリがあったのかと納得する。先生が彼女等に対し、不可思議な表現を使っていたのもうなづける。

だが?この学校は、この学校の生徒でない人間に生徒会を牛耳らせている事になる。正直大丈夫なのかと疑問に思った。

「何でこっちに来て勉強してるの?」

「さあ。作者が設定を詰めて無く話を進めた結果、設定の大幅変更を余技なくされて、後付で出して来た設定を私に聞かれてもあれなんだけど、どうも、うちの学校と聖エルナル学院セイントの経営母体が同じで、私立の大人の事情で、単位を共有できるみたいなんだけど、彼女等が何のために来ているのかまではちょっと、わかってないの。」

「へええ。色々とあるんだねええ。で、どう間違ってたの?」

「派閥ってのは、私は、ただの仲良しグループだと思っていたんだけど、実は聖エルナル学院セイントの人たちが、自分達はここ生徒達と

は違う特別の存在と主張するためにやっつてる組織みたいなのだ。

彼女等だけでは数がしれてるから、ここの生徒で、彼女等の気に入つた人を囲い込んで数を増やして勢力を競っているみたいなのよ。で、私が知っている派閥を作ろうとした先輩何かも、聖セイントエルナール学院の人たちの猛烈な圧力にあつて、断念したみたい。」

美由はその話を聞いて未恐ろしくなつた。自分は派閥を作るつもりなど更々無いが、現在、「おねえさま」と後輩の一部に呼ばれている。昨日やってきた人たちは、そういう理由で、私に不満を持ち、脅しをかけてきたのか。彼女等も分かるように説明してくれば良いものを……。

美由と須王寺

美由は教室に来て、カバンから教科書とノートを取り出し机にしまっている。須王寺が近づいてくる。

「桜間さん。ちょっといいかしら。」

美由はキョトンとした顔で、須王寺を見る。

「はい。どうぞ。」

須王寺はまわりを見回すそぶりをみせて「ここでは、あれですの
で、廊下の隅の方で。」

美由は須王寺についていった。

「桜間さん。すいません。」

美由は意味がわからない。

「須王寺さんが謝るような事を、私はされた記憶が無いのですが。」

「いいえ。噂で聞きました。昨日、派閥の件で圧力を受けたと。」

昨日ちゃんと、伝えておけば、こんな事には……。」

「あの、須王寺さん。おっしゃている意味が良くわからないのですが？昨日の昼休み、私の事が嫌いだという方が私を取り囲んで文句を言われたのは事実ですが、派閥だの圧力など一言も言っていないでよ。」

「そうですね。では、分かる様に説明します。あなたは、私たちが、ここの学校の生徒で無い事は知っていますか？」

「今朝、後輩から聞いて、はじめて知りました。聖エルナル学院の生徒さんで、こちらに交換学生として来ていると聞きました。経営母体が同じなので、単位を共有できるとかなんとか。」

「学園の三大派閥は、昔から聖エルナル学院から来た生徒が代々受け継いできたんです。ですから、派閥というのは聖エルナル学院の生徒にとっての誇りでもあるわけなんです。」

「はい。」

「で、その聖エルナル学院セイントの生徒の誇りである派閥を、ここの生徒さんに作られるのが許せない方々が結構おまして……。」

「別にそれを知っていたからと言って、昨日の件が回避できたとは思えませんよ。」

「まあ、それはそうなのかもしれませんが……。」

「ところで、聖エルナル学院セイントのお嬢様方が、何でこんな学校に来るのでしょうか？」

「恥ずかしい話ですが、世間的には二流大のある優秀な聖エルナル学院セイントと呼ばれるのですが、内実は酷いものなんです。」

あくまでフィクションであり、作者の思いつきで書かれています。実際にはこんな学校は無いのでフィクションとしてお読み下さい。

「酷い？」

「私どもの学校の新学期の日に何をするかご存知ですか？」

「知りません。」

「服と靴をつくるんですよ。学期毎に学校で。」

「へええ。そうなんですか。」

「一流のデザイナーとか職人さんたちを呼んで、上流階級のあるべき服や靴のオーダーや採寸の作法などを習うのが目的らしいのです。」

「凄いですね。」

「授業も、上流階級にあるべき、作法とか、ダンスとか、帝王学などが中心におかれています。」

「すいません。話が見えませんが？」

「そうですね。で、そう言った事をしていたら、どれくらいの学力が身につくと思います？」

「わかりかねます。ただ、私が、大学に行くために勉強しているのを基準にして考えるなら、高い学力がつくのか疑問ですね。」

「聖エルナル学院セイントは、国が決めた高校卒業の最低単位をとれば、後は自由に勉強しろいう校風なんです。それは漫画で出てくる様な

不良学校卒業生と同程度の学力であつても問題はないって事なんです。最低単位をとれば後は自由になんて言われて、勉強する方がどれだけいるでしょうか？」

「しませんよねえ。特に無試験で大学に行けるとなれば、なおさら。」

「そうなんです。それでは駄目だと思つ方は、家庭教師をつけたり、学校で先生に必死に勉強を教えて貰おうと頑張る方もいますが、周りが圧倒的にやる気がなく、優雅な高校生活を送れさえすればそれで良いと思つているので、次第にそつちへ流れていくんです。」

「まあ、勉強をしなくてはならないという空気が周りにないと、個人の決断だけじゃ駄目ですよ。それに勉強をするなら、ある程度、周りとギリギリの競争をさせていかないと。」

「だから、学力がなければ将来、駄目だと考える変わり者が交換学生で、この学校に来るんですよ。」

「なるほど。」

「まあ、ここに来て、1年の間に、この学校の水が合わないと言つ理由で、^{セント}聖エルナル学院の方に戻る生徒が半分程いますけどね。私だつて、^{セント}何度も^{セント}聖エルナル学院に戻ろうと思つたことがありますし。」

「そうなんですか。」

「まあ、お嬢様には、合わないようなああ。この学校の勉強第一主義の校風つて。私はずっと、トップクラスだったから、1年で居なくなつた人に出会わなかつただけで、他のクラスでは結構、抜ける人が多かつたのか。」

「あ、でも、^{セント}土曜日は^{セント}聖エルナル学院の必須単位である礼儀作法やダンスや帝王学を学ぶために行つてるんですよ。だから、私を土曜日の補習で見たことないでしょ？」

「そついやあ。見たことが無い様なああ。強制ではないから気にはしなかつたけど、確かに先生はスルーしてたな。でも、土曜の補習つて、授業をすすめたり、基本問題や応用問題なんかをやるから、

大変な事になる気もするが……。まあ、彼女は学年上位だし、家庭教師なんかでそこらへんはカバーしてるのかな？それより、彼女が昨日の登校中に、私に派閥やらおねえ様やらライバルとか言っていたのは皮肉と忠告だったのか……。分かる様に言ってくれないと……。」

「それと、ひとつ、勘違いなされては、困ることがあります。あなたが私のライバルになってくれるのを期待しているのは本音です。」

「そう言って、須王寺は去っていった。」

髪の毛

美由は教室に戻ろうと、廊下を歩き出す。その時、誰かが自分の背中をちよんと触って来た。

「桜間さん。後ろに髪の毛がついてましたわよ。」

そう言っつて、美由の髪をつかんでいたのは、同じクラスの子だった。学園3番目の派閥の長で、片奈 麻奈加という人だった。

「ありがとうございます。片奈さん。」

美由は髪をつかんだ指に緑色の指輪をつけているのが気になったが、注意してもトラブルになるだけだろうからあえて無視する。先生が注意するだろう。余計な事をしてこれ以上目立ちたくもないし、美由はそのまま、教室へと入っていった。

片奈はにやけけ、指にはめていた指輪をはずし、リング部分に美由の髪の毛を巻きつけ、また指にはめた。

『この指輪は指にはめている時は人には見えない。平民の下つどもは役に立たないどころか、私の名を傷つけたけど、この指輪は相手にわからないように呪いをかける。思い知りなさい、身分、不相应な夢を見たことを。』

朋は、自分の教室で、友達3人に参考書を見せる。

「見てみて！美由せんぱいからのプレゼント。」

「お、よっかたなああ朋。」

「でも、プレゼントが参考書とは、色気も糞もないなああ。」

「ぶー。美由せんぱいは、私を心配してくれたんだよ。心がこもっているから、私とつてもうれしかったの。」

「でも、朋、この参考書4冊、重ねて置くと、物凄い分厚さだよ。本当に勉強するの?」

「がんばるもん。」

「多分、家に帰って、本棚に置いたらそのまま、捨てるまで一生出てこないな。」

「うむ、全く同意だな」

「ぶー。」

3時限目を過ぎた頃から、美由は体調がおかしい。肩が少し重し、ちよつと熱がある。風邪にしては時期が違う様な気もするが、東南アジアとかは6月にインフルエンザが流行るといふし。

昼休みに入り、美由は真つ青な顔をしていた。熱はちよつとだが、明らかに体が重い。風邪とは微妙に違う気がするというより、病気とは別な不自然な感覚を覚えていた。

外から、体を押さえつけられる様な感覚と、魔法のような気配。

『仕方ない。蛙主に聞いてみよう。』

そう思い、校庭に出て、蛙を探す。

そこで、外で友達3人と芝生の上でお弁当を食べようとしている朋を見つける。

「美由先輩。お弁当一緒にどうですか?」

そういつて立ち上がり、てつてつと近づいてくる。

朋は気分が悪そうにしている美由の顔を見て驚く。

「美由先輩。大丈夫ですか?顔が真つ青」

「朋ちゃん、シー。どうも、魔法関係の問題みたいなの。今から、蛙主を呼ぶから今はちよつと。」

「私も手伝います。」

美由は断ろうと思ったが、朋は既にそこにはいなく、友達のとこるに向かい、一緒にお弁当が食べられない事をあやまりに行っ

た。

会議

蛙のクワクワという鳴き声が、学校の隅で響く。その横に朋と美由が立っていた。

「これで、蛙さんが来てくれるんですか？」

「多分ね。」

「どうやってくるんですか？走ってくるのか。」

「あんな山の中から蛙が走ってこれるわけないでしょ。蛙主は瞬間移動が使えるの。」

「へええ、蛙さんはワープが出来るんですね。でも、猫さんの時はワープが使える気配なんてありませんでしたよ？そしたら、猫さんから逃げられたのに。」

「発動に時間がかかるからねええ。存在が薄いとはいえ、自分の肉体を移動するわけだから、それなりのコストと準備が必要なのよ。」

「良く分からないですが、でも、ワープするには時間がかかるのは分かりました。それより美由先輩、体の方は大丈夫ですか？」

「大丈夫ではないかな。さつきよりは、ちよつとマシな気がするけど、気のせいかもしれないし。」

「私は、何にもできませんが、頑張ってください。」
美由は朋の頭を撫でる。

「ありがとう。朋ちゃんに応援されると、不思議と元気が出るよ。」

「えへへ。」

蛙主が突然、目の前に現れる。蛙主は何もしゃべらず、ジーンと美由の顔を見つめる。美由も何も話さず蛙主を見ている。

「何じゃ。魔法少女その1よ。この嬢ちゃんは、もう巻き込まんのじゃ無かったのか？」

「そういう、あなたも二日前に巻き込んだでしょ。」

「それと、これとは別じゃ。」

「あなたを呼び出そうと思っただら見つかってしまっただけにもいかなかったんで。」

「随分、決意が弱いのが。完全に拒絶するぐらいの覚悟をもたないかい。」

「すいません。」

「あー。美由先輩に拒絶されるのは嫌です。これから気をつけます。」

「さて、何じゃったかな？ と言えば、魔法少女その1よ。顔色が悪いぞ、どうした。」

「蛙主。あなたは、何しにここに来たんですか？ 蛙の方に、魔法の力で、体調が悪くなったからアドバイスを欲しいと伝えただけですが。」

「そうじゃったのう。お前さんの熱でうなされる寝姿を拝みに来たんじゃない。随分、色っぽいじゃろうに。」

「そういう、エロい考え辞めてください。」

「わしの生きがいじゃからしかたあるまい。」

「それより、調べて貰えますか？」

「蛙主はジーンと、美由を見つめる。」

「何か魔力的な力がお前さんの周りを包んでいる様じゃが、触ってみると良くわからないのう。」

「どうぞ。」

「蛙主は足をスケベな手つきで触る。美由は飛びあがる。」

「何するんですか、このスケベガエル。」

「いや、気持ち良さそうだな足だったんで。」

「朋はしゃがんで怒った顔をする。」

「蛙さん駄目ですよ。美由先輩は綺麗な女なので、そういう風に触りたい気持ちは分かりませんが、恥ずかしがり屋なので、そんな事しちゃう駄目です。」

『わかるのか……。』

「すまん。すまん。それより、魔法少女その2よ。わしを、きやつ頭のうまで持ち上げてくれんか？手が届かん。」

朋は蛙主のわき腹を両手で抱えて、持ち上げる。

『軽い。二日前は色々あって気にならなかつたけど。蛙さんって見た目よりずっと軽いな。』

朋は美由の頭まで、蛙主をもつていこうとする。身長差があるので、少し万歳気味になるので、美由は上半身を前に倒して、頭を前に差し出しす。蛙主は、美由の頭に手をのせた。

「むー。お前さん呪われとるなあ。しかも、かなり強い呪いじゃ。」

美由は上半身を起こす。朋はぬいぐるみを抱える様に蛙主を抱く。

「呪い？」

「そうじゃ。呪いじゃ。」

「それって、もしかして、正義の味方である魔法少女を倒すために、悪の組織が魔法少女に呪いをかけてたとか。」

そう朋が言う。

「うんにゃ。そんなのあるか。この魔法少女が自分達に害があるのかどうかもわからんのに、魔法少女だからという理由だけで、いきなり呪いをかけるなど、ただのアフォがする事だぞい。」

「確かに。でも、私は呪われるんですよね。」

「多分、これは、個人がお主を呪っておるんじゃ。お主、誰かにかなり恨みを買っているようじゃの。」

「最近、トラブルはありましたが、呪いをかけられるような事はとても……。」

「そう、思っているのは、お前さんだけかもしれんぞ。」

『また、その台詞か……。』

朋は自分の胸元にぬいぐるみの様に抱かれている蛙主を見る。

「この呪い解けないんですか？」

「解けるぞい。力は強いが単純な呪いじゃし。」

「では、お願いします。」

「嬢ちゃん、わしを、嬢ちゃんの頭の上に乗せてくれるかな？」
朋は抱きかかえていた蛙主を頭の上に乗せる。
蛙主は呪文を唱える。すると、緑の光が美由を包む。

「どうじゃ？」

「体が軽くなりました。押さえている力も無くなったみたいです。」

「緑の光が消えると、また、美由の体調が悪くなる。」

「駄目ですね。また、体を押さえられる様な感覚が来ました。」

「うーん。外からずっと、力を送り込まれているようじゃのう。」

「何とかならないんですか？」

「魔法少女に変身して、力を中和すればどうじゃ？対象が分かっ
たんじゃから、そんな難しくは無いじゃろ。」

「それは、気づきませんでした。」

美由はテラミルに変身する。

「確かに、大丈夫みたいです。でも、私、長時間、この格好を維持
できませんよ？授業もあるし。」

呪いを解くには。

「それは、大丈夫じゃろ。この呪いは、力が強いとはいえ、徐々に力が蓄積していつて、お主を疲労させておるわけじゃから。1時間〜2時間毎に一瞬、魔法少女になって、呪いの蓄積した力を中和しておけば、死にはせんじゃろう。」

「何か根本的解決には、なつて無い気がしますが。」

「常に、呪いの力がお前さんに送られてくるんじゃから、しかたあるまい。」

朋は頭の上の蛙を見るように、瞳を上にする。

「それじゃあ、寝れないような。」

「大丈夫じゃろ、術者から遠く離れば、多分、呪いの力は薄くなる。術者がお前さんのウチにずっと張り付いて、ストーキングしてるなら別じゃろうが、相手もそこまで暇じゃなからう。そいつにも生活があるじゃろうから。」

「呪いつて、距離が関係するんですか？」

「しないのもあるが、基本的には力を相手に送っているわけじゃから、遠距離になればなるほど、力を送るための力が必要になるし、距離が長くなれば長くなるほど、力は拡散し、薄くなる。更に相手の位置の特定も難しくなるし、もし特定が出来たとしても命中率も下がる。」

「魔法といつても、そんなに便利じゃないんですね。」

「そうじゃ。ワシが言うのも何じゃが、魔法より、普通にやったほうが遥かに楽じゃ。正直、呪いなんてまどろっこしい事をせんでも、相手を殴った方が遥かに楽じゃ。」

『？何かおかしい。』

そう、テラミルは思った。

「美由先輩の呪いを解く方法つて無いんですか？」

「相手を特定して、辞めさせる意外にないじゃろう。じゃが、ほ

つといても良いと思うぞ、わしの個人的予想じゃが、一週間も我慢すれば、多分、収おさまると思うぞい。」

『やはり、おかしい。なぜ、一週間と言えるんだらう？』

「すいません、蛙主、何か隠してませんか？」

「別に何も隠してなんぞおらんぞ。」

「では、何故、一週間と言えるんですか？」

「そりゃ、多分、この呪いをかけているのは個人で、呪いとはいえ力を使う。かなり強い力な上に接触ではなく、長い距離から力を送り、しかも、正確にお主に力を送っている。使っている魔力は少しいではないじやろう。それがずっと続くのじゃ、肉体的負担はかなりのもんじやろ。言ってみれば、お前さんがその姿ですつといるみたいな状態が続くわけじゃ。どんな力を使っているかは知らんが、魔法少女の様な存在を犠牲するタイプかもしれないし、精神に異常をきたすタイプかもしれない。ただ、魔力を使うだけのタイプかもしれない。どちらにせよ、そんな状態をずっと続けられれば、どうなるかは想像できるじやろ。」

「と、言うことは、その人がこの呪いを使い続けられれば、いつかは肉体的限界が来て、その人は破滅して終わると。」

「わしはそう思っているが。どうせ、本人に辞めてくださいと言つて、はい、そうですねかと、聞くとおもんねえし、お前さんは既に呪いを中和する方法をもっている。後は時間が勝手に解決してくれるのが分かっているんじゃないから、ほつとくのが一番だと思つたのう。」

美由は傷だらけの黒猫の言葉を思い出す。

『大抵の事は、火の粉を払っていれば、そのうち勝手に解決するか……。』

「でも、それでは後味が悪すぎます。」

「人間のことわざに、人を呪わば穴三つというのがあるじやろう。意味があつてどうかは分からんが、呪いには呪いのリスクがある。そのリスクを呪っている本人が知っているか知らないかは別に、その責任は本人が負うべきことであつて、お前さんが心配す

る事ではない。第一、わしが言っている事だつて、わしの推測にか過ぎんし、もし、この推測が当たっていたとしても、お前さんは知らないフリをしてれば良いだけの話じゃ。」

「駄目です。私も手伝いますから、相手を探して、辞めさせましよう。」

朋が両拳を握って前に出し、そう力強く言う。

「お主は、関わらん方が良いと思うんじゃないかなあ。まあよい。

別の手を考えよう。多分、相手はこの呪いをかけるのに、道具を使つておるはずじゃ。」

『このカエルも、私と同じで、この子に弱いなあ。』

「そう、思う理由はなんでしよう?」

「ずっと呪いがお前さんに送られてきておるからじゃ。ずっと力を使い続けるのは無理じゃ。多分、魔法の道具を身につけ、その魔法道具が自動的に相手の力を吸収してお前さんに呪いを送つておると思うのじゃ。」

「なるほど。」

「その魔法の道具を壊すか取れば、解決する。」

「でも、人前でその人のモノを壊したり、盗んだりしちゃ。後々、問題になりますよ?」

「それは、魔法少女になって姿を消して、魔法少女の魔力を中和する力を使って魔法道具の力を発動する能力だけ壊せば問題なからう。」

「相手がそれを身に着けている状態でその力を壊したら、相手に影響が出るんじゃないですか?」

「まあ、全く無いとは言えんなあ。破壊時の影響を回避したいのなら、相手から一度それを引きはがさないと駄目じゃるなあ。まあ、その前に、お主の力では、多分、魔法道具の力を無力化するのは無理な気もするが・・・。」

「では、どうするんですか?」

蛙主は朋の頭を叩く。

「この嬢ちゃんの爆発的な力を使わんと無理だと思っぞい。」

「朋ちゃんを巻き込めと……。」

「私、頑張ります。」

「蛙主では駄目なんですか？」

「わしか？わしなら出来ん事は無いじゃろうが、相手が身につけているものを引っぺがすとすると、一度、姿を見せる必要があるぞい。魔法少女は見えなくても、物質に強く干渉できるが、わし等はそれなりに物質に干渉するなら、存在を強くする必要がある。別にひっぺがさんで破壊して構わんなら、やっても構わんが。姿を現すのはいやじゃなあ。」

「でかい蛙が、突然、現れたら、そっちの方が大事おおいですもんね。」

「私がテラミルになって、相手から一度引き離れた後、蛙主がその場で破壊してから私が返すという方法ならいいでしょ？」

「まあ、それでも、よかろう。今は相手の魔法の道具が何か分かつたらん。相手の身に着けているものが何かわからんと、作戦の立てようがないからのう。それは、分かってから、どうするか考えるとしよう。」

「あと、ひとつ、別の懸念があるぞい。」

「何です？」

「相手が魔力を使っているという事は、魔法少女が見える可能性もあるという事じゃ。魔法少女は普通の人間には見えんが、化け物のわしらにはハッキリ見えるからのう。」

蛙とお弁当

「それは、問題ですね。まずまず、問題が難しくなる。」
テラミルは、朋の頭の上に乗っている蛙にそう話す。

「まあ、見えんかもしれんが、見るかもしれん。相手を見つけたら、ひとまず、探りを入れんとな。」

「蛙主を見せて、反応を見るとかどうですかね？」

「もし見えたとして、相手に警戒感を与えるだけだと思うが、下手にそいつが騒ぎ立てれば、我々化け物の立場も危うくなるし。」

「猫さん達に頼んだらどうですか？」
朋はそういった。

「猫は駄目じゃろうなあ。あやつらは、自分の利益になる事しか協力せんから。それにここ数日、猫は騒ぎすぎた。おとなしくしてた方が奴等のためじゃろう。」

「では、どうしましょう。」

「お前さんが魔法少女に変身すればどうじゃ？」

「向こうは私に注目しているのに、魔法少女に変身すればもっと警戒されると思いますが。」

「こつこつのは。どうですか？ 一瞬、相手が気のせいと錯覚するような魔法を隠れてつかって、反応を見るとか。」

そう朋が提案する

「おう、それは、いいのう。まあ、それは置いて、魔法少女その1よ、探しにいったこい。」

「どうやって探すんですか？それと、私一人なんですか？」

「わしがついて行ったら、もし相手が見える場合、問題があるじやろ。それと探し方は簡単じゃ、お主が元に戻って、気分が悪くなる方向へ向かえば、きつといるはずじゃ。」

「私の感覚ってそんな、優秀じゃないんですけどね。」

「色々な場所にいけば、大体の予測はつくじやる。学校中を回って、気分が強くなる処が大体わかるじやる。さつきも説明したが、遠距離での魔法は距離が離れれば効果が薄くなる。学校をぐるっとまわって、強くなる部分をチェックして、そこをつないだ中心に相手がいるじやる。」

「わかりました。」

「私も行きます。」

「朋ちゃんは待つてて、巻き込みたく無いし、相手が3年の教室にいたら朋ちゃん困るでしょ。」

「はい、わかりました。」

朋は残念な顔をする。少し心が痛んだが、テラミルは美由に戻り、気分が悪くなる方を探しに向かった。

「腹が減ったのう。」

「そうですね。あ、私、お弁当がありますよ。」

そう言って、隅に置いてた自分のお弁当を取りに行く。

「おお、それはありがたいのう。」

朋は、お弁当を広げ、蛙と一緒にお弁当を分け合い食べる。

「ところで、化け物の立場が悪くなるって、何ですか?」

朋は、箸を口にあてながら聞いた。

「化け物が目立てば、人間にとって邪魔じやる?居ると知れば駆除したくなるじやる?」

蛙主は冷凍ハンバーグを食べながらそう言う

「蛙さんみたいのなら、私は、別に。」

「うーん。たとえば幽霊が見たら怖がるじやる。」

「幽霊怖いです。」

「幽霊が特に人間の害にならなくても、居ると嫌じやる。それと

同じで、居るとわかれば、駆除したくなる連中が結構いるんじゃないよ。

「なるほど。」

朋はご飯を口に運び、咀嚼する。

「化け物が居るとわかるだけで、駆除まで行動を移すのは稀じゃが、害をなすとなると、流石に駆除をするため、本気で動くじゃろ。」

そういつて、弁当のプチトマトを蛙主はつかみ、飲み込む。

「確かにそうですねえ。」

「それにじゃ。化け物がいるという情報を聞きつけ、駆除をする事で金を稼いでいる連中がおつてな。そいつらに見つからんようにしているというわけじゃ。」

「化け物さんも大変なんですね。」

蛙主はから揚げを食べる。

「あー蛙さん。私、から揚げたべたっかのに。」

「もう口の中じゃから駄目じゃよ。」

「あうー。そういえば、食べる時は、見える程までには存在をあげてないんですね。」

「まあ、結構、存在を強くはせんと食べる事は出来んが、見える程まで上げる必要は無いのう。」

「そう言えば、存在を強めるとか薄めるとかどんな感じなんですか？」

「存在を薄くすれば、薄くする程、物質へ力を伝える事が難しくなる。空気とかの影響はそこまで無いのじゃが、ある程度、形があるものは、重くなって動かし難くなるという感じかのう。そして、ある一定のレベルまで薄くなれば、全くモノが動かせんようになる。そして、それ以上薄くなると、ある時、突然、物体を透過できるようになるんじゃない。まあ、物体の透過まで出来るやつは、化け物でも滅多におらんかのう。」

「蛙さんはできるんですか？」

「わしか？できるぞい。でも、結構、大変なので滅多にやりはせんがのう。」

「へええ。」

お弁当を食べ終わったので、「ごちそうさまでした。」といってフタを閉め、青と白のチエックのハンカチにお弁当箱をくるむ。

「ところで、蛙さんって、何で美由せんぱいに協力するんですか？さつき、猫さんは駄目だって。」

「うむー。仲が良いのもあるが、あやつは意外とドジっ子じゃからのう。ほっとくと、どんどん悪い方へい行ってしまふ。今日だつてそうじゃ。」

「ほっとけないんですね。お母さんみたい。」

呪っている相手

美由は自分を呪っている相手を探すため、重たい体を引きずりながら学校中を歩いていった。

最初、彼女は、気分が悪くなる方へまっすぐ向っていたが、初めての経験なので感覚に従って方向を決っていると、どっちが正解だか全く分からないようになり、断念する。

今度は、蛙主が言った、一度、学校中を歩き周り、呪いが強くなるポイントをチェックして、その真ん中を導き出すという方法に切り替える事にした。

美由は学校中をくまなく歩く。

『どうも、3年の私のクラスから、呪いは来ているみたい……。要するにクラスメイトの誰かか。』

美由は自分のクラスに向かい廊下を歩きはじめた。

呪いが強くなる方へ向かっているの、だんだんと気分の悪さと体の重さが増してきた。

そんな感じなので頭が回らないのだが、何とか思考を続ける。

『さて、クラスメイトの誰か？昨日の私を取り囲んだ人たちは別のクラスだから違う。クラスメイトは仲の良い友達がいるが、クラスメイトの中で私に呪いをかける程、トラブルになっっている人はいない。須王寺さんの今朝の話では、私が派閥を作ると勘違いして、嫌な思いをしている人がいると言っていた。でも、そんな事で、呪いをかけるまで恨みを持つ人が果たしているだろうか？』

美由は頭が回らない状態ながら、犯人を推理する。

『ああ、クラスメイトを疑うの嫌だなああ。でも、放置したらその人の肉体的破綻が待っているわけだし。そっちの方がもつと後味、悪いし。』

美由は真つ青な顔で、自分のクラスへと入り、クラス中を見渡す。すると、犯人はすぐに分かった。その人物は学園3番目派閥の長、

片奈 麻奈加であった。

美由がそう判断した理由は単純であった。

今朝、自分の背中から髪の毛をとった時は、彼女は健康そうだった、だが、今は、自分ほどでは無いにしろ、少し辛そうに机に座っている。片奈 麻奈加は、派閥の長であるため弱いところを見せるわけにはいから、背筋を伸ばし、気丈には振舞っているが、無理をしているのは顔色を見れば分かった。

蛙主は言っていた。呪いの力が強いので、使っている魔法力は少くは無いだろうと。それが機械的に常時続くわけで、美由が体調が悪くなりはじめてから3時間近くたっている。そのため、今朝は体調が良くとも、それだけの時間、呪いに力を使えば、体調が悪くならないはずはないのだ。

それに、自分がクラスに入って来た時に、一瞬だけ、刺す様な視線で自分を睨み、すぐに、視線をそむけ反対側を見たのが決定的だった。

『片奈さんなのか・・・』

彼女の席は窓際の一番後ろの席だった。美由はゆっくり、片奈の方へと歩いていく。

片奈は美由を見ない様に、窓際をずっと見ている。

彼女に近づくと、体の重さと気分の悪さが増していくのがわかる。

美由は、彼女を見る。彼女の指には緑色に光る指輪がはめられている。そのリング部分に、黒い線が増えているのがわかった。

彼女とすれ違う距離まで近づくと、その黒の線は髪の毛だと気づいた。それに、今朝は気づかなかったが、よくよく見れば、普通人にはこの指輪は見えない事がわかる。

『私は見る力が弱いのに、なんでこの指輪は、こんなに見えるのだろう？』

美由は一瞬、力が抜けて、よろめく。そして、猛烈な吐き気に襲われる。

『まずい。このままじゃ倒れる……。』
美由は急いで、教室を出た。

片奈 麻奈加は一瞬、よろめき、慌てて、教室を出ていった美由を見て、唇を噛む。

『この指輪は確かに利いている。私だってこんなに辛いんだから、あれ位じゃないと割りに合わないわ。』

作戦会議

美由はトイレに駆け込み、個室に入って、テラミルに変身し、呪いを中和する。

テラミルから美由に戻り、手を洗う。

『まいったなあ。彼女の近くは、あんなに力が強いのか。』

美由は、朋と蛙主が待つ裏庭に帰ってきた。二人は並んで座り、お話をしている。

朋は美由を見つけると、笑顔で手を振った。

「みゆせんぱーい。」

「はい、はい。」

朋は立ち上がる。

「どうでした？」

そういいながら、興味深げに美由を見上げている。

「犯人はわかりました。」

美由はあえて、名前を言わなかった。下手に情報を与えると、彼女が口をすべらせ、大事に発展しかねないと判断したからだだった。

「ほう。で？魔法の道具は何だかわかったか？」

「はい、指輪でした。緑色の寶石に金のリングでした。」

「では、早速、壊しにいきましょう。」

朋は張り切ってそう言う。

「こら、魔法少女その2よ。お前さんは人の話を聞いておらんかったな。相手と魔法の道具が分かったら、相手が見え無いものを見る目を持っているかどうか調べるのが先だと言ったじゃろうが。それも、もう少し、細かい情報を聞いたあと、作戦をちゃんと練ってからじゃ。」

「あー。」

「その指輪は金のリング部分に、髪の毛が巻きつけられました。多分、私の髪の毛です。」

「なるほどなあ。正確におまえさんに呪いを送る事が出来たのは、そのためか。」

「髪の毛で正確に相手を狙えるんですか？」

朋は不思議そうに利く。

「魔法では結構メジャーな手段じゃ。相手の肉体の一部を使って、力を誘導するんじゃない。かなり、複雑になるが、ほぼ確実に相手を狙える。で、他には何か気づいた事は無いか？」

「まず、蛙主が言った通り、その人に近づくとつれ、呪いの力は強くなりました。魔法の道具を確認しにかなり近づいたんですが、一瞬、気を失いかけるぐらい気持ち悪くなりました。今までは授業だったので、その人と私とは距離があつたので、あの程度ですんだと思います。それと、最初、私が気持ち悪くなった時より、かなり、呪いの力が増している様に感じました。」

「ふむ。時間がたつにつれ段々に力が増していると。」

「はい、それと、蛙主。その人の指輪なんですが、私はハッキリ見えたんですが、良くみると他の人には見えない様になってました。あれは何ですか？」

「さあ、わからんなあ。推測は出来るが、聞くか？」

「はい、是非」

「今から、わしが存在を薄めるぞい。」

美由は『何故？』と、思ったかが、何か意味があるんだろうと思ふ事にする。

蛙主は、美由では見るのが辛いぐらいに薄くなる。

「カエルさん、あんまり見えません。」

「もつともつと、見えなくなれるぞ。では、魔法を使つぞ。」

そう言つて、魔法を唱えはじめると、蛙主がハッキリと見えるようになった。

蛙主は魔法を唱えるのを途中でやめる。
すると、また見え難くなる。

そして、蛙主は存在を強めた。

「どうじゃ？見えなじやろ。魔法を発動すると、お前さん達みた
いな見えないものが見える目を持つものは、ハッキリ見える様にな
るじやろ。多分、これだと思っぞい。魔法少女がハッキリ見えるの
も、魔法力が外に出てるからだどワシは思っどる。」

「大体分かりました。ところで、その人はどこで、あんな指輪を
手に入れたのでしょ？」

「ワシが知るか。どこのどいつかも知らんのに、そんな事。」

「もしかして、悪の魔法秘密結社が、何かの目的で、その人に渡
したのかもしれないよ。」

そう朋が真面目そうな顔で言う。

「そんな、変身魔法少女アニメの様な展開がそこら辺にゴロゴロ
しているとは思えんがのう。そんな連中が来ているのなら、ワシの
処に噂が届いておつてもよさそうじやろうし。まあ、今は、指輪の
出所を考えていてもしょうがない。それより、どうやって指輪の能
力を破壊するかを考える方が先じや。」

「ですね。」

「で、そいつは見えないものが見ええそうか？」

「わかりません。実際試してみない事には……。そろそろ、授
業が始まりそうですね……。どうしましょう？」

「わしが、授業中に試しておいてやる。」

「分かりました、よろしくお願いします。」

そこで、解散になった。途中まで、二人と一匹は一緒に歩き、朋
が自分のクラスに行くため離れる。

「さて、嬢ちゃんも居なくなつたし聞くかのう。お前さんが、人
物を特定できる情報を微妙な言い回しで避けていたのは、そのため
じやろ。で、魔法少女よ。そいつはどんなヤツじや？男か女か？」

「女性で、同じクラスの子です。この学園の三大派閥のひとつの

長をしています。この学校で、私が新たに派閥を作るというデマが流れて、それを勘違いして、彼女がこんな事をしたんだと思います。彼女、プライドが高いですから、私みたいな人が、派閥を作るといふ話が耐えられなかったんだと思います。」

「うーん。何か、話が足りない気もするが」

「どういうところがでしょう？」

「派閥なんて、幾らでも立つもんじゃろ。いちいち、そいつらに呪い何て使っていたら、命が幾つあってもたらんぞい。」

「それも、そうですね。」

「まあ、理由はそうなのかもしれんし、実は知らず知らずの間にお前さんが、別の理由で恨みを買っていて、派閥の件を引き金にして、一気に爆発したのかもしれないぞ。」

「私、彼女とあんまり話した事が無いんですけどねえ。」

「人の恨みはどう買うかわからんぞい。」

美由は片奈 麻奈加の特徴を伝える。

「席は、窓際が一番後ろです。」

「大体分かった。何とかしよう。」

二人は無言になり、歩き続ける。

「ところで、蛙主？このまま私と一緒に教室に行くつもりですか？」

「うんにゃ。そのトイレでしばらく待つ。」

物質透過とだるまさんが転んだ。

午後の授業が始まる。

蛙主は、トイレで水浴びをした後、3年の美由のクラスの扉の前に立っていた。

『さて、はじめるかのう。』

彼は存在を薄くしはじめる。

『流石に、ここまで薄くすると、しんどいのう。』

扉に手を触れると、手は扉に吸い込まれていく。

『大丈夫そうじゃの。』

蛙主は扉をすり抜け、教室に入る。

そこでは、男の先生が英語を教えていた。蛙主は英語がさっぱりなので、何かの呪文にしか聞こえない。

美由を発見する。彼女は、かなり体調が悪そうに見える。

蛙主は宇宙遊泳をするかの様に浮き上がり、ゆっくと移動して彼女の机を目指す。

『この状態は、浮けるが、移動が遅いのがネックじゃのう。』

美由の目の前に降り立つが、美由は全く気づかなかった。蛙主は彼女の顔の前で手を振るが、全く反応が無い。

『流石に魔法少女でも、ここまで薄くなると、見えんようじゃのう。しかし、こりゃ、だいぶ、きつそうだのう。』

そう言っつて、彼女の胸にさわろうとするが、指が通過するため、触れない。

『この能力も良し悪しじゃなああ。見えませんが、セクハラが出来るん。』

蛙主は窓際の方へ顔を向ける。

『さて、こやつが見えんのだがら、相手が多少見える力があつても見えんじゃろ。どこにおるかな？確か、一番、後ろの窓際だったかのう。』

蛙主は片奈 麻奈加を見つける。

『おったおった。多分、あの子じゃな。魔法を使うと見た場合、ワシが見えてしまうから、後ろにまわらんな。』

美田の机の上から、浮いて泳ぐ様にゆっくりと、教室の後ろへと向かう。

そして、彼女の真後ろに着く。

蛙主は、そこから彼女の指を見た。そこには、緑の宝石のついたリングがはめられている。

『これか。よー見えとるが、確かに、人には見えん様になっておるなあ。多分、指にはめると、透明になる仕組みなんじゃろうな。』

蛙主は魔法的力を見る。

『ふむふむ、そこそこ魔力を発動しとるなあ。そんなに多くはないが、これが永続的に続くとなると、随分、きついじゃろうに。』

ふと疑問がよぎる。

『それにしても、呪いの誘導といい、透明化といい。魔法の道具的には、随分と手のこんだ作りじゃのう。まるで、ゆっくりと、時間をかけて証拠が残らないように、自然に死んだ様に見せかける暗殺のための道具じゃのう。装飾については全くセンスが無いが。』

蛙主は、魔法を唱えようとした。

その時、片奈 麻奈加の体が少し動いた。

蛙主の動きが止まる。

『気づかれたか？』

でも、彼女は後ろを振り向かない。

蛙主は10秒ぐらい動かなくて彼女の後頭部をみつめていた。

彼女が動かないので、魔法を唱えはじめると、彼女の首が横に大きく動いた。

蛙主はまた動けなくなる。

『な、なんじゃ？ 本当に見えとらんのか？』

今度は30秒ほど待つ。そして、再々度、魔法を唱える。今度は、

彼女は動かない。

蛙主は窓の外に、見えるモノにしか見えないすずめの形を作り出す。そのすずめは、動き出し、窓の狭い空間を踊るように移動する。彼女はそれに気づいたのか窓の外を見つめた。

『どうも、見えてるようじゃのう。』

すずめは、はばたき、いなくなる。彼女はそれを確認すると、黒板へと顔を向ける。

『見えてるのう。』

蛙主は、用が済んだので扉の前まで、ふわふわと浮かんで移動する。

そして、もう一度移動し、片奈を見た。

第3話終わり。

「あやつ、気を失いかけてるなあ。」

蛙主は少し何かを考え、片奈の方へ向かって飛んでいく。

そして、彼女の頭の上までやってきて、手を置き、眠りの魔法を使う。

彼女は簡単に眠りににつき、机に寄りかかるように倒れる。

蛙主は、彼女の体が占領している机の空きスペースまで移動し、存在を強める。

そして、彼女の手を優しく握り、指から指輪を抜いた。彼女はそうされても目覚めない。

蛙主は自分の顔の前まで指輪をもっていく、指輪を眺める。

ちよつと間、指輪を眺めた後、リングの部分に巻きつけられた美由の髪の毛をはずし、机の上に置いた。

そして、また、存在をかなり薄めた後、彼女の頭に手を置き、目覚めさせる。

彼女は目を開け、体を起こす。

『私は気を失っていたのか？』

彼女はまた、英語の授業が続いているのを確認する。

「いいか？ This is a Pen. の a は、theではなくaだ。何故、theで無く、aかと言うと、aは特定、theは不特定だからだ。ペンで言うと、theは一般で言う処のPenというものの全般を指す場合に使い、aは、そのペンが特定されている場合使う。この文の場合、これはペンです。なので、目の前にあるその一本のペンを指して、言っているわけだからペンが特定されている事になるだからaなんだ。」

高校3年生にもなつて、こんな事教えません。もっと最初の頃に教えます。

彼女は机の上に視線を移す。そこには、指輪が置かれていた。

『体調が悪くなるのがこの指輪のせいだと分かっていたから、何
度も何度もはずそうと思ったけど、そのたびに我慢して、あんなに
耐えていたのに、結局、気を失った時、無意識に、はずしたのか・
。。』

彼女は美由の髪の毛が、指輪から無くなっている事に気づく。

『多分、はずした時に取れたのね。そこら辺の髪を拾っても、彼
女のととは限らない。。。』

彼女は指輪を手にとり、制服のポケットの中に入れた。

授業が終わり、美由と蛙主は、3年の女子トイレの個室の中にい
た。

「この変態ガエル。変態とは思ってましたが、女子トイレにまで
入るとは。どこまで変態なんですか。」

「ええじゃろ。たまには。」

「良くありません。それより、授業の途中から体がいきなり軽く
なりました。授業中に彼女に分からない様に蛙主、壊したんですか
?」

「うんにゃ。壊さんかった。やつを眠らして、指から抜いて、机
の上に置いただけじゃ。」

「そうなんですか。」

「いかんかったか?」

「いいえ。でも、壊すと言っていたのは蛙主なのに、何で壊さな
かったんですか?」

「わからん。ただ、壊すとワシ等の立場が悪くなる様な気がして
な。」

「どうしてですか?」

「何となくじゃ。理由は幾つかあるが、判断の根拠としては弱い
のう。だから、感に従ったとしか言えん。」

「でも、どうしましょうか?彼女がああ指輪をまた使ったら。」

「多分、もう、つかわんじやる。」

「どうしてですか？」

「あの指輪を使った時の痛みを覚えたから、恐怖と本能が拒絶して、もう使わんじやる。もし、使ったら、その時は壊そう。」

「そんなに簡単に解決しますかね？」

「髪の毛はとったから、しばらくは大丈夫じゃろうし。お前さんが彼女に髪の毛をとられんように気をつければ大丈夫な話じゃ。それに、怒りで我を忘れて軽い気持ちで使ったんであるうから、冷静になり、振り返える時間が出来れば、恐怖心が強くなって、中々やろうとはするまい。」

「わかりました。」

第3話終わり。

第4話（前書き）

説明ばかりなわりに、作中の大筋とは今の所、関係無い内容なので読み飛ばしてかまいません。もしかしたら、必要になるかもしれませんが……。

第4話

部室棟の一角に、他の部室より2倍の広さがある空き部屋がある。そこは、部室の扉の鍵は、閉められる事も無く、いつも開いている。

この広い空き部屋は表向きには、綺麗に後片付けをし、タバコや、気に食わない人間を集団で取り囲んでランチをするなどの問題がある行動をしなければ、どの生徒も自由に使って良いとされている。

もし、発覚した場合は、数週間の閉鎖というペナルティーが科せられる。

表向きは誰でも使って構わないとなつてはいるが、実際は違つており、特定の人たちにしか使う事の出来ない暗黙のルールがあつた。

この部室は、生徒会で、緊急に広い場所が必要になつた時や、文化祭や学校の備品の一時的な物置になつたりするが、それ以外の場合、大きな派閥の社交場となつていた。

要するに、派閥に属している人間以外は、緊急の場合を除いて使つていけないのだ。

派閥は幾つもあるので、派閥に属していても、完全に自由に使えるわけではなく、派閥の代表が裏で話し合い、使う日時を決めて、競合しないように取り決めがなされていた。

勉強をドロップアウトした不良達もここを使う事は無かつた。

昔何回が揉めた事があつたが、女子の集団を敵に回すわけなので、人間関係で追い込まれていつて痛い目を見るため、手を出さない様になつていた。

この部室はライバルの派閥も使うわけなので、後で陰口を叩かれない様に、使つた後は綺麗に掃除をして帰るといふ暗黙のルールがあつた。掃除をするのは聖エルナル学院セイントのお嬢様達ではなく、普通ツウにこの学校に入り、派閥に属した一般生徒達なわけだが。

今日は、須王寺すおうじ 麗奈の派閥がこの部室を使つていた。

別に何か会議をするわけでもなく、ただ、しゃべっていた。

一般人にはあまり必要ではないが、お嬢様方には、馬が合わない人としても、意味も無くしゃべり続け、会話を続ける事は結構、重要なスキルであった。

社交界には『壁の華』という言葉がある。

意味の無い会話を続けられず、壁にずっと立ったままの女性を差す言葉で、壁の華になると、その後、社交界には呼ばれなくなる。

こういった、大人になった時に、壁の華にならないため、意味の無い会話をひたすら続ける能力を磨く必要がある。そういった会話の訓練のため、この、ただ、集まってしゃべるだけの派閥の集まりは聖エルナル学院のお嬢様達には必要なことであった。

当然、先生方も、この事を理解しており、部屋の使用問題が出てきた時に派閥側の意見に賛同することになる。

無駄に会話を続ける事を訓練するこの集まりで、黙っている人がいた。

その人物は須王寺すおうじ 麗奈だった。

普段は、彼女もこの集まりの時は、良くしゃべるといふより、派閥で壁の華になっている子に声をかけ、会話をさせたり、考え方やノウハウを伝える事で、テクニクを磨かせているのだが、今日は黙って考え事をしていた。

『私は大した事は無い。この学校に来て、色々な経験をすれば、するほどそれを思い知らされる。私は自信満々な態度を演じているから、皆が気が付いていないだけで、私の実力はそんなには無い。だから、もっとと実力が必要な。そのためにはライバルがいる。ライバルを見て嫉妬して、もがき苦しんで、もっと、もっと、自分を成長させなければならぬのに、後の二つの派閥の人たちは、私のライバルになつてくれない。差がつきすぎているし、最初から向こうはこつちと競いあう、つもりがない。彼女達は上流階級で金持ちで自分達は高貴で特別だというプライドと世間と周りが勝手に思っている常識と自分の作り出した固定観念にとらわれているから、あ

れ以上成長する事はない。私は常識は嘘ばかりだという事を知っている。派閥の統治を行って、常識の嘘を自分で考えて超えなければならぬ事を知った。だから、この派閥を何とかやっつけていけている。」

他の派閥は今年に入り、去年と比べ現状維持か少し数を減らしていたが、一番というブランドがあるとはいえ、去年より数を増やしていたし、全体の士気も高かった。

『桜間さんは、私のライバルに十分になれる。彼女がライバルなら共に成長していけるはずなのに。彼女にその気が無い。』

『どういふ根拠で、須王寺すおうじがそう考えているかはわからないが、彼女はそう考えていた。』

彼女は美由が、派閥の長になりたくないのも、おねえ様と呼ばれる事が嫌なのにも、恥ずかしがり屋なのも知っていた。

彼女のネットワークを使えば、直ぐにでも、聖エルナル学院セイントの美由に不満を持つ人たちの誤解を解くことが出来た。

だが、あえてしなかった。

美由と登校中に話した内容を聞いていた人たちにも、口止めをしている。

それをしていれば、妙なトラブルに発展する事もなかっただろう。

『彼女はこの試練を乗り越えなくてはならない。私のために。』

事後報告

「へええ。色々言ってたけど、結局、カエルさんが、全部、解決したんですね。」

朋と美由は学校の帰り道を、二人で歩いていた。

この二人の下校は鬼の様に学校を出るのが早い。美由は目立ちたくないという理由で、長年つけてきた癖なのだが、朋は美由を見つけて必死に追いかけて来たので早かった。

「そうだよ。魔法の道具が指輪という軽いものだったし、その人が気を失いかけてたから、そうした方が早いと思っただらしいよ。」

「でも、私も活躍したかったのに。」

美由は朋のその言葉を聞き、朋の頭に拳を当てる。

「め！朋ちゃんは、これ以上、関わっちゃ駄目。」

「あうー。だつてええ」

「あまり言う事、聞かないと、冷たくしちゃうぞ。」

「それは嫌です。」

朋は少し驚いた顔をした。

「それより、朋ちゃん。私が渡した参考書をやるなら、テストが終わってからやりなさい。」

「どうしてですか？」

「テスト勉強があるでしょ。あれは基礎学力をつけるためには使えるけど、テストで良い点数をとるまでには時間がかかるから、今は置いて、テスト用の勉強をしなさい。やるのはテストの後から。テストが終わったら、私が使い方を伝授してあげよう。」

「約束ですよ。」

「はいはい。」

「はいはい。」

「美由先輩、返事は一回ですよ。」

「はい、わかりました。まるで、お母さんみたいだよ。」

「えへへ。」

片奈はまだ、学校にいた。

自分の机の上にハンカチを置き、その上に指輪を置いて、じつと、指輪を見ていた。

『私はこの指輪をもう使えない。あの女の髪の毛を手に入れても、もう、恐ろしくて、はめる事が出来ない。さっきまで、私がこの指輪を外すのを拒んでいたのは、指輪を外せば、もう二度と、恐怖でつける事が出来ないと、本能的に悟っていたからなのね。私はあの下品な女が、派閥を作り私と同じおねえ様になる事を指を食えて見ているしか無いというの？』

片奈はイスから立ち上がり、ハンカチを手にとり、指輪をつつんで、ポケットに閉まった。

「片奈おねえ様。」

その声が聞こえてくる。自分の派閥の子だった。机に座っている時の片奈は近寄りがたい雰囲気だったので、声がかけれなかったのだ。

片奈は笑顔をつくり、派閥の子のもとへと歩みよった。

「よかったです。座っていた時、物凄く真剣な顔をしていらしたので、何かお悩みでもあったのかと思って、心配しました。」

「気にする必要は無くてよ。」

事後報告（2）

翌日の木曜日が来る。

美由は不思議に思っていた。

昨日は後輩から「おねえ様」とあまり呼ばれ無かったが、今日からまた「おねえ様」と呼ばれ、挨拶をされるようになった。

昨日は存在を薄めていなくても、呼ばれる事は無かったが、今日は存在を『どうでも良いそこら辺の人』と認知されるぐらい薄めているのに呼ばれていた。

『昨日は、呪いの指輪の件があったけど、彼女達を知るはずはないなあ。』

美由が「おねえ様」と呼ばれなくなったのは、正確には昨日では無く、二日前の昼からであった。

女子の集団が美由を囲んだ事件が学校中に広まり、女子の心を引かせていたのだ。

ただ、須王寺麗奈が、『彼女をおねえ様と呼ぶ事に前向きな考えを持っているらしく、ライバル視しているらしい』という噂が流れ、また、呼ばれる様になった。

当の美由はそんな噂を聞いて無いので、不思議がるのは当たり前前だった。

結局の処、この噂は、須王寺麗奈が本人が流したものだだった。

彼女は自分のネットワークをつかい『らしい』という部分を強調させて、流させた噂だった。

その目的は、聖エルナール学院の美由へ不満を持っている人間の

嫉妬心を煽る事だった。

彼女の撒いた種は、テストが終了して数日後に花を開かせる事になる。

今週は何事も無く終わり。来週からは4日間のテスト地獄がはじまる。

流石にテスト前の土日は補習は無かった。

テスト前日の日曜日。

桜間 美由は典型的な、灰色の高校生活を送っている女子高生だった。

男に興味が無いわけではないが、アイドルは中学入学と共に卒業したし、好きな同級生とかもいたが、恥ずかしがりな性格のためか恋愛には発展せず、中学校2年の中頃から後は、高校受験の準備や魔法少女で男に時間を費やす余裕がなくなり、いいなあと感じる男はいても、恋心を抱くまでにはいたっていない。

家に気軽に遊びに行けるほどの友達がいるわけでもないし、街で買い物やお金のかかる遊びをするほどお金があるわけでも無いし、何か趣味があるわけでも無い。

そんなこんなで、灰色の勉強漬けの高校生活を送っていた。

今は日曜日の早朝なのだが、広めの公園で姿を薄めながら、白のウィンドブレーカーとウィンドパンツを着てストレッチをしていた。本日は、テスト前日なので補習は無い。

美由はテストのための勉強はしない。と、言うより、テストの点より基礎固めを優先して勉強を行うタイプなのでテスト前日に慌ててやるらない様になっている。

彼女のストレッチは、はじめ、まず、手を開いたり閉じたりする。次に、指を一本一本を素早く強めに伸ばしていく。

そして、ゆっくりと時間をかけ、一本一本の指を伸ばす。ストレッチは、ゆっくと時間をかけて伸ばした方が効果があるのだが、はじめから、ゆっくり時間をかけてやると、かなり不愉快があるのだ。そのため、結構、ストレスが溜まる。

だが、はじめに、早く強めにやって瞬間的に筋肉に強い刺激を与えてた後、ゆっくりと時間をかけて伸ばすと、そこまで不快感を感じなくなる。

だから、はじめ早く強くやり、次にゆっくり時間をかけてストレッチをするようにしている。

指一本一本が終わったら、次は指全体、手首、腕、肩、首、腰、足の順番で、そして色々な部位を同時にストレッチするものへと順番にやっていく。

彼女はこれを30分じっくり時間をかけて、毎日やっている。

そのため、美由の体はかなり柔らかい。

前に体を倒して、膝に顔を付ける事も出来るし、股裂きなども、相撲や柔道の選手が出来る角度ぐらいいまで広げられる。

公園で、こんな事をやるのは、ストレッチには意外と何も無い空間が必要で、美由の家にはそのスペースが無いからであった。

中学の頃はやりもしなかったので、クラスでも体が固い事で見られる程、固かったが、魔法少女になってからは、毎日やるようになり、この柔らかさを手に入れた。

ストレッチには、頭を良く回転させる効果があると美由は思っている。

ストレッチを毎日やりはじめる前は、結構、頭の回転が遅い、おにぶさんだったのだが、これをやりはじめてから、結構、頭が良くまわるようになったと、個人的には感じていた。

早朝なので、公園の横の道路を健康を目的とした老夫婦が走って通り過ぎたりしていたが、公園には美由しかいなかった。

そこに、傷だらけの黒猫がのんびりと歩いてくる。

「おはようございます。魔法少女様。」

「おはようございます。猫さん。」

「何をされているのです？」

「見て分かるでしょ。と、言うより、私を監視しているんだから、晴れの日はここで、ストレッチをやっているのは知っているでしょ。」

「これは、手厳しい。では、何のためにそういう事をやっている

のでしょうか？」

「魔法少女になれば確かに強くなりますが、自分の体を補助的に強化するだけなんです。ですから、普通の状態です。それに、強化した分の力を最大限に使うと、肉体がかなりダメージを受けます。」

「ほう、そのダメージを緩和するためには、体を柔らかくする必要があります。」

「そうです。体が固いとダメージが軽減されないので、これくらいの柔らかさが必要になってくるんです。」

「そんなことを、毎日する必要があるので？体の柔らかさは、そこまで変化すると思えないのですが。」

「私はどうも、すぐに、体が固くなるみたいです。それにパワーアップのために筋肉をつけると、体が固くなるので、柔らかい伸びのある筋肉にしていくには毎日のストレッチは、かせないんです。」

「人間は大変ですね。鍛えなくては強い体が維持できないとは。」

「ただやれば、良いというものでもないですよ。やり方を知らない、大した効果が無いんですよ。」

「面倒なもんですねえ。鍛え方を間違えると、ただ無駄なだけとか。」

「ええ。ストレッチは早くやっても、そんなに効果はないのですが、ゆっくりと時間をかけて、やると結構効果があるんですよ。」

「私は体を柔らかくするために、毎日、そんなに時間をかけてやる事に、あまり、魅力を感じませんが。」

「ところで、今日は何の用でしょうか？」

「今日は特に何もありません。」

「珍しいですね。何の用も無いのに猫が、私のところに来るとか。」

「いけませんか？」

「いいえ。そうは思いませんが。」

美由はストレッチを終え、その場にとどまりながら駆け足をして、体を温める。

「私、これから走りに行くので、それでは。」

「はい、頑張ってください。猫は人間みたいに長い時間走れませんが、お付き合いできませんが。」

「来て貰われても困ります。」

美由は自分の存在を普通に戻し、道路に向かって、走りだした。

テスト前日の日曜日(2)

成美矢 朋のウチは、公営住宅の中にある。

無骨なコンクリートで作られた5階建ての建物の中に、朋の家がある。

昼過ぎに朋と仲良い友達である鈴木 あずさ・田中 佐和・佐藤 絵里の3人が、テスト勉強のために朋のウチにやって来てる。

ピンポン

朋は入り口で待ち構えていたので、直ぐに鉄の扉を開け、笑顔で三人を出迎えた。

「いらっしやーい。みんなああ。」

「おつす。朋。」

「こんにちわ。」

「入って、入って。」

朋はそう言つて、玄関の扉を押さえながら、体を後ろに引いて、みんなが家の中へ上がるだけのスペースを作る。

「おじゃましまあす。」

「あれ？誰もいないの？」

「今日はパパとママは仕事が無いから、街でデートしているので。夕方ぐらいには帰ってくるんじゃないかな？」

「おお、お熱いねええ。」

「えへへ。というより、ウチ狭いから、みんなで勉強するのにいたら、邪魔だろうつて、気を使って貰ったんだ。」

勉強会がはじまる。

みんな、各自持ち寄った、過去の先生の出題パターンや、別のクラスの子から聞いた出題予定情報などを整理していく。朋は情報をほとんど持って無いので、あまり役に立たない。

みんな数日前から放課後とかに、他の生徒から情報を聞きまくっており、かなりの情報が集まっていた。

「さて、他のクラスなんかから集めた先生が出すと言ってた処と、出題される可能性の高い処はひとまず分かった、そこを集中して検討してこう。」

そう、鈴木 あずさは提案する

「はい。」

残り三人も同意した。

「まず、現代社会だけど……。」

そんなこんなで、一時間ほどが過ぎる。

朋はみんなと勉強会をして思った。みんな自分より頭が良いなど。しかし、実際は、朋は錯覚をしているだけだった。

みんな、それぞれ、得意分野があり、得意分野は一応、皆に教えるために前もって準備していたし、得意分野しか口を出さないの、朋みたいに表面だけを見てれば、確かにそう感じるのだった。

ただ、得意分野が何もない朋は、駄目な子なのは違いはなかった。

『うー、よく、私、この学校に入学できたな。塾とかに通って、いつぱい勉強したけど、それでも、中学の先生なんか、この学校は落ちる可能性が高いとか言ってたし……。それでも、私立は受験日が重ならなければ、何校でも受けられるんだから記念に受けて来いと言われて、行ったら、合格してしまって、中学のみんなから、奇跡とか言われたし。』

身の丈に合っていない学校に来るって凄く大変なんだと、今更、思い知った。

もう、入学してしまったのだが、しょうがないと割り切る事にする。

朋はほっぺを叩き、自分に気合を入れる。

「よし、赤点とらない様に、がんばるぞおお。」

「おお、朋、やる気だなああ。志は低いけど。」

「そのいき、そのいき。」

「がんばるために、ここは休憩して、お菓子を食べよう。」
そう朋が言い出す。

「いきなり、心が折れたな。ま、いいや。休憩しようよ。」

「あたまを使うには糖分がいいと言うので、オレンジジュースと、
チョコレートを用意したのです。」

朋は誇らしげに言う。

「おお、いいね。いいね。」

そう言って、冷蔵庫に向かった。

タヌキ主

夜になった。

朋のウチにいた友達3人は、夕方には帰り、それと入れ替わりに両親がデートから帰ってきた。その後、家族三人でご飯を食べながら、二人のデートの話で盛り上がり、テレビを見ながら、のんびりしていた。

「朋。明日、テストだろ？そんなに、ゆっくりしてて大丈夫か？」
父親は朋にそう話しかけてきた。

朋は恐ろしい事に気づく。

明日のテストのために、覚えなくてはならない処が、まだ、いっぱいあつた事に。父親に言われるまですっかり忘れていたのだ。

「いけない。忘れてた。急いでやらなくちゃ。」

朋は慌てて、自分の勉強机に向かった。

「あんまり、遅くまでするなよ。パパもママも明日から仕事だから。」

「はい。気をつける。」

朋はノートを手に取り、勉強をはじめた。

美由の家は一軒屋であり、木造をベースにした二階建てであつた。彼女の部屋は二階にある。

彼女には下に弟と妹が一人づつおり、三人共用の部屋があつたのだが、学校から帰って着て、勉強をした後、運動に行き、また夜遅くまで勉強する、灰色の生活をひたすら続ける美由について行けず、二人に部屋を追い出されてしまい、元々、物置であつた3畳程の部屋に移動させられた。

よって、この狭い部屋は彼女専用の部屋である。

美由は勉強机に座り、ひたすら、英単語・英熟語の暗記をしていた。

英熟語というのは、英単語を二つ以上合わせてひとつの意味をもつ言葉である。代表的なのは、中学校の意味である、ジュニア ハイスクール。これは3つの英単語をあわせて中学校という意味になる。

英語は英熟語で文章が構成されているものが多い。例えば「This is」は「これは何々です。」という、英熟語として覚えられるし「Is this」は「これは何々ですか？」と英熟語として暗記させられる。これらが英熟語として成立しているかどうかは微妙だが、英熟語と割り切って暗記しないと、英文は読めない。

美由は英語の単語、英熟語は、簡単な例文と一緒に暗記しないと覚えられないと思っている。英単語・英熟語単語で覚えても、すぐに忘れてしまうので、例文と共に覚えることにしている。

彼女の覚え方はひたすら書き、ぶつぶつ言う事であった。視覚と触覚と聴覚を使い覚えるという手法である。

彼女は窓際にある机の上で、英単語・英熟語を覚ええるための例文を書きながら、ぶつぶつ言っていた。

そんな時、窓から「カリカリカリ」と爪で引つかく音がする。

窓の方へ顔を向けると、窓の向こうに何か動物がいるのが見える。その動物は猫よりちよつと小さいぐらいの動物だった。その動物はいつまでも、窓ガラスを爪で引つかくのをやめない。

美由は窓ガラスを開ける。

そこに、いたのは狸だった。

「おや、狸様。こんな、夜遅くに何でしょう？」

「よお。魔法少女。おまえさん、何、怪しげな呪文を一人きりの部屋で唱えてるんだ？」

「聞いてたんですか？」

「おう、ブツブツと。正直、不気味だったぞ。」

「くうう。何故、こんな処だけ、みんな見てるの。」

「それより頼みがあつて来たのだが。」

「明日、テストなので、今日は無理ですよ。明日は昼からなら空いてますけど。」

美由の学校のテスト期間中は、学校は午前中だけで、午後は空いている。

それは、生徒を遊ばせるためではなく、生徒がテスト勉強するために、空けてある時間なのだがどうも、美由はテスト勉強をするつもりは無いらしい。

「いやいや、明日でかまわん。」

「で、何ですか?」

「お前さんが最近、猫と仲良くしていると聞いてな。」

「別に仲良くはしてませんが。というより、警戒されて、監視のために近づかれていますといった方が正しいかなと。」

「それでも、構わん。仲介役を頼もうと思つてな。」

「何のでしょ?」

タヌキ主（2）

タヌキの化け物は、美由の知る他の化け物と、生き方が違う。

普通の化け物は都会か山かどちらかに暮らしているが、彼等、タヌキの化け物はその両方に棲む。

タヌキの化け物達は放浪暮らしをしており、ある程度、定住したら、また何処かに移動して棲家を探し、定住先が決まったら、しばらくそこに滞在して、また何処かに移動する。滞在するのは数ヶ月の事もあれば、2・3日の事もある。

かれらの棲家は、都会の真ん中でも山中でも構わない。暮らしやすそうな隠れる場所さえあれば、木の穴だろうが、ドブだろうが、配管の中だろうが棲む。

彼等タヌキの化け物は、血縁関係のある家族と一緒にそれを行っている。

常に放浪しているため、どこにいるわからない。

以前、タヌキ主と会ったのは、彼と一緒に行動していた家族が暴走した時で、その暴走を蛙主と一緒に止めた以来だった。

「中に入って良いか？」

美由の脳裏に以前、タヌキ主が自分の部屋に上がりこんだ時の記憶を思い出す。彼は異常に獣臭く。2・3日臭いが充満してとても部屋にいられず、寝る場所は自分の部屋しかないので我慢したが、毛むくじやらの巨大な臭い化け物にひたすら追われ続けるという悪夢を見た。

「駄目です。」

「なぜ。何の迷いもなく。」

「臭いからです。」

「酷い魔法少女だ。それでも正義の味方か？」

「私は正義の味方でもないですし、酷くて結構です。」

「鬼！悪魔！臭いで差別するとは！」

「鬼、悪魔、差別主義者、結構。多少の臭いは我慢できますが、タヌキ主の臭いは2・3日強烈に続くので、あの臭いになさるぐらいなら、あえて汚名をかぶります。」

「……………」

「と、言うわけで、そこで話してください。」

「むむむ、仕方ない。まあ、長居するわけにもいかんしな。」

「で、猫との仲介役と言っていました。何でしょう？私は猫への仲介役になれる程、信用されてませんが。」

「ここいらの猫のボスの処に連れていってくれるだけでいい。」

「私はボスがいる処知りませんが？」

「自分が知っている。お前さんはついてくるだけでいい。」

「では、一人で行けばいいじゃないですか？」

「それが、それも行かなくてな。」

「どうして、ですか？」

「ここいらだけでなく、この街全体の猫が今朝から、あちこちに居て、ワシ等の様な化け物が入りしめないように封鎖をしているからだ。」

「はい？」

「良くは分からないが、猫どもがあちこちに居て、ワシ等の様な化け物を、自分達の縄張りに入れさせない様にしているのだ。」

「そうなんですか？」

「さつき、封鎖を突破しようと4匹ががりで一匹を襲ったんだが、あつさり返り討ちにあつてなあ。」

「タヌキ4匹ががりでも、猫は倒せないんですか。猫ってかなり強いんですね。」

「あんなに可愛い顔をしておいて、わしらより圧倒的に強い。」

「へええ。」

『タヌキでも猫を可愛いと思うのか？』

「と、言うわけで、封鎖の突破に失敗した我々は作戦を変えて、自分一人で猫に見つからんように、こっそりと、ここに来たわけだ。」

「なるほど。」

「そこまでして来てやったのに、部屋に上がらせないなど、何たる仕打ち。」

「まだ、言いますか？」

「とうわけで、この封鎖を解いてもらうため、交渉に行きたいのだが、その時、猫にあったら襲われる可能性があるので、ボディガードとしてついて行って欲しい。」

「わかりました。あしたの昼頃、学校の裏庭でいいですか？」

「了解した。」

テスト初日の登校

朋はノートに張り付く様に見ながら、学校へと向かっていた。

結局、夜はあまり勉強出来ず、朝早く起きてやるうとしたが、何故かいつもと同じ時間に起きた。

そんなこんなで、今、必死にノートに書かれている事を暗記している。

そんな風に歩いていると、後ろから腰をバツシと叩かれた。

「きやつ」

「朋は驚きの声を上げる。」

「おはよう。朋ちゃん。そんな事してたら危ないよ。」

相手は斧ヶ野 加奈だった。

「加奈ちゃん……。ビツクリしたああ。」

「テストだからと言って、そんな事してたら、事故にあうわよ。」

「うー。昨日の夜、みんなに教えて貰ったところをやるうと思ったら、全然、勉強できなくて、朝、早くやるうとおもったら、いつもと同じ時間で、今、必死に覚えているところなの。」

「今更、やったって、遅い遅い。」

「でも、赤点とったら追試とかだし。そうならないために今、頑張ってるんです。」

「はいはい。まあ、私も似たようなもんだけどね。こういった事はあきらめも肝心。」

「勉強しなかったの？」

「一応、情報に入っている固い処は一通り押さえて、後は山張ったけど、凶と出るか吉とでるか。もし、赤点とったら、一緒に席を並べて追試受けようね。」

加奈は満面の笑みで朋にそういった。

「あうー。そういう仲良しは嫌なのです。」

朋はまたノートに目をやり、加奈は周りを見回す。

学校の校門が見える処まで来ているので、周りは登校する生徒でいっぱいだ。

「流石にテストの日はみんなの雰囲気が違うねええ。みんなピリピリしてる感じ。」

「そう?」

朋は、ノートから目を離し、ちよつと周囲を見る。

「ウチは女子が多いから、普段は華やかな感じだけど、今日は、今の朋ちゃんみたいにピリピリしてるねええ。笑顔が少ないし、挨拶とかもあんまり無いし。」

「そういえば、そうかな。」

「今日は桜間先輩とは一緒に登校してないんだ。」

「うん。登校の時はいつも一緒ってわけじゃないよ。下校は私が追いかけるから一緒のことが多いけど。美由先輩は鬼の様に下校が早いから、追いかけるのに必死なのです。」

「そつか、そつか。噂についてコメントを聞きたかったんだけどな。」

「どんな?」

「内緒。」

「えええー。」

朋は両手で握っていたノートを下にさげる。

「まあ、悪い噂ではないよ。私にとつては良い情報かな?桜間先輩のあの恥ずかしがり屋の性格だと本人的には悪い噂だと思うけど。まあ、出所が良くわからないし、信憑性もかなり薄いから。ひとまず、内緒。」

「わかった。でも、テストの日も噂の情報収集に余念が無いね。」

「えっへん。私はテストの点より、噂を優先する女なのです。まあ、赤点は嫌だけどね。」

テスト初日

朋は教室につき、自分の机で必死にノートを見ている。

そこに佐藤 絵里がやって来る。

「お、ちびっ子。一生懸命やってるな。偉い。偉い。」

そういつて、朋の頭を撫でる。

「あうー。昨日、あの後、全然出来なかったの。今頑張ってる処だから」

「お、早くも赤点決定か？」

「それを言わないでええ。」

テストがはじまる。

朋の教室の1時間目は現代社会だった。

先生が適当にテストを作った様で、この意味を文章で説明せよのオンパレードだった。

何とか、暗記したことが出てたので、半分ぐらいはかけたが、残り半分はまったく手が出なかった。

美由の教室の1時間目は数学だった。

基本レベルの問題が3問で、1問応用レベルが入っていた。

大学進学が目的の学校なので、先生の意図は分かるが、赤点回避のための簡単な計算問題や基礎レベルの文章題とかが入ってない。

これは、赤点になる人、結構いるだろうなと問題を解いていて美由は思った。

とにかく時間が足りないので、余計な事を考えず必死に解くことに専念した。

基礎問題にも苦戦したが、応用問題は解き方が見つからず無駄に時間が過ぎていく。ある時、二つの基本的な解き方を組み合わせないといけないと気づき、何とか解き終わる事が出来たが、最後の問題を解いていた途中で時間が無くなる。

美由は学年女子の中で3位だが、それはあくまで、体育や美術、家庭科、情報なども含めた総合であって、受験に必要なものだけでいうと5位だった。

須王寺麗奈も学年女子では2位だが、受験だけに絞ると3位である。

この二人はあくまで、マルチに点を取るため、総合が高くなるのだ。

ちなみに、二番目の派閥の長は受験だけでみると7位だし、3番目の片奈は9位であった。

美由は今回のテストはかなり順位を落とすだろうと考えていた。2年までは、基礎基本を重視する美由にとっては、都合の良い問題が多かったが、今回のテストは明らかに受験を意識した内容になっており、かなり、難しくなっている。

そんなこんなで、テスト初日が終わる。

猫のボスに会いに向かう。

テスト初日が終わり、美由はタヌキ主と約束を果たすため、学校の裏庭にやってくる。

タヌキ主は約束どおり、裏庭に来ていた。

来てはいたが姿が見えない。でも、彼が放つ獣臭さで居るのは分かる。

「タヌキ主、来ているんでしょう？」

タヌキ主は排水溝の中から、泥だらけになりながら出てくる。

「おお、魔法少女来たか。なぜ、自分がいる事がわかった？」

「あなたの体臭がきつ過ぎるからですよ。隠れるのであれば、その体臭を何とかしないと、隠れている意味が無いと思いますか？」

「むー。そんなに、きついかな？」

「きついんです。」

「何故、何の迷いも無く、そんな酷い事を。」

「事実だからです。」

「つく……。でも、自分ではそんなに感じないのだがなあ。」

「化け物化して、知恵がついたんですから、たまには体でも洗ったらどうですか？」

「嫌。」

「何で、即答なんですか。ドブとかから出て来た時もそのままだから、臭いが強いんですよ。」

「水浴びはどうも苦手だな。それより早く行くぞ。」

「わかりました。」

美由はタヌキ主の後ろからついていく。

「ところで猫は、まだ、封鎖を続けているんですか？」

「もちろん続けている。正直、ここに来るのも一苦労だった。」

「そうなんですか。」

「何で封鎖をしているか、分かりましたか？」

「さあ。さっぱり。何せ、理由を聞いても何も答えないしな。ちよつとしくくすると襲つて来るし。調べようが無い。」

「そうですか。ところで、昨日の朝からでしたっけ？」

「自分が気づいたのはそのころからだつたなあ。」

「昨日の早朝なら、ここらへんの縄張りに行っている猫達の使い走りをを自称する傷だらけの黒猫が私に会いにきましたけど、特にそんな雰囲気はありませんでしたよ。」

「黒猫？ああ、あいつか。あの下手したてに出た丁寧な言葉遣いをしなから、裏で人を馬鹿にする、しゃべり方をする猫だろ？」

「どうでしょ？変な言い方をしますよね。理由を複数、挙げているのに、本音は語ってなかったり。本人はあれで通じているつもりなのかもしれません、良く、話が通じてない時もありますし。」

「それが馬鹿にしている。」

「そう、言われてみれば、そうなんですかね。でも、そんな感じはあまり受けないんですけど。」

「まあ、感じ方は人それぞれだからな。」

「あの猫に、前、言われたことがあります。私は表面だけを見て、話の裏を読もうとしないと。」

「話の裏なんていちいち読んでいたら面倒だ。裏を読んでも勘違いだったりする事が遥かに多い。あの猫みたいに、相手が自分の話をいちいち読む事を前提とした話し方は、自分は嫌いだ。」

「私も苦手ですね。」

一人と一匹は学校周辺の郊外を抜け、住宅街へと入っていく。

「こんなにタヌキ主が堂々と歩いているのに、猫が襲ってくる気配はない。」

『私と一緒に居るからこないのだろうか？』

まああ、封鎖している情報は、タヌキ主にしか聞いてないので、彼が本当の事を言っていない可能性もある。

「猫のボスは、昼間は、もう少し先の空き地にいる事が多い。夜

「は何処に居るかつかめんが。」
「そうですか。」

猫のボス

空き地にやって来た。

その空き地は、三方を比較的新しい一軒屋で囲まれている。多分、分譲地でここだけ家が立ってないのだろう。

空き地なのに草はあまり生えておらず、多くの場所で地面が露出している。真ん中には直径が1mほどあるコンクリートで作られた水道管が3本三角に積まれている。

そのコンクリートの水道管の上に、おでぶな三毛猫が一匹座っており、その下の段に傷だらけの猫が座っている。

傷だらけの猫はタヌキ主と美由を見て、地面へと降り、数歩、美由の元へと歩み寄る。

「これはこれは、魔法少女様とタヌキ主様。何の用でしょ？」

おでぶな三毛猫がしゃべりはじめる。

「クロ、こいつ等は何ね？」

声の感じからして、どうもメスらしい。

『あの傷だらけの黒猫は、クロと呼ばれているのか。何と安直な……』

赤い首輪をつけているから、どこかの飼い猫なのだろうか？

『化け猫を飼っている家って、どんな処なんだろう？しかも、飼い猫がこちら辺のボスをやっているのか』

普通の猫の首輪には鈴がついている部分には、小さな巾着袋がついていた。

「ボス。例の魔法少女様と、最近、こちら辺に来たタヌキ主様ですよ。」

「おお、あん魔法少女ね？おみやあさん方、何しに来たんか？」

「はじめまして、ボス猫さん。私はこのタヌキ主のボディージャードを頼まれてきただけなので。」

「お初にお目にかかります。タヌキ主です。」

「わしら、忙ぎゃしいんだわ。用は手短に頼むわ。」

「申し訳ありませんが、封鎖を解いていただけないでしょうか？」

「そりゃ、無理な相談だわな。」

「どうしてでしょう？」

「んな事、言えるわきゃ、無かあね。」

美由が話しに割り込む

「えつと、タヌキさん達、猫が封鎖して外も出歩け無くて困っているみたいなんですけど。」

傷だらけの黒猫が口を開く。

「申し訳ありません。幾ら魔法少女様の頼みでも、こればかりは。」

「では、いつ頃、この封鎖は解かれるのでしょうか？」

「わかりかねます。」

「そうですね。では、あなた方の縄張り内なら自由に歩いて構わない事には出来ないんですか？」

「……まあ、よろしいでしょう。皆に伝えておきましょう。ただし、堂々と歩き回らないで下さい。こちらにも面子というのがあるので。それに、私たちの縄張りから出ようとしても襲いますので、じゅつぶん、気をつけてください。」

傷だらけの黒猫は、おでぶな三毛猫を見る。

「それで、よろしいですね。ボス。」

「ええよ。」

今度は、タヌキ主を見る。

「それでいいですか？タヌキ主様。」

「よからう。」

「それでは、これでタヌキ主様。魔法少女様。私も行かなくてはなら無い処がありますので。」

「ええ、私も勉強がありますんで。これで」

テストに焦る美由

空き地での交渉は終了し、解散になる。

美由は自分の家へと向かい歩きはじめる。その横をタヌキ主がついてくる。

美由は足を止め、タヌキ主を見下ろす。

「タヌキ主。何故、ついてくるんでしょう？」

「そりゃあ、お前さんのウチに行つて、お茶でもと。」

「断固、断ります。」

「即答とは酷い。少しぐらいの優しさは見せんと男にもてんぞ。」

「そういうのは、高校を卒業したら考えますので、今は必要ありません。」

「臭いくらい男ならするもんだぞ。それくらい目をつむつてやらんと。」

「それくらいなら、問題ありません。臭いが2・3日襲つて来るのが嫌なんです。」

「……あきらめるか。」

「当然です。」

美由はタヌキ主と別れた。

帰り道、タヌキ主の事が片付き、テストについて思い出していた。

『問題のレベルが2年と比べて明らかに上がっている。学校のテストの点なんて捨ててたつもりだったけど、流石に大きく下がると嫌だなあ。今までは運良く私の勉強レベルと同じぐらいの問題が出てたから良い点が取れてたけど、今日のレベルの問題だと、本当に予備校行きながら毎日かなりの時間、勉強漬けになるか、天才的感覚が無いと良い点は無理だろうし。私のメッキがはがれちゃうな。流石に焦ってしまう。』

美由は晴天の空を見上げた。

『今更、方針を変えるわけにもいかないしなあ。でも、テストの勉強をした方が良いでしょう。まあ、自分で決めた方法だし、ウチは予備校や家庭教師を雇える程のお金は無いし。今の方法でがんばらないと。』

テストの事は一旦置き、猫について考え始めた。

『今日は、あの傷だらけの猫、いつもと感じが違ったな。いつもみたいに、裏のある言い方ではなく、早く話しを終わらせる話方だった。』

腹の探り合いは好きではないが、こうあっさりなもの物足りなさを感じた。

あの普段とは違う話方や、忙しいいそがと言っていた事、直ぐに用があるとも言っていた事から推測するに、どうも、猫達は焦っている。

封鎖はタヌキ主の嘘ではないのかと何処となく疑ってもいたが、どうも事実らしい。封鎖の理由は言えない、封鎖がいつ解除されるのか分からない。それに彼等はかなり焦っていると推測できる。

『猫の中でかなり、とんでも無い事が起こっている。』

助けようか？とも思ったが、猫はどうも、自分達の中で解決する事にこだわる傾向がある。

それに以前、蛙主に言われた事がある。化け物にも生きるために社会がある以上、必ず大人の事情があると。そこに下手に関わっても、トラブルが増すだけだ。だから、手出しは出来ない。

前の様に向こうがこっちに非公式にでも依頼があるか、放置していたら何らかの危険性があると判断できる判断材料が無い限り、この件には介入すべきではない。

でも、かなり大きな事件だというのは分かる。

そうでなければ、猫達の社会を危険にさらすような、かなり目立つ『封鎖』という手段を選択しないはずだ。しかも、街全体の猫グループがそれをやっているらしい。

『それにしても、何故、自分達の縄張りに化け物が出入りしない様に封鎖しているのだろう？』

タヌキ主が集団が自分達の縄張り内を移動するだけならどうも問題は無いらしい。そうでなければ、あんなに、あっさり認めないだろう。

『後、この事件は昨日の早朝より前に起きている。昨日の早朝、あの傷だらけの猫は私に会いきている。要するに、事件直後だ。どうせ、私がこの件に感づいて、介入してこないかどうかを探りに来たただけだろうけど、でも、わざわざ、接触する必要があったのだろうか？いつもは、私を監視しているらしいけど、でも、さっきの猫達の反応だと、私に来る事を知らなかったみたいだし、と、言う事は、私を監視する余裕がないくらい』封鎖』に人手を回している事になる。』

美由は自分に与えられている判断材料を繋ぎ推理するが、答えは出てこない。

『駄目だ、判断材料が少なすぎる。猫の事は気になるけど、自分で解決するみたいだし。私は勉強、勉強。』

テスト二日目

一学期の中間テスト二日目である。

朋は昨日の夜は一生懸命勉強したが、結局、覚えきれず、早起きして挽回すると思たら、いつもの時間に起床した。

登校からテストが始まるまで、必死にノートにかじりつき、付け焼刃でテストを受けていた。

美由の本日最後のテストは化学であった。この学校の理科の選考は化学と地学、物理と生物に分けられていた。

彼女は本当は、地学と生物を取りたかったのだが、選考を決める時に何故だか地学と生物に圧倒的人気が集まったため、最初の辞退者募集の時点で名乗り出て、化学と物理をとった。

地学と生物はいつもの教室だったが、化学と物理は何故か理科の実験教室で試験を受ける事になった。

化学のテスト問題は業者の作ったものであった。

大学受験を意識したつくりで、独特の問題を読むだけで苦勞する作りになっていた。

化学のテストが終わる。

「ふー。」

美由はため息をついた。

問題は習った処を覚えていれば、解けない事は無い問題だったが、出題者の意図という名のトラップが仕掛けられた難解な文章を解読するのに疲れ果てていた。

「もつと、問題にこなれないと駄目だな。今日は最後まで解けたけど、理解するのに時間がかかりすぎる。こんなんで、本当に受験

に間に合うんだらうか？」

理科の実験室は別館にあった。

化学の試験が今日、最後のテストだったので、このまま帰宅しても構わないのだが、カバンを教室に置いたまま、この理科の実験室まで来てしまった。

カバンを持つてくれば良かったと、今更、後悔する。

本館の自分の教室まで戻らなくてはならない。

気分転換に最短のショートカットルートではなく、裏庭を通るルートで自分の教室に戻ることにした。

裏庭を歩いていると不思議な光景を見た。

茶トラの猫と女子高生が戯れているのだ。

何故、不思議かというところ、その猫は先日、女子高生を気絶させた化け猫だし、その猫と戯れているのは、その猫に気絶させられた女子高生だったからだだった。

猫は横になり、彼女にお腹を見せ完全服従状態で、のど元をくすぐられ玩具状態だった。

『不思議だ。つい数日前、襲った者と襲われたがあんなに仲良く、私ならどちらの立場であろうと、確実に疎遠になるな。』

猫を弄んでいる子は、この学校で成績なら一番のガリ勉少女で有名な、美由のクラスメイトである。

『普段はあんなにギスギスした人なのに、猫の前ではこんなに無邪気な少女の様な姿を見せるのか。』

この猫は化け猫である。当然、存在が薄い。

だが、この茶トラの化け猫は、人間がハッキリ認知できるまで存在を強めていた。

『そう言えば、傷だらけの黒猫が言っていたな。あの日、突然、化け猫になって、その時に餌をいつもあげている子を見つけて、飛び

ついたら、精神吸収が発動したって。あの時は朋ちゃんガラミンになって、それどころじゃ無かったから思考が回らなかったけど、良く考えてみれば、こうした不思議な組み合わせになるんだよなあ。あ。』 2話が終了した時の改変で、この会話が追加されています。美由はふと思った。

確か、今、猫はかなり大きなトラブルを抱えており、自分を監視できない程、人手が足りなかったはず。それなのに、あの傷だらけの黒猫に引き取られたはずのこの、茶トラ猫は女子高生と戯れている。

『おかしい。』

美由はそのまま、一匹と一人に近づいていった。

彼女は猫と遊ぶので一生懸命のようで、後ろから近づく美由に気づいていない。

「ねええ。この猫とお知り合い？」

美由は、相手が気づいて無いと知りつつも声をかけた

「きゃ。」

彼女は10cm程飛び上がり、美由の方を向いた。

「な、な、何ですか？」

『まさか、こんなに驚かれるとは思わなかった。』

「いえ、猫さんかわいいなああって。」

茶トラ猫と

裏庭で猫と戯れていた彼女は桐野きりの 舞奈まいなという名前である。

彼女は公立の中学から来た子だが、1年の時から男子を含めても一番をキープし続けていた。休み時間もずっと勉強をする姿から、嫌味を含めてつけられたあだ名が、『ガリ勉少女』であった。

普段は、取り付く島も無いぐらいにクールな人なのだが、今はこんな少女の様な顔で猫と戯れたり、子供の様に驚いたりしている。桐野の普段の姿は作りで、本当の彼女はこういう風に子供っぽいんだらうと、美由は思った。

彼女は立ち上がり、キツリつとした顔になる。

「あら？誰かと思えば、桜間おねえ様じゃない。」

『あなたもその呼び方をしますか？』

「すみません。その呼び方やめてもらえますか？同級生ですし。」
「あら？いいじゃない。期待してるんだけど。あなたがおねえ様になる事。」

「私はなるつもりは無いのですが……。」

「もつたいない。聖セントエルナル学院の人達が悔しがって面白いのに。」

「あはは……。」

美由は顔を引きつらせ、乾いた笑いをした。

『彼女はおのお嬢様方に何か恨みでもあるんだらうか？』

「親が金を持っているというだけで、公立中学出身の一般生徒を見下している、あの、いけすかないお嬢さんたちの大切なステータスである『おねえ様』の称号を、一般生徒の代表である、あなたが受けるのは考えてただけで痛快なのに。」

「遠慮しときます。」

『何かあったんだらうな。本当に。』

「私、あのお嬢様方だけに負けたくないと思って、勉強だけは

頑張ってきたのよ。恨みは人の競争心を煽り、成長させるから。多分、この思いが無かったら、今の私は無いわね。一応彼女等には感謝もしているんですよ。」

「はあ。」

「そうそう、感謝といえば、有り難うね。私が倒れた時に、一番に駆けつけたのがあなただったそうで、感謝の言葉を言うのを忘れてたわ。」

「いえいえ、どういたしまして。」

「貸しが出来たわね。」

「そんな気にしなくとも。」

「貸しついでに、もうひとつお願いがあるんだけど。」

「なんですか?」

桐野はゴロゴロと無邪気に寝返りを打つ茶トラの猫を見る。

「この子の事は黙っておいてくれない? 私、学校に来る時は、この子に毎日餌をあげているんだけど、ほら、先生や他の生徒に知られると体裁悪いから。」

「ええ、いいですよ。私は見てなかった、知らなかったですね。」

「有り難うね。」

少しの間、二人の間に沈黙が出来る。彼女は心配そうな表情になる。

「私が倒れた後から、この子、昨日まで姿を見せなかったんだけど、今日、こんなに元気そうな姿で現れて。」

そう言って、笑顔になった。

「へええ。」

「まあ、「暴走」して学校に来るところじゃなかったんだけどね。」

「でも、不思議、私が倒れた時、一瞬、この子に足を抱きつかれた様な気がしたんだよね。」

美由はビックとなる。顔が引きつる。

「へええ。そ・そう、なんですか。」

「じゃ、この辺で、テスト頑張つてね。」
そう言つて、桐野は立ち去つていった。

「後、おねえ様もね。」

美由は引きつった笑顔で、彼女を見送つた。

「テストは頑張るけど、おねえ様は頑張りません。」

茶トラ猫（2）

美由は地面で無邪気にバツタを追いかけ茶トラ猫を見下ろす。

『私が知っている猫達で、こんなに、猫らしい猫は初めてな気がする。』

美由は膝を曲げ座り込み、視線を低くする。

しばらくバツタを追いかけていたと思ったら、存在を薄め、突然、キツリつとなり、美由を見る。

「魔法少女さん。この前は有り難うですにゃ。」

いきなりの変化に美由は、何かガツカリ感を覚えた。せつかく、猫らしい猫を見て可愛いと思っていたのに、普通の化け猫に戻ってしまっている。声の感じからしてメス猫らしい。

『語尾に「にゃ」って、私の知っている猫達では初めてだな。』

「いえいえ。」

「あなたのおかげで、また、彼女との楽しいひと時が送れますにゃ。見てください自由に存在も調節できるようになったし、精神吸収の発動も自分でコントロールできるようになったにゃ。」

「そうですね。それより、聞きたい事があるんですが？」

「何ですかにゃ？」

「猫が封鎖をしているって聞いたけど、何でしてるの？」

「.....」

猫は顔を背けたが、直ぐに美由を見る。

「口止めされてるけど、命の恩人の魔法少女さんに特別におしえるにゃ。」

「ありがとう。」

「ボスの『しんせき』がなくなったにゃ。」

「あのメスのふちよっちょ三毛猫さんの親戚の誰かが、お亡くなりになったの？」

「その親戚じゃないにゃ。神の石と書いて『神石』だにゃ。」

「『神石』？聞いた事ないですけど、それって何？とつても大事なもの？」

「知らないにや。でも、みんなで探しているにや。」

美由は疑問に思った。落とし物を探しているだけなら、封鎖をする必要はない。盗まれたのであれば、封鎖して犯人を捕まえるには効果があるだろう。しかし、あの対立が激しい猫のグループまで封鎖に協力をするかと言えば疑問だ。

「ねええ。探し物をするだけなら、街を封鎖する必要はないんじゃないの？」

「うーんと、良くわからないにや。とにかく、『神石』が無くなったから、縄張りから外に化け物を出すな、入れるなという命令しか受けてないにや。それから縄張りを堂々と歩いている化け物がいたら、ひとまず襲って、堂々と街を徘徊させないようにさせろとしか聞いてないにや。」

「誰かが、その『神石』というのを盗んで、その犯人を見つけて捕まえるって事じゃないの？」

「今の所、そんな命令は聞いてないにや。そういうのは、クロさんとこの部隊がやっていると思うにや。」

「クロ？あの傷だらけの黒猫の事？」

「そうにや。」

「で、そのクロさんが部隊だけが、犯人と神石を探していると。」

「我々下っ端は、封鎖とパトロールしか命令されてないにや。」

『良くわからないなあ。神石の事がわからないと判断しようがない。』

「ところで、あなたは行かなくていいの？」

猫はビツクつとなる。

「本当は行かなくちゃいけないにやあ。ただ、ここ数日、彼女に顔を出して無かったから心配していると思って抜け出てきたにや。直ぐにいかないと怒られるから、失礼なのにや。ひとまず、他の人には内緒にしといて欲しいにや。」

「わかりました。気をつけて。」
「その約束は守れないけどね。蛙主に聞いて見るか。」

神石

あのメス猫が言っていた『神石』の情報を得るために、普通の蛙を使って蛙主に呼び出しをかける。

伝言の内容は「知りたい事があるから来て欲しい。」とだけ伝えられている。

あの茶トラ猫との約束を破るのは心苦しくもあつたが、どうも、ほっとくと、やばい気がした。

蛙主はすぐに現れた。

「何じゃ。猫が街で暴れ回っていて、来たくなかつたのじゃが。」
「すいません。聞きたかつた事があつたんで。」

「わしゃ、お前さんの辞書ではないぞ。今日はこんなにリスクを犯してきてるんじゃない。胸を触らしてくれ。」

美由は胸を隠すように腕組をして、体をそむける。

「い・いやです。」

「では、教えられんのか。」

「むむむ……。何でそうなんんですか。」

「嫌ならいいじゃよー。」

「わ、わかりました。」

そういつて、腕を下ろし、しゃがみこんむ。

「どうぞ。」

蛙ぬしはいやらしい手つきで、美由の胸をなでた。

「いやああ」

といつて、胸をそらした。

「もう、終わりが。まあ、ええじゃろ、処でなんじゃ？」

「あの、神石というのについて聞きたいんですけど。」

「親戚？血縁関係のある身内の事じゃろう？」

「そつちではなくて、神の石と書いて神石だそうです。」

「なんで、また、神石なんぞ。まあ、ええじゃる。神石は神の肉体が化石化したモノと言われておるが事実かはわからん。結構そこから辺にころがつとるから、信憑性は薄いと思うがのう。」

「そんなゴロゴロしてるんですか？」

「してるぞい。力は全く無いといっていいぐらい弱いかな。」

「力ですか？」

「神石は我々生き物に魔力に近い力を簡易的に与えてくれる事が出来る石じゃ。まあ、そこらへんのやつじゃ吸収しても雀の涙にもなりやせんがのう。」

「へええ。力がある程度ある石なら、結構便利そうですね。」

「それが、そういうわけでもないのじゃ。」

「どうしてですか？」

「力が強すぎる石は扱いが難しすぎてのう。かなりの訓練と精神力と魔法抵抗力が無いと、暴走のパワーアップ版みたいな状態になるんじゃ。」

「この前の猫以上ですか？」

「あんなもんじゃ無いと聞いておるぞ。わしも、見た事は無いから確実とは言えんが。昔、化け物たちが共同して押さえ込まなければならぬ程の大事件になったと聞いておるぞ。」

「うわああ。それは、大変ですね。石がそこら辺にあるんなら結構、やばいんじゃないんですか？」

「大丈夫じゃ。力の強い神石は普段は眠りについておる。」

「石が眠っているんですか？」

「そうじゃ。石がその眠りから目覚めないと力の吸収は出来ん。だからそんなに気にすることはない。」

「はああ。」

「ただ、石が目覚めたら、化け物はその石に触れただけでそういう状態になるそうじゃ。」

「へええ。石が目覚めた場合、危険なんですね。」

「時折、自然に目覚める事もあれば、特殊な魔法を使えば強制的

に目覚めさせる事もできるのじゃ。でも、目覚めても1時間から1日ぐらいで眠りにつくんで、よっぽど運が悪くない限りそういう事にはならんじやろ。」

「蛙主も石を目覚めさせる事ができるんですか？」

「わしか？できるぞい。というより、ワシが蛙主を継げたのは父親が厳しく神石の扱いを教えたからじゃ。神石の扱いが出来なくては、蛙主を継げんからのう。」

「なるほど、父親が厳しく訓練したら、今の蛙主がいるんですね。それが無かったらタダのスケベガエルですね。」

「くう。痛い事を言うのう。」

「さつき、『石が目覚めたら化け物が触れただけでそういった状態になるそうじゃ』と、言いましたよね？なんで、『そうじゃ』なんですか？目覚めさせられるなら知っていてもおかしく無いような。」

「ワシは自力で押さえ込めるし、他の化け物を実験台に使うわけにもいかんじやろ。」

「それは、そうですね。」

「第一、知的好奇心を発揮して、化け物に目覚めさせた石に接触させてたら、ワシの身が危ないじやろ。」

「確かに。」

「それに、そんな状態成る程力を持った石なんて、地面の表面や地中の浅い処には、ほとんどない。」

「何ですか？」

「さあ。地上に出ると風化が早く起こるのか、それとも、使いよによって便利だから取り付くしたのか、それとも、運の悪い虫なんか触って、奇跡的に発動したのか。まあ、ワシが知る限り、化け物でない限りは滅多に反応せんはずじゃが。」

「生き物が触って、暴走のパワーアップ版が起こる可能性が全く無いとは言えないと。」

「そうじゃと聞いているが、高い力がある石は滅多に見んからの

う。見つかるのは砂岩や泥岩 『砂や泥が地中内で高温と高圧にさらされ固まり石になったもの。』 の中や、地中深くとかにあるからのう。」

「はい。要するに、他の生物が触って影響がある程強い石なんて滅多に無いし、石が偶然目覚めざる可能性もあわせると、ほとんどゼロに近いと。」

「そうじゃ。第一、そんな、人間や他の生き物が突然化け物化した事件なんて聞いた事じゃいじやろ。」

「無いですねえ。」

「さあ行こう！あれ？」

美由は蛙主の話を聞き思った。

猫達のあの焦り様は、神石が紛失したから、あんなに慌てているのだろう。

蛙主の話だと目覚めた神石に化け物が接触しただけで、暴走のパワーアップ版になるという。

これは、強力な威力をもつ爆弾が街のどこかに、無防備に転がっている事に等しい。

この爆弾を爆発させずに取り扱うにせよ、犯人を捕まえるにせよ、特殊な知識が無いと駄目なのだろう。だから、あの傷だらけの黒猫の部隊だけが動かざるを得ない。

封鎖しているのも、縄張り内の化け物が活発に動かないように襲っているのも、化け物が不用意に動いて、たまたま接触してしまい暴走のパワーアップ版にならないようにしているのと、そんなものを自分の縄張りの中に入れさせないためなんだろう。

『さて、いくか。』

美由は何処かに行こうとする。

「魔法少女その1よ。何処に行く。人を辞書がわりに使っていて、有り難うも無しか。」

その言葉を聞き、彼女は「あ」と、思う。

そして、振り返ると、自分は犯人の顔を知らないし、石がどんな形状なのかも知らない。

手を出そうにも、実はどうしようもない事に気づく。

「有り難うございます。蛙主。」

「魔法少女よ。お主、何かあせつとらんか？」

美由はギクリとする。多分、表情にも出ただろう。

「いいえ、そんなことは無いですよ。」

「そうか。こんな猫が暴れているところに長居しようない。それじゃあもう。」

そう言っつて、蛙主は消えていった。

美由は、ため息をつく。

『ふー。何とかごまかせた。でも、どんな風に、やばいことが起こっているのはわかったけど、私が手を出せるわけじゃない。分かっているのに手を出せ無いなんてじれったいなあ。』

美由はカバンを取りに教室に戻った後、校門を出る。

校門の前では、ガツクリとうなだれている朋がいた。

朋は美由の姿をみるなり、走りより抱きつく。

「美由先輩。」

突然の出来事に美由は、状況が良くわからない。

「ど、どうしたの？朋ちゃん。」

朋は美由を見上げる。

「美由先輩。テストが全然できなかつたんです。元気を貰うために、美由先輩を追いかけたら、いないし。でも、こうして校門の前でうなだれてたら美由先輩にあえたのです。」

美由は朋の言い分に一瞬、啞然とする。

でも、優しい笑顔を作り、彼女の頭を撫でた。

「はいはい、わかつたわかつた。ごめんね。」

「えへへ。」

携帯電話を持っていない二人

美由は朋に抱きつかれながら思う。

『この子は凄いなと。』

焦っていた、自分の心を落ち着かせてくれる。

こういう風に甘えて他人を優しい気持ちにさせる事は自分には出来ない。

「朋ちゃん、一緒にかえろ。」

「はい。美由せんぱい」

二人は歩きはじめる。

「朋ちゃん、テストの出来があんまり良くなかったって、言っただけどテスト勉強しなかったの？」

「テスト勉強はしたんですけど、問題が難しくて。」

「そつかそつか。何時間ぐらい？」

「4時間ぐらいです。」

美由は普段から家で4時間〜6時間しており、それでも、大学入試に間に合わないかもしれないと思っているので、美由の基準から考えれば、朋の勉強時間がいっぱいかと言えはそうでも無い。

『まあ、普段はあまりしないんだろうから、良く頑張っている方かな。』

「まあ、高校の問題は、中学と感触が違うからねえ。問題を読むだけで大変な問題が増えるし。中学みたいに基礎を理解しているだけじゃ解けない問題が多いから。テスト期間中だけやっても、まあ、そんな上手く行くもんじゃないよ。」

美由は指を一本立てる

「もし、それで、上手く行っても、普段から、ウチでそれくらいの時間やらないと、大学入試は厳しいよ。」

「はい。大学行きたいです。」

「まあ、上と場所と学科とお金を選ばなければ、行ける大学もあ

るみたいだけどね。試験で良い点とらないと入れない4流大以上に行くんなら普段から毎日、勉強しないとね。」

「美由先輩はどここの大学に行くんですか？」

「私は近くの国立大に行けたらいいなあと思ってるよ。」

「美由先輩なら絶対いけます。」

「それはどうかなあ。私も今日のテスト受けて、ちょっと自信をなくしちゃってるから。」

「美由先輩でもそんな事があるんですか。」

「まあ、でも、朋ちゃんにそこで会えて良かったよ。ちょっとやる気が出た。」

「えへへ。ところで、美由先輩は何で近くの国立大なんですか？」

「うーんと、ウチにお金が無いから、私立に行くお金はないし。」

アパート借りるのもお金がいるし。」

「バイトとかしないんですか？」

「バイトはしないだろうねえ。今は全単位を最短で終わらせないと、就職がきついつて聞くし、バイトをすると、どうしても単位を落とすって聞くから。」

「大学に行っても勉強は続くんですね。」

「そうみたい。」

「ところで、美由先輩って携帯って持ってますか？」

「何を唐突に、持ってないよ。朋ちゃんは？」

「持ってます。お母さんが携帯は自分がお金を稼ぐようになってからと言うんで。」

「妹は持っているんだけど、私はモノをすぐに無くすタイプだし、かける相手もないから。いらないなあ。あっても、多分、ウチに置きっぱなしになると思うし。」

『そっぴゃあ。私が緊急に用事がある人たちって化け物ぐらいで、携帯以外の手段の連絡方を使ってるなあ』

「美由先輩って、妹さんがいるんですか？」

「いるよ。妹と弟が。」

「へええ。仲がいいんですか？」

「仲はそこまでは良く無かな？疎遠という程でもないけど、妹とは趣味や考え方が違うから話が合わないし、弟とは結構話があつていたけど、最近は話す量が減ったかな。」

「私一人っ子なんで、兄弟や姉妹に憧れます。」

「居た方がいいよね。たまに、邪魔に感じる事もあるけど。可愛いとも思うよ。」

「一人だと、淋しい事があるんで、兄弟がいると楽しいだろうなつて。」

「楽しくはあるかな。」

二人の足が止まる。ここで帰り道が分かれるからだ。

「それじゃあね。朋ちゃん。勉強頑張つてね。」

美由は手を振った。

「はい、頑張ります。」

白猫

とある一軒屋家の軒下に一匹の白猫が入っていく。

その猫は、化け猫でありメス猫だった。

コンクリートで仕切られた基礎の迷路を進み、奥へと入っていく。一番奥につくと、その猫は穴を掘りはじめた。

そこから、直径5cm程の磨いた大理石の様に輝く白い球体が出てきた。

『まだ、見つかって無いみたいね。』

猫は白い珠を見つめる。

『あのババア猫。ボスをやっているけど、ただ、神輿みこしとして担かつがれているだけじゃない。あのババアの私に対する執拗なイジメ。もう耐えられない。みんなも助けてくれない。もういい。あのババアから奪ったこの神石で自爆してやる。』

当人は有終の美が飾れるので良いかもしれないが、他の人達から見れば、ただ迷惑な猫であった。

化け猫社会は、ある程度上下関係が固まっているので、彼女の努力ではどうしよう無いのは確かなのだが、どこかよそに行つて、別のグループに入るなり、一人で生きて行くなり、時間がたてば上にいたものが死ぬので自動的に自分の地位があがるわけだから数年我慢して待つという手もあった。

選択肢は幾つもあるはずである。

でも、復讐のための自爆を選択した。

『あのババアの話によると、その内この石は目覚める。その時、この石に接触すれば、私は誰よりも強大な力を手に入れる事が出来る。散々暴れ周り、命を散らす。それが私の美学。』

「それまで、私が犯人だと、あいつ等に気づかれない様にしないと……。」

「あなたが犯人でしたか。」

白猫は振り返る。

そこには、傷だらけの黒猫がいた。

「クロさん……。」

「あなたを、ずっと疑っていたんですよ。だからずっと、泳がせ、監視しておりました。」

「疑っているなら、私を拷問すればよかったですじゃない。」

「それでも良かったんですが、猫はやりすぎてしまうので……。殺してしまつては、神石が回収できない。それに疑いがあったのはあなただけではない。ウチは規模が大きいですからねえ。野心があつたり不満を持つている猫は幾らでもいる。そんな疑いがある猫を全員潰していたら組織は持たない。」

「相変わらず、計算高いようで。」

「それに、あなたをなるべくなら、殺さないでおきたい。今なら紛失だつた事にして、あなたが見つけた事にすれば済みます。」

「その言葉を私が信じるとでも？ 化け猫社会のルールは裏切り者は消すでしょ？」

「信じてもらいたいものですな。どうせ、もう逃げられないんですから。」

「お断り。」

白のメス猫は不敵な笑みを浮かべる。

「いつバれて、殺されるかも分からない。脅えながら日陰で生き続けるぐらいなら、花火をでっかく揚げて華々しく散るわ。」

そう言うつと白のメス猫は傷だらけの黒猫に砂をかける。

一瞬、黒猫はひるむ。

その瞬間、口で白い珠をくわえ、コンクリートが破損して出来た抜け穴へと入っていく。

怒られる黒猫

夜になった。

住宅街にある空き地に積まれた三本の土管の上にふとつちよの三毛猫が座っていた。

三毛猫の視線の先には、傷だらけの猫が地面に座っている。

「おみやあさんにしては、珍らしゅう不手際だがあねえ。」

「申し訳ありません、ボス。」

口では謝っていたが、顔は無表情だった。

「ほんで、あの生意気な白猫は、ちゃんと手配したんか？」

「はい。見つかるのも時間の問題かと。」

「石が覚醒する前に、何とかせんといかなあ。」

「はい。善処します。処で、ボスは何であの猫が嫌いなので？」

ボス猫は、その質問に何の躊躇も無く話をはじめ。

「そりゃあ。若くて可愛いのにあぐらかいて、人が何とかしてくれると思いきんでいる処が気に入らんね。」

「なるほど。」

「クロも、あの色ボケ猫にやられてるかね？」

「いいえ、私はそういうのは卒業しました。ただ、仲間を殺すのは心が痛みます。」

「猫は独立心というのが強いがね。そげんなやつ等をまとめるにやあ、ルールちゅーもんを厳格に適應せんと駄目だといつも言っておるとは、お前さんだぎゃね。」

「はい。今度は躊躇しません。では、行ってまいります。」

「成果を期待してるだーよ。」

「はい」

黒猫は空き地に隣接道路へと歩きだす。

道路には一匹の猫がいた。

「情報は？」

「これと言って特にはありません。」

「今から、行くところがあります。指揮をお願いします。2・3時間で戻ると思っています。」

「何処に行かれるのでしょうか？」

「最悪の事態に備えようと思ひまして。そのための準備です。」
「わかりました。」

「彼女は必ず、我々の縄張りにいるはず。彼女の目的は我々への復讐ですから。」

黒猫は相手の猫をしつかり見る。

「それではお願いします。」

「了解しました。」

そう言つて、相手の猫は去つていった。

『さて。ひとまず、最初は蛙主の所にいきますかね。』

傷だらけの猫は、山道を登り、蛙主の処に来ていた。

「何？神石じゃと？」

蛙主は、黒猫の話聞き驚いた表情を浮かべた。

「はい。それがとっても危険なモノで。」

「神石ぐらい知つておる。」

「そうなんですか？」

「お主は知らんのか？蛙の化け物の主になるには、神石を扱える様にならんと駄目だと。」

「申し訳ありません。存じあげておりませんでした。」

一瞬、間が空き、蛙主が話しはじめる。

「で、神石がどうした。」

「その神石が、かなり高純度で大きなもの何です。それを使って、我々に復讐しようという猫が現れまして。」

「何でそうなるんじゃ。使い方を知らんヤツが使つたら、先日の

暴走どころではすまんぞ。」

あきれた表情でそう述べた。

「申し訳ありません。」

そう言つて、形式的に頭を下げた。

「お前さんが、街を封鎖していたのはそのためなんじゃな？」

「はい。紛失したのであれば、たまたま落ちている神石を不用意に化け物が触りでもしたらトンでもない事になるので。」

蛙主は頬に手をやり、あごをさする。

「確かに妥当な対応かもしれませんがなあ。で、ワシに何の用じゃ？」

わざわざ、迷惑をこれからかけますと謝りに来たわけでもあるまい。

「

「良くわかりで、もし、最悪の事態が起こった場合、手を貸して欲しいのです。多分、我々だけでは止められないと思うので。」

「よからう。神石での暴走を止めるのは蛙主としての役目のひとつじゃな。」

「……。神石の暴走を止めるのが役目とは？」

「ん？神石の暴走の場合、ワシら蛙の化け物の主を頼れと聞いてないのか？」

「いいえ。初耳です。」

「まあ、前に神石の事件があつたのは、ワシが生まれるまえじゃしなあ。随分前じゃから、下の世代に伝えそこなつたのかのう。」

「そのようですね。」

「ワシは、神石を目覚めさせる事も眠らせる事も出来るし、当然、神石から暴走せず力に吸収することも出来る。更に力が強ければ感知もできるのじゃ。」

「それは頼りになります。感知が出来るのなら、犯人を捜すのを手伝っていただけないでしょうか？」

「それが、ワシの仕事であるしな。」

「それでは早速ついて来ていただけますか？」

「しばし待て、猫と共に行動するのはこっちが怖い。お前さんは

それでもないが、他の猫を見るだけで恐怖で動けなくなる。そしてら感知が出来ん。仲間を集めてそいつらと共に行動する。それにお前さんがついて来るのでは駄目か？」

「仕方ないですね。それで結構です。」

「よかるう。」

「あの、ひとつ良いでしょうか？神石が扱えるという事は、神石で暴走したモノを元に戻せるという事でしょうか？」

「さあ、知らん。ワシは少なくとも聞いておらん。ただ、神石で暴走した場合、急激に肉体の破綻がはじまるとは聞いておる。もし、戻せたとしても、死んだ方がマシな状態になるかもしれん。」

「そうですか。」

「そういやああ。魔法少女が、今日、神石についてワシに質問しておったぞ。多分、どこかでおぬし等が神石を無くした情報を手にいれたのじゃないかのう。」

「誰か口の軽い猫がしゃべったんですかね。」

「かもしれんな。」

「まあ、魔法少女についてはひとまず、放っておきます。そこまです手が回らないのが現状なので。」

「まああやつも、こっちの助っ人として借り出すつもりじゃ。何せ、わしら化け物社会全体だけでなくこの街の危機でもあるんだしのう。」

美由の呼び出し。

蛙主は美由の部屋に瞬間移動でやってくる。

部屋には誰もいなかった。

「なんじゃ、あやつ。走りに行っているのか？」

部屋を占領しているクローゼットの引き出しの前までやってくる。

「さて、せっかくきたんじゃし、やつの下着でも拝見するか。」

そういつて引き出しを開ける。

「おお、大量というほどではないが、やつの下着じゃ。」

そういつて、ブラを頭に乗せた瞬間、美由の部屋の扉が空き、美由が中に入って来た。

「きゃ。。。」

美由は悲鳴を上げそうになったが、蛙主だと気づき、口を押さえる。

「なにやってるんですか、蛙主。」

「いや、お前さんに用事があったんで、呼び出しにきたんじゃが、いなかったんで、お前さんの下着をご拝謁しよう。」

「何でそうなるんですか。」

そういつて、蛙主の頭の上に乗っているブラジャーを奪い取り、クローゼットの引き出しにブラジャーを叩き込み、それを蹴って閉める。

「残念じゃのう。」

「で、何です？呼び出して。」

「猫が神石をなくしたというのは知っているな？」

「何で、蛙主が知っているんです？」

「さつき、正式に猫から手伝う様に依頼があったからじゃ。」

「そうなんですか。で？」

「今から、探しに行く。手伝え。」

「私、明日テスト何で、徹夜は嫌なんですけどね。でも、神石の

危険性については知っているもので、しかたないですね。処でどうするんでしょう？私は神石がどんなものか知りませんし。猫の方でどういったトラブルがあるのかも知らないのです。」

「まあ、もうしばらく、まっとなれ、ウサギのやつと、タヌキのやつと、傷だらけの黒猫が来るはずじゃ。詳しい事は黒猫に聞け。ワシが言えるのは、どうも、猫達の間でトラブルがあり、その復讐のために神石を使うつもりらしいという事だけじゃ。」

「なるほど、で、どうやって探すんですか？」

「ワシが神石を感知できる。感知の間は動けんので、お前の頭の上に乗って移動する。」

「私が蛙主の足になれと。」

「そうじゃ。」

しばらく待つと、ウサギ主とタヌキ主と傷だらけの黒猫が美由の家の前に集まってきた。

蛙主は美由の頭の上に乗る。

「うーん。魔法少女その1よ。お主の頭の乗り心地はイマイチじやのう。魔法少女その2の方が良いぞい。」

「ワガママ、言わないで下さい。朋ちゃんを巻き込むわけにいかないでしょ。」

「それなら、ぬいぐるみの様に抱きしめてくれ。その胸に包まれたい。」

「絶対嫌です。」

「むー。ケチじやのう。魔法少女その2は抱いてくれたのに。あの無い胸で包まれるのも、あれはあれで良かったが。」

「いい加減にしてください。」

美由はテラミルとなり、窓から降りる。

テラミルは集まった化け物達を見回し思う。

『私の家は、化け物の溜まり場なんだろうか？』

黒猫の説明を聞く。

話をまとめると、ボス猫のいじめに嫌気が差した猫が、ボスの神石を盗んだという。何で盗んだかといえば、神石を使ってパワーアップし、街で暴れまくって猫達に復讐し、自分も死ぬだという。

神石がいつ目覚めるかわからないので、自分が盗んだ事を隠して何事も無かった顔で過ごし時を待っていたらしい。

そして、今日、その猫が神石を隠し持っている現場を押さえたが、逃げられたという。

『何て、迷惑な猫なんだろう。復讐なら、復讐したい相手だけにすれば良いじゃないか。なぜ、関係無い人達を巻き込むようなことをする。』

蛙主を頭に乗せながら、テラミルはそう思った。

「さて、行くかの。」

蛙主はそう言った。

白の猫と白の珠をさがす。

蛙主はテラミルの頭の上に乗りながら目を閉じる。姿勢を低くとり、彼女の頭にべったりと張り付いた。

10秒ほどの時間が過ぎ、蛙主は目を開け、姿勢を戻した。

蛙主は不思議そうな顔をしてながら、首を横にひねった。

そして、美由の頭をポンポン叩きはじめる。

「魔法少女その1よ、お主が放出している力が邪魔で感知できませんに戻れ。」

「分かりましたから、頭をポンポン叩かないでください。」

テラミルは美由に戻った。

「はい、これでいいでしょう。」

蛙主はまた目を閉じ、そして目を開ける。

「ここら辺には無い様じゃの。」

「そうですか。」

黒猫は残念そうにそう言う。

「どうしましょう？蛙主が感知出来ないんじゃ、私はこの姿でいるしかないような。でも、テラミルじゃなかったら、高速に動きまわれませんかよ？」

二本脚で立っていたウサギ主が、4本脚で立つ。

「みんな、ワシに乗れ。」

美由はこの前の猫の暴走の時に乗った事を思い出す。

『うーん、また、あのロデオの様な体験をしなくてはならないのか。』

蛙主は弱った顔をしている。

「せっかく、お前さんの背中に乗らんで済むと思っておったのにのう。」

「蛙主もウサギ主の背中に乗った経験があるのか。」

「死ぬかと思っただぞい。」

「ほら、皆、四の五の言わず乗れ。他に手は無い。」
みんなうんざりしながら、乗る。

ウサギに蛙と人間とタヌキと猫が乗っている中々シユールな状態になった。

ウサギ主は、前と同じで乗っている人の事など考えず、荒い走り
で駆け出した。

「ふ、振り落とされる。」

「こんくらい根性で我慢せい蛙主。」

「出来るかー。」

でかいウサギは更に加速をした。

街のあちこちに移動するが、感知にひっかからない。

みんなが、ウサギ主の荒い走りにヘトヘトになっていたし、蛙主
の感知能力を疑いはじめていた。

「本当に蛙主、神石の感知能力あるんですか？」

「五月蠅い。しばらく使ってなかったから、感が鈍っているだけ
じゃ。こちら辺にも無い様じゃな。」

『大丈夫なんだろうか？その言い分は、かなり不確かなものに感
じてしまう。』

美由たちが通う学校の近くに来た時、初めて、蛙主は神石の力
を感じた。

「む。神石を感じるぞい。どうも、魔法少女の学校の中らしいの
う。」

ウサギ主はそれを聞くと、猛加速をはじめ。

学校のフェンスが現れるが、ウサギ主はスピードを落とさない。
フェンスは3m程あり、有刺鉄線が張られている。

「まさか、ウサギ。お主、あそこを飛び超えるつもりか。」

「まさかとは何だ。もちろん越えるに決まっておろう。」

「あの、有刺鉄線が見えんのか、あそこに突っ込んだら、みんな

大怪我するぞい。」

「そんなものは気にする必要は無い。この鍛えた筋肉があんな鉄の線を破るなど雑作もない。」

『いや、あなたはいいでしょうけど、他の人たちはそんな頑丈には出来てない。』

ウサギ主はジャンプし、フェンスを軽々と超え、グラウンドに大きな音を立てて着地し、5mほど地面を滑った。美由とタヌキ主はその衝撃で、手を離してしまいグラウンドに転がる。

「ウサギ主様。少しは上に乗っている人の事も考えてください。」

「すまんすまん。」

美由は学校のグラウンドを見回した。誰一人いないし、電気が消え暗く静まり返っている。

『この学校は猫の化け物に呪われてるなああ。』

「さて、どうも、裏庭の方みたいじゃの。ここまで近づくと精神を集中せんでも分かる。」

そう蛙主が言う。

「……………いかなあ。どうも、もう直ぐ、石が目覚めるみたいじゃ。」

白猫との戦い

白いメス猫は学校の裏庭の真ん中で、白い珠を見つめていた。

白い珠は青白い輝きをかすかに帯びている。そのため、暗闇の中でも白い珠がハッキリと浮かんで見えた。

『もうすぐ、この石は目覚める。この輝きを見ればわかる。早く目覚めて。あいつらが来る前に。』

彼女そう思っていると、どこからとも無く、石が猛スピードで飛んで来て白い珠をはじいた。

白い珠は、彼女の目の前から消える。

彼女は、石が飛んできた方向を一度見た後、振り返り白の珠を追いかける。

隠れていた美由は蛙主を頭に乗せながら、テラミルに変身し、超加速を使い珠を追いかける。

白の猫とテラミルはほぼ、同時に珠に追いつき、テラミルの手が先に珠を握った。

テラミルが珠を握ると、珠は強い輝きを放つ。

「魔法少女何をやっとする。」

蛙主がテラミルの頭をバンバン叩くが反応が無い。

「魔法少女、手を離せ……。いかん、魔法少女に神石の力が流れこんでいる。」

蛙主は魔法を使い、テラミルを強制的に眠らせる。

テラミルは倒れ美由へと戻るが、神石の力の流れが止まらない。

蛙主は美由の手から強引に神石を引き離す。次の瞬間、白の猫が蛙主に体当たりして突き飛ばし、白い珠をくわえた。

『これでやっと、終われる。』

『いかん暴走が始まれば、この魔法少女が最初の犠牲者になるぞ。』

白い猫の体がどんどん大きくなり、大人のオスライオンぐらいまで大きくなった処で、ウサギ主の右ストレートが白猫の顔面を直撃し、神石が口から落ちた。

蛙主は美由も神石の魔力を吸収した事など気にもとめず、美由に目覚めの呪文をかけ目覚めさせる。

美由が目を開くと、目の前にはオスライオンぐらいの大きさになった白いメスライオンの様な生物がいた。

ウサギ主は左のパンチを叩き込もうするが、白猫の前足の攻撃を喰らい3m程飛ばされた。

美由はテラミルになる。次の瞬間、白いメス猫はテラミルに向け腕を振る。テラミルはかわそうとするが間に合わず、モロに喰らい球体シールドを発動しながら10m程飛ばされた。

蛙主はその間に白い珠を回収に成功したが、今度は、蛙主が標的にされる。

傷だらけの黒猫は、大型犬ぐらいの大きさになり、猫の首元へと噛み付く。だが、猫が首をふっただけで、簡単に叩き落とされる。

逃げる時間を与えられた蛙主は、珠を握りながら二本脚で全力で中庭へと向かった。

それを、白猫は追いかけて様と体を切り返した。

傷だらけの猫は白猫の尻を両腕でつかみ横に倒そうとし、ウサギ主は首と肩を掴み同じ方向へ押し倒そうとするが、あまりに強い力で払いのけられる。

蛙主は全力で逃げながら叫ぶ。

「神石をほとんど、吸収しておらんのに、何じゃこの力は。そして、何故、ワシを追いかける。」

それは神石を握っていたからだだった。

テラミルが握れないことが分かった以上、今の状態で神石が握れるのは蛙主しかいなかった。

タヌキ主が猫に飛ばされ倒れて、起き上がるうとしているテラミルに近寄る。

「魔法少女よ、大丈夫か？神石の力を吸収したが、体に変化は無い
か？」

「はい。今のところは特には。でも、かなりパワーアップした
みたいです。行きます。」

そう言って、超加速で猫の後を追った。

4話終わり

大きくなった白猫は、逃げる蛙主に追いつき、噛み付こうとする。その時、テラミルが白猫の頭にキックを入れ、白猫は地面に顔を叩き付けられた。

「蛙主大丈夫ですか？」

蛙主はテラミルの頭に飛び乗る。

「お前さんの方こそ、大丈夫か？かなり神石の力を吸収したが。」

「はい、大丈夫みたいです。それどこか、大分パワーアップしたみたいです。」

白猫は起き上がり、首を振るつたあと、テラミルめがけて体当たりをしてくる。テラミルは飛ばされるが球体シールドの防御力があがつているため無事着地する。

「みたいじゃの。」

ウサギ主と大きくなった黒猫がやってくる姿が見える。

「よいか？戦おうとするな。とにかくかわせ。」

「はい」

テラミルは猫の攻撃を体を大きく振り後退しながらかわしていく。攻撃は早いが直線的なのでパワーアップしている今なら、かわすはたやすかった。だが、ジリジリと後退を迫られていき、壁へと追い詰められた。

猫は一気に飛びかかってくる。テラミルは腕をクロスし顔を隠す。すると、直径3メートルほどの緑色に輝く巨大なコンタクトレンズの様な形状をした盾が現れ、猫を止める。その緑色に輝く巨大な盾は蛙主が神石の力を引き出して出したものだった。

猫と盾の間で火花が散る。猫は盾の押し返そうとする力に喰らいつき前に進もうとする。

蛙主は辛そうな表情で盾を維持し続けていた。

テラミルは目を開き、クロスした腕の間から外の世界を見た。目

の前では光の火花が眩い光を放って猫の前進をとめているのが見えた。

ウサギ主は白猫に飛び乗り猫の首をつかみ、落とそうする。

流石にきついのか、猫は前進を止め、体を大きく振り、ウサギ主を払い落とそうとする。ウサギ主は喰らいつき耐えるが、体が横にすべり、脚が地面につくがそれでも、腕を首から離そうとしない。

黒猫は白猫の腕に噛み付いた。白猫は黒猫を放そうと、腕を振る。黒猫は簡単に持ち上がるが噛むのを止めようとしなない。

「魔法少女よ。ひとまず隠れるぞ。」

「ええええ。逃げるんですか？」

「そうとも言つ、ひとまず、作戦タイムじゃ。」

そう言つて、グラランドまで移動し、手洗い場の裏に体を隠した。

「どうします？ 蛙主。」

「ほつとくというのはどうじゃ？」

「駄目ですよ。あんなのを街に放つたら、何人の死者がでるかかわつたもんじゃありません。」

「いい作戦だと思ふんだがのう。どうせ、猫は元々長くは戦えん。しかも、あれだけの力を使つておる。肉体の破綻はかなり早いと見るんじゃが。」

「では、破綻するまで、足止めするしかないのでは？」

「無理な気もするが、仕方ないのう。」

テラミルは立ち上がり、水飲み場から体を出し、グラランドの中央へと移動する。ウサギ主と黒猫を振り切つた白猫がグラランドに現れ、二人に向かつてとびかかつてくる。

蛙主は巨大な緑に輝くシールドを展開して、猫の攻撃を防ぐ。

猫は構わず前に進んでくる。

「駄目か？」

蛙主はあきらめモードになる。

「何を弱気な。」

蛙主のシールドが一気に弱くなる。

テラミルは体を横に振り、猫の攻撃をかわした、そして、猫のわき腹に触れ、一気に精神吸収をかけた。

白猫は激しくもだえたため、テラミルは飛ばされる。自動的に発動した球体シールドのため、蛙主が頭から弾き飛ばされる。

「蛙主。」

蛙主は地面に何とか着地する。

「わしのことは気にするな。それより、かなり利いているぞ。」

「はい」

テラミルは起き上がり白猫を中心に反時計回りで体を移動させ、白猫に近づき、手を触れ精神吸収をかける。

猫は飛びのき距離をとった。

『確かに利いている。』

テラミルが飛び掛ろうとした瞬間だった。

白猫の体がじよじよに薄くなりだした。彼女の体はじよじよに小さくなり、横に倒れ動かなくなる。そして、完全に存在が消えた。

5 話始め

夜の学校のグラウンドの中央で白の猫は消えた。

それを見て呆然としているテラミルのもとに蛙主が近づいてきた。

「すまんかったな。最初の時にお前さんでなくワシが神石を掴んで置けば、お前さんに化け物殺しをさせずにすんだのに。」

「いいえ、私も浅はかでした。神石の危険性は頭では理解していたつもりでしたが、心のどこかで自分には関係ないと思ってたんだと思います。」

「浅はかだったのはワシも同じじゃて。ワシはまだまだだのう。」

「蛙主もそう思うことがあるんですね。それより、怪我をしてますよ?」

「ワシは自分でやる。それより、あつちのウサギと猫を治してやれ。やつ等の方が大怪我している。」

ウサギ主と傷だらけの黒猫はこちらに向かいゆっくりと歩いてくる。擦り傷や引っかき傷で全身の毛に血が染み込んでいる。

「すまん。魔法少女よ。ワシ等がもう少し頑張れたらよかったのだが。」

「いいえ。私が一番致命的なミスをしましたから。多分、ミスをした私への罰なんでしょう。それより、私の魔法で傷口を塞ぎますので、そこに座ってください。」

二人は座り込む。

ウサギ主は蛙主が担当し、傷だらけの黒猫はテラミルが担当する。

「ありがとうございます。魔法少女様。それより、あなた様の手を下さなくても、ミスを犯さなくても、あの猫は殺さざるを得なかったのか、それが我々だったのか、あなた様だったのかの違いがある

っただけで結果は同じだった事は忘れないください。」

「嫌な事をいいますね。」

「そうですか？そう聞こえたのでしたら申し訳ありません。」

二人の治療中にふとつちよの三毛猫がやって来る。

「おわったんだぎゃか？」

「終わりました。」

傷だらけの黒猫はそう答える。

「そりゃ、良かった。で、あのいけすかんメスの白猫はどぎゃんしたとね。」

「神石の力で、暴れた後、肉体的破綻が起こり存在が消滅しました。」

「そうかね。あん猫は好かんかったけど、消えたとなると淋しかね。で、神石はどこかね？」

「蛙主が持ってます。」

「ほれ」

蛙主は光を失った白い珠を三毛猫に投げる。三毛猫は珠を両前足でつかみ確認する。

「ちよっと、ちいさくなってるじゃあせんか？」

「すまん。神石で暴走した猫を止めるため、少々使ってしまった。」

三毛猫は首輪についている巾着袋にしまう。

「しかたにゃあねええ。」

治療が終わり、解散になる。

美由と蛙主は一緒に歩いていく。

「それにしても、私、神石を、あれだけ吸収して良く無事でしたね。」

「そうじゃなああ。」

「どうしてでしょうね。」

「さあなあ。」

「? どうしたんですか?何かノリが悪いですけど。」

「イヤな、お前さんの家の前で神石の探知を行った時、魔法少女の力の放出が邪魔だといったじゃろ。」

「はい。言いましたけど。」

「神石を感知する事になって初めて気がついたんじゃが、魔法少女の力の放出は神石の波動と似ておる。」

「はい。で、それで?」

「それだけじゃ。後はわからん。」

「そうなんですか。神石の力を吸収して大丈夫だったのも、一時的にパワーアップして体に負担が無かったのも、そこら辺が関係してるんですかね?」

「かもしれんなああ。」

「魔法少女って何なんですかねえ。有るから使っていますけど、本当の所は何も分って無い。化け物を退治するには目立ちすぎるし、何より化け物に対抗できる程、強くない。」

「さあなああ。存在が強ければ、存在が弱いものにダメージを与え難いし、その逆も同じで、存在の強弱の差でダメージの与え難さに変化するが、魔法少女はどの存在の強さにも似た様な力で介入できるが、ダメージもそのまま食らうからなああ。化け物との戦闘に向いているのか考えるとかなり疑問じゃの。でも、あの精神吸収はかなり強力な武器になりそうじゃな。」

「魔法少女の最大の武器は、パンチでもキックでもなく、触れるですか。正義の味方っぽくないですね。」

テスト三日目の朝

朝になった。テスト三日目が始まる。

美由は思いつめた顔をして歩いていった。

昨日の夜の化け物殺しのことが重い影を落としていた。

こんな顔は見られたくないので、交通事故にあう危険性を無視して、最大限に自分の存在を下げている。流石にここまで存在を弱めると、自分に興味がある人でも、中々気づかない。

ただ、朋は別だった。

「美由せんぱーい。」

そう言いながら、テケテケ走ってくる。

美由は朋の顔を見るが、顔を伏せた。

今、一番、自分の顔を見せたく無い相手が朋だった。

だけど、彼女は存在が薄いモノを見る事に関しては目が良い。自分の存在を最大限に下げても見つかってしまう。皮肉なものだと、美由は思った。

朋は美由の顔をのぞきこんだ。

『今の自分の顔を見ないで欲しいな。』

「美由先輩どうしたんですか？顔が暗いです。何かあったんですか？」

『今はほつといて欲しいけど、でも、逃げられないんだよね。受け入れ無いと駄目だ。戦いになれば弱い処だけを相手は攻め立ててくる。多分、今、朋ちゃんに会った事は不運なのだけど、受け入れないと先に進めないという神様のメッセージとっておこう。』

朋は心配そうな顔で美由を見つめた。

「朋ちゃんにはかなわないな。」

美由は笑顔を無理につくる。

「昨日の夜ね戦いがあった、初めて化け物が死ぬ処を見たの。昨日はそんなにシヨックじゃなかったんだけど、朝目覚めて、冷静に

思い返してみたら段々とね。」

「あー。何と言っていていいか分からないです。」
朋も暗い顔になった。美由は朋の頭を撫でる。

「朋ちゃんが、暗くなる事は無いよ。私のミスでそうだったんだから。」

「美由先輩でもミスをするんですね。」

「ミス何て、しょっちゅうだよ。というより、私はミスが多い方だから。ただ、昨日のミスは正直辛かった。ああゆうミスを犯さない様に、もっと成長しないと。」

「はい。」

「今日は暗い顔してたから、正直朋ちゃんには会いたくなかったんだ。」

「えー。私じゃ頼りになりませんか？」

「そういう事じゃないんだけど、でも、朋ちゃんに会えてよかったよ。前に進むしかないって気づけたし。」

「うー。良くわかりません。」

「いいのいいの。朋ちゃんはそれで。」

美由は自分の存在を元に戻し、一緒に学校に向かった。
そこへ加奈が走ってやってくる。

「美由先輩。朋ちゃん。おはよう。」

加奈は息をきらせていた。

「加奈ちゃんおはよう。」

「はい、おはよう様。」

加奈は息を整え、いじわるそうな顔で美由の顔を見る。

「美由先輩。噂聞いてます？」

「噂？」

美由の脳裏に色々な事がよぎる。

『まさか、魔法少女の事が噂に……。』

「い、いいえ。知らないけど。」

「そうですね、あの、須王寺麗菜おねえ様の事なんですけど。」

『ほつ。須王寺さんの事か、良かった。良かった。』

「須王寺さんが、何か？」

美由は気が楽になり、笑顔でそう聞いた。

「美由先輩がおねえ様になる事に前向きな考えを持ってて、美由先輩をライバル視しているらしいという噂が流れていて。」

『安心したのが馬鹿だった。これは、これでかなり問題ある噂だ。確かに彼女はライバル宣言をしたし、私におねえ様になる事を楽しみにしているとか言っていたが、あれは、お嬢様ジョークだしなあ。』

「いい？加奈ちゃん。私と須王寺さんとは、私がすっばんで、彼女は月なの。まさしく月とすっばん。そんな彼女が、私をライバル視するはずが無いでしょ。」

「そうですね？成績と言い、人気と言い、運動能力といい、結構良い勝負をされているような。」

「そんな事ないよ。成績は彼女は学年5番だし、私は9〜13番の間をウロウロしているし、それに、自分でいうのも何だけど、私はそんな人気なんて無いよ。」

「そうですね？」

その時、後輩女子3人が「桜間おねえ様、おはようございます。」と、挨拶をした。

『何て、タイミングの悪い。』

美由は顔をひきつらせながら、「ごきげんよう」と挨拶を返した。

「ほら、結構人気ありますって。」

「彼女達は面白がっているだけだと思っなあ……。」

美由はたどたどしく答える。

「美由先輩には魅力があります。」

朋が真剣なまなざしでそう言い放つ。

「朋ちゃんまでええ。良い？加奈ちゃん。私は彼女のライバルになれるほどは優秀じゃないし、おねえ様と呼ばれるのも実はイヤ

なの。それに自分の事で手一杯でとてもそんな大役が務まるとは思えないんだよね。」

「残念だなあ。聖セイントエルナール学院のお嬢様でない、王子様のおねえ様というのも面白いのに。」

「あははは・・・。」

美由は乾いた笑い声を出す。

「ああ、それと美由先輩、噂で聖セイントエルナール学院のお嬢様方が、あまり良い思いをしてないそうですよ。一応気をつけた方が良いでしょう。」

「気をつけろと言われましてもねええ。」

テスト四日目（最終日）朋、カメと出会う。

テストは三日目が過ぎ、四日目になり終わりを迎えた。

地獄のテスト期間が終わったのである。

最終日で明日はテストは無いのだが、先生の採点のため午後は休みだった。

朋は美由を追いかけるために、素早く教室を出て校門に向かった。珍しく美由はまだ来てないらしく、朋は校門前で待つ事にする。

周囲を見ると、不思議なモノがゆっくりと歩いているのに気づく。それはカメだった。

身長50cm程のカメだった。

朋は座りこみ、カメの頭をツンツンつつく。

「こりゃ。何をする。このいたずらっ子め。」

「わあ。」

カメがしゃべったので、思わず転んで尻餅をついた。

「カメさんがしゃべった。」

校門から何人かの生徒が出てくる。校門で尻餅をついている朋に冷たい視線が刺さる。どうも、みんなカメが見えて無いらしい。

「そののいたずらっ子。私が見えるのか？」

朋は体制を起こし、カメを見下ろす。

「ぶー。いたずらっ子では無いです。」

「カメを見て、いきなり頭をつつくだけで十分だ。浦島太郎をしらんのか？」

「それくらい知ってます。あ、私、あのカメをいじめた子たちと同じなのか。ごめんなさい。」

「わかればよろしい。ところで、道に迷ったんだが、ここら辺にでっかいウサギはいないか？」

「ウサギさん？見たことあるよ。」

「何処にいる。」

「しらな―い。でも、美由先輩なら知ってるかも。」

「おお。」

「待つてて、もう直ぐ来ると思うから。」

しばらく待つと、美由が校門を通る。

それを見た朋は、手をあげる。

「美由せんぱ―い。」

そう言つてカメを両手で持ち上げ。

「カメさん拾つた。」

美由はカメを見る。どうみても化け物だった。

「朋ちゃん。何でも拾つちゃ駄目でしょう。」

「あ―怒られた。」

亀の依頼

校門の前では、帰宅する生徒が続々と出てくる。

そんな中、不思議な行動をしながら独り言を言っている朋は当然みんなから不思議そうな目で見られているし、その不思議ちゃんに声をかけられた美由は当然、目立っている。

『目立ってるなああ。』

「朋ちゃん、ひとまずここじゃ目立つから。目立たないところに行こうか。」

そう言っつて、学校にまた入り、裏庭に向かう。

朋は、亀の甲羅を両手でつかみながら強引にカバンを握って移動する。

「駄目でしょ朋ちゃん。化け物にかかわっちゃ。」

「ごめんなさいです。」

「で、このカメは何？」

「この前の夜に会った、でっかいウサギさんに会いたいそうです。」

美由は膝を折って、朋の懐にいるカメと視線を合わせる。

「あなたはウサギ主にあいたいんですか？」

「ウサギ主？ああ、やつは主になったのか。何処にいるか、教えてもらっただけでいいんだが。」

美由は裏庭のフェンスの向こうにある山を指さす。

「あの山の上の方に棲んでいますよ。」

「何、あんな遠くか。」

「はい。私の足でここからだと急いで行っつて1時間ぐらいかかりますけど、でも、ウサギ主が住んでいるところは道が無いので斜面をずつと登る事になりますよ?」

「私の足だと、何日かかるだろうか？」

「カメの足でつけますかね？結構な斜面を登る事になるので、
朋が突然、手を上げた。」

「私、連れていきます。」

「朋ちゃん道わからないでしょ。」

「あ、そうか。だったら美由先輩も一緒にいきましょう。私、ウサギさんにも会いたいです。」

「まあ、朋ちゃんの足でも行けない事は無いと思うけど、大変だよ？」

「頑張ります。」

朋はカメの甲羅を握り締め、強いまなざしで美由を見た。

「うーん。あんまり、賛成できないんだけどなあ。ひとまず、カメさん何しにウサギ主に会いに行くつもりなの？」

「それは、果たし状を渡しに行くのだ。ウサギとカメどちらが速いか競争するのだ。」

「なんです？その昔話ウサギとカメみたいな話。」

「私とあのウサギとは因縁のライバルなのだ。数年前、ひよっこり海岸に来ていたヤツと砂浜で競争して私は負けたのだ。私は再戦を心に誓い、修行を積み晴れて、ヤツとの勝負をつけに行くのだ。」

「えーと。ウサギとカメって確か、ウサギが怠けて勝負の途中で寝たからウサギが負けたんですよね？」

「そうだ、私もヤツに負る前まで何匹かのウサギの化け物と戦ってきたのだ。やつ等がサボタージユして寝ている隙に勝ってきたのだ。だが、ヤツには負けた何故だ。」

「歩みが遅いからでは？その前にウサギ主はウサギらしくないので、勝負となると全力を尽くすタイプですよ。」

「それでも戦うのだ。私にとって、あの敗北はそれ程までに意味があるのだ。」

「がんばりましょうカメさん。」

朋はカメを力強く応援した。

「おしよ。」

美由は、とてつもなく無駄なことをしている気分になった。

ハイキングデート

美由は乗り気では無かったし、朋を化け物に関わらせたく無かったのだが、カメと朋の熱い情熱に押され一緒にウサギ主の所まで行く事にした。

1時間後に動きやすくて、汚して構わない服に着替えて、再度、学校に集合する事になった。

朋はウチに帰ってくる。

今は木曜の昼過ぎなので、両親はまだ帰ってきてない。

美由は紺のジーパンと白の丸ふち部分が黒のTシャツにピンクのパーカーに蛍光色で水色のリュックサックを背負って、書置きを書いていた。

『仲良くしている女性の先輩と、デートに行つて来ます。少し遅くなるかも』

「よし。」

そう言つて、ペンを置き、ルンルン気分で学校へと向かった。

学校に着くと、美由とカメが待つていた。

美由はいつもウサギ主に会いに行く、白のウィンドブレーカーではなく、黒のジーパンとチエツクの襟シャツという格好だった。美由もリュックを背負つてきている。

「朋ちゃんお帰り。」

「先輩待ちました？」

「私も今きたところ。」

朋はリュックを下ろし、チャックを開けカメに中を見せる。

「カメさん、この中に入って。でも、入るかな？」

「大丈夫でしょ、多分。でも、自分じゃ入れないから、詰め込ん

「してください。」

「はい。」

朋はカメの甲羅を両手で掴み、リュックに入れようとするが上手く入らない。見かねた美由はリュックの口を指で大きく開き、何とかカメを押し込む事に成功する。

カメはリュックから顔を出す。

「悪くはないですね。」

朋はカメの入ったリュックを背負う。

小さな子がカメの入ったリュックを背負っている姿はなんとなく微笑ましかった。

「さて、ウサギさんのところに行きましょう。」

「はい、行きましょう。」

美由は朋に優しく微笑んだ。

ひとまず、持久走大会で走った道を進む。美由がいつも使っているコースより大分、遠回りになるが、危険性が低いのでこっちで行く事にした。

「今日は美由先輩とデートなのです。」

「デートって呼べるのかな？女同士だし、カメもいるし。結構、

険しい道も通るし。」

「美由先輩は素敵なので、デートでいいんです。」

『うーん何か違う気もするが。』

「私の最初のデートなんですから、楽しく行きましょう。」

「はい、はい、わかりました。」

「美由先輩、ハイは一回ですよ。」

「そうだね。」

カメが話を始める。

「先ほどから、不思議に思ってたんですが？」

「はい、なんでしょう？」

「二人は、化け物を見て、何でそんなに普通でいられるんですか？」

「ああ、何と言うか……。この通り、普通に化け物が見れるし、何人か知り合いもいますし……。」

美由が魔法少女の事を隠しながら話していると、朋が割り込む

「カメさん。私たちは魔法少女なんだよ。」

「こら、朋ちゃん。不用意に言わないの。」

「あうー。怒られた。」

「もう。」

美由は困った顔になった。

「良くは分かりませんが、魔法少女なんですね。」

「は、はい。」

美由は抵抗感を覚えつつも、自分達が魔法少女である事を認めた。

「まあ、そんな事より、あのウサギに会いに行くのを何故、手伝ってくれるのでしょうか？」

「私は……。まあ、朋ちゃんが連れてくと強く訴えていたの
でとしか……。」

「何でかと言えば、カメさんが可愛いからです。怖い幽霊さんと
かだと駄目ですけど。」

「可愛いといわれたのは初めてですね。」

「後、もう一度、ウサギさんに会ってみたかったです。私、楽
しみなのです。」

「その元気が続けばいいけどね。」

「頑張ります。」

家も無くなり、左右を完全に杉林で囲まれた山道を歩いている
と、朋とカメは童話を歌い始めた。

歌っているのは、「ウサギとカメ」である。

『何故その歌を、カメと一緒に……。』

最初は朋も足取りが軽かったが、流石に1時間半も山道を歩いているとバテてくる。

「美由先輩まだですか？」

「まだ、一時間ぐらいかかるよ。しかもこれから、道なき道を歩く事になるけど。」

「ええー。」

美由はアスファルトにへたり込む。

「だから、言ったのに。休憩しようか。」

「うん。」

美由と朋はリュックを下ろす。

美由は自分のリュックから、水筒を取り出し、水を飲んだ後、また水を注ぎ、朋にコップを差し出す。

「朋ちゃんどうぞ。」

朋は、コップを両手で受け取る。

「美由先輩と、間接キスなのです。」

そういって、コップの水を飲んだ。

「すいません。私にも下さい。」

カメはリュックの中からそう言った。

「はいはい。どうぞ。」

そう言って、コップに水を注ぎ、カメに水を飲ませた。

休憩

左右を杉林で囲まれた山道の隅っこでカメと二人の女子高生は休憩していた。

「美由先輩、それにしてもタフですね。私はこんなにへばっているのに、汗ひとつかいてない。」

「私は鍛えてるからね。いつもここら辺走っているし。」

「いいなあ。私はすぐへばっちゃうから、毎日走るなんて考えられないです。」

美由は朋をジーっと見つめる。

「私も中学校の頃までは、すぐ、へばっちゃてたよ。」

「そうなんですか？」

「そうそう、魔法少女になってから、毎日運動するようになったけど。最初の頃はさっぱり。」

「意外です。美由先輩も運動が出来ない頃があったなんて。」

「そんなこと無いよ。それより、朋ちゃんぐらい健康な体なら、ちゃんと鍛えればそこそこ走れる様になると思うよ。」

「えー。私、すぐ息があがっちゃうから、幾ら頑張っても無理です。」

「コツがあるんだよ。朋ちゃん一生懸命走ろうとするでしょ？」

「はい。」

「そしたら、すぐ息があがっちゃうでしょ。頭が重くなって、肩が痛くなってくるでしょ。」

「はい、その通りです。」

「それじゃあ、ずっと続けたいとは思わないでしょ？最初はね。歩くぐらいのペースで、ゆっくりとちよっとの時間走るの。そしてちよっと休んで、またちよっとの時間、ゆっくりと走る。これを10分ぐらいやるのね。」

「それでは、全然鍛えられないような。」

「そんな事無いよ。全く運動をしてない人が歩くぐらいのペースで走ったら結構きついもんだよ。」

「そうなんですか？」

「そんなもんです。それを毎日続けて、一週間ぐらいすれば慣れると思うよ。そこに慣れたら次のステップに進むんだけど、まあ、やらないだろうからこれ以上は言わないけど。」

「あー。」

「まあ、大事なのは、毎日、続ける事だよ。肺の心肺機能はいきなりは上がらないし、しかも、結構落ちやすの。2・3日休むだけで結構落ちるし。だから、毎日、徐々に徐々に上げていかないと駄目だって事を頭に入れとか無いと、ある程度のレベルには行けないよ。」

「ある程度、走れる様になるには、毎日、走る訓練が必要なんですよ。」

「そういう事、そして次に重要なのは無理はしない事。」

「わかりました。ちょっと、頑張ってみます。」

美由はカメの方を向く。

「ところで、カメさん。ウサギ主とかけっこをしても絶望的だと分かっていて何故、挑むんですか？」

「遅いモノにも意地があるんですよ。速いモノにはわからない劣等感というものが。だから、速いモノを倒したい。この熱意がわからないとは。」

「そうですね。美由先輩は足が速いからわからないんです。私も足が遅いので劣等感でいっぱい、足が遅いのをいじられると、いつか見返してやりたいと思うもんです。」

「朋ちゃんも努力すれば、そこそこ早くなると思うけど、カメさんはどうかな……。」

美由がそう言った瞬間、お尻を何かが触ってきた。

「きゃあ。」

美由は飛び跳ね、その場から素早く2m程離れた。

そこにいたのは蛙主だった。

「よう。魔法少女のお二人。」

蛙主は片手をあげて、そう言った。

「蛙主……。」

「あ、カエルさんだ。」

「何で、何も言わずに近づいてきて、私のお尻を触るんですか？」

「いや、珍しくヒップラインの出ているものを着ておるから、つ

い。

「ついじゃないでしょ。ついじゃ。セクハラはやめてください。」

「ところで、お前さん方二人、こんなところで何しとる？ここら辺を通るには随分時間が早いが。」

朋はリュックを引っ張りよせ、蛙主にカメを見せる。

「このカメさんが、ウサギさんのところに行きたいそうなので、連れて行つてるところなんです。」

「ほう。カメさんとやら、こんにちはじゃ。ワシは三上の蛙主というもんじゃ。」

「これはこれは、私は海ガメの化け物のカメ太と申します。」

「カメ太さんとやら、何しにウサギの処に行こうとしているのじゃ？海ガメが山奥まで来るとはよっぽどな事情があるとお見受けするが。」

「はい、3年ほど前に、ウサギが海にやってきて、砂浜で競争をしたんですよ。そこで、私は負けてしましまして、今日、その雪辱をはらそうと来たわけです。」

「なるほどなあ。それは、大変じゃったろう。」

「はい。ですが、親切なこの魔法少女？でしっけ？のお二人に助けていただいて、何とかここまで。」

「ほうほう。で、これからウサギのところに行くんじゃろ？随分あるが、ワシが呼び出そうか？」

「え？」

美由が驚きの声をあげる。

「蛙主つて、ウサギ主と距離が離れていても、連絡がとれるんですか？」

「とれるぞい。と言うか、お前さんがいつもワシを呼び出しているのにカエルをつかうじゃろ。あれをちょっと、応用すれば呼びだせん事はないぞ。」

ウサギ主の呼び出し。

蛙主がカエルの様にゲコゲコ鳴いている。

普段、美由も朋も普通に人間の言葉を使っている蛙主しか見てないので、普通にゲコゲコ鳴いているのは新鮮な光景だった。

「カエルさんって、カエルの様に鳴けるんですね。」

「私も蛙主が鳴く姿は、初めて見るかも。」

蛙主は鳴くのを止め、女子高生二人を見る。

「こら、ワシを何だと思っておるんじや。カエルの化け物じゃぞ。鳴けて当然じや。」

そういつて、また、鳴きはじめた。

どこから、ともなく、他のカエルの鳴き声が聞こえてくる。

「さて、一応、メッセージは送ったが、ウサギのヤツ、メッセージを受け取れるかのう？あやつ、昼は寝ておるから。」

「あれだけ、自信満々に言っ置いて、今更、そう言う事いいますか？」

美由はあきれた顔で、カエル主の発言につっこむ。

「すっかり忘れとった。昼は起きてても機嫌も悪いからのう。」

「やつぱり、道無き道を歩いて行った方が確実ですかね？」

「まあ、10分程待て、メッセージを受け取ったらなら来るじやろう。もし来なかつたら、ワシが瞬間移動で呼びに行つてやる。」

「カエルさんの必殺技ワープですね。」

朋がそう言う。

カエルの鳴き声が聞こえて来た。

蛙主は耳をすませて、その泣き声を聞く。

「ふむ、起きてはいるが、かなり機嫌が悪いらしく、用事があるなら直接来いと言っているそうじや。」

「ええ。これから道が無いところを歩くんですか？」
朋がブーたれた。

「ワシが行って来よう。」

蛙主は、そう言った後、魔法を唱え消えた。

「大丈夫なんですかね？」

美由が疑問の声を上げる。

呼び出して拒否の姿勢を一度、出した人を動かすのは中々難しい。美由は他人に対してあきらめが早いので、一度、拒否されたら、少しは説得するがそれでも動かない場合は、後は自分で動いて問題を解決する事になっている。正直、時間の無駄だし、ストレスが溜まるし、トラブルの元になるからだ。

ウサギ主が機嫌が悪いのだから、カメを自分が背負って直接連れて行った方が早いだろうと思っていた。

5分程すると、蛙主が帰ってくる。

「ウサギのヤツ、来るそうじゃ。魔法少女のちびっ子の方がお前さんに会いたがっていると、言ったら、渋々飲んだぞい。」

『流石は、朋ちゃん。可愛い女の子効果は凄いなあ。私だったら、絶対、直接来いと言われるな。』

美由は朋の実力を目の当たりにし、ちょっと感動する。

それから5分程過ぎると、ウサギ主が、杉林の中から現れた。

挑戦状

ウサギ主はアスファルトにどつてと座った。

朋はウサギ主に近づき、頭を下げた。

「こんにちは、ウサギさん。この前の夜は、助けて貰ったのにあいさつも出来ず。」

彼女は夜遅く蛙主に巻き込まれ、彼女のウチの近くの公園で、茶トラ猫の暴走でウサギ主に助けられた事を言っていた。

「嬢ちゃん気にする事は無い。あれは、そのカエルが悪い。」

朋は首を上下にして3mを超えるウサギをジーンと見る。

「ウサギさん、触ってもいいですか？」

「む？いいぞ。」

その言葉を聞き、朋はウサギ主をちよんとつつく。

毛が豊富なので柔らかい。

もっと、強めに押してみると、下に硬いモノがある事に気づく。

それはウサギ主の筋肉だった。

朋はウサギ主に抱きついて見る。

少し変なおいがするが、そこまで嫌な臭いではない。でも、さわり心地は良くなかった。

朋は放れて言う。

「ウサギさん。何かゴツゴツして、さわり心地がイマイチ。」

「む、硬いのはしょうがないのだがなあ。」

ウサギ主は立ち上がり、筋肉が膨れ上がるポーキングを見せる。

「わしは、体を鍛えるのが趣味でな。この豊富な毛から見ても分かる筋肉美を出す事に全力を傾けておるのじゃ。」

「ええ。せっかく大きくて可愛いのに、もったいないです。」

ウサギ主がガツクリとする。

「そうか？」

美由は朋に弄もてあそばれるウサギ主を見て思った。あの硬派なウサギ主

もちびつ子少女には弱いんだなと。

「それよりウサギさん。」

そう言つて、朋は自分の水色で蛍光色のリュックサックを引つ張り寄せる。

リュックから顔だけを覗かせているカメをウサギ主に見せた。

「このカメさんが、ウサギさんに用事があるそうです。」

ウサギ主はリュックから顔を出しているカメをじっくりと眺める。

「むー。お主は確か、数年前、戦ったカメだな？」

「そうだ。3年前に砂浜のかけつこで負けたあのカメだ。」

カメはそう答えた。

「おお、やはりあの時、砂浜で戦ったカメか。そのカメが今更何の用だ？」

「お前を負かすために、この3年間それだけを考え修行してきた勝負しろ。」

「む？勝負なら是非も無い。では、早速、この人がつくり出した道で勝負だ。」

「待て待て。」

いきなり勝負を挑んでくるウサギ主にカメは制止をかける。

「今日は果たし状を貴様に渡しに来ただけだ。第一、海ガメたる自分がこんな山奥で勝負して勝てるわけが無いだろう。勝負は今度の日曜。場所は前にお主と戦った砂浜だ。」

「よかるう。発汗機能が本来は無いウサギが発汗機能を得たらどんなに凄いか教えてやる。」

ハイキングの帰り

美由と朋は来た山道を下っていた。もちろん朋はカメを自分のリュックサックに入れて背負っている。

流石に下り坂なので朋の足取りも軽い。

「美由せんぱい。帰りは楽ですねえ。」

「そうだねえ。行きは登り坂ばかりだったから。」

朋は走りだす。

「朋ちゃんあぶ・・・。」

「見て見て、こんなに足が軽い・・・。」

朋はそう言つて美由の方を振り向いたとたん、足を絡まらせコケた。

美由は朋に走りよる。

朋は上手く倒れる事が出来たらしく、今回は怪我はなさそうだった。

「もう、朋ちゃんたら。」

美由は前かがみになり、朋に手を差し伸べる。

朋は美由の手を握り起き上がった。

「えへへ、コケちゃった。」

「下り坂は、コケやすいし、走ると足の負担が大きくなるから、気をつけないと駄目ですよ。」

「はい。」

カメが話しに割り込む。

「しっかりとしてくださいよ。私を背負っている事も忘れないでください。私動くことができないんです。」

「カメさんごめんね。」

二人は歩きはじめる。

「ところで、美由先輩。私が知っている化け物さん達って、普通の動物がただ存在が薄くなっただけの方々ばかりなのよな。」

美由は自分の記憶を振り返る。

「私は2度くらい、如何にも妖怪さんみたいなのを見たことがあるけど、滅多にみないね。」

「へええ、如何にも妖怪さんみたいな化け物さんもないわけじゃないんですね。」

カメが割って入る。

「私が住んでいる海とかは、妖怪みたな化け物が結構いますよ。でも、普通に歳をとって化け物化している方が多いですけどね。」

「いっぱいいるんだ。そだ、幽霊とか神様とかもいるんですか？」

「幽霊は見た事ないなあ。神様は結構いるけど。ほら、蛙主もウサギ主も神様だし。」

「カエルさん、神様なんですか？」

「一応、さつきまで居た処よりもう少し奥にいった処に神社があって、蛙主は祀られているんだけど。ウサギ主もこの山の上の方に祀られているのよ。」

「へええ。」

「本当は彼等を数える時はひと柱はしらふた柱と数えなきゃいけないんだけど、どうしても、一匹・二匹って数えちゃうよね。」

「えっと、神社に祀りさえすれば、神様になるんですか？」

「そうよ。朋ちゃんだって、神棚を家に置いて自分の名前が書かれたお札を入れて、祀る人がいれば生きた状態で神様になれるよ。他の人が認めるかどうかは別の問題だけど。」

「何か、随分簡単に神様になれるんですね。」

「まああ。趣味で祀る分にはねええ。正式な神社として公に神様と認められるには、神職の資格で正階以上の資格を持っている人に祀ってもらって、神社本庁に認められる必要があるけどね。」

「ちゃんとするとなると、何か大変そうですね。」

「自分も早く祀られたいものです。」

そうカメが言った。

学校へ着く。別に学校に用事があつたからではなく。山道から街に戻るには学校を通る必要があつたからだつた。時はもう夕方になつていた。

朋はカメに語りかける。

「カメさん、ここで、お別れだね。」

朋はカメとここで会つたので分かれるのは当然、学校前だと思つていた。

「ええ。海まで連れつてくれないんですか？私、海ガメ何で、地上を歩くの大変なんですけど。」

「ワガママなカメですね。ここまで歩いて来たんだから、帰れるでしょ。」

美由がカメに怒りの表情を見せる。

「私の足では二日かかります。対決に間に合わないかもしれません。」

「しょうがないなあ。朋ちゃんを遅く帰すわけにもいかないし。朋ちゃんリュック貸して。私が海まで連れてくから。」

「でも美由先輩も、リュックもってますよ。」

「まあ、私のは荷物が少ないから大丈夫だつて。手で持るし。」

「わかりました。」

朋はカメ入りのリュックを下ろし、美由に渡した。

「じゃあ。朋ちゃん気をつけて帰つてね。」

「はい。また明日学校です。」

そう言つて朋は帰つていく。

「さて、いきますか。カメさんかなり揺れますけど気をつけてくださいね。」

美由は自分の存在を薄め、海へ向かつて走り始めた。

そして、無事に海岸までカメを送り届けた。

テスト返却

翌日になった。今日は金曜日である。

本日から何日かかけてテストが帰ってくる。

テストが終わったので、登校中もギスギス感が無く、いつもの華やかな感じだった。

みんな心に余裕ができたので、挨拶も活発に行われる様になる。当然、テスト期間中はあまり挨拶をされなかった美由も「おねえ様」として、後輩にいっぱい挨拶される。今日も引きつった顔をしながら笑顔で返事を返していた。

朋は今日の返却分は赤点では無かったが、赤点に近かった。

美由は予想通り点数がいつもより15点程落ちていた。

「ふう。分かっていたとは言え、流石にこの現実にはヘビーだな。」
美由はテストを返してもらってそう思った。

ただ、点数が落ちていたのは美由だけでない。ほとんどの生徒が点数を落としていた。彼女はまだマシな方で、クラスの半分ほどがかなり落としていた。

3年になり問題レベルが一気上がったため、難しい問題に強い本当に勉強をしてきた人達だけが、成績を落とさずにすんだのだった。ただ、今回のテストは赤点はほとんどいなかった。なぜなら、赤点ラインが10点台だったからだ。この学校では平均点数が60点を上回っている場合30点未満が赤点で、それ以下の場合平均点の半分が赤点ラインになる。

問題を難しくすぎたために、大幅に平均点数が下がったため赤

点の点数が下がってしまったのである。後に「中間テストの奇跡」として語られる事になる。

まあ、実際は、この学園の毎年の名物行事だったりもするのだが、この学校は進学校なので、生徒に実力不足を知らしめるために、あえて3年の一学期の中間テストから問題をかなり難しくして、生徒に勉強をしなければならぬという意識を植え付けるさせるのだ。そのため、赤点ラインが酷く下がるのが名物になっていた。

テストの答え合わせで、先生が1時間で答え合わせをすませようとするので、答えだけを黒板に書いていき、おまけ程度に補足をつけるという事やってしまう。

先生の事情もわからなくもないが、問題レベルが上がっているの、考え方とか解法を説明してくれないと正直困ると美由は思った。

『この答えあわせのやり方では、身につかないではないか。』

昼休みになった朋は、いつもの三人と教室でお弁当を食べていた。「うー。あずさちゃん。何とか30点以上とれたから赤点じゃなかったけど、もう少して追試だったよ。」

あずさは朋の頭をポンポン叩く

「はいはい。もっと勉強しようね。」

「ぶー。冷たいのです。いいなあ、みんな。」

「こういうのは甘やかすと、本当に勉強しなくなるから冷たくします。」

「あうー。」

「朋ちゃんは部活やってないし、帰りも早いんだから、美由先輩の尻ばかり追いかけてないで、勉強しないと。」

「はい。」

朋は思い出す。そう言えば、テストが終わったら参考書の使い方を教えてくれると美由先輩が言っていた。後で、使い方を聞いて、

勉強しなくてはと思った。

朋と勉強

放課後になり美由はいつもの様にすばやく校門へと向かう。後ろから、朋がパタパタ走りながら追いかけてきた。

「美由先輩待つてください。」

「あ、朋ちゃん。いつもご苦労さま。」

二人は歩きはじめる。

「美由先輩、昨日のカメさんはあの後どうしました？」

「カメさんは無事に海に帰したよ。」

「よかったです。日曜日楽しみです。」

「朋ちゃん、かけっこ見に行くの？」

「はい、もちろんです。美由先輩も行くんですよ？」

「私は……。」

美由は行ってもしょうがないので、行かないでおこうと思っていた。

「もしかして、行かないつもりなんですか？行きましょうよ。」

「うーん。仕方ないなあ。一緒に行こうか。」

朋の残念そうな顔を見たら、とても断る事ができなかった。

「えへへ。今度は海でデートです。」

「雨ふらなきやいいけどね。天気予報で雨になるようなこと言っ

てたから。」

「ママが言っていました、二日後の天気予報が当たる確立は50%

ぐらいだと。」

「うーん。もっと、ある気もするけど。」

「それと、ですね。美由先輩、この前の参考書の使い方を教えてほしいです。」

「ああ、テストが終わったからね。もしかして、やる気が出たの？」

「ぶー。実は今日帰って来たテストが赤点まじかったのです。」

赤点では無かったんですが、このままじゃやばいです。」

「あちゃー。」

「だから、教えて欲しいんです。」

「いいよ。今からでもいい?」

「え?いきなり、今からですか?」

「うん。というより、こういうのは後回しにしたら、二度とチャンスは来ないからね。」

「はい。どこでやりましょう?」

「私はどこでもいいんだけど、朋ちゃんのウチとかは?参考書はウチでしょ。」

「では、私のおうちでやりましょう。」

「私は一度カバンを置いて着替えて来るから。朋ちゃんのウチはあの猫と戦った公園近くの市営住宅だったよね。」

「はい。」

朋は自分のウチがある場所を美由に伝えた。

「では、朋ちゃん、家に帰って勉強の準備をして待っているのです。お菓子とか飲み物とかは用意しないように。」

「なんでですか?」

「サボる理由に使われるから。」

「あー。」

美由は着替え朋のウチにやってくる。成美矢の表札ですぐに朋の家はわかった。

押しベルを鳴らすと、すぐに朋が出てきた。

「よ。朋ちゃん。来たよ。」

「美由先輩あがってください。」

「ではおじやします。」

朋の勉強机に向かい朋を座らせる。白本4冊とノートが置かれている。

「まず、数?をひととおり、やって次に数Aやってその次に数B

をやつて、数？をやる順番でやつたほうがいいよ。と、言うわけで他の3冊はしまいなさい。」

「はい。」

そう言つて本棚にしまった。

「朋ちゃん、今から大事な事を教えるね。」

「なんですか？」

「勉強に一番邪魔なモノはね。実はプライドなの。」

「プライドですか？」

「そう、私立の有名進学校に入学した実力があるとか、思い込んでらまず負けだから。」

「はい」

「だから、自分は何も知らないと心に刻みなさい。」

「自分は何も知らない。」

「そう。まず、その覚悟をもたないと、勉強しても意味がないよ。私もそこそこのプライドがあつたから、それで何ヶ月も無駄にしたの。だから、自分は何も知らないことを認めるのが大事なの。」

「わかりました。」

美由は白本のページをめくり指差す。

「この赤字で難問と書いているのは今はやらなくていいから。本を一周してからやつたほうがいいよ。問題が解けないで止まるとやらなくなるから。最初は基礎的な概念をだけをpushさえて先とにかく進む事だけ考えて。まあ、でも、この白本の難問が解けないとウチの学校じゃ良い点とれないけどね。」

「はい、がんばるのです。」

「では、がんばりたまえ。」

美由はページを指し、ここのページを理解したら言つて、練習問題はやり方にコツがあるから一緒にやる。」

「はい」

「数式を見て、1段目と2段目の変化を見て、なぜ、こういう風に変化しているのかを考えてやつてみて。」

「いきます。」

「美由ちゃんそつちのちゃぶ台の方を借りるよ。私も勉強するんで。」

「どうぞ。」

美由はリュックから緑本数？を取り出し、勉強をはじめた。10分ほどして朋はが美由を呼ぶ。美由は立ち上がる。

「では、下の問題をやっていこう。えっと答えはこのページか。朋ちゃん。このページを握って。」

朋は美由が空けた答えのページを押さえる。

「一問やったら、即、答え合わせ。いい？」

「はい。」

朋は問題を解き始める。最初の問題はあっていた。

「二番目の問題は間違っていた。」

「あー不正解でした。」

「引つ掛け問題というほどでもないけど、 \cdot があるでしょ。これでここが変わるでしょ。」

「ああ、なるほど。」

「このまま第二問の答えが間違ってたさあ、次ってやったら、駄目なの。この問題に引つ掛け部分を良く理解しないといけないのね。だから、もう一回やってみて。」

今度は正解する。3問目に取り掛かる。また不正解だった。

「ほら、これはこうやるの。さっきとは別の引つ掛け部分があるんだよ。でも、懐かしいなあ。私も似た間違いをしたなあ。」

「へえ。」

「ほら、もう一度とく。」

「はいがんばる。でもめんどくさいですね。」

「そっだよー。」

今度は正解する。4問目にとりかかる。

「今度は、2番と3番の引つ掛けが同時に出てるでしょ。」

「こつこつ風に問題が出る毎に引つ掛けのレベルがあがっていく

から、1問1問答えを確認して、間違ったら、やり直して理由を
解していけないと問題が解けないようになってるのね。」

「わかりました。」

美由はこの後1時間ほど朋に勉強を教え、自分の家にかえって
いた。

日曜日早朝

美由は仰向けで寝ている。それが彼女のいつもの寝姿だった。

日曜日の朝5時ごろ。

柔らかいモノが美由の顔をピチピチと叩く。

『なんだろう？』

美由は不思議に思い、目を開けると、目の前に蛙の手があった。

『なに？』

「こら、魔法少女やつと起きたか。」

美由は起き上がり、目をこする。

「なんだ。蛙主か。……。」

美由は布団の中で後ずさりをする。

「な、な、何で蛙主がここにいますか？てか、女の子の部屋に勝手に上がりこんで、寝ている女子に何をしますか？」

「ほれ、ウサギとカメのかけっこ勝負に行くぞ。」

美由は外を見る。薄明かりが広がっていたいたが、まだ暗い。

「外は暗いじゃないですか……。」

美由は自分が口走った事に『つは』として時計を見る。5時15分だった。

「まだ5時ですけど……。」

「太陽は出とらんが、十分外は明るいぞ。」

『ポン・ポン』という大きなしずくが何かにあたる音が聞こえて

くる。どうも、少し雨が降っているらしい。

「雨が降っているじゃないですか？」

「何か問題でもあるのか？こんな快適な日に。」

「蛙は雨の中、動き回るのが好きでしょうが、人間は違います。

てか、雨の日にかけてっこをするはずが無いでしょ。」

「何を言っておる。ウサギのやつは何の問題もないと言っておるぞ。むしろ、決闘を先延ばしされる方が苦痛だと言っておる。」

「ん？もしかして、ウサギ主も来ているんですか？」

「もちろんじゃ。あやつはデカいから外で待っておる。」

『この二匹は、人の家で何をやってるんだ。』

「もしかして、今から行って、即、勝負するつもりなんですか？」

「もちろんじゃ。ウサギのやつは太陽が昇ると寝る時間じゃからなあ。早くすませて帰りたいそうじゃ。」

「あははは。」

美由は顔をひきつらせて、乾いた笑いをした。

『何て勝手な方々』

「だったら、私を呼びに来なくていいじゃないですか。」

「何をいつとるんじゃ。お主が審判をするに決まっておろう。」

「私、そんな話し、聞いてませんけど。」

「ええい、文句を言わずについてくればええんじゃ。」

『何て強引な話……。まあ、行く予定ではあつたけど……。』

あれ？』

「あ、朋ちゃんがかけっこ見たいって言ってましたけど。」

「何？魔法少女その2がか？それは困ったのう。」

「今の時間に彼女の家に行くわけにはいかないんですけどねええ。」

朋ちゃんのおうちは両親いるから起こすわけにもいかないし。」

「ワシが魔法少女その2のウチに行って、こっそりささやいてこ

ようか？」

「蛙主、朋ちゃんのウチ知らないでしょ。」

「お主が知っておろう。何か知っている口ぶりだったし。」

「はいはい。では、勝負が早朝になったんで、残念だがこのまま行くと伝言お願いしますね。では、着替えますので、出て行ってください。」

「このまま、お前さんの着替えを覗くから、このままでええじゃろ。」

美由は問答無用で蛙主を窓から外へとつまみだす。窓を開けた時ウサギ主が家の前で濡れて立っているのが見えた。美由はすばやく

着替えて外に出て、傘をさした。

ウサギ主に傘を差し出す。

「ウサギ主使いますか？」

「いらん、というか、さしても小さくて意味が無い。」

「それもそうですね。」

美由は傘を家の中に戻す。

美由が着替えている間に朋がかけっこを見たいという趣旨を蛙主が伝えていた。2柱と一人は朋のウチに向かった。

蛙主が物質透過ができるまで、存在を薄くして中に入り、寝ている朋を起こし、もう行くと告げる。バタバタと慌てる音が聞こえる。

『どうも、最悪の事態になったらしい。これでは呼びベルを鳴らすと変わらないではないか。』

10分ほどして、菓子パンをくわえながら、蛙主を頭に乗せた朋が扉を開けた。

「美由先輩おはようございます。」

「別に起きなくても良かったのに。」

「絶対に行くんです。」

朋の両親が美由の顔をのぞきこんだ。

「どうも。朝早くからすいません。まさか、こんなに早くなるとは思ってたなかったもんで。」

「いえいえ。話は聞いてますから。おきになさらずに。」

『明らかに不審がられてるよなあ。私。』

勝負開始前

二匹と女子高生二人は、雨の中、海岸へとやって来た。

海岸線沿って、車2台が何とか通れそうなアスファルトの道路が続いており、その道に沿って1m半程の防波堤も続いていた。道路の反対側には灰色の砂浜がずっと続いていた。

ここは海岸で雨が『しとしと』と降っているのだが、今日は風があまりなく、海もそこまで荒れてない。

今、4人が居る場所は、港の近くなので砂浜には船や漁に使う道具が置かれていた。

港から少し離れたところは何も無く砂浜が続いている。少し遠くの方には岩場も見える。

ウサギ主は少し遠くの岩場を指す。

「あそこが多分、待ち合わせ場所だろう。ここからでは見えないが、あそこに鳥居と社がある。」

みんなでその社に向かって歩きはじめた。

美由は道路を歩いた。

朋と彼女の頭の上のっている蛙主は防波堤の上を歩く。

ウサギ主は修行のためだと言って、砂浜を走って先に社へと向う。

『ウサギ主、今日も元気だなあ。』

みんなが鳥居の前に集まった処で、カメが海からあがってきた。

「何だ、あんた達もう来てたのか？というか、今日は雨だから、こなくて不戦勝で勝利するつもりでいたのに。」

『何て、志の低いカメなんだらう……。』

「ふん、この程度の雨を理由に負けられるか。早くはじめよう。」

コースを説明せい。」

「この鳥居から、港へと行き、またこの鳥居へと戻ってくる。」

鳥居を先に抜けたものが勝者だ。泳いでも良いし、砂浜を走っても良い。防波堤の上でも良い。ただ、道路に出れば負けだ。」

『泳ぐって……。この勝負はかけっこでは無かったのか？』

「よかるう。」

ウサギ主は相手の提案をあっさり呑む。

『いいのか？ウサギ主。まあ、やると言っている本人が良いと言っているんだから。口出しはしないけど。』

「審判は、この魔法少女とカエルがつとめる。ゴール地点は魔法少女がカエルは港の方で折り返し地点の置物とする。いいな？」

「わかった。」

「カエル。先に港に行つて、適当なところに座っておれ。」

「勝手に決めおつて。まあ、折り返し地点が決まっておらんな。

カメに配慮して海の近くにすることにするぞ。」

「好きにしろ。」

蛙主は姿を消す。

朋が話し始める

「ウサギさん、ずいぶん自信があるんですね。」

「みたいだねえ。」

「カメさんががんばってください。足が遅いものとして応援します。」

「

「おうよ。」

カメは前足を上げ、朋の応援に答える。

「美由が手をあげる。では、位置について。」

カメは鳥居からすぐ、海に飛び込める位置につく、ウサギ主は砂浜に行くようだ。

『うーん。本当に節操が無いカメだな……。そんなに勝ちたいのだろうか？』

「よーい、ドン」

そう言つて美由は手を下ろした。

カメとウサギの競争（前書き）

スタート地点が鳥居に変更になりました。

カメとウサギの競争

スタートが切られた。

カメはに4本の足をバタフライの様に回転させ岩場を走りはじめる。カメとは思えぬ人が軽く走るぐらいの速度が出ている。

美由と朋は「おー」と感嘆の声をあげた。

ウサギ主はカメが邪魔で、スタート地点の鳥居を抜けられないでいたが、カメが邪魔にならない位置まで移動したので、一気にジャンプをする。

蛙主は体長が3mあるので、鳥居に後頭部をぶつけた。周囲に「ゴーン」という音が響く。

ウサギ主は地面に落下しその場で倒れる。

その時、カメは振り返る事もなく、迷わず海に飛び込んだ。

ウサギ主は後頭部を前足で押さえ、立ち上がり、首を振る。

「ふう。油断した。」

「いたそーです。ウサギさん大丈夫ですか？」

「大丈夫だ。」

美由は鳥居に頭をぶつけたウサギ主を見て、猫の暴走の時にウサギ主に乗った事を思い出し、恐ろしくなった。

「ウサギ主は上への配慮が足りないなあ。あの上に乗って移動した事があるけど、あの時よく、私達が木にぶつからなかったものだ。」

ウサギ主は、四本足でゆっくりと鳥居を抜けた後、砂場に向けて一気にジャンプする。

大きな音と共に、砂に大穴が開く、ウサギ主は大ジャンプを続けてやろうとするが、あまり高く飛べなかった。

雨で濡れた砂がクッションになり、力が拡散して上手く飛べないのだ。

「あちゃー。大穴あけちゃった。すぐ埋め戻さないと。」

ウサギ主は、大ジャンプでの移動をあきらめ、力を抑えて、砂場を走る事にした。

「朋ちゃん。すぐにあの穴埋めるよ。」

美由がそう言っただけ走り始める。

「え？なんですか？」

「目立つでしょ、あの穴。今は化け物が競争しているのに。それに迷惑だし危ないし。」

「はい。」

美由と朋はウサギ主があけた穴を埋め戻しにかかった。

美由は迷わず、片足をつき、上半身をかがめて、穴へと砂を押ししていく。

朋は立ったままで、砂を両手ですくい少しづつ穴へ入れていく。

朋がウサギ主の背中を見る。

「ウサギさんって、あれくらい速さなんですか？」

美由は作業を続けながら、ウサギ主を見る。

「普段はもつと速いよ。多分、砂のせいで地面に上手く力をつたえられないんじゃないかな？ほら、ウサギ主って筋肉が無駄にあるから足の面積あたりにかかる体重が多すぎるんだと思うよ。」

美由の超加速の場合は魔力で足元の面積を広げているので、こういった砂場で力いっぱい地面を蹴っても、そんなには沈まないが、ウサギ主は体重が重く、魔力は弱い方なので魔法で足元の面積を広げる事が出来ない。更にウサギ主の走り方は飛び跳ねる事で徐々に加速を重ねていくわけだが、飛び跳ねるため重力という加速度が加わり自然に砂に伝える力が増える。そのため得意な走り方では砂に足が沈んでしまうから、猫の様な走り方にならざるを得ないのだろう。砂地はウサギ主に不利と言わざるを得ない。

「だったら、砂の上じゃく、防波堤の上を走ればいいのに。」

「たぶん、正々堂々とやりたいんじゃない？」

「別に違反ではないですよ？だったら？」

「男のロマンってやつじゃない？負けるより大きな問題なんでし

よ。ウサギ主的には。」

美由は勝つための手段はどうでも良いと思っっているタイプだった。昔は正統派にこだわってはいしたが、勉強や魔法少女の経験から、それでは勝つ事は出来ない事を理解していた。勝つためにはルールギリギリか、少し超えるぐらいの事をしないと駄目な事を知っている。

ルールギリギリを攻める必要性を理解した時、正統派は正統派なのりのワケがあるというのも見えてきた

。ルールギリギリは所詮、邪道であり、一時しのぎにしかならないのだ。経験を重ねると邪道は研究され全く通じなくなるか、破綻するため、どうしてもある一定レベル以上を目指すとなると、正統派に回帰せざるをえなくなってくるのだ。

ただ、今回の件は、邪道に走っても問題無い気もする。相手は自分の都合の良いルールをつくりあげてやっているわけだから、多少のルールギリギリでも非難されることはない。それでも、正統派にこだわっているのだから、『男のロマン』という皮肉を言いたくもなる。

「なるほど。」

朋は美由の考えを理解したかどうかは別にして、納得したようだった。

カエル主は港の砂浜のすぐ近くに座っていた。

先に来たのは、海から砂浜に上がったカメだった。カメはバタフライの様に4本の足を使って砂を移動する。砂の上には彼の通った甲羅と足の跡が太い線となり残る。

「おお、カメよ。来たな。まだ、ウサギのやつはきとらんぞ。」

「はい。」

カメは蛙主の周りを一周し、港の岸壁から海へと落ちていった。そこにウサギ主がやってくる。

「ウサギ、遅いぞ。カメはさつき、海に落ちたぞ。」

「分かっておるわ。」

ウサギ主は港のコンクリートの上に入ると、大ジャンプで蛙主を飛び越え、着地したあと、即、体を切り返し、大ジャンプをして蛙主を超え、砂浜へともどっていく。

「ふう。あの巨体が自分のすぐ上を飛び越えるのは恐怖だのう。潰されるかと思ったわい。さて、戻るか。」

蛙主はゴールの鳥居に戻ってくる。

美由は砂だらけになっていた。

「何じゃ。魔法少女その1よ。その汚れ方は。」

「ウサギ主に言うてください。ウサギ主が大ジャンプして、そこに大穴あけたんで、埋め戻してたんですよ。」

「あいつも迷惑なやつじゃな。」

1柱と二人は、遠くにいるウサギ主を見ていた。

しばらくして、カメが海から出て、岩場をよじ登りはじめる。

ウサギ主もゴール近くまでできていた。

カメは岩場へとあがり、必死に4本の足を回しながら、鳥居を指す。

ウサギ主も岩場へと足を踏み入れ、一気に加速をかけた。

5 話終わり。

「カメさんががんばれー。」

朋はカメの応援をする。

「ウサギ主ももう少しですよ。」

「ウサギ、はよせんと、カメにまけるぞー。」

三者三様に応援している。

カメはもうすぐ、鳥居の前を捉えようとしていた。

このままでは、ウサギ主がカメにコースを塞がれ負けてしまう。

ウサギ主は大ジャンプをして、カメを一気に超え、滑るように鳥居を抜けた。

勝ったのはウサギ主だった。

ウサギ主は立ち上がり、雄たけびをあげた。

「あー。カメさん負けたのです。」

「ウサギ主勝ちましたよ。」

「残念じゃのう。ヤツが負けるのが楽しみだったのに。」

ウサギ主は額の汗をぬぐう。

「ふう。危なかった。まさか、砂を本気で蹴ると、砂にズブズブ

沈むとはおもわなんだ。」

ウサギ主は濡れて砂だらけの美由を見る。

「ん？魔法少女よ。何で、そんなに砂まみれなんだ？」

「ウサギ主が最初にあけた大穴を埋めてたらこうなったんです。

下着にまで砂が入って気持ち悪いです。」

「それは、すまなかつたな。」

朋はカメに近づき頭を撫でる。

「カメさん残念だったね。でも、頑張ったので偉いのです。でも、カメさん、地上でも足はやかかったよ。カメさんと思えないぐらいはやかっただです。私より速いかも。」

「有り難う。嬢ちゃん。負けはしたが、その言葉で心がはれた。」

「えへへ。」

ウサギ主がカメのもとへと歩み寄る。

「カメよ。久々に良い勝負だった。礼を言うぞ。」

そういつて、筋肉が浮き出るポージングをとる。

「こちらこそ、負けはしましたが、また修行して勝ちたいと思います。」

「おう、いつでも待ってるぞ。」

「では、解散しましょうか。私、家に帰ってお風呂に入らないと。」

「美由先輩。砂遊びをした後の子供みたいですよ。お母さんに見つかったら怒られますね。」

「そうだねええ。」

第6話

美由は海岸から帰り、シャワーを浴びていると、学校で補習があった事を思い出す。

彼女は慌てて学校へと向かった。

幸い、競争が早朝だったので、今、行けば、そんなに遅刻ではない。

普段は使わないが、焦っていたので、魔法少女テラミルに変身して学校へと向かった。

『ぬかった。日曜日も補習がある事を、すっかり忘却していた。』

美由は自分のクラスの扉を慌てて力いっぱい開ける。

「すいません。寝坊しました。」

クラスから「ど」と、笑い声が響いた。

普段クールなイメージのある美由が慌てて教室に入ってきて来て、『寝坊した』と大声で言い訳をするのが皆、面白かったらしい。

いつもなら、目立つのが嫌なのだが、今日は皆の笑い声に救われた気分だった。

美由は席につき、補習を受け始める。

今の補習は古文であった。

美由にとって、この遅刻はただ目立って、ただ補習に遅れ、目だつて恥をかいたのと、少し先生の話の聞けなかったただだったが、ある聖エルナル学院出身者の背中を押すには十分な事件だった。

問題のすり替え

学園3番目の派閥の長である片奈 麻奈加は、補習に遅れてきた美由を苦々しい思いで見ている。

『遅刻の対応のしかた。気品のかけらも無い。私の目にはあの女は下品にしか見えない。あんな下品な女に「おねえ様」の称号は似合わない。少なくとも私はあんな下品の女に並ばれるのは絶対嫌』[□]

実際の処、片奈は美由に負けている部分が多い、成績ではかなり差がついているし、運動でもわずかに劣っている。まあ、運動でも本当はかなり差がついているのだが、目立つ事が嫌なのと競争心が欠けている美由が体育の時間に本気を出してないだけなのだが。女子内での人気は今美由の方が少し上だったりする。

片奈が勝っているのは、家柄と家が金持ちな処と、気品とセレブ女性的な美しさであった。

おねえ様の重要な要素は家柄と気品とセレブ的な美しさと考えている片奈にとって、どこことなく、少年っぽい、ファッションにもこだわらない美由がおねえ様にふさわしいとは思えなかった。

『それにしても、須王寺さんが、あの女が「おねえ様」になる事を須王寺さんが期待していて、あの女こそ自分のライバルだと言ったとかいう噂が流れている。もし、本当だったとして、あんな女のどこが良いというの？ ああ、頭にくることばかり。』[□]

片奈はイライラしていた。彼女もまた3年の中間テストの洗礼を浴びて、点数をかなり落としていた。実際のところ美由以上に点数を落としている。

テストの点数は派閥の長を務めるには結構重要で、馬鹿と認定されると下の人たちが言う事を聞かなくなり、最後には派閥の破綻か、自分の地位を誰かに奪われる可能性が出てくる。

その焦りを解消するためには、本来、自分で努力して成績をあげ

るべきなのだが、美由にその焦りの責任を付け替えようしていた。

『あの女が「おねえ様」になるなんて、私は絶対に許せない。でも、どうすればいいの？自分の派閥の女子をまた使い、あの女を脅してやめさせるか？イヤ。自分の派閥の人間を中心に動かせば前の様に噂になり、自分の地位を脅かしかねない。指輪をまたはめるのはどうだろう？イヤ。あの苦痛はもうイヤだ。何か良い手は無いの？』

画鋏と落書き

月曜日になった。

美由は今日は一人で登校していた。後輩の女子の何人からか「おねえ様」と呼ばれるのだが、どうにも慣れないでいた。しかも、声をかけられる数が日に日に増えてる気がする。

「何か、私の虚像がどんどん大きくなっていく気がするなあ。最近、学校では人気落ちそうな変な事しかしてない気がするのだが。」

「朋が校門前でカメを見せた時とか、昨日の遅刻で間抜けな姿を見せた事を思い出していた。」

美由は須王寺の巻いた噂を、未だに知らないでいた。

「お嬢様学校の人たちが不満を抱いているっていうし、彼女らが爆発する前に、早くこのブームが去ってほしいなあ。」

美由は靴箱につき、下穿きを床に落とす。

すると、何か小さな輝くものが、下穿きから落ちた。

美由は何だろう？と、輝くものを見る。

それは画鋏だった。

画鋏を拾い、自分の目の前にそれを持っていく。

「ふー。ついに来たか。」

それは、危惧していた事がついに現実になった事を告げていた。

美由は、自分のカバンを開け、筆箱を取り出し、筆箱の中に入れる。

自分の教室に行つて、自分の机を見て驚いた。

机に油性ペンで卑猥な言葉で落書きされているのだ。

美由は啞然とする。

「ここまでするか……。」

美由は席に座り、何事も無かったかのようにカバンの中身を机にし

まった。

HRがはじまる。

先生が入って来て、全員立ち上がり、挨拶をして着席をする。

美由だけ座らない。美由は手をあげ発言する。

「先生。私の机見てください。」

「桜間、何を言っているんだ。」

「油性ペンで誰かが落書きをしています。かなり卑猥な言葉を書いています。これは明らかないじめなので、この証拠を先生に確認していただき、こういった事件があったことを知って欲しいのですが。」

いじめ対策で最も大事なのは証拠を残し保存する事である。その証拠を先生に突きつけ問題を大きくした方が、後々、相手を追い詰めるのに便利だし、これで止まる場合もある。

先生が美由の机を見る。

「こりゃ酷いなあ。桜間、お前、何かやったのか？」

「いいえ。まったく心あたりがありません。今朝来たらこうでした。」

美由は心当たりはあったが、心当たりがある人数が多すぎるのと、誰が犯人なのかめぼしをつけていない事、それに確証が無いのに犯人を限定させるわけにもいかないの、あえて嘘をついた。

「まったく、こんな卑猥な言葉を使うなんて、品性が下劣としか思えません。これをした人の人間性を疑います。」

美由は相手が、お嬢様学校の人間の誰かだろうと思っていたので、当人たちが一番の誇りにしている品性を貶める発言をあえてした。

「自分たちの誇りである品性はこんなもんだと」ただ、やった人間から見れば負け犬の遠吠えとしか聞こえないんだろうとも思った。

「こら、桜間、そんな事を言うもんじゃない。それと昼休みに生徒指導室に来なさい。」

「はい。」

「それから、これをやったヤツ先生絶対許さないぞ。覚えておけ。」

美由は机はしばらくこのままにしとこうと決めた。

実は美由はこれを消す方法を知っており、道具も持っている。油性ペンで文字をなぞり、すぐに拭けば消すことができるのだ。

それをあえてやらないのは、クラス全員にいじめがあつたという証拠を見せ付ける必要があるのと、これをやった人間がこれを見て心に負荷を追わせる必要があつたからだつた。

ちなみに、この事件を起こしたのは片奈ではない。

彼女はまだ、何もしていない。何かしようとはしていた。

そんな時に、美由の机が卑猥な言葉でうめつくされているのを見て、気分が良かったのも事実だつた。

自分の仲間がいると思つた。だが、美由にこれが品性下劣な行為と指摘され、自分がやったわけではないのだが、苦々しい思いを抱いたのも事実だつた。

事後処理

ホームルームが終わると学園1位の成績を誇る桐野 舞奈が美由の席にきた。

「桜間さん、大変ね。どうせ、あのいけすかない誰かの仕業だとは思っけど。」

「桐野さん。犯人が誰かわからないので、そういう事は心の中でお願いします。」

「そう、心の中ね。」

桐野は意味深げにそう言った。

「ところでそれ消さないの？」

「今は道具が無いので……。」

美由は嘘をついた。桐野は美由の顔を観察していた。

「なるほどね。ひとまず、今のあなたの対応は正解だったと思うよ。ただ、やった本人があなたのその嫌味に気づけるかは、別の問題だと思っけどね。」

「嫌味なんてそんなつもりは。」

美由はまた嘘をつく。

「きつと、あなたがその机に座り続けている姿がみじめに見えて、あなたの発言が負け犬の遠吠えとしか聞こえてないでしょうっけどね。あいつらの性格だと。」

「桐野さんまた。」

「これは失礼。これだけは聞いて。私はあなたを手伝う事は出来ないし、多分、助けない。だから、なくさめもしないし、応援もしない。多分、他の人たちもそう。先生もきつと役にたたないでしょうね。なくさめたり、応援すれば、人は弱いからそこにすがり、あなたは戦うのをやめてしまう。だから、私は優しくしない。」

「これは私の問題なので、桐野さんはお気になさらずに。」

「あら、気にはするし、注目もするわよ。」

須王寺麗菜は教室に入つて、美由の机を見た時、怒りを覚えた。でも、すぐに怒る事をやめた。

これこそが、自分が巻いた種が実った成果からだったからだ。

HRが終わり、美由に慰めの言葉をかけようかと思つたが止めた。理由は桐野と同じだった。

『彼女はこれに勝たなくては駄目だ。』

だが、罪悪感もある。

まさか、ここまで、露骨な事をするとは考えていなかったからだ。そして、失望感もあった。

多分やつたのは聖エルナル学院出身者の誰かだからだ。この行為は自分たち学院出身者の品位を傷つける行為であると、麗菜は思つていた。

今日、自分の派閥の人を集めて、この件で学院の品位が傷つけられた事は皆に伝える必要があるとは思つていた。

昼休み。

美由は生徒指導室に向かった。

美由が呼び出しを食らつた事は瞬く間に学園女子の間に広まる。

「桜間おねえ様が、生徒指導室？何か悪いことでもしたの？」

「違う違う。なんでも、机に卑猥なことを書かれたらしいよ。そのことで先生たちが話を聞きたいって。」

「ええ。桜間おねえ様被害者じゃん。誰よ。」

美由は生徒指導室に入る。

先生は理由を尋ねるが、美由はわからないの一点張りだった。先生方はやられる様な原因を作った美由が悪いみたな話にもっていかうとしていた。すぐに除光液をもって、机の落書きを消し、この件は無かった事にしろという方向へもっていかうとしていた。

『まいったなあ。ここまで、役に立たないとは。』

「先生。私が一人我慢して、無かった事にすればこの件だけは解決するかもしれませんが、この手のヤツはクギをさしておかないと問題が更にエスカレートしますよ？」

「そんなことは無い。これ以上問題を大きくする方がかえってエスカレートする。」

ようするに、先生方は上が聞きつける前にもみ消そうとしているらしい。

美由は除光液とタオルを持って生徒指導室を出る。

扉を閉めた後、ため息をついた。

『本当に桐野さんが言ってたように、役にたたないなあ。』

美由は自分の机に戻ってくる。

しばらく、机の落書きをしばらく放置しておこうと思っていたが、除光液でいそいそと消しはじめた

落第点

ガリ勉少女のあだ名を持つ桐野 舞奈は、昼休みになると、美由が生徒指導室へ向かった事を確認して、裏庭にやって来る。

メスの茶トラ猫に餌をあげるためだった。

彼女は嬉しそうな顔をしながら、ゴロゴロ転がるメス猫のお腹を撫でていた。

「猫さん聞いて。私が目をつけていたクラスメイトが今いじめらてるの。」

猫はゴロゴロ転がるのを止め、眠たそうに目を閉じる。

「彼女が派閥を作るといふ噂が広がって、彼女が特に言い訳をしないもんだから、あのいけ好かないお嬢様学校の人たちが勘違いをして、彼女をいじめているの。今日、机に卑猥な言葉を落書きされていたわ。」

桐野は画鋏の事は知らなかった。

「あの子は本人にまったく自覚が無いけど、この学校に変化を起こしている。変化を起こす時には、必ず抵抗がある。だから、彼女はいじめられる。彼女がこれに耐える事ができたら、きつと素敵なおねえ様が誕生するでしょうね。今から楽しみ。」

桐野が猫との楽しい時間を過ごして、教室に戻ると、アルコールの臭いが充満していた。

美由がいそいそと、自分の机の落書きを消している。彼女が使っている除光液の臭いだ。

桐野はその光景を見て、ちよつとがっかりしていた。

『今の時間、彼女が机の落書きを消しているという事は、先生達との交渉を早めに切り上げたということか……。』

彼女は美由に話しかける。

「あら、桜間さん。しばらく、消さないんじゃないやなかったの？」

美由は一度、桐野の顔を見たあと、視線を机に戻す。

「先生がさっさと消せと言ったので。」

「生徒指導室で何か言われましたか？」

「原因を作った私が悪いから、我慢しろとだけ。」

『やはりか……。』

「桜間さん。今回は落第点です。」

「桐野さん、何をいきなり、点数をつけてるんですか……。」「

「結果が変わら無い事が分かっても、昼休み終わりまで粘るべきでしたね。」

美由はギックとなる。

「な、何をおっしゃっているか良くわかりませんが……。」「

彼女は嘘をついた。実は美由も彼女の言わんとしている事は分かっていた。

「先生にもう一度、クラス全体の問題としてクギを刺す様に説得すべきでしたね。多分、上にいじめを報告したくないとかいう理由で、もみ消しそうとして、あなたが悪い論を展開したんだと思いますけど、あなたは戦うべきだったんですよ。」

美由は実は充分そのことを理解していたのだが、先生と揉める覚悟を持っていなかったため、今回の腰砕けな有様になっている。

「まあ、もうこんな事はないでしょうし、もしあつたら、今度は覚悟を決めるつもりですよ。」

「桜間さん。弱者に責任をなすりつけるのが、一番楽なんですよ。自分たちが責任をとらないですむ、一番簡単な方法だから。私も経験があるから知ってます。私の場合、普段、正義だの差別だの自由だのを口する先生でしたが、いざ、いじめが発覚したら被害者である弱者の方が悪いと平然と言い放ちました。あなたは、ひとつも悪くありません。あなたは被害者です。先生方の不当な主張に抗議する権利があります。それにこれは戦争です。これで終わるはずがあ

りません。初期に半端な対応をすれば、問題は泥沼化する。だから、最初に相手にリスクがある事を認識させる。多分、お嬢様方で、上の人たちなら、今回の件の対処方は学園の上層部に直接、親から圧力をかけさして、学園全体に向けて脅しをかけるはずですよ。それが、一番、効果があるから。」

「私の親は普通のサラリーマンなんですけどね。」

「だから、先生を説得する必要はあるんですよ。」

「まあ、すんだことですし、あるかどうか分からない事を話し

ても。。。」

「そう。」

朋が怒る。

「ええ？美由先輩の机に落書き！許せないのです。」
そう言ったのは朋だった。

「まあまあ、朋ちゃん落ちついて。」

朋はふてくされている。

「朋ちゃん私が聞きたいのは、美由先輩を恨んでいる人に心当たりは無いかって事。」

「ぶー。美由先輩は素敵なので、人に恨まれる様な事はしないのです。」

『やはり、駄目か。期待はしてなかったけど・・・』

「じゃあ、美由先輩に何か変わった事とかなかった？」

朋は思い返すが、化け物関係の話しか思いつかないので、言えるわけがない。それに化け物関係なら美由が学園でいじめにあっている事と関係は全く無い。

片奈の指輪の件にしても、朋は蛙主が勝手に解決させたと聞いているだけで、美由に恨みを抱いての行為だったという事に気づいてない。ぼんやりと悪の組織の仕業だったと勝手に思い込んでいる。

「あ、言葉につまった。何かあるのね？」

「無いです。この前、美由先輩に貰った参考書の使い方を教えてもらったためにウチに来てもらったことぐらいしか・・・」

「面白そうなネタだけど、今は良いわ。他には。」

「本当に無いよう。」

加奈は派閥とのいざこざの話をしようと思ったが、朋の純粋な感じを見てみると、こういった話をすべきではないと思った。

放課後になった。

朋は美由を追いかけるため、すばやく学校を出た。

「美由せんぱーい。」

「ああ、朋ちゃん。」

「美由先輩聞きました。机に落書きをされたって。」

「ああ、朋ちゃんの耳にも届いているのか。」

「はい加奈ちゃんから聞きました。」

「加奈ちゃんって、前に登校の時にあった朋ちゃん友達だったけ？」

「はい、そうです。それにしても許せないのです。美由先輩の机に酷い言葉を書いてあったと聞いたのです。」

『卑猥な言葉だったけど、酷い言葉に摩り替わっているな。』

「まあ、朋ちゃんが怒る事ではないよ。私の問題。」

「美由先輩がいじめらるのを見ているのは、私がイヤなんです。」

美由は朋の頭を撫でる。

「そっか、そっか。そんな事を言ってくれるのは朋ちゃんだけだよ。」

「そうなんですか？」

「そうだよー。ある人なんか、私にやさしい言葉をかけないとか言ってたし。」

「酷いのです。」

「ああ、勘違いをさせちゃったか。やさしい言葉をかけても、そこに甘えるだけだから問題は解決しないって、だから、やさしい言葉をかけないって、応援されたのよ。」

「良くわからないです。」

「まあ、そのうち分かるよ。それより朋ちゃん。大事な話があるから聞いて。」

「なあーに？美由先輩。」

「ちよつと、この件が長引きそうなの。私と仲良くしていると朋ちゃんにも迷惑がかかりそうなんだ。だから、ちよつとの間だけ、私と距離を置いてもらえるかな？」

「ええ、私、イヤです。迷惑がかかってもかまいません。」

「私が構うの。朋ちゃんが大好きだから。その人に迷惑がかかる
を見ている方がつらいから。」

「わかりました。」

二人はその後、無言のまま歩き続け、別れた。

悪

淋しそうな朋の背中を見てみると、美由は心が痛んだ。

『私は朋ちゃんに別れを告げる事に覚悟が足りなかったな。多分、別れを告げる事になるんだという認識すら持つてなかった。』

美由は言つて後悔をしていた。

『ごめんね。こんな駄目な人で。』

「あらあら、かわいそうに。」

どこからとも無く、声が聞こえてきた。

美由は声の方向を見る。そこには傷だらけの黒猫がいた。

「酷い事をしますね。魔法少女様。」

美由はその言葉に落ち込む。

「すみません。私が浅はかでした。」

「そういう言葉は私ではなく、彼女に言うべきでは。」

「ですね。」

「でも、今の状況から考えれば、あなたの判断は間違つてませんよ。配慮が足りないとは思いますが。」

「イヤな事を言いますね。ん？もしかして、学校の事を知っているんですか？」

「ええ。あの魔法少女誕生のきっかけになった茶トラ猫がいたでしょ。そいつに餌をあげている女性が言つてたそうなので、その伝聞ですが。」

「あの、おしゃべり猫め。」

「お困りでしたら手伝いましょうか？あなたには恩があるので犯人を探し出して、あなたの代わりに制裁をしましょうか？」

「やめてください。そんなこと。絶対にしないでください。」

「そうですね。せっかく恩が返せるチャンスだと思ったのに。しかも、早期に解決しそうなのに。」

「この件は化け物さん達が関わつていい話ではありません。第一、

そんな事をしたら私が一番最初に疑われます。」

「なるほど。」

「そう簡単に折れるという事は、断ると分かっている提案してま
すよね？」

「わかりますか？」

「私を試すのはやめてください。」

「それは無理というものですよ。あなたは魔法少女なんですから。
ところで、魔法少女様、本当に解決できるんですか？」

「さあ。わかりません。」

「特に何か作戦があるわけじゃないと？」

「はい。手札が足りないので、手の打ちようが無いというのが正
直な処ですね。」

「だったら、犯人だけ調べましょうか？」

「今回の落書き事件の犯人が分かっても、私への不満に対する解
決になるわけじゃないので、今は必要ありません。第一、下手に知
っていると、現段階では問題になる可能性があるのです。」

「では、どうするつもりで。」

「待ちます。多分、次に何らかのアクションがあるでしょ。それ
が起こってから考えます。」

「まあ、それしかないでしょうね。処で、普通の女性なら、泣い
ておかしくないのに、何で泣かないんですか？」

「泣いて解決するなら。思いつきり泣きますよ。」

「泣けば解決するかもしれませんよ。」

「だったら、いくらでも、泣きますよ。ウソ泣きでも何でも。今
回ははじめです。はじめを受けて一番やっちゃいけないのは、嫌が
らせを受けた時にリアクションをとることです。相手が何故嫌がら
せをするかと言えば、こちらがその嫌がらせに対して不快感をしめ
したりアクションが見たいからです。ですからリアクションするとい
うのは相手に報酬を与えるのと同義です。そして、一番やっては
いけないリアクションは、泣く事です。はじめの最高の成功報酬は

泣く事なんです。一度、報酬の快楽をすれば、次も報酬を求めるようになります。それが徐々にエスカレートしていく。私が泣くというのは相手に麻薬を与えるのと同義です。第一、泣くというのは弱みを見せるという事です。弱みをみせれば、そこに付込まれ、そこから崩されていく。相手は絶対に手を抜きません。親の敵の様に攻めてきます。」

「我々猫の縄張り争いと大して変わりませんね。まるでヤクザじゃないですか。」

「人は自分の行為がどんなに酷い事であっても、気付かなければ正義だと思うもんですからね。正義だから、何をしても許されると信じてる。そして、自分に被害が及ばない事で、自分が正義であると再認識する。」

「無知の正義は恐ろしいですね。」

「そうですね。私は今、正義の味方ではなく、悪そのものなんですよ。」

「悪の魔法少女ですか。それは恐ろしく聞こえますね。」

「自分が悪だとわかっていて、戦うのはイヤですねえ。」

「別にあなたが本当に悪なわけじゃない。学園の一部があなたを悪に仕立て上げようとしているだけです。知っています？人間が昔書いた絵に7つの大罪というのがありますが、実はもう一枚8つ目の大罪があるそうです。7つの大罪を凌ぐ最大の罪それは正義だそうです。」

「へええ。」

「正義という大儀があれば、人はどんな酷い事でもできる。強盗でも人殺しでも。あなたが正義を敵に回しているなら、自分を守るために正義と戦うしかないでしょうね。今回あなたは被害者です。でも、悪にされようとしています。ここで戦うのをやめたら、本当に悪にされますよ。」

「私に残された選択肢って、『戦う』以外に無いのもわかってるんですよ。こちらがいじめに妥協して不登校になる事が相手の目

的だと思います。不登校という選択肢を選んだら、自らの手で完全敗北を認める事になります。それは、相手にとっても自分にとっても最もやってはいけない手段です。それに不登校になって、退学してニートには、なりたくありませんし。」

「早くこの戦いが終わるといいですね。もう一人の魔法少女様のためにも。」

「終わりますかね？」

「終わらせたく無いのですか？」

「そんな事、絶対にありません。私は朋ちゃんが大好きですから。また一緒に仲良くしたいと思っています。だから戦います。」

「では、頑張ってください。前にも話しましたが、私達もあなたに潰れられたら困るので。手が必要になったらいつでも言うてください。いつでも待っているのです。ただし、その時は、ちゃんと言葉で伝えてください。空気を読んで王子様が助ける何て事はありませんから。」

「ありがとうございます。」

朋は美由と別れ、しばらく、うなだれていたが、次第に涙が出ていた。

警告

朋は下校中、泣きながら思った。

『私が頼り無いから、美由先輩はああ言ったんだ。美由先輩のためにも、もつと強くならないと。私、頑張る。』

彼女は涙を拭き、家へと帰る。

須王寺麗菜は、放課後、自分の派閥の人間を集めた。

「みなさん、聞いていると思いますが、今日、私のクラスでいじめがありました。」

須王寺は集まった皆の顔を見渡す。

「別に、私は、いじめをする事も、卑怯な事をする事も止めません。上に立つ立場の者にはとても必要な事ですから。ただ、今回の件の場合、それをやれば、私達、全体が疑われます。正直、ごく一部のやり過ぎた人間と共に、こちらの品位を下げられるのは我慢がなりません。」

皆、黙りこんでいる。

須王寺は携帯電話を取り出し、彼女の机の落書きの画像を選択し、前列の端の人に渡す。

「見たら隣の人に回していきなさい。」

受け取った人は、画面を見た後、次の人へと渡していく。

「私達、全員がこんな言葉を平然と言う様な人間だと、他の人たちに思われるのが私は我慢なりません。やるなら、私達を巻き込まない方法でやりなさい。」

彼女は間を置き、話はじめ。

「後、勘違いしないで欲しいのは、私はいじめや卑怯な事をする事をすすめているわけではありません。やるなら、自己責任でやれ

と言っています。その人はその人なりの理由があるのでしようから止めはしません。やるからには、それだけの決断をなされたんでしょから。私が言っているのは、私達まで悪く思われる様な事をするなどという事です。やりたければ、どうぞ、ご自由に。責任を取るのはいくまで自分一人が責任をとる形でやれば良い事なので。だから、私はその方を応援をしませんし、守る事もしません。むしろ、問題が発覚した場合、問答無用で切り捨てます。」

須王寺は目を閉じ、一旦、息を大きく吸う。そして、目を開ける。「私が、その方を切り捨てる方針に不満がある方はいつでも言いなさい。私はいつでも派閥の長を辞める用意があるので。」

須王寺が派閥の人の前で演説を行っていた頃、美由の下履きの中に10本程の画鋲を入れる人物がいた。その人は、美由の靴の中を覗き込み、効果的に刺さる様に画鋲の位置を調整する事に神経を集中させていた。そこに誰かが来る事も気付かないまま。

「あら、面白い事をしているのね？」

その声の主は、学園3番目の派閥の長、片奈だった。

画鋲をしこんでいた人物は片奈を見る。

片奈は何食わぬ顔で、自分の靴箱をあけ靴を履き替える。

「別に止めは、しないわよ。やるならご自由に。ただ、止めるなら今よ。私も、あの下品な女に不満は持っていたけど、あなたかどうかは分からないけど、あの落書きを見て、この人たちと同類にはなりたくないって、本気で思ったわ。」

片奈は自分が美由を呪った事をひとまず置いて、そう言った。

「別にそのまま放置しても、チクリはしないけど。多分、一番に疑われるのは、この私だから、状況が悪くなれば、遠慮なくあなたの名を出すわよ。それと、あたが、何をしようが構わないけど。私達の品位を下げる事だけは止めてもらえるかしら？」

朋が頑張る。

朋は家に帰ってきて、ジャージに着替え、自分のウチの公営住宅の近くにある公園に立っていた。かなり勇敢な顔をしている。

「美由先輩のためにも、私は強くなるのです。ひとまず、美由先輩が言っていた、一日20分走るのです。」

そう言って、朋は走りはじめるが、すぐに息が荒れる。

『うー。やっぱり駄目だああ。』

朋は足を止め、前かがみになる。

『そういえば、美由先輩言ってたな。まずは心肺機能を徐々にあげていかないと駄目だって。それには歩く様なスピードで走れって、最初はきついけど、毎日やっていけば一週間ぐらいでなれるって。美由先輩の言葉を信じるのです。』

朋は、ゆっくりと歩くようなペースで走りはじめた。

確かにきつい。でも、すぐに息が切れるような感じでない。頑張れば何とか長く持続できそうだなと思った。

道路に出て、3分程走ると、徐々に疲労がたまっているのがわかる。ちよつときつくなっているでも、頑張ればいけそうだ。でも、やめたい。

朋はまた足を止めた。

『うー、頑張れそうなのに。頑張れないよ。そーいやああ。疲れたら、ちよつと休んで、また走りはじめれば良いとか良いとか言ってたな。』

朋は歩き始める。そして、また、歩くようなペースで走り出した。

「ああ、さっきの疲れが消えてる。もうちよつと、頑張れそう。」
朋は2分ほど走った。

「うー。さっきより、疲れるのが早いよー。」

そう言って、また歩きはじめる。しばらくして走り始めた。

『ああ、こーいう事なんだ。』

朋は20分程走ってウチに戻り、着替えて、勉強をはじめた。今やっているのは、美由から貰った数学？の白本であった。美由に言われた通りにやると意外とスイスイ進む。でも、ちょっと、面倒くさくなり、わかったつもりになって、読み飛ばしをしてみたら、すぐに理解できなくなったので、また読み飛ばしをする前に戻り、ちゃんとやりはじめる。

「むー。やっぱり丁寧にやっついていかないと駄目だな。」
夜になり、お母さんが帰ってくる。

勉強をしている朋も見なくなり、買いたったレジ袋を落とす。

「と、朋が試験でもないのに勉強している……。」

「うー。ママ酷いのです。」

「いや、もの凄く、珍しいものをみたから。どうぞ、どうぞ続けて。」

母親は慌てて、レジ袋を拾った。

「ぶー。でも、頑張るのです。」

美由の実力。

翌日になる。美由の靴には画鋏が入っていないかった。

学園では職員室の前に、中間テストの順位が張り出されていた。

1年から3年の上位50番。計150人分の名前だ。

美由は13番であった。

全体ではいつもより、ちょっと下であった。女子の中では5位と変わらなかった。

美由も点数を落としていたが、他の生徒も落としていたので、大して変化が無かったのだ。

桐野が美由に話かける。

「あら、桜間さん。少し点数を落としているようだけど、順位は落ちてないみたいね。」

「ああ、桐野さん。相変わらずの一位ですね。点数も凄いですね。」

「まあ、それだけを一生懸命頑張っているからね。それにしても、今回のテストは問題のレベルが上がったとはいえ、沢山の人が点数を大幅に落としているわね。他の人達も、もっと勉強すべきね。3流大以上を目指すのであれば、あれくらいの問題で大幅に点数を落とす様では合格なんて無理だと思うけど。受験ではあのクラスか、それ以上の問題が出るわけだし。」

「そうですね。」

「桜間さん、あなたもね。」

「分かっています。もう少し、受験に対応した勉強をしないといけないでしょうね。私の場合、基礎・基本を重視してきたので、受験用の問題に不慣れなところがあるので。」

「頑張りなさい。あなたには期待してるんだから。」

「おねえ様としてですか？」

「そうよ。」

朋が友達を連れてやってくる。美由の顔を見て一瞬明るくなるが、顔を伏せ暗い顔をする。一緒にいるのは加奈だった。

『ごめんね。朋ちゃん。駄目だな私はあの子にあんな暗い顔させるなんて。』

美由はその場から離れた。

「ほら、朋ちゃん。桜間先輩だよ。話かけないの？」

「ええとね。今、美由先輩、昨日の落書き事件でいじめられてるから、もしかしたら、仲良くしている私にまで危害が加わるかもしれないからって、しばらく、会わないことにしたの。」

「あらら。まああ、現状を考えると、かなりその可能性はあるからねええ。大丈夫だって、桜間先輩ならきつと解決できるって。」

「うん。美由先輩なら大丈夫です。」

加奈は美由の名前を発見するの。

「ほら、朋ちゃん、桜間先輩だよ。13位か。女子だと5位か。

ちよつと今回は落としてるねええ。でも、上位には違いない。赤点があつた私とは大違いだ。」

「加奈ちゃん赤点があつたの？」

「まあねええ、朋ちゃんは無かつたの？」

「ギリギリ大丈夫でした。」

「一緒に追試が受けられなくて残念だなああ。」

「うー。追試イヤなのです。」

「次こそは、一緒に追試受けようね。」

「受けない様に頑張るのです。私が頼り無いから、美由先輩があいつたんです。私はもつと頼りになる女になるのです。」

「おお、燃えているねええ。」

美由のクラスではテストが終わってから、二度目の体育の授業が

やってきた。

二クラス合同で、女子と男子が別れて、体育をやる。

今日の女子は50m走だった。

美由は考え事をしていたので、周りの事が見えていなかった。

自分の順番になる。隣にいるのは、別のクラスの女子で陸上短距離のエースで地区大会では優勝、県では1回戦敗退ぐらいの実力だった。

美由はとなりが誰か分かっていなかった。頭をふり、今は走る事だけに集中する。

お嬢様方は美由が差をつけられて負ける事を期待し注目していた。

「位置について、用意、ドン」

美由は上半身を前に強引に倒した上体で大き目の足音をたて、ちよいとジグザグ気味に数歩進み、少し状態をおこして、モモをすばやく上げ下げする。その走り方で、隣の選手と並んでいた。

『何？この子？足は速い方だけど、ここまで、速かった？』

美由は完全に体を起こし、大きく足をスライドさせる。

二人はゴールを切った。

美由は負けた。タイムでコンマ1秒、からだ半分の距離だった。

美由はぜいぜい言いながら、集団へと戻っていく。

桐野が声をかけてきた。

「おおやるじゃない。」

「はい？」

「うちの学校の短距離のエースと互角なんて。」

「ええ？そうだったんですか？」

「あきれた。気付いて無かったの？」

「色々考え事をしてたんで、直前になって、考えるのをやめて、ただひたすら全力で走る事に集中してたので。」

「へええ。実はあなた今まで実力を隠していたんじゃない？」

美由はギックリとする。

「か・かくして何ていません。」

「動揺してるわよ。あなたすぐに顔に出るから、分かるわよ。」

また起る

体育の授業が終わり美由と桐野は一緒に自分達のクラスに戻る。

「桐野さん。私と一緒にいたら、仲良しと思われて、あなたにも迷惑がかかるかも。」

「あら、大丈夫よ。聖セイエルナル学院のお嬢様方は、多分、私には手を出さないから。」

「はあ……。何でまた。」

「多分、薄々気が付いていると思うけど、私と彼女達とは1年の頃から喧嘩しててねええ。」

「何かあるとは思ってましたが。喧嘩をしてたとは、知りませんでした。」

「まあ、水面下でやったからね。あなたの場合みたいに、直接的なモノは無かったし。」

「はああ。」

「あのお嬢様方は、事ある毎に私にちよっかいを出してきてたんだけど。私は、ちよっかいを出して来た当の本人ではなく、関係する派閥の長にクレームをつけに行ったもんだから、半年もしたら、誰も私に手を出そうとはしなくなっただわ。」

「1年の時という事は、二つ上の先輩ですよ。怖くなかったんですか?」

「一番最初は怖かったけど、やらなきゃ、潰されるからね。おかげで、私は変わり者扱いされる事になり、この学校で仲良くしてくれる友達はいなくなっただね。まあ、変わり者と思われていた方が便利な事が多いから別に後悔は無いわ。」

美由と桐野は、一緒に自分達のクラスに入った。

そこで目に飛び込んで来たのは、美由の机の上や周りで、無残に破かれた、ノートや教科書だった。

落書きもされている。色とりどりの蛍光ペンや、ボールペンなど

をつかつてバカだのアホだの色々罵倒の言葉が書いてある。

「あらあら。これは酷い。」

桐野は美由を見る。

「桜間さん、みんなの見ている前で泣かないでね。家に帰ったら
幾らでも泣きなさい。」

「わかってます。と、言うより、こんな事で泣きません。」

そう言つて、美由は散らかったものを片付けようと体を動かすが、
桐野に肩をつかまれ止められる。

「駄目よ桜間さん。今、片付けちゃ。」

桐野はクラス中を見渡す。

「みなさん。これを見て下さい。どうも、この中にはこんな恥ず
かしい事をする方がいらつしやるようです。今から先生を呼んでき
ます。その間にやった人は名乗り出てくれるとありがたいんだけど。」

そう言つた後、桐野は美由の方を向く。

「あなたは、これに誰も触らない様に見張つてなさい。」

そう言つて、まず、自分の机から携帯電話を取り出した後、写真
を数枚撮つて教室を出て行く。

『まいったなあ。皆の注目を集めてる。さて、誰がやったのか。
。。。体育の時間中にやったんだよな。。。』

学園3番目の派閥の長である片奈もそれを見て思案しはじめる。

『おかしい。昨日の靴に細工をしていた子は、気にはしていたか
ら体育の時間これを出るはずがない。別の誰かだ。』

学園1番目の派閥の長である須王寺^{すおうじ}も携帯のカメラで撮影しながら
思案する。

『これだけの事をするには、時間がかかる。という事は、体育の
時間、遅く来た子が、途中で抜け出した子。または、うちのクラス
が体育の授業だと知つて、よそのクラスから抜け出した子。』

美由は、落書きを見てふと気づく。

『前の人と字が違う。こんなバカっぽい下手クソな字じゃなかつ

た。前の人の字はかなりの達筆だった。』

美由は更に細かくチェックしていると、ピンクの蛍光ペンで書かれている文字が他と違う事に気づく。この文字は斜めに書かれており、細かい文字で、文で詩の様なものを書いていた。

『明らかに他の文字と違う。書いた人は複数いる。』

片奈・須王寺・美由はほぼ同時に容疑者に辿りついた。

体育の時間、遅刻してた3人。第二派閥に属している子達。

桐野は先生を連れて来る。

「また、桜間か。とつとと片付けて、昼休み生徒指導室来い。」

桐野は先生に対して文句を言い始める。

「ちよつと、待って下さい。彼女は被害者です。彼女を生徒指導室に呼ぶのはお門違いです。次の昼休みにみんなを教室に集めて、犯人探しをするか、犯人が見つからない場合、全体責任として全員に説教をして下さい。」

「しかしなああ。」

「一度目だけなら、しょうがないですみませんが、今度で二度目です。しかも二日続けて。」

先生は美由を見る。

「桜間はどう思っているんだ？問題を大きくしたく無いだろう。」

一瞬もう良いと、言いたくなかったが、一回大きく深呼吸をして、自分の弱い心を押し込める。

「昼休みか放課後、全体責任として説教をして、ちゃんと釘を刺して下さい。私は先生に言いましたよね？ちゃんと、釘を刺しておかないと、また起こると。そして、事件は起きました。先生は絶対起こらないと私を説得しました。これは、先生の監督責任だという事もお忘れなく。」

須王寺が前に出て、先生に話しかける。

「先生、これで二度目なんですよ。犯人が誰かわからない以上、私達も容疑者です。正直、こんな下劣な事で疑われるのは耐えられません。二度とこんな事が無い様、昼休みに注意してください。」

先生は渋々それを飲み、昼休みは説教の時間となった。

桐野と美由の下校

昼休み、先生はまず犯人は名乗り出る様に言うが誰も出てこない。名乗り出た時点で、確実に一週間以上の謹慎である。それが、分かっているから当然誰も名乗り出ない。

やった人間は誰がやったか分から無い様に、全員に疑いがかかる手段をとっているのだから様、当然逃げ切るために、名乗り出るはずがない。

先生はさつきまで隠蔽する事しか考えておらず、女子生徒のクレームに折れて渋々この説教をはじめたのだが、突然、正義の心に火がついたらしく熱く語りだしはじめた。

「いいか？こんなことをするヤツはクズだ。」

正直、美由一人に罪をかぶせようとしていた事を知っている人たちが聞くと、滑稽としか思えない言い分なのだが、大事なのは全体責任という形で、大事な昼休みを拘束され、不快な説教を受ける事で犯人にリスクがあると知らしめるのが目的なので、あえて、黙って聞いていた。

放課後になり、美由はいつもの様に素早く、席を立った。

「桜間さん。待ちなさい。」

声の相手は桐野だった。

桐野は自分のカバンを持ち、美由に近づく。

「一緒に帰るわよ。」

「はあ」

二人は一緒に教室を出て桐野は口を開く。「

「その前に今日、猫に餌をあげてないの。昼休みあれだったから。一緒にいい？」

「はい。構いませんよ。」

二人は裏庭に向かった。

「流石に、須王寺すおうじさんは違っわね。私達の説得だけでは、全然やるつもりが無かったのに、彼女が発言するだけで、簡単に折れるなんて。」

「ですね。先生が私に声をかけてきた時、明らかに私を牽制しましたし。」

「ところで、あのまま先生と言い合いをしたら、今回も折れた？」

「今回は覚悟を決めてたので。多分折れなかつたと思います。」

「それでよし。これで、連日の落書き犯もこりるでしょう。」

「それなんです。多分、昨日の人と今日の人は違います。」

「何で？そう言い切れるの？」

「文字の書き方が違います。昨日の人はかなり達筆でした。今日みたいにバカっぽくなかつたです。それに今日は複数犯です。多分、数は3人。」

「その根拠は？」

「文字の書き方の違いです。昨日みたいに達筆な人はいませんが、一人はかなり字が汚いうえに大きく書いてます。一人は小さく詰めて書いてます。もう一人は、普通ぐらいですが。」

「なるほどねえ。その人数とあの体育の時間のアリバイを考えれば、おのずとその条件に当てはまる人物は推理できるわけだ。何で言わなかつたの？」

「リスクがある事だけ理解させるれば、それでいいかなと。言えば、その人たちは間違いなく謹慎になるので。」

「甘いわねえ。」

下校2

桐野と美由は学園の裏庭へとやってくる。

茶トラ猫が現れ、桐野の足に頭を摩り付け甘える。彼女は猫の頭を撫でて、カバンから猫カンを取り出す。

『むー。おしゃべり猫だ。』

「ところで、私を助けないと言っていたのに、何故、あの時、私を助けたんですか？」

美由は体育終わりの休み時間に自分の教科書やノートが破かれ、落書きされていた件で、彼女がアドバイスや先生を呼びに行った事を聞いていた。

「あら、助けたつもりはないわよ。正直、見ているだけで不快な行為だったから、相手が何の罰も受けずに、心の中で笑っているのが許せなかっただけ。私は私のためにやったの。まあ、それに巻き込まれた他の生徒はいい迷惑だろうけどね。多分、須王寺^{すおうじ}さんも、同じ気持ちだったんじゃないの？」

「すいません。」

桐野は怒った顔を美由に向ける。

「桜間さん。あなたは簡単に謝り過ぎる。簡単な謝罪は相手をイラつかせるだけよ。第一、簡単な謝罪は敵に付け込まれる元よ。何より、あなた自身の言葉の価値を下げるわ。謝罪の言葉をもっと大切にしないさい。あなたのためにね。」

「わかりました。」

「破かれた教科書が、世界史と日本史だったのは大変ね。両方も教科書が無いと大学受験ではどうしよう無い教科だから。」

「後で買いにいかないといけませんね。」

「教科書って、結構な値段するわよ。」

「無いとどうしようないですからねええ。大きな字で書かれている処だけ覚えて、大学に行ければいいんでしょうけど、大学受験は

隅に小さく書かれている処から受験に出るんで。」

桐野はバス通学なので、校門を過ぎると直ぐにバス停があるのでそこで別れ、美由は一人で下校をはじめた。

いつもなら、朋がかけつけて、楽しい下校になるのだが、今はそういうわけにはいかない。

『ふー。淋しいな。でも、自分で選んだ道だから仕方ないよね。』
美由は昨日と今日の事件を思い返す。

彼女が手に入れた証拠を考えると、それぞれの事件が明らかに別の人間の犯行だと示している。

『幾ら大勢の人が私に不満を持っているとはいえ。これだけ別々の人間が、同時多発的に一線を踏み越えるものなのだろうか？』

集団催眠みたいなものだろうか？と、美由は考えた。

誰かがやった、その人物は罰を受けなかった。

それを見ていた人物が自分も自分もといじめっ子に加わっていく。

それは、誰かが罰を受けるか、相手が消えるまで続いていく。

イジメが一旦はじまると、イジメを行う人数が爆発的に増えるのは、そういう心理が働くからだ。

ただ、今回は高校生である。バレればへたすれば退学の可能性もある。

そのリスクがあると分かっている、わざわざ、一線を越える人が、沢山でるのだろうか？とも思う。

美由は答えが出無のまま、家へと辿りついた。

近藤 ジェミニ

学園第二の派閥の長の名は、近藤 ジェミニという。

日本名と外国名が組み合わさっているのは、親がフザケて外人っぽい名前にしたわけではない。彼女は日本とイギリスのハーフなのだ。

ハーフだが、外見は日本人ぽい処は無く、どう見ても白人・アンブロサクソンであった。髪は白に近い細い金髪で、瞳は青いし、肌は赤みのある白だ。

見た目で英語がペラペラに見えるが、生粋の日本育ちなので、実際は日常会話程度しか話せない。それでも、高校の英語は得意であった。

今日の部室棟の空き部屋はジェミニの派閥が使っていた。

須王寺すおうじの派閥は、一般生徒の受け入れに積極的なので、どこなく雑味がある感じだが、彼女の派閥は一般生徒の受け入れが厳しいので、お嬢様方とその従者という感じで気品がある。

彼女達も今、ここで雑談の練習をおこなっていた。

ジェミニは須王寺すおうじの様に壁の華に優しくしたりはしない。出来ない子は元からいれない主義の人だった。

話題に拳がっていたのは、美由の悪口だった。

ただ、具体的に行動を起こそうと言う会話は無かった。

ここ二日ぐらいの美由にいたづらをしたのは、この派閥の人間なのだが、自分達の誰かがそんな事件を起こしたなどと思っておらず、いい気味という声が聞こえてくる。

ジェミニは制服の内ポケットにギリギリ入る本を入れていた。

本はアルファベットで書かれているが、どの言語かわからない。実際は英語で書かれているのだが、暗号化されていて、そのまま

では読む事ができないのだ。

『いいわね。この不満の充満。この本の効果が十分に出ている。』
そうジエミニは思った。

この本は魔法道具である。

この本の効力は、ほんのわずかだけ、人の悪意を増やすということも
のだった。

悪魔のささやきで背中を押すと言う程のものではない。本当にち
よつとだけ、悪意が表に出やすくなるというだけのものだった。

この本の力の代償は新鮮な血であった。

数滴、新鮮な血を垂らせば、ほんの数分ではあるが効果を発動す
る。

本の効果そのものの力は弱いが、集団が同じ悪意に満ちていれば、
少し悪意を増やすだけで、暴走する者が出る。

彼女は自分の手を汚さず、命令を出さなくとも、兵隊が勝手にや
つてくれる状況を作り出していたのだ。

『さあて、今度は誰が私のためにやつてくれるのかしら？』

教科書を買いに行く。

美由は家に帰り、お金を持って、教科書を買に行く。

教科書は普通の本屋でも売っている場合があるが、滅多にない。そのため、教科書の専門コーナーがある本屋に行く必要がある。美由の住んでいる町にはその専門コーナーがある本屋が無いが無い。よって教科書がある本屋まで買いに行く必要がある。

バスに乗り、電車を乗り換え1時間程かけて、大きな町へとやってくる。

移動の間も、英単語の暗記本を読んで勉強をかかさない。

美由は教科書を買、直ぐに電車に乗ってうちへと帰る。

正直、時間の無駄だと思うが、教科書が無いのでしかたがなかった。

美由のウチの近くまで来た頃には、日が暮れ、すっかり暗くなっていた。

彼女のウチの近から一番近いバス停は、国道沿いにある。上下それぞれ一車線の計に車線で両端に広めの歩道がついており、歩道に食い込む形でバス停がある。

美由はバスから降りると、バス停に据えられたベンチに傷だらけの黒猫が座っていた。長くて細い尻尾をプラプラ振っている。

「おかえりなさいませ、魔法少女様。何処にいらしたのでしょう?」

「教科書を破かれたので、買いに行っていました。」

「大変ですね。」

「全くです。3時間も時間を無駄にしましたし。」

美由は自分の家に向かい歩道を歩きはじめる。

黒猫はベンチを降り、美由の横に並ぶ。

「そういえば、もう一人の魔法少女様なんですが。」

「朋ちゃんですか?」

「そうです。昨日・今日と、そこら辺を走っていましたよ。かなりゆっくり走っていましたけど。」

「へええ。」

「きつと、あなたの役に立ちたいから、頑張つて鍛えているんでしょうね。」

「朋ちゃん……。」

それを聞いて、美由のギスギスしてた心が、晴れた気がした。

「朋ちゃんは、私にとっての幸運の女神様だな。これで、また戦える。」

近藤ジエミニの登下校は、車である。

黒塗りの高級外車で送り迎えされる。本日は派閥の集まりがあったので、帰りが遅かった。

車が国道を走っていると、私服に着替え国道を歩いている美由に似たシルエットの女性に気がついた。隣には黒い猫がいる。

黒い猫は化け物なので、通常の状態のままでは、普通の人間には見えないはずだ。だが、彼女には見えていた。

「あの子、こんな時間に、こんな処で何をやっているのかしら？ それにしても、ダサイ男みみたいな服装ね。」

ジエミニは自分が魔法の道具を使って、一線を越えさせた人たちが破いた教科書が使えなくなったので買いにいったという答えには辿りつけなかった。

「それにしても汚い猫だったわねええ。彼女の飼い猫かしら？ 散歩させてるのかしら？ 犬では無く、リードもつけてないのに、それはないか。でも、確かに彼女は、あの猫と一緒に歩いていた。」

猫の話題

翌日になった。

6月である。衣替えの月だ。学園は中間服を推奨している月だ。

中間服と言ってもジャケットを脱ぐだけなのだが。

学園が推奨しているからと言って、皆が中間服に変わるわけではない。

すっかり、忘れているモノもいれば、趣向の問題で変えないモノもいる。

この学園の場合、冬服より中間服の方がカワイイので女子に人気がある。そのため中間服の入れ替えは早い。ただ、中間服より夏服の方が人気があるので、秋の方は中間服の時期が終わるまで夏服で通す子もいる。

そして、この時期の名物といえば、3年のスカートが一気に短くする人が増えるという事だ。5月はまだ、肌寒い日もあるので、するには早すぎるし、この学校では夏服と冬服のスカートは生地の見が違っただけなので、夏服を引っ張り出してミニにするのだ。1・2年がやると、目をつけられるのでやる人はほとんどいない。よって、3年生になったこの時期にミニスカデビューを果たす子が多く出るのだ。

美由は恥ずかしがり屋なので、ミニスカートなど論外なわけだが。

流石に美由のクラスは、トップクラスなのでミニにしている子は、ほとんどいなかった。

まあ、ファッションを捨てて勉強漬けになっている灰色の高校生の吹き溜まりの様な処なので、当然といえば当然なのだが。

派閥の長の一人がミニにしていた。近藤ジェミニである。

片奈にしる須王寺すおうじにしる、どことなく古風な考えがあり、ミニなど論外だという考えがあるのだが、ジェミニは違っていた。

だが、彼女はミニはしているが、冬服のままだった。

魔法道具の本を隠す必要があったからだ。だから、この時期恒例のミニデビューは果たしたものの、冬服という不思議な組み合わせになっていた。

朝のHRが始まる前、ジエミニが美由に話かけてきた。

美由は珍しい人に声をかけられたので、少しとまどった。もうひとつとまどったのは、ミニなのに冬服のままだという事だった。

「昨日の夜、学校の帰り道に車から、あなたを見たわよ。」

「夜？」

「はああ。どこででしょう。」

「国道よ。何してたの？」

「ああ、昨日、教科書が破かれたので、買いにいったんですよ。それだけです。」

「あら、では、あの仲良く歩いていた、きつたない黒猫はあなたのペットではないの？」

「黒猫？傷だらけの黒猫の事か……。おかしい。あの時は確かに人には見えなかったはず。」

「さあ、偶然私の横を通ったのかもしれませんが、ちょっと覚えてませんね。」

「そう。」

ジエミニは、美由にオカルト的キモさの噂を流すための材料に使えると思って聞いたのだが、シラを切られて心の中で舌打ちした。

「まあ、いい。ファッションのあのダサさだけでも、十分に使えるか。」

美由は彼女を良く見た。かなり大きな胸のラインの片方に何か四角いふくらみが見える。美由は文庫本かな？と思った。

鐘が鳴り、ジエミニは離れた。

美由は思った。

「おかしい。持久走大会の時に蛙主が見えていたのは私と朋ちゃんだけだと、蛙主は言っていた。前回の片奈さんの時は、彼女が呪

いの指輪を使っでいて見えないものが一時的に見えるようになったのではないかと、蛙主から聞いている。

『彼女は存在が薄いモノは見えないはず。でも、昨日の傷だらけの猫は見たと主張している。片奈さんの例を考えると、彼女も何か魔法的力を使っているのではないのか？』

美由は魔法の感知能力は無いに近い。

『まあ、いちいち調べててもしょうがないか。猫に言っと、彼女の身が危なそうだし。』

朋と本

休み時間、近藤ジエミニはトイレの個室の中にいた。

自分の左の人差し指の腹をみつめていた。

そこには、3ミリ程の傷があった。

本の力を発動するためには血が必要で、その血を本にあたえるために、自分でつけた傷だった。

彼女は針を取り出し、何の躊躇も無く、傷口に差してえぐり、本の表紙に指を押し当てた。

『これでよし。』

さて、今日はどんな、面白いモノが見れるかしら？

彼女は本を内ポケットにしまい、トイレを出ると、突然何かがつかつてきて、尻餅をついた。

ジエミニはぶつかってきた相手を見る。それは朋だった。

朋は大量のプリントを一生懸命運んでいたが、そこらへんにぶちまける。

朋は慌てて立ち上がり、大きく一礼をして「すいません」と、言った後、すぐに這い蹲り、プリントを拾い始めた。

そこに、みないない文字で書かれたカバーのとれた文庫本のような本がある事に気づく。

それは、ジエミニの魔法の本だった。トイレで内ポケットにしまったつもりだったが、内ポケットに入っておらず、朋がぶつかってきた時に落ちたのだった。

朋がその本を拾うと、本が青白い光を放った様に見えた。

ジエミニは起き上がり、本を乱暴に朋の手から奪い、高い声でどなりはじめた。

「何なのあんた？私を誰だと思っているの？この学園で二番目の派閥の長よ。それをあの程度の謝罪だけなんて。」

「すいません。次の授業で配るプリントを運んでいたら。」

「私はそういう事をいつているんじゃないの。ただ、平謝りして、私に気遣いをせず、プリントを拾い始めてるなんて、どういう教育うけてるの?」

「すいません……。」「
朋は泣きそうになっていた。

「何?泣くつもり?泣きたいのは私の方よ。自分が悪い事しといて何様のつもり?」

「すいません……。」「
誰かが、駆け寄ってきて、朋とジェミニの間に割って入った。それは美由だった。

「ちよつと、近藤さん。出会い頭にぶつかったのはお互い様ですよ。彼女はちゃんと謝っています。幾らなんでもその言い方は酷すぎると思います。」「

「な、なに、この私に口答えするつもり?」
美由は朋の顔を見る。

「朋ちゃん、いいからプリント拾って。」「
美由のその言葉に我を忘れたジェミニは、美由の顔を平手で思いっきりはたいた。

「何、私を無視して、勝手に許可だしてるの。」「
美由はジェミニの顔を見る。

「近藤さん。周りを見てください。人が見てますよ。」「
ジェミニは周囲を見渡した。大勢の生徒が自分に冷たい視線を向けているのが分かった。彼女は「ふん」と言いながら、教室へと立ち去った。

美由は這い蹲り朋と一緒に、プリントを拾い始める。

「朋ちゃん大丈夫だった?」
「はい、迷惑をかけてすいません。」「

朋は身を守るような感じだった。美由は朋の頭に手を置き、ポンポンと叩く。

「朋ちゃん。迷惑だなんて思ってないよ。私だって朋ちゃんに助

けられているんだから。お互い様だって。
「
朋は笑顔になった。」

ジェミニは自分の机に座り、深刻な顔で考え込む。

『何？私があんな事を言うなんて？本の効果なの？でも、あんなに強い効果ではなかったはず。周りの人は自分をどう思ったか、少し想像をめぐらせればわかる。高慢ちきなイヤな女と思われたはずだ。これもあの女のせいだ。』

本の効果

美由は自分が拾ったプリントの束を、朋に手渡した。

「美由先輩有り難うございます。」

「なんの、なんの。」

朋はちよつと、言いづらそうして話始める。

「美由せんぱい、今の外国人の様な金髪の女性何ですけど、本を持っていました。」

「本？」

「字が読めなかったので、良くわかんないんですが、文庫本2冊ぐらいの厚さの本でした。」

「それが、どうしたの？」

「ぶつかつた時、その本を落としたみたいで、私がそれを拾うと、青白く輝いたんです。」

「輝いた？」

「はい。魔法の様な感じでした。そしたら物凄い勢いで本を私の手から取って、怒りはじめたんです。」

「うーん。何か貴重な魔法の本だから、あんなに怒つたのかな？」

「わかりません。」

授業のチャイムがなる。

「教えてくれて有り難うね。」

美由は授業中少し思考する。

『朋ちゃんが言うには、彼女は魔法の本を持っているらしい。どんな本かは分からない。でも、朋ちゃんが握った時、光ったらしい。』

何かの効果が発動したのかな？でも、目に見えて何かあった様には見えなかったけど。プリントが散乱しているのと、いつもの近藤さんからは想像出来ないあの怒り方以外は。うーん良くわかんないなあ。人のプライバシーに突っ込んででもロクな事にならないし。まあ、本人の事は本人が何とかするでしょ。」

美由は割り切る事にした

ジェミニは授業中イライラしていた。

『駄目だ。イライラする。いつもの私なら、こんな感情抑えられないはず。なのに今日は駄目。あの小さな一年の女子が触った時、本が強く輝いた。あの効果なの？この本にはこんなに力は無いはずなのに。使い方は母から習った。でも、自分が暴走してあの女を襲ってしまいそうになるくらいリスクがあるなんて聞いて無い。いっそ、この本を捨ててしまいたい。でも、これは、我が家が今の地位を築く事の出来た大切な家宝。耐えなくては。』

美由にしる朋にしる本が強く効果を発揮した時に、魔法少女の魔法抵抗力のおかげで影響は受けていなかったが、ジェミニにはそんな力は無い。

だから、彼女は我を忘れて、朋を怒鳴りつけたし、美由を平手でひばったいた。

既に、本の効力は切れているのだが、効果が発動してすぐに朋の手から本を奪い返し、胸ポケットにしまったので、モロに影響を受け、その副作用に苦しんでいるのだった。

いつもより、強い力は、他の生徒にも影響を及ぼしていた。

振り上げた拳は

昼休みになった。

美由は周りをお嬢様方に取り囲まれていた。

『前にもあったなこの展開……。今回は別の方々ばかりだけど、しかも、如何にもお嬢様ばかり。』

彼女達のリーダー格が話しはじめた。

「桜間さん来ていただけるかしら？」

『さて、どうしようか？』

美由はちよつと思案する。そして、ひとつの考えが浮かんだ。

「拒否します。」

それが、彼女が出した答えだった。そして言葉を続ける。

「用があるなら、ここでお願いします。」

その言葉が終わる前に腕をつかまれ、無理やりひぱつられ、立たざるを得なくなる。

「何をするんですか？」

「いいから来るのよ。」

そう言つて、二人の人間にそれぞれ片腕をつかまれ、強制連行された。

強制連行された先は裏庭だった。

そこには桐野が猫を見ていた。

桐野は複数の女性に無理やり連れてこられている美由を確認する。リーダー格の女子が桐野に話しかける。

「すいません、桐野さん。ちよつと、ここから立ち去っていただけますか？」

桐野は状況を観察する。美由は別に助けていう顔をしていない。

桐野はニツコリと笑みを浮かべた。

「いいわよ。立ち去ってあげる。」

彼女は歩み始める。

「桜間さん。頑張ってね。」

美由は何も答えなかった。

両腕を二人の人間に抑えられているのだから、下手に話すと何が起きるかわらないのでしかたない。

桐野が立ち去ったのを確認し、お嬢様方は美由をフェンスごしに立たせ、取り囲む。

『流石に、これだと無傷で逃げ切るのは無理だな。』

「さて、何ですか？私は拒絶したのに、無理やりこんな人気の無い処につれてきて。」

リーダー格の女子は美由の腹にグーで拳を入れる。

美由は反射的に回避行動をとり、体をくの字に曲げる。

所詮、鍛えておらず、殴り慣れていない女性の拳なので、鍛えている美由には全く利かないのだが、反射行動で大きくダメージを与えたように見える。

彼女は美由のむらぐらをつかみ、状態を起こさせ、フェンスに押し付ける。

美由は抵抗をせず、相手のなすがままにされる。

「生意気ね。あなた。」

美由は無言のまま、相手を見ていた。

リーダー格の女子は空いている手で、美由の頬を3発続けて平手打ちする。

美由は反射行動で、ダメージを受け流すが、平手は痛かった。

「何とか言いなさい。」

美由は無言のままである。

別に恐怖に震えて、無言でいるわけではなかった。正直、対応に困っていた。

『どうするかなあ。本人はいたって真面目にやっているんだろ
うけど、正直この程度だと対応のしようが無いのだが……。』

襟首を掴んだまま、強い力で美由のあごに押し当てる。
『むー。ポイントがずれてるんだよなあ。相手を息苦しくさせ
るなら、もっと下なんだけど。』

「な・ん・と・か・い・い・な・さいよ。」
そういつて、襟首を掴んだ手を離す。美由は倒れこみ、息苦しか
った演技をする。

『私。何て猿芝居やってるんだろう……。』
他の女子が口を開く。

「ねええ。彼女ひん剥いて、写真とらない？」

「いいねええ。インターネットにアップして世界中にばら撒こう。」

「やめてください。タダではすみませんよ。」

彼女達は、集団で美由をつかみ、強引にひっぱる。ベストとカ
ッターシャツのボタンが弾け飛び、美由のブラジャーが露出する。

美由は胸を隠した。

その姿をシャメで撮る「はい送信。」

『ああ、やっちゃたああ。私はしらないぞー。』

「このまま、素っ裸の写真も撮っちゃおうよ。」

そういつて、集団で押さえこまれ、服を強引に引っ張られる。

美由のカッターシャツの片腕がとれてしまった。

その瞬間後ろから大きな声が聞こえてきた。

「あなた達、何やっているの？」

その声の主は須王寺麗菜すおうじだった。

裁縫

須王寺麗菜は、美由に走るよる。

「桜間さん大丈夫？」

「ええ。」

須王寺は取り囲んだ女子を睨みつける。

「あなた達、取り返しのつかない事をしましたね。学園はあなた達を放っておきませんよ？」

その言葉が、数で優位に立っていたはずのお嬢様達を劣勢に追い込んだ。

「このまま、桜間さんが警察に駆け込めば、あなた達は犯罪者ですよ？集団リンチなんて。」

「須王寺さん、ですが・・・。」

「ですが？あなた達は犯罪を犯したんですよ？それを正当化する理由があるというの？」

美由が口を開く。

「すいません。須王寺さん。集団リンチだけではなく、私のいじめられている写真をインターネット上で既に公開したそうですよ。自分の手で証拠を残すなんてバカなことしましたね。」

「そこまで・・・。」

彼女達は黙っていた。

「服やぶけちゃいましたねええ。ウチの学園、無駄に制服高いんですよ。これ5万くらいするんですよ。このままじゃ私、授業も受けられないんですけど。しかも、私のサイズって他の人と合わないし先生になんて説明すれば。」

自分達が有利になると思ってやった事全てが、自分達に不利な証拠として襲い掛かっている。

須王寺は美由を見る。

「桜間さん。お願いがあるのですが？」

「はい」

「彼女達を許してはいただけませんか？」

「イヤです。許すと発言した時点で、彼女達の罪が清算される事になるので。ただ、判断を先に保留にし、今後、何も無ければ心に閉まっておく分には問題ありません。」

須王寺はお嬢様方を見る。

「あなた方、聞いて？それで、問題がありますか？」

「いいえ、須王寺さん。」

「聞きました？桜間さん。」

「はい。」

「あなた達は去りなさい。後は私が何とかするから。」

お嬢様方は何も言わずに立ちさった。

「さて、どうしましょうか？この制服。このままじゃ授業が・・・

」

「私のジャケットはおれば問題ないんじゃない？」

そう言ったのは、近くで覗き見していた桐野だった。

「でも、カッターシャツのボタンが。」

桐野はポケットから裁縫用具を取り出す。

「つけりゃあいいじゃん。」

3人で美由の制服の修復作業を始めた。

美由は、桐野のジャケットを羽織り、カッターシャツとベストを

脱いでいる。

「幸い、破けたのがカッターシャツだけでよかったです。」

そう、須王寺は言った。

「あいた。」

そう言ったのは美由だった。針を自分の指に刺しただった。美由のボタン付けはかなり駄目だった。

須王寺は美由から服を取る。

「万能的桜間さんも裁縫は苦手の様ね。」

「あはは、お恥ずかしい。」

須王寺はスイスイとボタンを縫い付けていく。

桐野はカッターシャツのボタン付けが終わり、カッターシャツの袖の縫いつけをやっている。袖口はマチ針がいっぱい刺さっていた。

「すいません。私の事に巻き込んで。」

二人は同時に美由に反論する

「「桜間さん。簡単に謝らない。」」

須王寺と桐野はお互い見合って、笑った。

6 話終わり

裁縫中に桐野が話し始める。

「それにしても、彼女達もバカね。集団で、あんな強引に一人の女性を引つ張つて来れば、完全な拉致監禁よ。」

「私が拒否したので。彼女達も仕方なかったんでしょね。」

「文句があるなら、人前であろうと、直接言えばいいのよ。来る事を拒んだ桜間さんの判断は正しいわね。」

「そう言いながら、それを見ていた桐野さんは満面の笑顔でスル―しましたよね。」

「だって、あのままで終わらすと、警察に行っても相手にしてもらえないでしょ。どうせなら、相手にしてもらえる位に酷い状況になるまで放置しようと思つて。」

「酷いですね。」

「あら、あの時、あなたつて、随分余裕そうだったわよ。それに、関わるなつて顔をしてたから。別にいいじゃない。」

『確かに、暴力沙汰になる可能性もあつたから、あの時は、そうだったなあ。』

「それにしても、脅すだけならともかく、問答無用で暴力とはねええ。脅すだけなら口裏を合わせれば何とか逃げられるだろうけど、暴力となるとそういうわけにもいかないから。それに服を破いて、写真をインターネットに公開して、証拠を残すなんて自分達で退路を断っているのと同じよ。もし、これが問題になれば良くて全員、長期謹慎、下手すれば退学よ。」

「あそこで、須王寺すおうじさんが入つてこなかったら、桐野さんはどうしたんですか？」

「先生を呼び行つてたでしようね。でも、随分余裕そうだったら、もう少し、見てたわね。」

「桐野さん。桜間さんは女の子なんですよ。顔に傷でもつけたら

大変でしょう。そんな計算ばかりでなく、もっと早く助けるべきです。」

「確かに。ごめんなさい桜間さん。」

「いえいえ。」

『私もほとんど同じ計算してたから、怒る気にはなれないなあ。』

」

裁縫が終わり美由は桐野のジャケットのボタンを止めた。

胸の辺りにシワがより、窮屈そうだった。

「あら、これは不愉快ね。おなかの辺りは問題無いのに、胸がそんなに窮屈そうなんて。」

この事から桐野は幼児体系であることがわかる。

「そんな。私、骨太なのできつと、横が広いために、こんなになるんでしょう。」

「まあいいわ、でも、それじゃあ逆に目立つから、ジャケットのボタンはずしたら？」

美由はジャケットのボタンをはずした。

ジャケットのボタンはキッチリ止める主義の美由は、自分が裸にされた様な、無防備さを感じてしまう。美由は少し前かがみなり、胸を隠す様なしぐさをする。

「桜間さん。恥ずかしがっていきませんか。逆に胸に注目が集まりますよ。」

そう須王寺すおうじが言う。

「はい。」

「もつと、堂々としなさい。弱そうな態度をとったら、さっきの様につけこまれる元ですよ。」

「そうそう。堂々と王子様の様に凛々しくいなさい。どちらにせよ、もう、日陰には戻れないんだから、あきらめなさい。」

美由はシユンとした。

美由はこれまで、日陰の奥を進んで歩くタイプの人間だった。なるべく、日のあたる場所に居たくないと思っていたが、どうも、戻れないらしい。

自分で願ったわけではない。

どちらかというと、逆を願っていたのだが、皮肉なものである。

状況が勝手に進んだため、願いと真逆の方向へと追いやられてしまったのだ。

7話はじめ

近藤ジェミニは、昼休みになって直ぐに早退していた。

当然、自分の派閥の人間が美由に暴力を振るった事など知るよしもない。

彼女は黒塗りの高級外国車の後ろの席で、本を見つめていた。

『この本はリスクが高すぎる。』

そこに、突然、携帯が振動しはじめた。

相手は自分の派閥のNO2の女性だった。ジェミニは通話ボタンを押し携帯に出る。

「どうしたの？え？派閥の子達があの子へ暴力？そう、須王寺さんが割って入って事なきを得たの。」

ジェミニは携帯を切り、強く握り締めた。

『本の効果が強く出すぎたのか……。あの女へはどうでもいいけど、須王寺さんに迷惑をかける結果になった。もう、この本を使うのはよそう。リスクが大きすぎる。このままいけば、私の派閥が壊滅してしまう。それは避けなければならぬ。』

ジェミニは、ある1シーンを思い出す。それは、朋が本を握った時に見えた輝きだ。

「なんだったのかしら、あれ……。」

放課後、朋は走っていた。

赤いジャージに、長くて細いストレートの黒髪を一本に束ねている。結んでいる位置から下はあまり膨らみが無く、一本の線の様になっている。そのポニーテールを左右振りながら走っていた。

相変わらず、歩く様なペースで走っていたが、初日みたいに直ぐにバテるといふ事は無くなった。でも、他の人に比べればまだまだバテるのが早い。

『美由先輩が言った通りやって、距離が伸びているのは実感出来て、達成感はあるけど、まだまだ全然駄目だ。あうー。』

朋が道路の真ん中で足を止め、せいぜい言っている。

ブロック塀から、傷だらけの黒猫が降りてきた。

「これは、これは、魔法少女様。何をしているのでしょうか？」

「ぶー。見て分かりませんか？体を鍛えているのです。」

「そうですね。あまりにゆっくりだったのです。」

「良いんです。美由先輩に教えて貰った方法なので、しかも、ちゃんと、成果が出てるんですよ。」

「何かそういう風には見えませんが。」

「あうー。他の人と比べるとそうですね。運動神経0の私的には物凄い進歩を遂げているのです。」

「なるほど。そう言えば、もう一人の魔法少女様なんですが。」

「美由先輩がどうしたんですか？」

「学校の昼休みに複数の女子に囲まれて暴力を振るわれたそうですよ。魔法少女様は一切抵抗しなかったとか。」

「ええ。美由先輩大変なのです。怪我とかしてたら大変。」

「あの方が、もし怪我をしても、自分で治せるので問題ないと思いますけど……。」

「そういう事ではないのです。あの綺麗な顔に怪我の跡なんてついたら私が困ります。美由先輩怖かったですね。」

「大丈夫ですよ。もう一人の魔法少女様はあれ以上の修羅場を幾つも抜けているので、ロクに鍛えもしていない女子数人に囲まれたからといって、恐怖に感じる事はないでしょ。私が聞いた話では平然としてたらしいですよ。」

「気丈に振舞ってたんですね。」

「そうでも無い様ですよ。何も反論もせずに、されるがままだったみたいですよ。その時、あなたの学校の派閥の一番目の長の人助けが入り、その場はおさまったそうですね。」

「須王寺おねえ様が……。後でお礼を言わないと。」

「言っても迷惑なだけだと思いますよ。」

「ぶー。さつきから否定ばかり。」

「すいません。こつという性格なもので。」

「私、行きます。サボってたら、勉強する時間が足りなくなるので。」

「頑張ってください。」

犬に絡まれる。

朋が走っていると、一方通行の細い道路の真ん中にブルドッグが座っていた。

彼女は犬はTVで見る分にはかわいいと思うが、怖いからその場にはいて欲しくないというタイプの子だった。

朋はブロック塀に張り付き、そっと、そっと、ブルドッグの横を抜けようとする。

ブルドッグは彼女の怪しい動きを追いかけるように、顔を移動させる。

『こわいよー。』

ブルドッグは口を開く。

「こら、その小娘。失礼でしょ。」

「あう、しゃべった。」

「私が見えてるんだろ。まるで汚い物を露骨に避けるように。」

「ごめんなさい。犬さん怖くて。」

「怖いなら引き返すとか、あるじゃん。」

「うー。それは思いつかかったです。」

「あんた見えているなら、私と一緒にご主人探しを手伝いなさい。」

「ええ、イヤです。」

「ワガママ言うんじゃないやありません。」

「ワガママ言ってる無いもん。」

「そんな事言っているとずっと、何日もあなたの後ろ着いていきますよ。」

「あうー。それはイヤなのです。」

朋は渋々犬の要求を呑んだ。

「何処に行けばいいですか？」

「知らない。それを知っていれば、あなたになんて頼らない。」

「ぶー。それじゃあ、どうしようも無いのです。」
「私の首輪の裏に住所が書いてあるから、そこに連れてけばいいのよ。」

「あうー。触るんですか？」

「私が首輪取れると思うの？」

「むりそうなのです。」

朋は恐る恐る、ブルドックの首に触れ、首輪をはずす。

首輪を確認すると、学校よりちよい山に入った処の住所だった。

「わかりました。着いて来てください。」

そういつて、朋は学校の方向へ向かう。

「こら、小娘。私を抱いて行きなさい。歩きつかれて動きたくないの。」

「ええー。怖いです。」

「暴れたり噛んだりしないわよ。」

朋は渋々、犬を抱き上げる。ちよつと重い。

「うー。少し重いです。」

「私、これ以上存在を薄くできないから。軽くはなれないわよ。」

「存在を薄くすると軽くなるんですか？」

「軽くなるよ。」

「へええ。」

朋はブルドックを抱きかかえながら、歩き始めた。

ブルドッグ

「がうー。」

「あう。怖いのです。」

朋は抱いている犬が唸る声を聞いて、脅える。

「あんた、本当に犬が苦手なのね。」

「うー。犬さん酷いのです。そんな事していると、ウチまで連れて行きませんかよ。」

「その時はあなたのウチにお世話になるから大丈夫。」

「あうー。ウチはペット禁止なのです。」

朋は自分の腕の中にいるブルドッグを見る。

そして、ひとつ不思議に思った。どうして迷子になったんだろうと。

「犬さんは、どうして、迷子になったんですか？」

「ウチの近くに、大きな野良犬が居て、それに襲われたのよ。全力で逃げて、何とか助かったと思ったら、道に迷ってしまったって、適当に歩いてたら疲れたんで休んでいたら、あなたが通りかかったのよ。」

「へええ。で、その野良犬さんも、化け物さんなんですか？」

「違うわよ。どうして？」

「だって、存在が薄いモノって、化け物にならないと見れないんじゃないですか？」

「あんただって、見えてるでしょ。化け物じゃないのに。何事も例外つてあるのよ。犬は人間みたいに感覚が弱く無いから、人間より見えるヤツが多いのよ。それに存在が近いと、見えやすいのよ。」

「知らなかったのです。」

「それに、もうひとつ。私、化け物として、中途半端なのよ。これ以上薄くなれないし。あんた最初みた時、私を化け物だと思わな

かったでしょ。」

「確かに。」

「それにしても、随分見える目なのね。そういやあ、あんた。犬は苦手なくせに、化け物は随分なれてるのね。はい、お友達もいっぱいいるのです。この前はカメさんと仲良くなりました。」

「へええ。」

朋は、学園近くまでやってきた。

向こうから、学校指定のジャージを着て走ってくる女性がいる。

「おおい。朋。」

その声は、佐藤 絵里の子だった。

朋は抱いていた犬を下ろす。

「あ、絵里ちゃん。」

彼女は朋走りよって、頭を撫でる。

「あうー。絵里ちゃんなに。」

「いや、ここにちびっ子がいたんで、腕が勝手に。」

「ぶー。気にしてるのに。」

「悪い悪い。処で朋は何してるの?」

「私は素敵な女性になるために、走って体を鍛えてるのです。また、絵里は朋の頭を撫でる。」

「偉いぞ、ちびっ子。でも、見た感じ全然汗をかいて無し、歩いていたから、それじゃあ駄目だぞ。」

「あうー。絵里ちゃんはどうしたの?」

「私?私は、部活。」

「確か、バレーボール部だったよね。体育館でやらないの?」

「一年で才能が無いヤツはずっと、走りこみと後片付けだけさ。」

私、バレーは高校からだし、5月から始めたからまだ、練習ではボ

「ルにさわってもいないよ。」

「部活大変そうなのです。」

「うちら4人組みで部活に入って無いのは朋だけだぞ。」

「みんな、あずさちゃんが入ったのをきっかけに、みんな入ったもんね。でも、私には美由先輩を放課後追いかけるという大事な仕事があるのです。」

「でも、最近は、いじめに巻き込ませたくないからって桜間先輩に会えないんだろ。」

「あー。それは言わないでええ。」

「まあ、噂だけど、今日の昼休みも結構大きなのがあつたらしいからねええ。いつになったらちびっ子の願いが届くのやら。」

「その日が来るまで頑張るのです。」

「じゃ、私に行くよ。」

「じゃあねええ。」

絵里は走り去っていた。

「いいなあ。絵里ちゃん。あんなに走れて。私も走っているけど、あんなに走れないよー。」

ブルドッグが朋の足をツンツンする。

「そんなのはどうでも良いから、とつとつ、ウチに連れられてくれない?」

坂道を占領している犬

朋は学園の横を通る道を進み、学園の裏手にある坂道までやってくる。

その坂道はかなりの急勾配で、一歩、歩くだけでもうんざりしそうな傾斜であった。

道は車が1台通れるぐらいの幅で、学園の裏庭に沿って200m程続いており、そこから山手に曲がっている。学園側は崖になっており、反対側の山手には3件の家が強引に建てられている。

「うー。ここまでじゃ駄目ですか？」

「駄目。私のこの短い足で、ここを登れと言うの？私の家はこの坂を登って、そこを曲がって、まだまだ上にあるのよ。」

「面倒くさいのです。」

「それに、私を追い掛け回した犬はそこを曲がった処にいたの。まだ、いたらどうするの？」

「あうー。イヤな事を聞いたのです。」

朋は坂道を登り始める。

見た目と同じく、一歩登るだけで、疲れる坂道を踏みしめながら登っていく。

『私、絶対ここには住めないな。』

彼女は坂道の曲がり角までやってくる。

曲がり角にある家はコンクリートブロックの壁があり、朋はそこから顔を出し、曲がり角の向こうを覗いた。

そこには、ロットアイラーという筋肉質の大型犬が道に真ん中に座っていた。

朋は頭を引っ込める。

「あうー。犬さんがいたのです。しかも、凄く、怖そうな犬さんなのです。」

「私、ウチここを超えないと、いけないの。人間なら襲わないか

もしれないから。早く行つてくださるかしら。」

「無理です。噛まれたらどうするんですか。」

「大丈夫よ。多分。」

「あうー。信用ならないのです。」

朋は、坂道を渋々、歩きはじめた。

朋が見えても犬が動く気配は無い。

彼女は、犬を避ける様に道の端ギリギリを歩きはじめる。

犬は顔をあげ、朋に顔を向ける。

更に歩き続けると、犬が「うー」と、唸りはじめ、「ぼづ」と

回吼えた。

『怖いのです。』

無理に歩くと、立ち上がり、「ぼづぼづ」と二回吼え、足をピク
リと動かした。

朋はパニックになり、後ろを振り返り、坂道を網ダッシュで下り
はじめた。

「こら、逃げるな。」

「あうー。無理なのです。」

坂道を下りきつて後ろを振り返ると、犬は追いかけてこない。

『どうしよう・・・。』

その時、どこからともなく、声が聞こえてきた。

「おお、魔法少女その2ではないか。こんな処で何してる?」

そこにいたのは蛙主だった。

役所に電話してみる。

蛙主は、側溝の中に隠れるようにしていた。

「何この蛙？」

ブルドッグは蛙を不思議そうに見ている。

蛙主は犬に見つめられて、全く動かなくなった。

「蛙さんは、蛙主さんと言って、ここらへんの偉い化け物さんなのです。」

「あらそうなの。私、外の化け物事情には疎いの。」

蛙主はまだ、動けない。

「どうしたんですか？蛙さん？何もしゃべらないけど。」

「その犬が怖いのじゃ。」

「あら、失礼ね。こんなカワイイのに。あんたみたいなまずそうな、襲って食べたりにしないわよ。」

「ここの上に犬はワシを食べようとしたぞ。信じられるか。」

「あいつは、あいつ、私は私。あんな下品そうな犬と一緒にしてもらっては困るわ。」

朋は犬を道路に下ろし、蛙主を捕まえ、頭に乗せる。

「これなら、大丈夫でしょ。犬さんは歩いてくださいね。」

「仕方無いわね。感謝しなさい。この私が歩くのですから。」

「なんじゃ。このお高く留まっている犬は。」

「さあ。ところで、蛙さんは、何をしてるんですか？」

「こここの坂道の上に犬が、化け物の通行を妨害しているとクレームがあつてなあ。何とかしてくれと要請があつて、話し合いにきたのじゃが、問答無用で食われかけて、ここまで逃げて来たのじゃ。」

「役に立たない化け物ね。」

「お主が何とかしてくれるなら、お主でもかまわんだぞ？」

「私があんな凶暴そうな犬に勝てると思つて？」

「ブルドッグは、元々、格闘犬じゃる。」

「幾ら格闘犬として品種改良されたとはいえ、限度があります。」

「ところで、どうするつもりなんですか？」

「そうじゃなあ。今思案中じゃ。」

「思案中ですか。」

「戦力を集めれば、倒せない事はないんじゃないか。あれは普通の犬なんでなあ。下手に我々が倒すと人間が化け物退治をはじめ可能性があるから。そうは言っても、ここは化け物達にとつては山と街を繋ぐ重要な道じゃから、このままにも出来んし。」

「あの一。役所に電話してみるのはどうでしょ？」

「人間に頼るの？」

「ただの野良犬がうろついて危険な場合、役所が何とかしてくれるって聞きました。」

「まあ、それしかないかのう。」

朋は携帯電話を持ってないので、学園まで行き、学園内にある公衆電話の処までいき、役所に電話をかける。

「あの一。役所でしょうか？野良犬がうろついてとても危険なので何とか。あ、ハイ。保健所の方ですね。」

朋は公衆電話の受話器を下ろす。

「どうじゃった？」

「直接、保健所の方にはけなせだそうです。」

朋は保健所に電話をする。

「あの一。保健所でしょうか？はい、野良犬がうろついていて危険なので、ええ。そこです。はいはい。」

朋は受話器を下ろした。

「今度はどうだったの？」

「朝から、電話があつて、一度行ったそうなんですが。その時は犬が見当たらなかつた。明日もう一度来るそうです。」

「ええ。だつたら、私はどうなるの？」

「ここでも野宿でもすればどうじゃ？」
「イヤよ。野宿なんて。」

学校の見張り役の猫

1匹と1頭と一人はひとまず、公衆電話がある校舎を出て、裏口の方へと向かう。

「私は家に帰りたいの。」

ブルドッグがワガママを言う。

「よわったのう。」

「あうー。でも、あそこの坂道、犬さんが塞いでて通れないのです。」

朋も蛙主も弱りはてていた。

そこに、誰かが声をかけてきた。

「困るにゃ。私の持ち場にこんな化け物さんがぞろぞろとこられては。」

3人が振り返ると、そこには茶トラのメス猫がいた。

朋は一瞬ビクとする。

自分が魔法少女になったきっかけの猫で、2度襲われた経験があったからだったからだ。

「魔法少女さん。その説は迷惑をかけたにゃ。ごめんなさい。」

「いいえ。元に戻られたんですね。良かったのです。」

この猫は暴走して、大型犬ぐらいの大きさになって本当の化け猫の様な姿になった時、朋を襲った事があるのだ。ここにいる朋と、もう一人の魔法少女と蛙とウサギの活躍で、何とかこの猫を元に戻すことが出来た。

「この通りピンピンですよ。」

朋の頭に乗っている蛙主が猫に話しかける。

「処で、学校のすぐそこに居る犬について聞きたいのじゃが。」

「今朝からずっと居るにゃ。化け物は襲うけど、人間は襲わないにゃ。」

「私はさっき、襲われかけたのです。」

朋が口を挟む。

「それは、私を抱いてたからじゃない？」

ブルドッグはそう答えた。

「役所の人間がやって来たけど、その時はすぐに隠れたにや。」

「ところで、あれは何じゃい？」

蛙主がメス猫に聞く。

「数日前からこの周辺に退魔師が来ているという情報は来てて、どうも、その退魔師の犬みたいにや。特殊な訓練をつんだ対化け物の犬みたいにや。上の命令で、関わるな。会ったら逃げるとしか聞いてないにや。」

「弱ったのう。倒すわけにはいかんようじゃな。」

「ずっと、あそこにおいて、化け物に会っても追い払っているだけみたいだから、近寄らなければ問題無いにや。」

「何が目的なんじゃろう？」

「知らないにや。近づかなければ、そのうちいなくなるんじゃないにや？」

「まあ、他の連中には知らせておくかの。」

犬が割って入る。

「ちよつと、私が困るじゃない。さつきから言っているように私はウチに帰りたいの。」

「むー。だったら、陽動作戦でもするか。魔法少女頼むぞ。」

「ええ。」

朋は蛙主の発言に驚いた。

陽動作戦。

茶トラのメス猫が語りはじめる。

「陽動作戦かじゃ？でも、自分は上からの命令があるんで、行けないじゃ。」

「わかっておるわ。」

「まあ、私を助けないなんて、生意気な猫ね。」

「助ける道理が無いじゃ。」

「可愛ければ、助けるそれが、道理でなくって。」

『そんな無茶苦茶なああ。私はウチまでついてこられるのがイヤだから付き合ってるだけだし。』

朋はそう思った。

「そんな事より作戦じゃが、あの坂道の角の家の裏側から、この犬を行かせる。」

「はい」

「あの角の家のブロック塀は高いから、この犬じゃ登る事ができんじやる。そこで、魔法少女その2が手を貸してブロック塀に乗せる。」

「分かりました。」

「その後、わしを頭の上に乗せ、ちゃんとしたルートで犬に会い、犬の気を引く。」

「ええ、犬の側まで私も行くんですか？」

「もちろんじゃ。ワシじゃ怖くて、動けなくなる。しかも、足が遅いから、噛まれる可能性もあるじゃろうが、来たら全力で逃げるのじゃ。」

「うっ。」

「で、あの犬があなた達を襲っている間に私が抜ければいいのかね？」

「そういつ事じゃ。」

猫と別れ、二匹と一人は坂道の角までやってくる。

朋はブルドッグを持ち上げ、ブロック塀の上に乗せようとするが、ちよつとだけ届かない。

「うー。届かないのです。」

「頑張りなさい。」

朋はジャンプする。置けそうなのだが、犬を置けない。

「もう少しよほら。」

何度か挑戦し、何とか犬を塀に置いた。

「有り難うね。後は、あなた達次第よ。」

そう言つて、犬はブロック塀をゆっくり優雅に歩きながら家の裏に回つた。

「さて、魔法少女その2よ。ワシを頭の上に乗せてくれ。」

「本当に大丈夫なんですよね？」

「ワシにまかしておれ。」

蛙主は何か自身満々だった。

朋は蛙主を頭に乗せて、坂道を登る。

そこには相変わらず、犬が陣取っていた。

犬は、蛙主を確認すると、問答無用で立ち上がり、走り出してきた。

「魔法少女逃げろ。」

「ええ。」

朋は体を切り返し、慌てて坂道を下る。

犬は猛スピードで、朋に噛み付こうとするが、一瞬朋が早く動いたので噛まれずにすんだ。

犬はフェンスにぶつかり、高い声で鳴くが、直ぐに方向を変え、朋に走りより、簡単に朋に追いつく。

「魔法少女、体を横に切れ。」

朋はまっすぐ走っていたが、すぐに方向を変えるが、足が絡まりコケる。

頭にいた蛙主は坂道に投げ出され、コロコロと転がっていく。

犬は朋に襲い掛かるうとはせず、迷わず、蛙主を追う。

蛙主は起き上がり、二本脚で立って走り始める。

「何でいつもワシだけなんじゃあ。」

蛙主はぎりぎりの所で、側溝へと逃げ込んだ。

犬は側溝に首を突っ込むが、あきらめて、元いた位置へとゆっくりと帰っていく。

犬はすれ違う朋に何の関心ももたず、スルーして行き過ぎた。

「ふう」

退魔師の女

夜になった。

学園そばの坂道を占領している犬に近づく女性がいた。

歳は30に近くの女性で、明らかに日本人なのだが、髪はポリウム（注）の無いぺつたりとしたストレートのショートカットを強引に金髪にしており、朱色を少し黒に振った様な色の修道服ともとれるカツコウ（注）をしていた。

犬は女性には擦り寄ってくる。

女性は犬の頭をさすりながら話かける。

「私の方はボウズ。あんたの方はどうだった？と、言ってもあんたはしゃべれないか。」

女性はタバコぐらいの大きさのプラスティックケースを取り出し、それを空け、犬に差し出す。

そこにはドッグフードが入っていた。

犬はそれにかぶりつく。

「よしよし。」

彼女はそういいながら、犬の腹をさする。

「この街は、結構、化け物多いけど、チキンでチンケなヤツ等ばかりね。化け物といっても、見つけるヤツ見つけるヤツ動物のモドキばっかで、いかにもってヤツが全然いなし、こんだけハツキリ退魔師ですって主張しているカツコウしているのに、私を見るなり逃げるやつらばかり。あまりに退屈なんでチンケなヤツでも狩つてやろうかと思つたら、すつかり身を隠して、全然、会いやしない。もう五日もこの街うるついているのに、化け物が悪さしたっていう情報すりや入らない。全く、化け物なら化け物らしく、悪さしろつてーの。こんな沢山いるんだからさあ。」

彼女は地面にお尻をつける。

「ああああ。これじゃあ。おまんま食い上げだよ。退魔師って化

け物が悪さをしててさ、被害にあっている家から、大金を巻き上げるのが仕事じゃん。それが、この街が全然よ。ねえ聞いている？」

犬は餌をバクバク食っているだけである。

彼女は道路を見渡す。

「ここは化け物の通り道なんだから、ここ塞いでいりゃあ。あんたを襲う化け物もいると思ったんだけど、どうも、全然いなかったみたいね。よわっちい動物の化け物狩っても、引き取ってくれる場所に連れてくだけで、赤が出るし。しかも、動物モドキってさあ。

少し痛めつけるだけで、簡単に存在がなくなるじゃん。あそこまで連れてつてもそこまで生きていてくれるか保障ないし。あんたが強い化け物を捕らえてくれりゃあさあ、その金でしばらく遊べるのにねええ。」

犬はケースの中身を全部食べ終えた。

彼女はケースを閉じ、ポケットにしまう。

「どうしようかしら。こう退屈で何も無いと、事件を捏造したくなるじゃない。」

犬は彼女の赤いスカートを口にくわえ、こっちに来いと言わんばかりに引つ張る。

「なに？メリー。何か見つけたの？」

彼女は犬の引つ張る力に無理に抵抗せずに、ついて行く。

坂道を降り、学園の比較的入りやすい有刺鉄線が無いフェンスをよじ登っていく。

「何？この学校の中に入れて？」

犬は彼女の声に反応する事もなくそのまま、フェンスをよじ登り、グラウンドへと降り、彼女の方を向いて「バウ」と吼えた。

「はいはい、分かったわよメリー。」

彼女も軽々とフェンスを登り飛び降りる。

犬はそれを確認すると、スタコラと校舎の方へと向かった。

『何かしらね？いったい。別段、魔法的なものがあるとは思えない建物だけど。』

犬は暗いグラウンドを横断し、校舎の入り口へと向かう。そして入り口の前に来て、メリーは入り口を爪で掻き毟りはじめる。

「何？この校舎の中？。強い魔力でも感じたの？」

犬は彼女の方を向き、「ばう」と一度吼えて、入り口を掻き毟るのやめ、その場に座りこむ。

「ふむ、何か強い魔力を感じたのは確かみたいね。」

彼女は目を閉じ魔力をさぐる。

「確かに何か痕跡の様な微かなものは感じるわね。もう、効力を失っているみたいだけど、この感じは呪いかしらね？でも、効力を失って数日は過ぎていてみたいけど・・・。」

どうも、彼女が感じているのは片奈が美由にかけた呪いの様だった。彼女はメリーを見た。

「あんたが、あの坂を占拠してたのは、今朝からだから、多分、これじゃないわね。あんた真面目だから、あそこから動かないだろうし。今日、この学園のこの校舎の中で、あの坂からでもハッキリわかるぐらいの魔力が発動した・・・。どういう事なのかしらね？」

そうやって、彼女は歩きはじめる。

「この学園をちよつと、探索してみましょ。」

対象の校舎をぐるりと回り、裏に回る。

彼女は突然、手を上げ、上げた手を振り下ろす。

手の先から、小さな光の弾が物凄いスピードで飛び出し、何かに当たる。

「こゃ」

そうやって、飛び出したのは茶トラのメス猫だった。

「あら、何かいると思ったら、化け物猫さん。私、退屈なの一緒に遊びましょ。遊んでくれたら良い所に連れて行ってあげるわよ。」

茶トラのメス猫は、そんな言葉など全く聞いておらず、飛び上がった後すぐに、彼女と反対方向へ逃げ出していた。

「メリー行きなさい。」

そう言うと、犬は飛び出し、猫を追いかける。

「全く、人の話はちゃんと聞けつてーの。」

彼女そう言つて彼女も走りだした。

猫より犬の方がスピードが速かった。犬は徐々に猫との距離をづめていく。

彼女は手を振りかざし、光の弾を放つ。その弾は、猫の目の前に着弾した。

一瞬、猫の足が止まり、犬にかみつかれそうになるが、素早く方向を切り替え逃れる。

猫はフェンスまでやってくる。フェンスの前にはレンガで出来た花壇があり、緑のブロックの様な植え込みがずっと続いている。猫は植え込みに飛び込み、はう様に植え込みを進み、フェンスに辿りつく。このフェンスは花壇との間に僅かに隙間があり、もぐりこむ様に頭を低くしてフェンスを抜けていった。犬は緑のブロックの様な植え込みの周りをノソノソとうろつくしかなかった。

「あら、逃がしたの？残念ね。でも、結構、面白そうな学校みたいね。ちょっと調べてみようかしら。」

絡まれる美由

夜、美由はHDDレコーダーに録画していた、某放送協会がTVで放映している、高校の教育番組を見ていた。

現在見ているのは、日本史・次に世界史を見る予定だった。

実際の処、この高校対象の日本史・世界史の番組は大学受験ではあまり役に立たない。

と、いうより基礎的な事をさらりと流して教え、試験範囲外の事をやったりする。

だが、そこが重要だったりする。

高校の歴史の場合、ただ、教科書を使って勉強をすると、記号の羅列の暗記のみになり、中々頭に入ってこない。そのため、時代背景や、当時の考え方や文化、それ以前の歴史がどうだったかという、その記号の裏にある「流れ」を理解する必要があるのだ。

この「時代の背景の流れ」を中心にしてやるため、良く、「これって受験に必要なの？」と、いう内容がでてくるのだが、暗記の補助線に非常に役に立つので美由はちゃんとチェックする事にしていく。

平安時代の場合、教科書で受ける印象だと、突然、武士が現れる様に感じるのだが、実際は、武士が徐々に力をつけ台頭していく。この徐々に力をつけていく過程が教科書では分かり難いため平安時代に起こった幾つかの戦がかなり分かり難くなる。TVではこの武士が力をつけていく過程を丁寧やっている。江戸時代でも、いくつかの文化が起こったが、映像的な資料が多いので、わかりやすかったりする。

ただ、授業で3時間ぐらいかけて授業でやる内容を30分でするため、中身は超特急である。そのためノートに書き留める時間が無い。よって、頻繁にリモコンの停止ボタンを押す必要がある。

ちなみに作者は、前の日本史の聞き手に萌えていたのが、某ア

二メの声優をやっており、そのキャラがHな淫乱女性役だったの
何やらしとんじゃ、このアニメ会社と怒りを覚えた事がある。

美由の弟が、やってくる。

「ねえちゃん。そんなつまんない番組でテレビを占領しないで
よ。時代はバラエティーだよバラエティー。」

美由は弟を見る。

「あんた達の部屋にテレビあるでしょ。おねえちゃんの部屋には
無いんだから、自分の部屋で見ればいいでしょ。」

「ええ、HDDレコーダーに録画しているのが観たいんだよ。C
Mなんて見るの面倒だし。」

「全くもう。それくらい我慢して見なさい。CMがあるから民間
の放送はタダなんだよ。あと、1時間ぐらいで終わるから、我慢し
なさい。」

「一時間も待てないよー。」

「もー。」

美由はノートをたたみ、立ち上がる。

「はい。どうぞ。」

弟は「ありがとう」も言わずに、リモコンを手にとりTVを見始
めた。

朝になった。

美由は朝のストレッチと軽いジョギングを終えた。

やっている事は既に、朝が早く、体操とジョギングなどまるでお
じいさんのだった。

朝食をすまし、学校へと向かう。

最近の美由は、存在を薄めては登校しない。

正直無駄だからだ。あきらめて普通に学校への道を早歩きで歩く。
登校の途中に、修道服みたいな赤い派手なワンピースに、シヨ

トカットの金髪女性が大きく黒い犬を連れて歩いていった。

犬にリードがつけられて無い。

美由は「危ないなあ」と思いつつ歩き続ける。

「？彼女、存在をかなり薄めている？朋ちゃん意外で存在を薄められる人間を私は知らない。」

「あら、あんた、私が見えてるの？」

赤服の女性は美由に声をかけた。

絡まれる

時は少し戻り、赤い服を着た女性は、犬を連れて学園周辺を探索していた。

誰も彼女と犬には気づかない。

それは、彼女も犬も存在を薄くしているからだっただ。

犬は化け物ではないが、生まれた時からもつ特殊な力と退魔師のパートナーとして訓練を受けて手に入れた力だった。

「ああ、退屈ね。メリー。」

犬は特に彼女の言葉に反応する事もなく、彼女の横をノソノソを歩いていった。

彼女は通りの隅にある、しめ縄をされた石を見る。

「この街、神社とハッキリわかるのは少ないけど、意外と祀られている神が多いわね。」

しめ縄をされた石は良く、掃除をされており、しめ縄も新しく、お供え物もされている。

「ちゃんと、お供え物もされてて綺麗という事は、結構、この街って土地神の信仰があついのね。これだけちゃんと祀られているとなると、この土地神は結構力がありそうだけど。」

神への祈りや、お供え物、信仰者の数が多ければ多い程、その神に力を与えるのだ。

「その割には、全然、強い化け物に出会わないんだけど。ん？」

目の前に一人の女子高生が早歩きで歩いてくる。美由だ。

彼女は明に自分を一度見て、隣の犬を見ている。

二人とも、今は存在を薄めているわけだから、彼女は見える目を持っている事になる。

『あの制服は今調べているあの学校の制服。しかも、見える目を持っているとは面白い。』

美由とすれ違う瞬間、声をかけた。

「あら、あんた、私が見えてるの？」

美由はドツキつとして、一瞬、動きが止まったが、金髪に赤い派手派手な服に大型犬といういかにも怪しい人だったので、絶対に関わりたく無いと思った。

美由は聞こえなかったふりをして、歩みを止めない。

赤服の女は、美由の分かりやすいスルーっぷりを見て、唇を緩める。

『なんて、分かりやすい子。顔と行動に出てるよ。』

「メリー」

そう命令すると、犬が美由の前に立ちふさがり、唸りはじめる。

「そのまま行くと、その犬が何をするかわからないよ。」

美由は観念して、ため息をつく。

「何ですか？ いったい。」

「それは、私の質問。何であなたは私達が見えるの？」

美由は困った表情を浮かべる。

「えっと、何をおっしゃっているのかさっぱりです。」

「あら、何か隠している様ね。顔に出てるわよ。まあ、良いわ。

私達は今、他の人たちには見えないはずなのよ。なのにあなたは見えるてる。」

「わ、わたし、中学校の頃から、そ、その見える様になりました。たまに見えないはずの猫とかが見えたりするんですよ。」

美由の顔を見れば、明らかに慌てているのが分かる。

「ふーん。まあ、見える人はあんまないけど、珍しいという程ではないからね。それより、あんたが通っている学校の事について知りたいのよ。昨日、何か無かったかしら？ もちろん、魔法的なことでよ。」

美由は心当たりが多すぎるが言うわけには、いかないものばかりだ。

「お、おっしゃてる事が、良くわかりませんが？」

「じゃあ、数日前に誰か突然、気分が悪くなったとか無かった？」

悪くなったのは美由自身であった。

「さあ。知りませんが。」

『この女明らかに嘘をついているな。』

「どうも、誰かが呪われたみたいなのよね。」

「へえ。そうなんですか。では、学校がありますので。これで
そう言っつて美由は歩きだす。

「はいはい、頑張つてねお嬢さん。」

赤服の女は美由の後ろ姿をずっとみていた。

「さあ、メリー面白い、お嬢さんに出会ったよ。少しマークして
みましょう。」

朋と黒の大型犬と桐野のジャケット

変な女から逃れるため、美由はいつもより速く歩いていた。でも、明らかに後ろからついて来ている。

『弱ったなあ。どうも、私は変な人に絡まれやすいらしい。』

美由は振り向きもせず、学園へと向かう。

赤服を着た女性と黒の大型犬は小走りで、美由を追う。

「あら、ここの露骨に逃げるなんてますます怪しいじゃない。」

彼女は小走りをしながら、そう口走った。

実際のところ、変な女と犬が自分をつけていけば、誰でも逃げなくなるはずなのだが、彼女はその点に気がついていなかった。

学園の校門が見えてきて、美由は『あと一息。』と思う、まさか、学園までは追いかけて来る事は無いだろうと思っていた。

その時、後ろにいた犬が「ボウボウ」吼え始めた。

美由は今まで意地でも後ろは向くまいと思っていたが、流石にこの犬の反応はおかしいと思い後ろを向いた。

犬と女性は立ち止まっており、美由の方を向いていない。

犬の視線の先にいたのは、朋だった。

朋は明らかに脅えている。

赤服の女性は慌てて、犬の首を抱きしめる。

「どうしたの？メリー。落ち着きなさい。」

そうすると、犬は吼えやめた。

彼女は犬の視線の先にいる朋を見た。

「あら、あなたも見えてるの。」

「き、昨日の犬さん・・・。」

「あら、お知り合いなの？」

「昨日、学校の裏の坂道処で、噛まれそうになりました。」

赤服の女性はメリーが人間を襲わない事を知っている。襲うとすれば化け物となんらかの関係があるという事だ。

「ふーん。」

赤服の女性は朋の肩を強引に掴む。

「ちよつと、あなた、話があるの。」

「きや、やめてください。」

登校中の他の生徒には、赤服の女性が見えないので、朋が変な事を言つて突然、変な動きをしはじめたようにしかみえない。

美由は朋に走りより、赤服の女性の手を掴み、朋の肩から彼女の手はずす。

「ちよつと、やめてください。」

「あら、あなた達、知り合いな。おねえさん、ますます、あなたがたに興味が沸いたわ。」

美由は朋の手首を握り引つ張る。

「朋ちゃん行くよ。」

「は、はい。美由先輩。」

朋は美由に引つ張られるようして歩きだした。

校門を過ぎ、朋が美由に話かける。

「今の人、何だったでしょうか？」

「さあ、さつき、いきなり私に絡んできてずっと、着けて来たんだけど。それより、学校の裏の坂道の話って何？」

「昨日、あの犬さんとは別にですね。化け物のブルドッグに絡まれて、ウチまで連れて帰れと。その途中、あの犬さんが道を通せんぼしてて、いきなり襲ってきたんです。で、その時、カエルさんに会つてですね。助けを借りて、何とかそのブルドッグさんを、あの犬さんが通せんぼしている向こう側まで連れて行くことに成功したのです。」

「む？良くわかんないなあ。まあ、蛙主も絡んでいるのか」

美由は朋と別れ、自分の教室にやってくる。

すると、桐野が「おはよう」と美由に声をかけてきた。

「おはようございます。桐野さん。」

美由は着ていた、ジャケットを脱ぎ、桐野に渡す。

「ジャケット、有り難うございます。」

桐野はキョトンとした顔をしていた。

「桜間さんって、変な処で抜けているのね。」

「何ですいきなり？」

「だって、普通、こういうのって、着てこないで、紙袋に入れて渡すものかなと。クリーニングとかして」

「あ。だったら・・・。」

「良いわよ。私的には今をときめく桜間さんの脱ぎたてを着られる名誉を与えられたわけだから。」

「決して褒めてませんよね。」

「そんな事ないわよ。私的には変に気を使われるより良いし。でも、今度は気をつけなさい。礼儀が無い人間と思われるのはイヤでしよ。」

「はい。」

桐野はジャケットを羽織った。

「うーん。桜間さんの臭いがする。」

「そんな変態みたいなの・・・。」

赤服の女が教室にやってくる。

美由と桐野が話していると、須王寺すおうじがやってくる。

「あら、お二人さん。ご機嫌よう。」

「あら、須王寺すおうじさん。おはようございます。」

「おはようございます。須王寺すおうじさん。」

美由は須王寺すおうじに普通に声をかけられた事にとまどいを感じていた。そこまで、仲が良い記憶が無いからだ。

昨日は確かに助けて貰ったが、自分を助けたというより、同じ聖セイエルナル学院出身者の子達を止めるためだったと、美由は解釈していた。

須王寺すおうじは、桐野のジャケットを見る。

「あら、桐野さん。桜間さんにジャケットを返して貰ったのね。」

「ええ。彼女の脱ぎたてよ。」

「まあ。それは、桜間さんに憧れるている後輩が聞いたらうらやましがるわね。」

「でしよ。」

美由は二人の会話を聞いて、ふと疑問に思った。

須王寺すおうじはともかくとして、桐野は聖エルナル学院のお嬢様が嫌いなはずだが、須王寺すおうじへの対応が随分親しい様な気がした。

美由は疑問に思ったので、何も考えずに聞いてみる事にした。

「須王寺すおうじさんと桐野さんって、仲がいいんですか？」

「何で？」

そう桐野が美由に聞き返す。

「いや、桐野さんって聖エルナル学院の方を快く思って無かったと思つてたんで。」

「ああ、彼女は別よ。と言うより、1年の時は随分喧嘩したけどね。」

「ええ、彼女には酷い目にあわされましたよ。事ある毎に私に文

句を言ってきた。最初の頃は何だろこの人はと思ってました。」

須王寺は、そう笑顔で答えた。

「須王寺さんは、最初はいけすかないお嬢様だったけど、喧嘩しているうちに角がとれたというかね。てか、私達が一年の時の3年生だった派閥の長に文句を言いに行った後、彼女だけは私に絡んできてね。」

「あら、失礼ね。それはあなたも同じでしょ。クラスが同じで、席が近く、何事にも意見が合わないもんですから。」

「へええ。二人はライバルなんですね。知らなかった。」

美由も彼女達と同じトツプクラスだったはずなので、3年間一緒だったはずだが、そういう争いがあった事を全く知らなかった。これは、美由が鈍感な事と、自分の世界の外にいる人たちとの関わりを避けていたので、そういった情報に疎かった。

「あら、桜間さん。私はあなたもライバルと思っていますよ。前にも言ったでしょ?」

「そんな。」

チャイムが鳴り、先生が教室に入ってくる。

先生の後ろからあの赤服の女性と一緒に入ってくる。

美由はドツキとなる。

『何で?』

彼女は存在を薄めていた。多分、見えてるのは自分だけだろう。

彼女は入り口近くの壁に背をつけ、腕組みをして、美由を見つめる。

『こんな、堂々と普通来ますか?他の人に見えて無いから言うわけにもいかないし……。てか、何しに。』

授業がはじまる。

彼女は美由をまだ見ている。

『やりづらいなあ……。』

1 時間目の授業が終わり、美由は彼女の腕をつかみ、教室を出るとそこには、犬が座っていた。今は犬に構っている場合ではなかったのでスルーして、彼女をトイレの個室に連れ込む。

「なんですか？ いったい。」

「あら、あなたと、今朝、一緒にいた子に興味が沸いたのよ。しかも、あんた何か隠しているみたいだし。」

「そんな事ありません。と、言うより迷惑なので、どっか行ってください。」

「いいわよ。今はどっか行ってあげる。どうも、授業を見ててもつまらないだけだし。また、放課後会いましょ。」

「もう、来ないでください。」

「それは約束できないわ。」

美術の時間

美由はトイレの個室を出る。

すると、何かビツクと動くモノに視線が止まった。

そこに居たのは近藤ジェミニだった。

美由は、何事も無かったかの様に手を洗い、次の授業に向かう。

ジェミニは美由がトイレから立ち去るのを確認し、美由が出てきたトイレに向かい話しかける。

「ねえ。そこに誰がいるんでしょ？多分、赤いドレスを着てるんじゃないかしら？」

ジェミニの見ている世界からいうと、ほとんど見えないぐらいの赤い塊があるぐらいにしか見えて無い。

赤い塊はトイレの中から、ジェミニへと近づいてくる。

そして、その塊は、女の姿へと変わる。

「あら、彼女以外に見える子がいたの？」

「だれ？あなた？桜間さんの知り合い？」

「桜間？ああ、さっきの女の事か。知り合いという程のものではないな。」

「あんた、さっき、授業中、教室の入り口の方に居たでしょ。分かってるのよ。」

「ああ、居たよ。それがどうかしたのか？」

「それが、どうしたって……。あんた何者？」

「私か？私はしががない退魔師だ。そして、今は何か金になりそうなオカルト現象を探している。」

「はあ？」

「お前は、あの女より目が良く無いようだが、推測するに私が消えていた時、赤色の塊の様にみえてたんだろ？ありていに言えばそういう普通であれば見えるはずの無いものが起こす怪奇現象を利用して、金を稼ぐ商売をしている。」

「良くわかんないわね。何で桜間さんと一緒なわけ？」

「ああ、私がお金になりそうなオカルト現象を探して、昨日、この学園近くまでやってきたわけだ。で、調査してみると、昨日、何か魔術的な力が使われた形跡があつてな。今朝、調査を行っている、あの女と出会ったわけだ。あの女はお前と違って消えている私をハッキリと見る事が出来たからな。何かあると踏んだわけだ。」

「良くわからない話ね。」

「まあ、分かれというのが、無理はな話だな。」

「それより、あなただって、桜間さんのことを調べているのね？」

「まあ、そうだが。」

「良かったら、その情報、売っていただけるかしら？」

「あら。酔狂ね。」

「でも、今は時間が無いから、昼休みにでも。」

「了解したわ。」

美由は赤服の女とトイレで別れた後の次の授業は美術・音楽の授業であつた。

彼女は美術を選考している。お嬢様方や美由の友達は音楽を選考しているため、知り合いと言えば桐野ぐらいである。女子の音楽人気が高いためか、こっちは男子が多い。

今は桐野をモデルに、鉛筆で写生するという授業をしていた。

美由は美術は得意ではない。

正直、まともに絵を描けば、小学生高学年に余裕で負けるぐらい絵が下手だ。レベルとしてはせいぜい小学校中学年程度といった処だろう。正直、絵の才能のレベルはかなり低い。

そんな彼女でも好成绩を美術を収めているには理由があつた。

実は、高校で美術の好成绩を収めるのに、絵の才能は要らなかつたりする。

高校美術で求められるのは、実は数学的考え方と、絵の描き方の知

識だ。

例えば、リンゴを描くのであれば、見たものをそのまま描くのではなく、まず、ちゃんとした『まる』を描く。

何故、『まる』かというのと、『球体』はこの角度から見ても、絵にすれば必ず『まる』になるからだ。

この描いた『まる』の中央に縦線を入れ『まる』を二分割する。

この二分割した線上に、リンゴのヘタの付け根になる部分を決め、その付け根を基準にリンゴっぽくなるように、肉付け修正していけば、自然とリンゴの形になるのだ。

こういう風に、形が近く、誰でも描ける円や四角、三角などの図形を組み合わせていけば大抵のものは描けてしまう。

色のつけ方も、水生絵の具を使う場合、どうしても、濃く描いてしまいが、実は、そんな描き方をすれば全体が暗く雑味のある感じに仕上がってしまう。

実は、大抵の場合、ほんのりと色をつけるだけで十分で、濃くびつちりと、色をつける必要などない。

他にもパースや色のつけ方、光源など色々とテクニックはあるが、才能とは全く関係無いテクニックで何とかなってしまうのだ。

桐野は美由を描いていた。

二人とも、スラスラとお互いを見ずにお互いを描いていた。

美由とクロは退魔師について語る

美術の時間が終わり、美由は別の校舎にある自分の教室に戻ろうと中庭を歩いていった。

そこに、尻尾をプルプルさせながら歩く、傷だらけの猫が美由に近づいて来て、一緒にならんで歩きだす。

「何です？黒猫さん。」

「魔法少女様。退魔師の女に絡まれた様で。」

「ええ、迷惑をしています。てか、珍しいですね。あなたが学校に堂々と来るなんて。」

「堂々とはしてません。チャンスが今しかなかったもんで。」

「チャンス？」

「あの退魔師の女が、さっき、学校から離れたので、その隙をついて来たわけです。」

「何か私に用でも？」

「ええ。昨日の夜、茶トラのメス猫があの女に襲われました。まあ、何とか逃げ切りましたが、どうも何もしていない化け物を捕らえて売りさばこうとしているみたいで。」

「それは、酷いですね。でも、私が『やめて』と言って聞くタイプとも思えませんよ。」

「そんな事は言ってます。どうも、あなたに興味をもたれた様なので、彼女が諦めるまで頑張つて相手をして欲しいのですよ。」

「私、イヤですよ。」

「彼女はどうもお金が無いようで、食うために安易に稼げる弱い化け物狩りに走っているようなんですよ。このままでは、我々の生活が危ういので、どうか頼みます。」

「むー。どうせ、断つても、向こうはこっちに勝手に寄つて来ますからねえ。実際私には選択肢は無いんでしょうけどね。」

「良くお分かりで、多分、あなたが彼女の前で存在を薄くす

るとか、魔法少女になるとか、魔法で治療するとかいうポ力をするとか、または、我々化け物の情報うつかり口を滑らして話さない限りは、大丈夫だとは思いますが。そういうワケで、注意と口止めに来たわけですよ。」

「自身無いなあ。魔法少女関連は良いとしても、化け物の話については、カマをかけられたら、簡単に話してしまいそうです。」

「頑張ってください。それとですね。茶トラのメス猫についてですが、退魔師がどうもここら辺にしばらく留まるつもりみたいなので、その間、学園には来させません。彼女と仲の良い、あなたの友達がいまますよね？その方が心配しているようでしたら、前にボスと会った空き地で見たと伝えておいてください。」

「はい、分かりました。」

「ああ、大事な事を言うのを忘れてました。」

「なんででしょう？」

「今回は、あなたに助けを求められても、我々は手を貸しません。」

「私は手を貸すのにですか？」

「当然ですよ。相手は退魔師です。相手に下手に傷つけたら、我々を駆逐するために動く連中が必ず出てきます。我々は全滅を避けるために仕方が無いのです。私一人の問題ですめば、手を貸しても構わないのですが。そういうワケにもいかないのです。」

「仕方ないですよええ。」

「それと同じ理由で、蛙主様やウサギ主様に直接、会うのは避けられた方がいいですよ。」

「そうですねえ。あの人達を巻き込むわけにはいきませんから。」

「でも、一応伝えておくかな。カエルのメッセージ程度なら大丈夫ですよ。」

「では私はこれで。」

そう言って、猫は去っていく。

『あのおねえさんは、今は学校にはいないというし、今のうちに蛙主に来るなど言っておくか・・・。』

美由は蛙をみつけ、メッセージを送った。

『そっぴゃあ。彼女、朋ちゃんにも目をつけていたんだよな。どうしよう・・・。』

蛙とウサギの相撲

山の中、蛙主とウサギ主は、地面に円を描いただけの簡易的な土俵の上で見合っていた。

二人の横には猿の化け物がいる。

土俵のまわりには、化け物の若い蛙やウサギが何匹か見学をしていた。

どうも、蛙主とウサギ主は相撲をとろうとしているらしい。

猿は行司役の様だった。

「さあ、みやって、みやって。」

猿がそう言うと、二人は地面に両手をつける。

その時、蛙の鳴き声が回りに響き渡った。

蛙主は地面から両手を離し、後ろを振り返る。

「ちよいまつとくれ。何かメッセージのようじゃ。」

ウサギ主も両手を地面から離し、土俵脇に移動する。

「カエルよ。ワシが勝負を待たされるのが嫌いとおもう、

はよせんか。」

「ええい、まつとれ。」

しばらくして、カエルの鳴き声がやむ。

蛙主は、返事の鳴き声をあげた後、全体を見渡す。

「皆のもの聞け。魔法少女その1から伝言が今、あった。昨日、クロ犬が街へ抜ける道を塞いでおったじゃろ？あれは、どうも退魔師の犬のようじゃ。その退魔師がワシ等を無差別に捕まえようとしているようじゃ。魔法少女が言うには、しばらくそいつは街にいるみたいなので、近づくなという話じゃ。わかったか？」

「ほーい。主どの了解しました。」

「後、魔法少女がどうも、その退魔師に目をつけられたらしい。

ずっと、マークされているみたいなので、自分処に来るなど言っておったぞ。」

「大丈夫か？あの娘？」

ウサギ主が、蛙主にそう聞く。

「なあーに。何とかするじゃろう。ワシ等が行っても何も出来ん。それより、相撲じゃ相撲。」

ウサギ主は大きな両腕を振る。

「そうれもそうだ。あの娘のことは、あの娘にまかせておこつ。」
そう言つて、両者は土俵に手をつけぶつかり合つ。

ジェミニと赤服の女

昼休みになった。

学園第二派閥の長、近藤 ジェミニは、赤服の退魔師と待ち合わせの場所まで行く。

そこは、魔法少女ガラミンが誕生した、階段の下だった。

ジェミニは直ぐに階段まで来たが、まだ、誰も来ていないようだった。

ジェミニは腕組をしながら、イライラして待つ。

「何しているのかしら、あの人。私を待たせる何て。」

「あら？あなた。私が見えないの？」

そう言って、退魔師の女は存在を強め、ジェミニの目の前に姿を現す。

「私みたいな、目立つ格好している人が学園内にいると問題になると思ったから、見え無いようにしてただけ。」

「あら、失礼。そういう事だったの。」

「さつきトイレで話した時は、さつき、消えてたくらいでも見えてたのに。今は見えない様ね。あんた最近魔法でも使った？」

「魔法を使うと、見える様になるの？」

「一時的だけど、見える様になる人が結構いるわね。まあ魔法を使っても見えない人の方が多いけどね。魔法を使ってどれくらいの時間で見えるのかは、人それぞれだし。」

「へええ。」

「昨日、メリーが感じた強い魔法の発動はあんたか？」

「メリー？」

ジェミニは故意に魔法を使った事についてスルーする。

「ああ、まだ言っただけだったか。メリー姿を現しなさい。」

彼女がそう言うと、黒い大きな犬が現れた。

ジェミニは凶暴そうな犬が現れて、少し心の中で引いたが、顔に

は出さない。

「この子がメリー。退魔の訓練を受けた特殊な犬で私のパートナーよ。よろしく。」

「へえ。こんにちは、メリー」

ジェミニは無理に笑顔を作り、メリーに微笑みかける。

「メリー消えなさい。」

メリーは消えた。

赤服の女はジェミニを見る。

「で、あんたが、昨日、この学校で魔法を使ったの？」

「それについては、今は回答を避けておくわ。」

「なるほどね。でも、メリーがあゝの距離で感知して私に知らせる程の魔力をあんたが使える様にはみえないんだけどな。」

「それについては、ヒントだけあげるわ。1年の成美矢朋という子を調べなさい。」

「なるみや とも？」

「この前まで、あんたが調べてる女とべったりだった子よ。最近
は仲良くしているのは見ないけど。」

「ああ、あのちびっ子が。なるほどな。そいつもかなり良い目をしてたな。」

ジェミニは考える。

『この女は桜間さんも見える目を持っていると聞いていた。そして、あのちびっ子も見えるという……。どついう事なのかしら？』

「ねええ。あの子達って、どれくらい見えてるの？」

「さあなああ。知り合ってまだ4時間ぐらいしか立ってないからなああ。多分、私よりはだいぶ下だとは思うが。」

「それってどれくらいなの？」

「そうだなあ。犬とか猫が長生きすると、極たまにだが、化け物化する事がある。」

「化け物化？」

「化け物化するとだな。その土地で人間が話している言葉をしゃ

べれたり、存在を薄くできたりする。」

「化け物化つて、大きくなって如何にも凶悪な姿に変貌するんじゃないの？」

「ああ、そういうやつもたまにはいるが、大抵は、元の姿のままだ。私等の間ではそいつらを『モドキ』と呼んでいる。」

「……」

「こいつらは、普通の人間には見えないうらには存在が薄いが見える目をもっていればほとんど消えているからどうか分からないぐらいには見える。まあ、最初会った時のあんだと、うつすらとした色の塊があるぐらいにしか見えないうら。ようするにあの時のお前さんより、ちよい目がいくらいじゃないかな？ いかんせん天然の様だしな。」

「天然って何かしら？」

「見える目を持っていても、私の様に見る訓練を受けて無いヤツのことさ。」

「へええ。」

ジエミニはそう答えた後、難しい顔をする。

ふと、彼女の脳裏に、夜、美由と傷だらけの黒猫が一緒に歩いていた姿を思い出していた。

『あのときは、あの本を使っていた時。私は多分、見えないものが見えていた。彼女は猫など知らないとかまかしていたけど、あれが化け物だと考えると、彼女が否定した理由も納得が行く。』

「どうかしたの？」

「いいえ。処で、桜間さんについて他に情報は無いのかしら？」

「あつて、4時間しか立っていないのだぞ。そんなもんだ。」

「そう。ひとまず、あなたとは、もう少し縁を持っていた方が良さそうね。」

そういつて、封筒を取り出す。

「今回の礼よ。」

彼女は何の躊躇もなく、その封筒を受け取り、中身を確認する。

10万ぐらい入っていた。

「もし、彼女について何かわかったら、私に教えて。」
そういって、ジェミニは立ち去る。

「ああ、一つ言っておくけど、次はそんなに貰えると思わないでね。それと、私から金をせびろうとしない方がいいわよ。あなたの身のためだね。」

「了解した。」

桐野と須王寺と美由の昼休み

昼休み、桐野がいつものように学園の裏庭にやってくる。

彼女の日課は、昼休み、猫にえさをやる事だった。

でも、今日は猫がいなかった。

彼女はしばらく猫を待つ事にするが、10分まってもこない。

『どうしたのかしら？いつもは直ぐに来るのに……。でも、ちょっと前にもこういう事はあったから珍しい事ではないよね。でも、事故とかにあつてたらどうしよう。』

前にこなかったのは、茶トラのメス猫が暴走した時、暴走の治療のため、衰弱し、しばらく来られなかった時だ。今回来れないのは、この学園周辺を変な女が監視しているからだった。

桐野が色々と考えていると、美由が現れた。

「あのー桐野さん。いつもあなたが、昼休み可愛がってる猫なんですけど。」

「うん。どうしたの？」

「今朝、とある空き地でみたんですけど、ここから随分離れているのでどうしたのかなと。で、今、来てみたら、桐野さんといつものように遊んでなかったの。」

「桜間さん。有り難うね。ところでその空き地って何処かしら？」

「私の家より、ちよつと離れてた処ですけど。」

「へえ。じゃあ。今日、学校が終わったら、そこに連れて行つて下さるかしら？」

美由は『しまった。』と、思った。

猫は退魔師の危険を避けるためにあえて、学校から離れた。

それなのに、一番、退魔師からマークされている美由がそこに連れていったら、何の意味もない。

「ええ。場所を教えるので一人をお願いします。」

「あら、あたなの家の家庭訪問もかねて言っているんだけど。」

桐野がその言葉を発すると、後ろから誰かが二人に声をかけてきた。

「あら、それは良いわね。私も参加させて貰おうかしら。」

二人は声が出た方を向く。

そこにいたのは、須王寺だった。

「あら、須王寺さんも、桜間さんの家に興味があったの。」

「ええ、もちろんですわ。桐野さん。」

「私一人だと、どうも断られそうなの。須王寺さんが手伝ってくれるなら、桜間さんを説得できるかも。」

「よろしくてよ。」

須王寺は素直に桐野に同意した。

美由はこの二人に押し切られて断る自信がない。

「はいはい、わかりました。どうぞ、どうぞ二人ともいらっしゃってください。」

「わかってくれたみたいね。」

「そうね。」

美由はどうしようと思案に暮れた。

バス

放課後になり、美由は逃げ出す様に席を立ち、カバンを取る。

桐野と須王寺すおうじが今日ウチに来ると言っているの、それから逃げるつもりであった。

だが、桐野に呼び止められる。

「桜間さん。待ちなさい。今日は絶対、一緒に帰るんだから。」
美由はバツが悪そうな顔をした。

『あの、赤服の女の人に尾行されたら、猫が学校に来なくなつた意味がないから、直接は案内したくないんだけどなあ。』

携帯で電話していた須王寺すおうじが、話の途中で携帯を耳元から放す。

「お二人さん。お待ちになつてくれるかしら。今、迎えの車へ事情を伝えている処だから。」

そういつて、須王寺すおうじは携帯を耳元に戻す。

「はいはい。」

桐野がそう返事をする。

「彼女の車で行くつもりなんですか？」

「さあ。私は知らないわよ。」

須王寺すおうじは、電話を切り、ポケットにしまう。

「さあ、お二人さん行きましようか？」

「行くつて、まさか、須王寺すおうじさんの車で行くつもりなんですか？」

「いいえ。車には待機してもらつように伝えました。桜間さんと一緒に歩いて行くのよ。」

「うちは、遠いですよ。普通にあるけば30分ぐらいかかりますけど。」

「あら、気にしなくてよ。」

「そんなに遠いなら、自転車かバスにすればいいの？」

そう桐野が言う。

「個人的な問題なので……。今日はバスで帰りましようか。」

「あら、良いわね。私、実はバスってのはじめてなの。楽しみね。」

三人は仲良く校門へと向かった。

その時、朋と加奈が3人を見かけた。

「見てみて、朋ちゃん凄いよー。」

と、加奈が朋に語りかけた。

「何が？」

朋は、加奈の指差す方を見ると、向こうの方に美由と桐野と須王寺すのうじが仲良く歩いているのが見えた。

「美由先輩と須王寺おねえ様だ。後、一人は誰だろう？」

「ん？知らない？ウチの三年全体で一番の桐野さんよ。お嬢様嫌

いで有名な。」

「へええ。でも、須王寺おねえ様と一緒にだよ。」

「これは、事件ね。」

「何でそうなるかな？」

「ウチの三年女子の1位2位3位がそろって、仲良く3人で下校よ。既に事件よ。」

朋は美由を視線で追いかける。その先に今朝、自分に吼えた大きな黒犬と、自分を連れて行こうとした赤服の女がいた。一頭と一人のペアは、明らかに存在を薄くして美由を見ていた。

美由は校門前に、赤服の女と、大きな黒犬がいて自分を見ている事に気づく。

このペアは明らかに消えていた。そして、自分に顔を向け、満面の笑みを浮かべている。

『まいったなあ。最悪の事態だな。今日は一緒に帰る人がいるから、言葉をかけるわけにもいかないし……。』

美由はこのペアを無視してすれ違った。

赤服の女は美由達から少し距離を取り、尾行をはじめた。

『もう、何なんだろう。』

3人は校門近くのバス停に辿りつき、時刻表を見る。

「もうすぐ、来るみたいですね。」

美由がそう言うと、バスが入ってきて、入り口を開けた。

「私がいつも使っているバスね。一緒の方角なのね。」

そう桐野が言う。

「バス楽しみですね。」

「須王寺さん。バスの入り口に紙が出ているでしょ。あれを取る

の。

「何ですか?」

「何処で乗ったか証明するためよ。」

そういつて、桐野バスに乗り込むが紙をとらない。

美由は紙をとる。それを見て、須王寺も紙をとった。

「何で桐野さんは紙をとらないの?」

そう須王寺が質問する。

「ああ、私は定期があるから。」

二人がそう話している間に、赤服の女と黒犬も乗り込んでくる。

当然、彼女等は紙を取ろうしなかった。

「さあ。座りましょ。奥の方が開いてましてよ。」

そう須王寺が言う。

「ああ、私のウチはバスだったら直ぐですから、立ってましょ。」

」

そういつて、美由はつり革と掴んだ。

「これ、人が触っているんですよ。」

そう、須王寺が言う。

「気にする事は無いわよ。後で手洗えば問題ないわよ。」

そういつて、桐野もつり革を掴んだ。

須王寺はハンカチを取り出し、つり革を掴む。

「須王寺さん。目立つ上に変に思われるわよ。」

バスの中と美由の部屋。

バスが走り出す。

立っている3人の娘は、慣性の法則で後ろに引つ張られるが、つり革を強く握りその場に留まろうとする。

「まあ、バスって立って乗ると、こんなに体が揺れるんですね。」

須王寺が妙な文句を言っている。

「今日は、まだ、マシな方よ。」

そう桐野が切り返す。

カーブにさしかかり、Gがかかる。

須王寺は立ってバスに乗る慣れてないのか足を一步踏み出した。

「どうかならないんですかね。」

「須王寺さん。こんなもんですよ。」

美由は須王寺をいさめる。

「普段、あんたが乗っている車の性能と運転手が異常なのよ。グ

ラスにお酒ついでも倒れないんですよ。」

「ええ。運転手さんが、そんなこと言ってましたね。」

「ところで、須王寺さん本当にバスに乗ったことないんですか？」

「あら、誤解がある言い方をしましたわね。学校での遠足とか修学旅行、社会化見学の時はバスに乗りましたわよ。でも、こういう通学の時に乗るバスは乗った事がありませんって、言っただつてもりだつたんですけど。」

「だつたら、バスが結構揺れるのは分かるでしょ。」

「あの時は座ってましたからねえ。立っているとこんなに慣性の力が働くなんて。」

赤服の女は3人を見て思った

『仲がよろしいことで。』

しばらくすると、「あ、次です。」と、美由が言った。
美由がボタンを押そうとする。

「ねえ、桜間さんちよつとまっていただけ？私に押させて。」

「どつぞ」

須王寺すおうじがボタンを押すと、ブーという音がしてランプが光った。

「わあ。面白いですね。」

須王寺すおうじは子供の様な笑顔で光るボタンを見ていた。

「あら、桜間さん。私の家と同じ降り場じゃない。」

そう桐野が言う。

「え？そんなんですか？桐野さんの家って、私のうちの近くなんだ。」

「奇遇ね。これから、一緒に登下校できそうね。」

「私は歩き専門なので、駄目ですよ。」

バスは美由の家があるバス停まで来る。

美由がまず、紙とお金を機械に投げ入れる。それをみた須王寺すおうじもドキドキしながらお金と紙を投げ入れた。桐野は運転手に定期を見せ、犬と赤服の女は見えて無いのを良い事にお金を払わず降りた。

美由はバス停に降りた4人と1頭を見て思う。

『大行列だな……。全員まねかねざる客なわけだが。』

「さて、桜間さんの家はどこかしら？」

そう須王寺すおうじが聞いてくる。

「こつちです。」

美由はそう言って、歩きはじめる。

残りの3人と一匹がゾロゾロと美由の後をついてきた。

しばらく歩くと、美由の家が見えた。表札には『桜間』と書いてある。

美由は立ち止まる。「ここです。」と言った。

「あら、桜間さんのおうちってここだったの？本当に近くね。あ

の子を見たつて空き地つてあの分譲地の真ん中に家がたつてなくて、水道管が置いてあるところ?」

「ええ、そうですね。」

「なるほどね。後で一人で行つてみるわ。」

美由はその言葉を聞いてほつとした。猫に迷惑をかけなくてすむからだ。

「さあ、あげましょう。桜間さんの部屋楽しみ。」

そう、須王寺すおうじが提案する。

「私の部屋。狭いですよ。」

『ところで、あの赤服の女の人と犬は一緒に来るつもりなんだろうか?』

そう思つてみると、女は隣の家ブロック塀に肩をつけ、犬もそこに座り込んでいた。

どうも中に入つてくるつもりはないらしい。

美由は鍵を取り出し、扉のレバーに手をかけると、扉が開いている事に気づく。そのままレバー押し、扉を開ける。

「ただいまああ。」

扉を開けると、弟が上半身裸で、牛乳を飲みながら廊下を歩いてきた。

「こら、友達が着てるんだから、上を着なさい。」

弟の返事が無い。弟は須王寺すおうじを見ていた

『綺麗な人だなああ。』

「こら。」

「はいわかったよ。」

そう言つて、自分の部屋に向かつていった。

「みなさんこつちです。」

そう言つて、靴を脱ぎ家へ上がり、階段を登つて、美由の部屋へとやつてきた。

「ここが私の部屋です。」

「狭いのね。」

「ええ、元々、弟と妹と同じ部屋だったんですけど、私が夜遅くまで勉強するんで追い出されてしまって、元々物置だったこの部屋にきたんです。」

「まあ、桜間さんって布団派だったの？てつきりベットかと」

部屋の結構な面積を占領している畳まれた布団を見て、須王寺すおうじが言う。

「こんな狭い部屋にベットが置けますか・・・。」

「それにふかふかではなそうですし・・・。」

「まあ、いいんじゃない？健康にはベッドやフカフカの布団より、こういつた布団で畳みで寝るほうが健康にいいらしいわよ。」

そう桐野が言う

「あら、そうなんですの？」

「ベッドやフカフカの布団は腰に来るらしいから、寝返りがうちやすいこっちの方が良い見たいよ。」

「へええ。」

「もう少し、女の子らしい、カワイイアイテムがあったりとかすると思つてましたのに。」

「進学校の女子高生なんてこんなもんよ。まあ、それよりも」

「ずかずかと、桐野が美由の部屋に入り込み、本棚をチエツクする。」「ふむふむ。」

本棚に詰め込まれている参考書や問題集をひとつひとつチエツクしていく。

「なかなか、良いのがそろっているわねええ。おお、予備校の先生が書いた日本史と世界史の本まである。問題集が物足りないわね。基礎と基本レベルばっか。今はこれくらいでもいいかもしれないけど、夏が終わる頃には難しいのもやっておかないと厳しいわよ。あと、センターの過去問も入れとかないと駄目よ。ん？黄色と緑があるのに白と赤本が無いじゃん。」

桐野は美由の方に顔を向ける。

「白はこの前、後輩の子にあげたんです。赤は私はやるつもりがないので。」

「ええ。桜間さんって1流か2流の大学を目指してるんじゃないの？」

「私は近くの国公立大に行くつもりなので。」

「なんで？」

そう桐野が怒った顔で聞く。

「そうですね。桜間さん上を目指さないと駄目です。」

須王寺も起こった顔をしていた。

「うちにお金が無いので、行けるとしたら、そこか、安い専門学校に行こうかと。」

「そういう理由なら仕方ないわねええ。」

美由の私服

「処で、桜間さん。服を着替えないの？」
須王寺がそう言った。

二人が来ているので、自分の部屋だが美由は制服のままである事を須王寺は疑問に思ったのだ。

美由は普段、学校から帰っても着替える事はない。制服のまま日が暮れる前まで勉強した後、ジョギング用の格好に着替えるのが日課であった。

「私、毎日、体力づくりのため走っているんですけど、その前に勉強をするんですよ。ですから、制服のまままで勉強をして、走る時に着替えるんです。」

美由は一瞬、嘘を着こうかと思ったが、あれこれ聞かれると面倒臭い事になると思い本当の事を話す事にした。

「まあ、これは新たな一面を発見しました。桜間さんが毎日、走ってらっしゃるとは。」

「へええ。部活に入ってたのに、この前の短距離走で、陸上部の短距離エースと体一つ差だったのは、そう言う理由か。」

二人とも何故だが、妙に納得している様だった。

「私、勘違いをしておりましたわ。桜間さんって、マルチな才能を持った万能タイプと思ってましたが、実は物凄い努力家でしたのね。」

「誰もが須王寺さんみたいにマルチな才能に溢れてないわよ。」

桐野が少し、嫌味を込めて須王寺に釘をさす。

「あら、私も頑張ってますよ。」

須王寺は桐野の釘に反論した。

「で、桜間さんが、努力型でガツカリした？」

「そんな事はありませんわ。むしろ、誰にも気づかれない様に一生懸命頑張っている桜間さんを知って素敵だなと思ってます。」

美由は二人の会話を黙って聞いていた。

『人の部屋でケンカしないほしいなあ……。やるなら、私
の見て無いところでやって欲しい。』

美由がそう思っていると、二人は同時に美由の方に顔を向ける。

「桜間さん。」

須王寺すおうじがキツイ目で美由を見る。

「はい」

美由はビックリして、身を縮み込ませる様にそう答える。

お嬢様はキツイ視線から、笑顔になり

「桜間さん。この後、走りに行くんですよね？」

「ええ。二人が帰ったらですが……。」

「だったら、私達に見せていただけませんか？」

「はああ？」

「どんな格好で、桜間さんが走っているのか興味がありますの。」

「はああ……。」

美由はワケがわからない。

ファッションセンスが全く無い美由は、その部分は切り捨てて、
実用性を追求した格好をしている。須王寺すおうじを満足させるような格好
であるはずがないのだが、それを見たいという。

『不思議な事を言う人だな……。』

そう美由が思っていると、桐野が割り込んでくる。

「私も、興味あるわね。桜間さんがどういう格好で走っているの
かって。」

二人は、強いまなざしで、美由を見る。

「着替えて。」

「え？二人が見ている前で、ですか？」

二人はお互いを見て、しばらく見つめ合い、美由をみる。

「女同士ですし、気にする必要はありませんわ。」

「そうよ、体育の時間、教室で一緒に着替えているわけだし。」

二人はかなり強気で、美由に迫る。

美由はこの二人の強気に押されてしまう。

「わかりました。」

そういつて、美由は恥ずかしがりながらベストのボタンをはずし、ベストを脱いだ。

カッターシャツのボタンを全て外した後、タンスの方へ行き、白のウィンドパンツやピチピチのランニングシャツを取り出し、着替え始めた。

美由は着替え終わる

「おお、須王寺さん。私は桜間さんのこの結構あるバストラインがこんなにハッキリ出ているのにエロさを感じているわけですが、どうおもいますか？」

「そうねええ。バストラインがくつきり出るのは良いけど、あのダボダボのウィンドパンツはいただけないなわね。」

「須王寺さん、私もあの体のラインを隠す様なウィンドパンツはどうかと。エロさが半減します。」

二人はお互いを見合う。

「「やっぱり、スパッツに短パンかブルマーですよね。」」

『この二人は……。てかブルマーって……。』

赤服の女と走る

桐野と須王寺すおうじは帰る事にした。

3人は一緒に家の外に出る。

家の前には須王寺すおうじを迎えに来た黒塗りの高級外車が止まっており、運転手が立っている。

運転手は頭を下げる。

「お迎えにあがりました麗菜お嬢様。」

「ご苦労さまです。」

須王寺すおうじが歩き出すと、運転手は車の扉をあけた。彼女は車に乗り込み扉がしめられる。

「それではみなさん。ご機嫌よう。」

桐野と美由は手を振る

「バイバイ。」

車は走り去っていくと、車の向こう側にいた赤服の女と黒犬が姿を現す。

女は美由を見て「つぶ」っと笑っていた。

『何だろっ?』

桐野は歩きだし、美由に向かって手を振る。

「じゃあね、桜間さん。走るの頑張つて。」

「あ、はい。」

そういつて、桐野は去っていった。

美由も走りに行くため、歩きだした。

顔は自然に赤服の女を追っていた。

「あら、お友達ごともごっこは終わり?」

退魔師の女が話かけてくる。

美由はその言葉を無視して歩きはじめる。

退魔師の女も美由の後を追う。黒い犬も立ち上がり、二人を追った。

「連れないわねええ。せつかく、一緒にいるんだから仲良くしましょよ。」

美由は相手の方を向く。

「何ですか？いったい。」

「いやね。あんたが隠しているものを知りたいだけよ。」

「別に何も隠していませんが。」

「あら？そう言っても信じないわよ。」

「すいません。私、走るんでこれで。」

「どうぞ、どうぞ、普段通りになさい。」

美由は走りはじめた。

彼女も犬も走りだす。

『あんな、全身を覆う格好で走れば、熱がこもるし、汗だくになるから大変な事になるような……』

3分程走り、女は足を止める。

「あんた。まちなさい。」

女はかなり疲れているようだった。

『やはり……』

美由は足を止める。

「まだ、走るつもりなの？」

「まだって、まだ、3分ぐらいしか走ってませんよ。私は普段2時間ぐらい走るので。」

「2時間？冗談でしょ？」

「冗談ではないですよ。では、お先に失礼します。」

そう言っつて、美由は走りはじめた。

「くう……」

彼女は犬を見る。犬も息を「はあはあ」させていた。退魔師の女は犬の頭を撫でる。

「あんたも限界か……。まあ、犬は人間ほど長くは走れないからねええ。私もこの格好でなかったら、頑張れるんだろうけど。」
自分の格好がロングのワンピースである事を恨んだ。

だが、自分の趣味で着ている事に気づき、ふと笑いがこみあがってきた。

「あなたは、あの女の家の前で張ってな。私は買出しと仕事さがしてくるよ。」

お風呂

赤服の女は、街の中を歩いて色々な事を思っていた。

『ふう。テレビの魔法少女に憧れて、退魔師になつたのに。今は、こんなホームレス生活。イヤになつちゃうわ。そーいや師匠が言つてたな。退魔師になつても、ちゃんとした組織に属していないと貧乏生活が待っているだけで、一般家庭出身の自分が退魔師になつてもまともに生きていけないって。あれって、本当だつたのね。あの女を調べて、あの外国人にその情報を伝えればちよつとは金になりそうだけど、しばらく生活出来るほどの金にはならなそうだしな。やはり別口の何かをみつけないとな。かと言って、一般人相手じゃ一週間の生活費にもならないし。』

美由は家へと帰ってきた。おつきな犬が家の前に座っているだけで、赤服の女はいなかった。

美由は犬の前へ座り込む。

「おおい、犬よ。ご主人はどうした？」

犬は座つたままだつた。

美由は立ち上がり、家へ入ろうとすると、赤服の女が帰ってくる。

「あら、あなた。メリーに変な事しないでよね。」

美由は彼女を見る

「変な事なんかしていません。」

「なら、いいのよ。それより、あなたの家にながつてもいいかしら？」

美由は身構えた。

「何ですか？」

「そりゃ、あなたの事が知りたいからさ。まあ、断つても勝手に

あがるけど。」

彼女は姿が消せる。その人物が上がり込むのを完全に阻止する事など不可能だ。

「しかたないですね。」

「あら、物分りがいいのね?」

「消える能力がある人に抵抗しても無駄なので。多分、あなたの希望にそえるものはウチには無いですよ。」

「そうかしらね。」

美由は彼女をウチに招き入れた。

彼女は玄関を見渡す

「本当に何の変哲もない家ね。」

「だから、言ったでしょ。」

美由は階段をあがる。女も美由についてくる。

二人は美由の部屋へとやってきた。

「ここが、あなたの部屋。随分狭いのね。」

「さつきも言われましたよ。」

「さつき来てたあなたの友達二人?」

「そうです。」

彼女は美由の部屋を色々調べはじめる。

「本当に何も無いわね。勉強道具しか置いてないじゃん。」

「だから言ったじゃないですか。ご期待に沿えるものはないっす。すいません。私お風呂に行きたいんですけど、もう、帰って貰っていいでしょうか?」

「あら、いいわね。私も一緒にいらしていただくかしら?」

「……………」

二人は交代でお互いを見張りつつ、お風呂に入る事になった。先に美由が入り、シャワーを浴びるだけにした。

彼女もシャワーを浴びて終わりにした。

二人は部屋に戻る。

「いい風呂だったわありがとうね。」

「すいませんが、私、勉強があるので。」

「そう。私はこれでおいとまするわ。」

そう言って、彼女は家を出て行った。

日曜日

日曜日になった。

早朝、美由はいつもの様に公園でストレッチをしていた。

赤服の女と犬もいる。

女が美由に話かける。

「しかし、あんた、本当につまらない生活送っているのね。勉強か運動かどっちかしかしてないじゃん。」

美由は相手を刺す様な視線で見つめる。

「いけませんか？」

「いいや。私みたいな、ホームレスになるより、よっぽど健全な選択だと思うよ。」

「退魔師って、大変なんですね。もっと、儲かるものかとばかり。」

「退魔師で儲かっているのは、昔から代々続く組織の一部と、本物の詐欺師だけさ。私の様な野良は食うだけでやっと。」

「私なんて、追いかけてても、お金にはなりませんよ。」

「そうかもね。正直、ここまで何も無く、あんたが何ひとつ面白い事をしないからうんざりしてるわ。」

「だったら、もう、いいじゃないですか？私を追うのをやめて、別の仕事を探せば。」

「あら、有り難うね。でも、心配には及ばないわ。あんたが見て無い処では副業もちゃんとこなしているし。」

「副業ですか？」

「知りたい？」

「いいえ、特には。」

「面白く無い子ねええ。」

「すいません。」

「まあ、いいわ、教えてあげる。占いよ。駅前とかでコソコソと

ね。」

「大丈夫なんですか？勝手にそんな事して。」

「大丈夫じゃないわね。警察やヤクザやクレーマーが結構やってくるわよ。でも私には消える能力があるから。」

「そんな話あまり聞きたく無いんですけどねえ。」

「暇だから話の相手にくらいつてよね。聞き手がいない愚痴ほど淋しいものはないわ。それでも、私、当たるって有名になってきているのよ。実際、客足も増えてるし。あんたも3000円で占つてあげようか？」

「結構です。」

「もつたいないわねえ。特別価格なのに。まあ、本当は私には占いの才能は無いけどね。占いの力で当てているわけじゃなく、相手から得られる情報を大量に引き出して、後は占いの本とかに書いてある事を言つて、それに当てはめて適当なことを言っているだけどね。」

「詐欺じゃないですか。」

「あら、大抵の占い師なんて、そんなもんよ。」

桐野は制服を着て、美由の家の前にいた。

美由の母親が玄関先で桐野の相手をしている。

「あら、あなたが美由のお友達？」

「ええ、桐野と申します。」

「珍しいわねえ。あの子と一緒に学校に行くために家まで誘いに来た子つて中学以来かしら。ごめんなさいねえ。美由は、走りに行つていて、今はいないの。もうすぐ帰つてくるとは思っただけど。」

「桜間さんつて、いつも朝、走っているんですか？」

「そうよ。変わった子よね。もう少し、華やかな高校生活を送ればいいものを。」

美由の弟が玄関奥から桐野を覗いた。そして、知らんぷりをして、奥へと引きこもる。

「でも、良かったわ。あの子に高校でお友達が出来て、本当に心配してたのよ。そーいや、桐野さんって家はどこ？」

「直ぐ近くですよ。」

「もしかして、あそこの鉄筋で出来た白いちよつと大きめの庭のある家の桐野さん？」

「ええ。そうですが。」

そんな会話をしていると、美由と赤服の女と犬が家に帰ってくる。赤服の女は息を切らせ、汗だくになりながら足を止める。

「みなさい。ここ数日の私の成果を。朝の距離はちゃんと、あなたについていけるようになったわよ。」

「はいはい。偉いですね。」

そーいいながら、家を見ると、そこには桐野が自分を見ていた。

「あら、桜間さんおはよう。独り言？」

美由は耳をまっかにする。

「桐野さん……。どうして。」

「あら、友達が一緒に補習を受けに行こうと誘いに来たのに、それは無いわね。」

美由は急いでシャワーを浴びて、制服に着替え玄関を出る。

「桐野さん。」

髪がボサボサで、ちゃんと制服を着てない美由を見て、桐野は「つき」っと怒る。

「桜間さん。髪がボサボサになっているし、制服も歪んでる。あなたに憧れている子がガツカリするでしょ。もう一回家入って身だしなみを整えてきなさい。」

「ええ、でも、桐野さんを待たせちゃ悪いし。別に私はこれでも」

「私が良くないの。」

「はい。やり直してきます。」

美由は反省して家にもどり、鏡の前で髪をとき、制服をととのえてからまた玄関を出た。

「よし。」

桐野は満足そうな顔をする。

「さて、学校行くわよ。あなたにあわせて、歩きで行くつもりで早く来たけど、走らないと無理ね。バスで行きましょう。」

「そうしましょうか?」

退魔師の女と大きな犬も二人の後を追う。

『また、今日もついてくるのか……。こんな事してて本当に食べていけるのだろうか?』

美由はこの一人と一匹がついてくる姿を見て、そう思った。

「ところで、桜間さんはいつも、こんな走らないと間に合いそうにない様な時間に家を出るの?」

桐野が話しかけてくる。

「ええ。私、足だと、このくらいで十分なので。」

「確かに桜間さんが遅刻したのって、私の記憶では先週の日曜の補習一回だけね。それにしても、良く間に合うわね。」

「毎日走ってますから、それくらいなら何とも。」

「桜間さんの王子様のなところって、密かに体を鍛えてて、努力している処にあるのかもねええ。」

「それって、私が男っぽいって事ですか？」

「平たく言えばそうなるかな。でも、カッコいいじゃん。須王寺すおうじさんはあなたに可愛さを取り入れたい様だけど、私は断然、カッコいい男路線で行きたいわね。」

「この人は何を言っているんだろう？」

「あの、何を言っているのですよ？」

「あなたのプロデュースの話よ。おねえ様としてどうやって売っていくのか。」

「そんな……。迷惑な。それにアイドルじゃあるまし……。」

「おねえ様は学園のアイドルよ。アイドルだからこそ、プロデュースが必要になる。須王寺すおうじさんと私は言っなければ、あなたのプロデューサーって事になるわね。」

「いつの間にそんな事に」

「あなたが、お嬢様方に暴力を受けた日からよ。どちらにせよ、お嬢様方を『おねえ様』として屈服させない限り、あなたに平和な学園生活は無いんだから、選択肢は無いわよ。」

『酷い……。』

赤服の女は苦笑していた。

3人と一頭はバスに乗り込み学校へと向う。

美由と赤服の女、黒犬はある一人の中年男性に違和感を感じる。

『あの男性、何か黒いモヤみたいなものが……。まあ、たまに見るし、関わらないでおくか。』

「あら、あなたも気づいているみたいね。」

赤服の女が美由に話かける。美由は桐野がいる手前、返事をかえさない。

「あの男、悪霊に取りつかれているわね。」

『悪霊って……。』

「丁度いいわ。私、お仕事に行ってくるから。」

そう言つて、彼女は姿を現し、男の元へと歩いていく。

『突然現れると、気づかれるでしょうに。』

「あれ？あの赤服の女の人って乗ってたっけ？」

桐野は突然現れた彼女を見て、そういう。

「のつてたんじやないですかね？突然現れるわけもなし。」

「あんだだけ、目立つ格好だと、気づくと思うんだけどな。」

『ずっと、あなたの横にいたんですけどね。』

中年の男は中肉中背といったところで、顔は白く疲れており、少しよれよれの古めのスーツを着ていた。赤服の女とスーツの中年は言葉を交わし、彼はスーツを脱ぐ。女性はスーツを受け取り、何か呪文めいた言葉を唱え、相手に触れると彼の体は青白い光に包まれた。

「どうかしら？」

「疲れがとれました。有り難うございます。」

「お礼の言葉はいいから、約束の一万円。」

男は渋々財布を出し、彼女に一万円を渡す。

「有り難う。普通なら5万はとるところだけど、その代わりに、約束どおりこのスーツも貰っていくわよ。」

彼女はスーツのポケットをあさり、中のものを全部相手に渡す。

「もう、なさそうだけど、一度しらべてみて。」

男は自分のスーツをチェックするが、特に何もなさそうだった。

彼女は男と離れ、スーツを抱きながら席に座る。

『 役得、 役得。 』

美由はその光景をずっと見ていた。

『 悪霊がついているのは、あの人じゃない。あのスーツだ。 』

ジェミニと赤服の女

美由と桐野が教室に入ると、須王寺が二人に声をかけてくる。この3人を近藤ジェミニは見つめていた。

『最近、あの三人いつも一緒ね。』

桐野と須王寺が熱く語り、美由がオタオタしている。

『まったく、あの女。よりもよって、須王寺さんと、口うるさい桐野に取り入るなんて。あの二人に挟まれれば、彼女に嫌な思いを抱く人たちも黙り込むしかないじゃない。なんて、計算高い女なの。』

実際の処、ジェミニは勘違いをしていた。

須王寺と桐野が、美由をオモチャにして遊んでいるだけなのだが、事情を知らない他の人から見れば仲の良い三人組みに見える。

美由に不満を抱いているジェミニから見れば、美由の困った顔も計算している様にしかみえなかった。

『あの、変な女も、あれ以来、連絡ないし。何してるのかしら。』

補習が終わり、ジェミニが学校から帰ろうとすると、突然、赤服の女が現れる。

「今、あんた暇？」

ジェミニは髪を掻き揚げる。

「何か良い情報でもあったのかしら？」

「いいや。一応、経過報告と思ったただけだが。」

「まあそれでも良いわ。」

ジェミニと赤服の女は、裏庭へと移動する。

「で、あの女について分かった事を教えてくれない？」

「そうだなあ。一言で言うと、非常につまらない女だな。」

「と、言つと?」

「家に帰つたら、まず、勉強をして、暗くなつたら街を走つて体力づくり、その後、また勉強して、寝て、起きたら、また走りに行つて、その後学校の繰り返しだ。」

「本当につまらない女ね。他には何かしてないの?」

「本当にそれぐらいしか、知らないな。まあ、受験生としては妥当な生き方とも思うが、もう少し華のある生き方をしてもらわないと、正直、見張っているこっちがつらいわよね。」

それはそうと、最近、あの女、須王寺さんと桐野さんと仲が良いみたいなの?何か知ってる?」

「さあ。まあ、その二人なら、あの女の家遊びにきてたぞ。」

「遊びに来ていた?で、どうだったの?」

「どうだったと聞かれてもなあ。あの女を須王寺と桐野という二人がオモチャしてて、あの女は二人のいじりにあたふたしているだけに見えたが。」

「オモチャ?」

「ああ、オモチャにされてたな。話を聞いている限りでは、本人はその気がまったく無いのに、桐野と須王寺の二人が、あの女をおねえさまとして、プロデュースしたいとか何とか。」

「それって本当なの?」

「そうは言っていたが、それが本気なのかどうかは別の問題だからな。ただの冗談だと思うけどな。」

「ありがとう、ずいぶん参考になつたわ。」

「ん?私は何も話してなんだがなあ。あの女の不思議な力について知りたいわけじゃないのか?」

「ああ、何かそんな事いつてたわね。見えないモノがみえるとか正直、そんなのに興味は無いわ。」

「まあ、そつちには何も成果はないから、それでいいなら、こつちも問題はない。」

ジエミニは財布を取り出し、一万円札を5枚引き抜く

「はいこれ。依頼料。」

「ありがたく受け取っとくわ。それより、私、あの女を追うのを止めようと思っているの。」

「そう。まあ、勉強やジヨギングにつきあつたて、つまんないでしようしね。」

「わかつているじゃん。それじゃあね。」

歩く

補習終わりに、美由は須王寺と桐野に捕まっていた。

3人しかいなくなつた教室で、美由は何故か一人歩かされていた。

「力強くはあるけど、格好良くないわねええ。歩くというよりウォーキングだね。」

「そうねええ。優雅さが無いわねええ。」

二人とも好き勝手な事を言っていた。

「あのー。別に歩き方なんてどうでも・・・。」

「よくない。」

二人同時に美由に注意する。

「あう。」

「ひとまず、桜間さんつて、どんな歩き方してるの？」

桐野は腕組をしながら、そう聞く。

「え？まず、歩き出す時は、頭を前にたおして、頭の重みで上半身を倒して、その上半身が落ちる力を利用して、右のかかとからひねるように。踏み出し、スピードがある程度出たら、上半身をあげて、背をピンとして、腰を5cmぐらい落とす感じにして、なるべく歩幅を大きくしながら・・・。」

「ああ、歩きはじめからして優雅でない。」

「頭を前に倒してその重みを利用するのはいただけませんね。」

二人は美由の歩き始めに駄目だしをする。

「こつちの方が早く加速できるので。」

「スピードは問題ではないの。いい？大事なのは優雅さよ。」

「登下校中ならそれでいいかもしれないけど、学園内でそんな効率を求めちゃ駄目よ。」

『何で私が優雅さなんぞを追求せねば・・・。できる限り目立たない感じがいいだけだな。』

須王寺は桐野を見つめ、ニツヤっとする。

「桐野さんいいもの持ってきたわよ。」

「へえどんなの？」

須王寺は自分のカバンからハイヒールというか黒いピンヒールを取り出す。

「おお。」

美由ははじめて、ピンヒールを見た。普通の靴屋には無いからだ。あつたとしても、少し足のサイズが大きい自分にあうヒールがあるとは思えない。

「あの、誰がそれを履くのでしょうか？」

「もちろん。桜間さんに決まってるでしょ。」

「私の足のサイズに合う、そのサイズのは……。」

「大丈夫よ。ちゃんと調べてるから。探すのに手間取ったけど。」

「さあ、桜間さん履いて。」

美由は一生の中で履きたくないと思っていた靴がある。それがピンヒールだった。そして、目の前に自分用のピンヒールがあり履けと強要されている。

しかたないので、美由は上履きを脱ぎ、ヒールを履いた。

少し足が入り難く、指が変な感じになっている。

「桜間さん履き心地はどう？」

「ちよつと、指先が窮屈な感じですか？」

「どれくらい？ほんのちよつと？」

「ええ。だったら問題無いわね。きついぐらいなら変えないとダメだけど。」

「さあさあ、立ち上がった。」

美由は椅子から立ち上がる。ただでさえ身長のある美由がかなり大きく見える。

「なかなか、色っぽいわねええ。桐野さん。」

「そうですねえ。須王寺さん。」

「バランスを全然とらなくても、立ってるんですね。立つだけでガクガクになると思ってた。それに、足にはそんなに負担はこな

いんですね。でも、その代わりお腹のあたりが結構きますけど。」

「あら、ハイヒール履いた事が無いの？」

「私の足に合うおしゃれ靴はそうそう無いと思いますが。」

「そんだけヒール高が高いと、歩くのに結構コツがいるわよ。」

美由はおそろおそろ、ぎこちなく蟹股気味に歩きはじめる。

前かがみになるうとするが、靴の形状がそれを許さない。と、言うより倒れそうになる。

「桜間さん。危ないわよ。そんな歩き方じゃ。」

「え？」

一瞬気を抜いたら美由は横に倒れた。

「あちゃー。」

「はい、立ち上がる。そんな蟹股みたいな歩き方するから倒れるのよ。さっきやったウォーキングみたいに歩きなさい。」

「はい。」

1時間ほど、二人のしごきは続いた。

頭の上に教科書を載せられ、落とさない様に歩かされるのだが、

美由は頭を前に倒す癖があるので

歩き出しでそれがなかなかできない。

できる様になったら、今度は腰の動きが男っぽいと指摘される、腰ではなくお尻を振る感じで歩けといわれる。

美由の腰全体を満遍なく使って歩幅を稼ぐアスリートのな歩き方だ。そのため、色っぽさはない。

『プリプリ腰を振るのはなるべくしたくないんだけどなああ。』

スーツについて

美由はやっと、二人から開放され校門を出る。

二人ともこの後、何か用事があるらしく、一緒に帰る事はなかった。

美由はため息をつく。

「ふう」

「あら？ため息なんてついていると、幸せが逃げるわよ。」

美由が顔をあげると、そこには赤服の女と黒犬がいた。

「まだ、いたんですか？」

「あら、悪い？」

「悪いに決まっていますじゃないですか。」

二人と一匹は歩きはじめる。

「ところで、今朝、バスの中で男の人と話してたじゃないですか？悪霊がどうのと。」

「あなたから、話を振るなんて珍しいわね。」

「気になったから、聞いているだけです。たまにああいう黒いモヤがかかった人を見るので、それって悪霊なのかと。」

「へえ。」

「なんです？」

「あなた、私と同程度ぐらいは見えてるんだ。ちょっと見えるだけかと思ってたけど。」

「それが何か？」

「うらやましいわねええ。私も見える才能はあったけど、動物が化け物化したのが輪郭が見える程度で、修行してやっとここまで見えるようになったのに、あなたは天然でそのレベルなんだ。」

『私、何やら余計な事を言ったらしい。』

美由はバス停を素通りする。

女はバス停前で立ち止まる。

「あら？バスは使わないの？」

「私は歩きます。バスを使いたければ勝手にどうぞ。」

「連れないわね。」

女は歩きはじめ。

「ところで、悪霊の事なんですけど、あの男の方ではなく、あなたが受け取ったスーツの方についていたように見えたのですが。」

「そうよ。」

「何で、男の方に魔法を使っただんですか？」

「そっちの方が説得力あるでしょ。どうも、悪霊のせいでちょっと見えているみたいだったし。」

「何の魔法だったんですか？」

「ちよつとした、元気を与える魔法。悪霊のせいで疲れていたみたいだったし。」

「そうなんですか。ところで、あのスーツはどうしたんですか？」

「悪霊を呪術的に封印して、あるところに保管しているわよ。」

そこは近くの駅のコインロッカーであった。

「悪霊を払わないんですか？」

「何で？」

「何でって、危ないからに決まっているじゃないですか。」

「そんなもつたいたい。」

「もつたいたい？」

「ええ。悪霊がついたモノって、魔法の道具なのよ。悪霊がついているというだけで、魔力を帯びている事が確実な。」

「それは、そうかもしれませんが、悪霊ですよ。」

「あら、悪霊のスーツだけでも霊的、魔術的な防御力はかなりのものよ。下手に人間が魔法強化した服なんかより遥かに強力な。」

「そんなんですか？」

「それに、魔法の道具を作る雛形になるから、高く売れるのよ。」

「買う人がいるんですか？」

「そりゃあ、いるから、あんなオヤジのスーツを引きとったわけ

で。」

「話は変わりますが、悪霊って、どうやって取り除くんですか？」

「そんなもん。大抵はお風呂に入れば落ちるわよ。」

「そんな、汚れみたいな……。悪霊ですよ、悪霊。」

「あら、あなた、日本書紀とか読んだこと無いの？」

「無いです。」

「日本人だったら、現代訳版ぐらいは読んだ方がいいわよ。」

「今度、機会があったら読みます。で、何でお風呂なんですか？」

「お風呂である必要は無いわよ。水を浴びれば落ちるわよ。襦みそぎっ

て言い方がいい？」

「襦ですか。」

「ヨーロッパでもけがれを落とすために沐浴もくよく要するにお風呂に入るのはメジャーな手段だし。学校で習わなかった？ローマの聖職者の家には幾つもお風呂があるとか。」

「知りませんねえ。」

「まあ、本当に強力で、かなり強くとりついた悪霊にはあまり効かないけど、普段、そこらへんにいる様な悪霊のたぐいなら、風呂に入るだけで充分ね。」

「へええ。悪霊を祓うのに聖水とか使うわけじゃないんですか？」

「聖水なんて大層なもん使う必要なんて無いわよ。綺麗な水で充分よ。」

「と、いうか、そこらへんに悪霊ってゴロゴロいるんですか？」

「ゴロゴロって程じゃないけど、結構いるわね。でも、風呂に入れば消えるから。問題は無いでしょ。服にだって、悪霊はつくけど、それも洗濯してしまえば、大抵一発ね。」

「本当に汚れみたいな扱いはなんですね。悪霊って……。ところで、あのスーツはどうなんですか？」

「あれは、結構、強力みたいで、洗濯では無理じゃない？」

占い

美由と赤服の女と犬は、美由の家に向かい歩き続けていた。

「ああ、悪霊を祓うためとか言って、風呂に一日何回も入ったり、異常に潔癖になったりしない方がいいわよ。」

「そうなんですか。何ですか？」

「悪霊がまとわりつくという事は、良い霊もまとわり着くって事ですよ。そんなのまで落とす事になるから。それに霊的なものがある程度、身にまとってないと、とりつかれやすくなるの。それと、最近分かった事だけど、どうも清潔にしすぎると霊的耐性が落ちるみたいなのよ。だから、1日1回適当に体を綺麗にするくらいが丁度いいらしいわよ。」

「へええ。何か、本当にバイ菌対策みたいな感じですね。」

女は足を止める。

「どうしたんですか？」

美由はいきなり足を止めた彼女に質問した。

「私、今から副業の方に行くから、あなた、先に帰ってなさい。」

「別に許可なんか貰わなくても、そうします。副業って占いですか？」

「そうよ。」

彼女は犬を見て、頭を撫でる。

「メリー。彼女と一緒に帰りなさい。」

「バウ」

犬は一回吼えて、美由の方へと歩き出した。

赤服の退魔師は、駅へとやってきて、占いの客を待つことにした。さっそく、4人組みの女子高生ぐらいの年齢の私服の女性達が自

分の方に向かつて歩いてきた。

朋と鈴木 あずさと田中 佐和と佐藤 絵里の仲良し4人組みだった。

「本当に当たるって有名なんだって。」

そう、あずさが言う。

「あの人じゃない？赤いワンピースだし。」

田中佐和が、指を指しながらそういう。

朋はその女性を見ると、何日前、自分の肩を突然つかんできた女性だと気づく。

『あーう。あの人なのか。イヤだなあ。でも、みんな、占いをしたがっているし。我慢しないと。』

赤服の女も朋に気づく。

『あれ？あの子たしか、あの女以外で私とメリーに気づいた女の子。あの女に気を取られて、思い出せなかったが、そっぴあ、この子もいたな。』

鈴木あずさが、退魔師の女に声をかける。

「すみません。占いをされているかたですよ？お願いできますか？」

「いいよ。人数が多いし、学生さんのようだから、普段は一人3000円だけど、一人1000円で占ってあげよう。」

「有り難うございます。」

赤服の占い師は営業スマイルを見せる。

『まあ、あの子のことは気になるけど、今は商売商売。』

赤服の女は本業が退魔師なので、職業上の必要性なため、占いの勉強を色々としている。手相や姓名判断、占星術など色々だ。それらをミックスして、後は相手を見てマニュアルに従い結果を言うだけである。タロットカードなども一応かじってはいるが、カードの量が膨大で覚えられない上に、あまり、当たらないのでやらない。それに、机やカードを用意するのが面倒だ。

鈴木 あずさ・田中 佐和・佐藤 絵里を占う。結果は頑張れば何とかなるという感じだった。

朋の番になった。

「へええ。あんた成美矢 朋って言うの。」

「はい」

「手、出して。」

朋は言われるがままに手を出した。

『まあ、何てカワイイ手。小学生みたい。頭脳はまずまず。少しのんびり屋で、飽きつぱいところがあるか。へええ。霊的守護の力と魔法的ちからが結構あるのか。』

占いが終わり、4人は去っていった。

「ね、結構あたってたでしょ。4人とも恋愛は駄目駄目だったねええ。」

鈴木 あずさは、にこやかにそう言った。

魔法道具屋の男

朋達4人組が去ると、赤服の女は商売を止めて、駅の中へと入り、ロッカールームへと向かう。

ロッカーの鍵を取り出し、ロックを外し、扉を開けると、そこには、大きめのリュックと麻縄で縛られ紙が張られているスーツがあった。

彼女はスーツを腕にかけ、扉を閉め、お金を投入し、またロックをかけた。

『さて、次の電車で来るとか言ってたみたいだけど。』
彼女は改札口の前で待つ事にした。

電車が到着し、改札口から人が出てくる。

一人の太めの男のスーツを着た男が銀色のアタッシューケースを持って、へらへらしながら退魔師へと近づいてくる。

「いやあ。神園さん。まいどまいど、有り難うございます。」

どうも、赤服の女は神園というらしかった。彼女は無言のままだ。

「今回は上物という事で。」

「ええ。これよ。」

そういって、紐で縛られたスーツを見せる。

「それですか。では早速鑑定の方を。」

そういって、スーツを受け取る。

「ほう、聞いてた通り、中々の強い悪霊のようですね。良く、とりついている。」

「でしょ。ここまで、とりついているとなると、何か仕掛けがあるように思うけど、調べるのが面倒だから調べてないわよ。」

「ええ。ええ。かまいませんよ。下手に調べられて、悪霊が離れてもらってもこまりますしね。」

「で、幾ら貰えるのかしら?」

「30万ほどでいかがでしょうか?」

「あら、安いわね。よそなら50万程するわよ。」

「この不景気ですし、なにぶん、予算が削られてまして。」

「なら40万で手をつつわ。」

「35万では駄目ですか？」

「しかたないわね。特別よ。」

「毎度有り難うございます。」

太めの男は、財布を取り出し、お金を抜き取り渡す。

女は札束を数える。

「はい、確かに受け取ったわよ。そんな事より、あんたらの処でも、モドキを引き取ってくればいいのに。」

「ウチは魔法道具専門で、化け物の類は専門外ですて。」

そう言いながら、銀のアタッシュケースにスーツをしまう。

彼女は、そのスーツを見つめる

「相変わらず、ご大層なスーツね。封印が何重にもかけられてる。」

「こんくらいしないと、逃げ出す可能性もありますんでね。」

「あら、私の封印が駄目だとも。」

「そんな事は言ってますが、念には念を。」

男はアタッシュケースにロックをかけた。

「では、私はこれで、またのご利用を。ああ・・・。」

「どうしたの？」

「そう言えば、昨日、隣の市で化け物のおとりものがあつたそうですね。聞いてます？」

「へええ。聞いて無いわね。で？」

「何でも、取り逃がしたのが名門の須王寺だそうで・・・。」

「へえ。そんな処がわざわざ。」

「で、化け物に懸賞金がかげられたそうですね。行かれてみてはいかがですか？」

「冗談でしょ。須王寺で取り押さえられない化け物に私が敵うわけないじゃん。遠慮しとくわ。そっぴゃあ、この街にある学校に須

王寺って女がいるけど、何か関係あるのかしらね。化け物が見える目を持っている様にも、退魔師の訓練を受けている様にも見えなかったけど。金持ちではあったわね。」

「さあ。あそこは退魔師業以外にも手広くやっていますからねえ。」

「

近寄る鬼

蛙主とウサギ主にタヌキ主、猿にイノシシ、それと傷だらけの黒猫が、山奥の杉林に集まっていた。

「何じゃと、鬼じゃと？」

蛙主が驚いた声をあげる。

「はい。どうも、鬼が発生したようです。」

傷だらけの黒猫が、落ち着いた感じで話始める。

「迷惑な話だな。お主等の縄張りでか？」

ウサギ主が黒猫にたずねる。

「いいえ。この街ではなく、こっから30Km程はなれた大きな街での事だそうです。」

「近いのか遠いのか微妙な距離だのう。人の足なら歩いて半日、走れば2時間から4時間。ワシなら三日はかかる距離だのう。」

蛙主は手であごを撫でながらそういう。

「カエルは修行が足りん。ワシなら1時間で行ってみせるぞ。」

巨大で筋トレが趣味のウサギ主がカエルに対して妙な対抗意識を見せた。

「ウサギよ。お前さんと比較するな。体のつくりが違うんじゃない。」

「あの、ウサギ主様、蛙主様脱線をしている場合では無いのです
が……。」

黒猫が二柱に釘を刺す。

「でも、鬼じゃる？ワシ等、化け物の管轄ではない。鬼は人間が何とかするべきものじゃ。第一、そんなに離れているのであれば本当に関係ないではないか。」

ウサギ主は黒猫の意見に反論する。

「それがですね。どうも、人間が取り押さえようとして、失敗し、どうも、こちらの街へ向かって逃げているそうなんです。それで、

その鬼を追って、人間の退魔師の団体も一緒にこっちに来ているみたいで……。」

「何と、迷惑な。」

猿がそという。

「で、とにかく、鬼にも退魔師の団体にも巻き込まれない様に身を隠してください。」

「鬼は暴走と違って、ご飯さえ食ってれば、ずっと生き続けるからう。何日身を隠しておけば良いのやら。」

神園という赤い修道服の様な服を着た退魔師はインターネット喫茶にいた。

マウスのホイールをクリクリ回しながら、文字化けした文章を読んでいた。

暗号化されているのである。

彼女は独り言をつぶやいた。

「へええ。こっちに向かっているのか。」

彼女は、賞金がかけられた化け物とやらを調べていた。男には否定したが、もし、運が良ければというのもあり、一応チェックする事にしたのだ。

「特徴は、と……。」

彼女は特徴を読み、ふと疑問に思った。

『こいつは化け物じゃないんじゃないのか？鬼の様な気がする。』
色々な仲間内のページを移動し、情報収集をする。

そして彼女は床を蹴り、椅子を後ろに移動させ、伸びをする。

「ああ、やつぱり、鬼じゃん。何で化け物と偽って鬼をフリーの連中に狩りさせようとしてるわけ？鬼殺しは立派な殺人よ。」

鬼の説明

退魔師の女は、美由の部屋にいた。

そこには美由もいて、勉強をしていた。

赤服の女は自分で持ち込んだセンベイをバリバリ食べている。

「ねえ聞いてる？鬼よ鬼。化け物といいながら鬼よ。わかる？」

美由は後ろでセンベイを食べながら愚痴をこぼしている女の方を向かず勉強を続けている。

「はいはい、そうですか。」

「あんたも勉強何かしてないで、一緒にセンベイでも食べて私の話聞きなさい。」

美由は退魔師の女の振り返る。

「なんですか。いきなり、人の部屋にやってきて、センベイをバリバリたべて、鬼とかわけの分からない話を。あなた、私を密かに見張っているんじゃないんですか？」

「だって、退屈なんだもん。」

「退屈だったら、見張るのやめりゃあいいじゃないですか。」

「ええ。だって、知り合いがいるわけじゃないし。愚痴こぼせるのあんたしかいないから。」

「まったく。」

美由は椅子から立ち上がり、センベイを掴んでパリッとたべる。

「で、何ですか？もう少しわかるように順序だてて言ってください。」

「昼さ。あんたと別れたじゃない。」

「ええ。」

「その時、今朝のスーツを買い取ってくれる人に会ったのよ。」

「はあ」

「そいつが、昨日、隣の市で化け物のおおとりものがあって、逃がしたんで、その化け物に懸賞金が懸けられたっていうのよ。で、

さっそく調べたらさ、一千万も懸かってさあ。これはやらねばと思
つてよくよく化け物の特徴をみたらさあ。どうみても鬼なのよ。で、
知り合いの退魔師とかのページとかをチェックしてみたら、どう
も、本当に鬼みたいでさあ。」

「あの？鬼って何ですか？化け物と違うんですか？」

女はリスの様に「カリカリカリカリ」とセンベイをかじる。

「あんた、鬼しらないの？」

「化け物の一種じゃないんですか？」

「まあ、普通の人の認識ならそうか。鬼は人間よ。人間が化け物
化した存在。」

「そうなんですか？」

「そうよ。まあ、化け物で人間みたいなのも鬼と呼ぶ事もあるけ
ど、私らの間では鬼と叫びたら、人間が化け物化した存在ね。」

「へええ。で、鬼退治をするのと、化け物退治をするのとで違い
があるんですか？」

「当たり前じゃない。鬼は化け物化したとはいえ、人間よ。殺し
たのがバレれば殺人罪で即逮捕よ。1000万で人殺しるって、酷
くない？気づかなかつたヤツがもし殺してもすれば即、警察行きよ。
私はそこに怒っているわけ。何を考えているのかしら。懸賞金懸け
た連中。」

「ところで、鬼って放置して何か問題でもあるんですか？」

「あるやつもいれば、無いやつもいるわね。理性を失って暴れま
わるヤツもいれば、理性を持って悪い事をするヤツもいるし、かわ
いそうな青鬼だっけ？あんな、平和な鬼のままのヤツもいるわね。」

「理性を持って悪いことって・・・。」

「鬼になるのには色々あるけど、自ら強大な力を欲して鬼化する
者もいれば、霊的な力を異常に浴びて鬼化する者もいるし、何か負
の感情が強すぎて鬼化する者もいるわね。」

「色々あるんですね。」

美由はセンベイを「ぱつき」と食べる。

「見た目は千差万別、鬼化する前のまんまのもいるし、体が大型化するのも、妖怪みたいになるのもいるわね。体が変化しても、人間の姿に戻る事が出来るやつもいるわ。」

「へえええ。鬼化して、人間の姿になれるんですしたら、見つけるのが大変そうですね。」

「まあ、鬼は人間化しても、力を放出しているから、ある程度、見える目があればだいたいわかるわよ。」

「鬼って、あなたみたいに消える事も出来るんですか？」

「消える方が多いけど、消えることが出来ないのもいるわね。ベースは人間だから消えてない方が普通の状態。そこらへんにいる動物の化け物は消えているが普通みたいだけど。何が違うのかしらねええ。」

「で、もし、鬼と戦うとしたら、あなたならどうするんですか？」

「逃げるわね。」

「逃げるんですか。」

「そう、だって、動物は殺しても器物破損ですむけど、人間を殺せば殺人罪だから。殺さない様に取り押さえられるならそうした方がいいんだろうけど、生憎わたしの手札にそんな便利なものは無いの。」

『魔法少女も無いなあ。蛙主とかは、縛る魔法をもっているけど。』

鬼の説明2

「では、一般的に退魔師が鬼を退治する時はどうしてるんですか？」

美由はもしかしたら、自分が鬼と戦うかもしれないと思い、参考にするため聞いてみる事にした。

「あら？あんだ、鬼退治に興味があるの？」

彼女の言葉に一瞬『っは』とするが、平然を取り繕う。

「ええ、そりゃあ、少しは・・・」

「ふーん。まあ、私は見た事も、やった事もないけど、一応、教えてあげる。鬼退治といっても殺せば、殺人になるのは分かるわね？」

「ええ。」

「何で殺人になるかわかる？」

「え？言っている事が良くわかりませんが。」

「つまないわねええ。死んだ時に肉体が残るからよ。しかも、その肉体が人間の姿にわざわざ戻るの。要するに人間の死体という証拠が残るから、問題があるわけ。」

「なるほど。」

「という事は、殺せない。イヤ、合法的に殺す方法もあるんだけど、ちよつと面倒なのよね。」

「どんな？」

「緊急避難的措置か正当防衛。または、超法規的措置。この3つのどれかね。緊急避難的措置と正当防衛は相手を殺す意外に助かる道が無い場合。」

「はい。」

「正当防衛は不良に絡まれて暴行を受けたら、反撃しないと身が危険にさらされる場合とかあるじゃん。そういう時に反撃しても罪にはならないってヤツね。緊急避難的措置はたとえば海で遭難して

食料が尽きた時、人間を食べなければ全滅してしまうとか。山で崖に登っていて事故に合い、相手を見捨てないと、共倒れになるとかいう極限状態での生死の選択を迫られた場合ね。」

「はい。で、超法規的措置ってなんですか？」

「法律で定められて無い、または、法律で禁止されているんだけど、どうしても、法律を逸脱しないと、どうしてももないって事があるでしょ？例えば9・11とかのテロリストが一般旅客機をハイジャックして、何千人とか働いている超高層ビルに突っ込もうとかしている。そのそういう時に、罪にならない様に法律では禁止されているけど、現在の法律ではどうしようもないので、しかたなく法を犯しても罪にならないという措置の事よ。」

「へええ。そんなのがあるんですか。」

「まあ、鬼退治で超法規が発令される事なんて滅多に無いから、除外して考えて良いわよ。」

「滅多にという事は、無い事は無いんですか？」

「そりゃねええ。でも、よっぽどやばい事が分かってて、関係するところに根回ししまくって、やっと発令だから。ちよつとやそつとのコネやカネがあるだけじゃ駄目ね。私みたいなフリーなんて論外ね。」

「なるほど。」

「と、言うわけで、緊急避難的措置は極限状態になきゃ駄目だし、超法規については論外だから、正当防衛をどう立証するかって話になるわけよ。その正当防衛を立証するのも難しいから、殺すって選択肢をまず切り捨てる必要がわけよ。」

「へええ。」

「もう一つ、日本の裁判所はオカルトを認めて無いから、オカルト的理由なんて、一切通じないわよ。」

「はい」

「そういうわけで、鬼退治の場合、相手を殺してはいけないという制約があるから、殺さない程度に痛めつけて、身動きがとれない

様に拘束するしか手が無いわけよ。だから、如何に相手を身動きが
取れないように押さえ込むかって方法になるわけ。」

「なるほど。」

「だから、落とし穴とか、罠をしかけて檻に入れるとか、ロープ
や鎖でがんじがらめにするとかになるわけよ。」

「へええ。勉強になりました。」

「あら？まだ、話は終わってないわよ。」

「そうなんですか？」

「そうよ。罠にかけるとか、ロープでがんじがらめにするとか、
一人で出来るわけが無いじゃない。だから、最低でも3人。できれ
ば5人ぐらいでチームを組んでやるわけよ。私みたいな一匹狼じゃ
無理な方法よ。」

鬼と戦う

夜になっていた。

美由はいつもどおり、夜の街から学園近くを通り、山道を走っている。

赤服の退魔師も美由に続く。

朝のランニングは軽くなので犬もつきあうが、夜のランニングはハードなので犬はつきそっていないかった。

いつも、彼女は山道手前で、ギブアップしているが、今日は山道にも着いて来ている。

本当なら、美由の監視のために着いて来ているはずなのだが、だんだん、彼女自身のトレーニングに目的が変わっている様だった。

彼女は足を止める。

「待つて。休憩しましょう。」

彼女はゼイゼイ言いながら、アスファルトに座り込む。

美由も足をとめた。

「別についてこなくても、何もありませんから、そこで休んでいたらどうですか？もう少し走りますし。どうせ、折り返してここに戻って来るんですから」

「そういう、哀れみは好きではないわね。」

「別に哀れみとかではないんですけど・・・。あなたに付き合ってたら目標の距離を走れないので言っているだけです。」

「あら、冷たいわね。」

「さつきは、哀れみは好きで無いと言ってたのに・・・。」

「それと、これは別よ。」

『同じ事だよなあ』と、美由は心の中で思った。彼女には彼女なりのルールがあるんだろっと思っ事にする。

美由は自分が進むべき道の方を見た。

何かぼやけた光が見える。

『何だろう？はじめてみる光だけど。蛙主やウサギ主はあんな光は放たないし。』

「あの？」

「なに？」

美由は指を指す。

「あのボヤけた光はなんでしょう？こっちに近づいている様な・

・。

「え？」

彼女は美由の指が指し示す方を見る。確かに何かぼやけた光がこちらに向かっているのが見える。

『なんだ？』

二人は黙って、光をじーっと見続けていた。

そして、認識できる距離までそれが近づく。

それは、鬼だった。

赤というより、オレンジ色の肌をしており、身長は2mを超え、筋肉隆々、見てわかるくらいハッキリとした短足で、額に二本の角が突き出ており、ボロボロの服を着て、いたるところに大きな傷を負っていた。その傷口はまだ新しいようだった。

「鬼・・・」

退魔師の女はそうつぶやいた。

美由は女の方を見る。

「あれが鬼？」

そういつて、鬼の方を再度見て、身構える。

鬼は二人に気がついたようで、両手をあげゴリラの様に二人を威嚇する。

「逃げるわよ。」

退魔師の女は片手を着き、回転するように鬼と反対の向きに立ち上がる。

「何しているの？」

「え、はい。」

美由も、体を反転させ走り始めた。

鬼は二人が走り出すと、物凄い勢いで二人に走りよってくる。

美由は走りながら後ろを見ると、鬼がすぐそこまで来ていた。

「鬼が追ってきますよ。」

「余所見せずには走りなさいよ。」

「そんな事、言っただって、もうそこまで来てますよ。」

美由は全力で走り、赤服の女を追い抜く。

「あ、待ちなさい私を置いていかないでよ。」

「あなた、退魔師でしょ。何とかしてくださいよ。」

「さつきも言っただでしょ、正当防衛でも無い限り鬼を攻撃できないって。」

「十分、正当防衛通じるでしょ。この状況。」

「通じるかもしれないけど、私じゃあんなの無理。」

「ええ!!!」

その時、鬼が彼女を攻撃出来る距離まで近づいて来ていた。そして、大きな腕を彼女に向けて振り下ろす。彼女は運が良いのか悪いのか、偶然、足を絡ませ転んでその攻撃をよける事ができた。

彼女はアスファルトの上で転がる。勢いあまった鬼の足に転がった彼女の体がひっかかり、鬼も転げる。

美由は足を止めて、後ろを振り返る。

鬼は起き上がり、退魔師へと近づいていく。

彼女は足をくじいた様で立ち上がる事が出来ない。

「つく。絶対絶命って感じね。」

鬼がジリジリと彼女に歩み寄る、彼女は、呪文を唱えると手から炎が現れ、その炎を鬼に投げつける。

炎の塊は鬼に当たるが、鬼の服と髪が少し焦げただけで、ダメージを食らっている様にはみえない。

「まさしく焼け石に水ね。私もここまでか……。」

美由は、手遅れかもしれないが、テラミルに変身しようとした瞬間だった。

突然、鬼と退魔師の間に強く青白く輝く槍が飛んできて、アスフアルトの道路に刺さった。

「何？」

鬼はその槍をみて、道路からはなれ、杉林の奥へと消えていく。

その鬼を追って、3人の男達が杉林の中へと入っていく。

「そこのお二人さん。大丈夫でしたか？」

そう言って、一人の女性が近づいてきた。

そこにいたのは、須王寺麗菜すおうじに似た女性だった。

「須王寺さん？」

美由は思わずそう言ってしまった。

須王寺

須王寺に似た女は美由を見て不思議な顔をした。

「誰？あなた？」

「え？須王寺さんではないんですか？」

「いいえ。私は須王寺ですが。」

「桜間です。」

「桜間？知らないわね。」

「？須王寺 麗菜さんではないんですか？」

「ああ、麗菜姉さんのお友達なの。姉さんに退魔師のお友達がいるとは知らなかったわ。」

「あの、私は退魔師では無くただの女子高生で、そちらの倒れている方が退魔師さんです。」

「そうなの。大丈夫ですか？その赤服の退魔師さん。」

「どうも、須王寺さん。まさか、須王寺家の人間が直接でばって来るとはね。」

「あら、あなた。私達を知っているの？」

「そりゃ、ご同業であんた等を知らないのはモグリだろに。」

「それもそうね。ご同業なら、分かっていると思うけど、今回の件は内密にしてね。」

須王寺妹は、にこやかな笑顔でそう言う。

「わざわざ、念を押さなくてもいいわよ。そんな自分の立場も危うくする様なバカなマネはしないわよ。」

須王寺妹は美由の方を見る

「その姉さんのお友達の方もお願いします。」

「はい。」

「ところで、その女子高生が何で退魔師と一緒に鬼退治をしているのかしら？懸賞金目当てで鬼と戦っていたの？」

「違います。私の格好を見てもらえば分かると思いますが、体力

づくりのためにランニングを彼女と一緒にしてたら、突然、鬼が現れて、襲ってきたので。」

「それは運が無かったわね。私達が追いたてていたから、敵と思っただのかしらね。で、何で女子高生と退魔師が一緒にいるか教えて貰えるかしら？」

「ええと、私には化け物を見る目があつて、たまたま、彼女が消えている時に私が彼女がいる事に気づいて、何故だか、その事が彼女の興味を引いたらしく、彼女が私をつけて来まして、えっと、それで、私は日課で毎日、この時間に走っていて、彼女も何故か私を追つて着いて来て、そしたら鬼にあつて。」

「説明が分かりづらいわね。」

「すいません。」

「要するに、あなたが天然の見える目を持っているのが気になつて、その退魔師さんがあなたを調べるためストーキングしてたというわけね。」

「まあ、そうです。」

「納得はいかないけど、今はそういう事にしとくわ。あの鬼を取り押さえ無いといけませんしね。」

彼女はアスファルトに刺さつた、槍を引き抜き、森へ歩みですが、2・3歩歩いた後、振り返る。

「そうだ。もう一つ、念を押して置く事がありました。姉には絶対と言わないで下さいね。特に私に会つた事。それと、姉さんに妹がいる事も内緒にしてね。」

「はあ。何故でしょう？」

「人は色々と複雑な家庭の事情を抱えておりましてよ。そういう無粋な事は言わないで下さいまし。」

「素直に聞いてた方が良いわよ。あんたの身のためにもね。」

赤服の女は吐き捨てるように言う。

「わかりました。」

「では、これで失礼しますわ。」

そう言つて彼女は森の中へ消えていく。

二人は呆然とそれを見ていた。

美由は赤服の女に近づくと。

「大丈夫ですか？」

「大丈夫ではないわね。走るのは無理そう。でも、立って帰るぶんには問題無いわ。」

「肩を貸しましょうか？」

「遠慮しとくわ。でも、立ち上がるのは手伝つて。」

「わかりました。」

美由は右手を彼女に差し出し、彼女はその手を掴む。美由は腕に力を入れ、彼女を引つ張り上げる。

「助かつたわ。」

「いいえ。」

「まさか、鬼がここまで来るとはね。」

鬼を追う者たち

須王寺妹は、腐葉土がたまり、起伏の激しい杉林を平然と走っていた。

服は少し短めの巫女服である。

彼女は須王寺家の人間ではあるが、神主になるための階位をもっていないので、巫女服のままだ。階位を取るには、神社庁が指定する養成所で数年間勉強するか、神社庁が指定する大学に通うか、数年間神社での就職したのち養成所で何日間かの講習と試験を受けなければ階位はとれない。

彼女はポリウームのある長い髪を、和紙で包み一本に束ねていた。右手には槍が握られている。槍と言っても、金属は一切ついていない。ただの木の棒を尖らせただけのものだ。もち手の部分には怪しげな文字がびっしりと書かれた布が巻きつけられている。

彼女が山道を走っていると、先ほど、鬼を追って山の中に入った男の一人が彼女の元へ近づいてきて、一緒に併走する。

「月美様。鬼は山の上の方へと逃げていますよ。」

「わかりました。それにしても、これだけ追っているのに、まだ捕まらないなんて。私の退魔師デビューに傷がつかましたわね。」

蛙主とウサギ主は山の上の方で仲良く酒を飲んでいた。

「しかし、人間も迷惑よのう。」

そう、ウサギ主は言う。

「まったくじゃ。女子高生を拝みにいけんではないか。」

蛙主は愚痴をこぼす。

「人間の女には興味は無いが、こつ堂々と山の中を走れんと、ストレスがたまる。」

「まあ、こんな山奥には鬼は現れんじやろうから、酒でも飲んでおとなしくしておれ。」

そういいながら、ひょうたんを口につけ、酒をぐびぐびと飲んだ。

「ん？」

二人は何かに気づき、同じ方向を見た。

「なんじやろうな？」

「酒で鼻がつまって、臭いわからんが、何か気配がする。」

じつと見ていると、突然、鬼が現れ、物凄い形相でウサギ主に飛びかかってくる。

「鬼じゃ。何でこんなところに。」

ウサギ主は、相手の手をつかみ、力比べをはじめめる。

「知るか。」

鬼も大きい、ウサギ主はもつと大きい。鬼が力があるとはいえ、ウサギ主の方がもつと力があつた。徐々に鬼を押ししていく。

鬼は力負けしている事に気づき、ウサギ主と繋いでいる手を強引に引き離し、のど元へ手をかけようとする。ウサギ主は鬼の脇に手をすべりこませ、腕を掴みそれを阻止しようとする。

ウサギ主は相手の足を払って倒し、寝技でおさこもつするが強い力で抵抗されて、中々抑え込めない。鬼はウサギ主の手を噛み、一瞬ひるんだ隙に、ウサギ主の寝技を抜け立ち上がった。

ウサギ主も立ち上がる。

鬼は腕を振り上げ、ウサギ主に殴りかかってくる。

彼はその拳をあえて受け、同時に下から突き上げる様にして相手の腹に拳を叩き込む。

ウサギ主はなんとも無かつたが、鬼は3mほど、とばされた。

「倒すのは難しくなさそうだが……。」

ウサギ主がそう口走つた瞬間、鬼は逃げ始めた。その時だつた。

「ここに、大きな化け物と鬼が戦っているぞ。」

大声で誰かが叫んだ。

鬼を追ってきた退魔師の男達である。

ウサギ主と蛙主は男達に囲まれていた。

男達は武器を構え今にも襲い掛かってきそうだった。

「待ちなさい。」

男達の動きが一瞬止まる。

ウサギ主は四つんばいになり、蛙主が背中に飛び乗った後、ウサ

ギ主は高くジャンプをして逃げていた。

「月美様、あれはいつたい。」

「多分、ここら辺の土地神でしょう。それより、鬼を追いましよ

う。」

休憩

「土地神ですか……。何と凶暴そうなウサギ。あんなのが街出て暴れてもしたら。」

部隊の入ったばかりの新人がそういう。

「こら、土地神は実りをもたらす神だ。それに、ここいらは数十年、化け物の被害があった報告は無いし、何か化け物に動きがあるという報告もない。それは、化け物が上手く、人間と付き合っている証拠だ。人間に悪さをしないで、ひっそりと暮らしているのに、見た目が凶暴だからという理由で狩るのは、愚か者がする事だ。」

副隊長の男が若い男を諭す。

「そうですね。化け物の完全浄化は昔から何度と無く行われて来ましたが。彼等がいなくなった土地に悪霊や悪魔、鬼が棲み付く様になって、より酷い事になる事が分かっているのです、霊的に安定している土地に手を出すのは愚かな行為ですよ。」

月美はそう言った。

須王寺 月美の部隊は、一日以上鬼を追い、疲労がピークに来ていた。

「流石に、これ以上追うのは無理そうね。」

「応援がもう直ぐ来るそうなので、そちらに引き継いで、我々は一旦休みましょう。」

「悔しいわね。」

須王寺の部隊は、応援部隊に鬼の大体の位置を携帯を使い連絡をした後、山を降りた。

美由と赤服の女はゆっくりと山を降りていた。

赤服の女はひねった足をかばう様に不器用に動かしながら歩いていた。

「ごめんね。まさか、こんな事になるなんて。」

「いいえ。私だけだったら、あの鬼に襲われて助かっていたか。」

「それも、そうね。感謝しなさい。」

「はい、そうします。」

「それにしても、須王寺家の部隊は凄いわねええ。武装が。」

「あの巫女服と木の槍ですか？」

「ああ、あれも、結構な霊的装備だけど、他の男達の装備がなかなか。」

「森に入って行くのを一瞬、見ただけなので、どんな格好をしてかなんて。」

「もう、つまないわねええ。もう少し、周りにも目をくばりなさい。一転集中もいいけど、それでは周りの大事な事に気づかないわよ。」

「良くいわれます。私は物事に集中すると、周りが見えなくなると。気をつけてはいるんですが。」

「それより、あの部隊で1日かけて取り押さえられないわけですよ。あの鬼、私達を見ていきなり襲ってきたわけだし。あんなのが街に出たらトンでも無い事になるわよね。その前に何とかしてくれるのかしら？」

美由は、その言葉を聞いて、さっき、テラミルになって鬼を倒しておくべきではなかったのか？と思ったが、相手は人間である。殺すわけにはいかない。と、なると、取り押さえる必要がある。だが、魔法少女に取り押さえる手段が無い。

自分が戦っても、無駄だという答えしか出てこない。

『蛙主やウサギ主がいたらなああ。でも、鬼を捕まえても、その後、どう処理していいかもわからなし……。捕まえたら捕まえたでどうしようもないわけで』

「ま、私ではない、他の退魔師が何とかするでしょ。」

山を下り舗装された道路まで出ると、キャンピングカーが止まっている。

須王寺の部隊はキャンピングカーに早々に乗り込んだ。

キャンピングカーの中は、真ん中に通路があり、左右に2段づつ上下に区切られた人が一人やつと寝れるベットルームがあるだけだった。

「ところで、月美様はこのまま帰られたほうがいいのでは？」

副隊長・実質的な部隊長が月美にそう提案する。

「あら、何故かしら？私、あしでまといかしら？」

「そういう事ではなく。月見様は良く働いておりますが、明日、学校なので。」

「^{セント}聖エルナル学院はそういう事には融通が効いてよ。」

「^{セント}聖エルナル学院は自由な校風が売りである。基本的に上流階級で生きる処世術と、高校卒業に必要な最低限の単位さえとれば、それで良いという学校だった。それは、登校日数も最低で構わない事を意味する。しかも、それなりに理由があれば、公欠扱いしてくれるのだ。それは家の事情や、仕事でも構わない。流石に遊びやサボりは無理だが。この公欠の甘さを利用して、ファッション雑誌のモデルや、東京まで行ってまだマイナーではあるがアイドルをやっている子までいた。」

「ですが……。」

「おねえ様が通っている進学校なら、毎日通わないと成績が大変な事になりますけど、うちの学校はそういうのは二の次なので。と、言うより。私が聖セイエルントナル学院にいるのは、須王寺家の本業である退魔業に専念できるからです。お姉さまみたいに、表でやっている事業を引き継ぐのであれば、勉強も必要でしょうが私には必要なものではないので。」

「わかりました。」

「それより、寝ましょう。8時間後には別働隊との引継ぎもありますし。」

「了解しました。」

早朝

早朝になった。

天気予報によると、この地域は梅雨入りしたと見られるらしい。よって、梅雨の始め独特の小粒の雨がシトシトと降り続けている。須王寺 月美が寝ているキャンピングカーの周りは霧がかかっており、真っ白であった。

車がある位置は標高が200mぐらいなのでそんなに高くはないのだが、梅雨の時期はたまに雲に包まれる事がある。視界は20m程しかない。

これで鬼を探すのは厳しいと、部隊の皆が思った。

鬼狩りの準備と、食事をとっていると別働隊から連絡があつた。

どうも鬼が、山の裾野へ降りたらしい。携帯のGPSで細かい位置を知るとメンバー全員に衝撃が走つた。

そこは、私立武汎^{むはんへつ}辺津高等学園の周辺であつた。

学校周辺は郊外なので、そこまで人が多く無いが少し離れば住宅街がある。

それに、この学園には須王寺家の表の次期の当主になる人物、麗菜がいる。

鬼は学園の周辺で消えおり、移動した気配は無いという。どこかで休んでいるかもしれない。

キャンピングカーは急いで、私立武汎^{むはんへつ}辺津高等学園へ向けて走りだした。

月美は右手の親指の爪をかじる。

「全く、何て処に逃げてくれたの。姉さんが通う学校の近くなんで。しかも、今日は月曜日。学校がある日じゃない。」

「偶然、なんでしょうかね？」

副隊長が月美にそういう。

「分からないわね。彼が鬼化したのは本家の近く。姉さんはあの

時、確かに本家に居た。私達が本家に入る前にあの鬼に出会う事が出来、深手を負わして、あの鬼は逃げた。そして、今度は姉さんが通う学校を目指している。本家での暗殺が無理だと判断したから、警備が手薄な、あの学校で姉さんを狙う事にした？」

「可能性が無いとは言えないでしょ。」

「ああ、もう。この車、もっとスピードでないの？」

「無茶を言わないで下さい。この霧と雨と山道ですよ。下手にスピードを出せば事故に繋がるでしょ。」

「もう。そうだ。本家に連絡をして、姉さんを学校に行かせない様に引き止めて。時間から見ればまだ家にいるはずだから早く。」

「わかりました。」

副隊長が携帯で連絡を取る。

月美はまた、親指の爪を噛みはじめた。

『何で、こんな事になってるわけ？私のデビュー戦なのに。』

早朝 2

須王寺麗菜は、家から学校へ向かうため、黒塗りの外国車の後部座席に乗り込もうとしていた。そんな時、家で執事をやっている男性が、走ってやってきた。

「麗菜さま。」

麗菜は車に半分、体が入りかけていたが、体を外へ出して立ち上がり、走ってくる男性を待つ。

「どうされました？」

「お母様が、本日は学校は休んで欲しいと。」

「お母様が？何かしら。」

「さあ。詳しくは聞いておりませんが、本日は家にいて欲しいと。」

「お母様の頼みならしかたありませんね……。そう言えば月美はどうしました？昨日から見てない様な。」

「月美様は、昨日から巫女の修行に入られておりまして……。」

「そう。うちのしきたりで、真の当主になるためには巫女の修行を積む必要がありますからね。それと、私が今日、家にいなきやいけない事と関係があるの？」

「さあ。私にはわかりかねますが。多分、関係無いかと。」

「そう。後でお母様に理由を聞きましょう。それにしても、家の名前に寺が入っているのに敷地内に神社があるって妙な感じね。」

「そうでございますね。須王寺家は代々続く由緒ある家。初代がこの家を興した頃は何か寺に関係していたのかもしれないな。」

「ところで、巫女の修行って何をしているのかしら。お母様も月美も教えてくれなくて。お父様は養子ですから神社や巫女の事はわからないのは仕方が無いとはいえ。」

「私はあちらの方は全くタッチしておりませんので、私に分かるはずが……。」

麗菜には退魔師業の事は秘密にしているようであった。

美由は自分の部屋で起きた。隣には赤服の女と、犬が寝ていた。

昨日の夜、足をくじいて気分が悪そうだったので、特別に許可をしたのだった。

外は雨が降っている。今日はいつもの早朝トレーニングができない。

雨の時は美由の狭い部屋でも出来るストレッチをするのだが、今日は犬と女が占領して出来そうにない。

『まいったなああ。』

美由が困った顔をしていると、犬と女と一緒に起き上がる。

「あら、おはようさん。」

「おはようございます。」

「あら、外は雨が降ってる。よかった。野宿じゃなくて。あんがとね。」

「いえいえ、どういたしまして。」

「ん？今日はトレーニングしないの？」

「外は雨ですよ。」

「それも、そうねええ。」

「ところで、昨日の鬼ってどうなったか分かりますか？」

「あれからあんたとずっと一緒よ。分かるわけない無いじゃん。」

「ですよね。」

「気になるんなら、あんたが学校に行っている間に調べておくわよ。」

登校時間になり、桐野が美由の家に傘を差してやってくる。

「桐野さんおはようございます。」

「おう、桜間さんおはよう。今日は、須王寺さんは家の用で休み

だつてさ。」

「何故、あつて早々、須王寺さんの話題……。」

「さつき電話があつたから、あなたにも伝えようと思つて。須王寺さん凄く残念がつてたよ。今日も桜間さんをお嬢様としてビシビシ鍛えるつもりでいたのにと。」

「私みたいな男おんなに、お嬢様要素なんていらななんですけど・
・。。。」

「あら、私は見てて凄く面白いわよ。」

赤服の女は二人の会話を聞いて苦笑していた。

ブルドッグと鬼と

山の中で雨に濡れた一匹のブルドッグがいた。

「ふう。また、迷子になってしまったわね。」

朋に「迷子になったので家まで連れて行け」と言っただけの犬の化け物だった。

「夜のお散歩とか言っただけで、気軽に家を出てみれば、雨が突然降って来て、雨宿り先を探していたらいつの間にかに迷子に。ふう。何で、私だけがこんな不条理な目にあうのかしら。」

自分の無謀さと方向音痴と判断ミスを棚にあげ、運のせいにして愚痴をこぼしていた。

ブルドッグは周りを見渡す。

杉林の向こう側には2 m程に伸びた草むらが広がっていた。

草むらには何か大きな物が最近通った跡があり、草の壁が強引に押しつけられ、道が出来ていた。

「なにかしらね。帰り道かしら？」

犬は首を素早くふり、体の水気を飛ばした後、草むらに出来た道を進みはじめた。

草むらの中を進むと、人間の臭いがしてくる。だが、人間の臭いとは少し違っていた。

道を進むと、そこにはオレンジ色の鬼がうずくまりながら寝ていた。

ブルドッグは、よせばいいのに鬼のおしりをつつく。起きなかった。

更に、強く鬼のお尻を叩きはじめる。

「ちよつと、あんた、置きなさいよ。」

それでも起きない。

「まったくもう。」

犬は鬼の体によじ登り、頭に乗って鬼の頭をバンバン叩きはじめる。

た。

さすがに、鬼も目覚め、顔をあげたと思った、突然首を素早く振りはじめ、頭についた変なものを払い飛ばそうとする。

犬は草むらにたたきつけられた。

「痛いわねええ。」

鬼は立ち上がり、草むらに転がっている犬を見ると、よだれを垂らし、前かがみになる。

「な、何？あんた？私をもしかして、食べようとしている？」

鬼は犬に飛び掛り、喰らいちこうとするが、小さく体が幸いしその攻撃ははずれる。

ブルドッグは道のできてない草の壁の中へと潜りこむが、鬼はくさの壁などものともせずにいぬを追った。

鬼と朋

朋と加奈は一緒に登校していた。

本日は雨で、二人とも傘を差しての登校だ。

「雨もたまには良いけど、これから毎日となるとおっくうよねええ。」

そう加奈が不平を述べる。

「私、良く、傘を置き忘れるから、びしょ濡れになってママに怒られるのです。」

朋は雨より、服を汚してママに怒られる方が問題だった。

「朋ちゃん、すぐ、風邪ひきそうだもんね。」

「あうー。心配される程、体は弱くないのです。でも、毎年、インフルエンザにはかかるからママに心配させてしまうのです。」

「やっぱり、風邪引く體質じゃん。」

「ぶー。インフルエンザと風邪は違うのです。」

「どちらがうの？」

「風邪は色々とウイルスがあるけど、インフルエンザはインフルエンザウイルスという、ひとつのウイルスが引き起こすのですよ。」

「へええ。」

加奈はそう言った後、あたりを見渡した。すると、桐野と美由を発見する。

「見てみて、桜間おねえ様と、桐野先輩だ。あの二人、最近、仲が良いよね。」

美由も美由と桐野を見る。後ろから赤服の女と黒い大型犬も一緒に歩いてきている。

『あの、女の人、美由先輩をつけてる……。』

「加奈ちゃんいいなあ。美由先輩をおねえ様と呼べて。私は美由先輩に止められてるし……。」

「焼かない。焼かない。その代わり、仲がいいでしょ。それより、

桜間おねえ様も、須王寺おねえ様と、桐野先輩に挟まれて、おねえ様としての貫禄が出てきたよね。私がばら撒いた噂も無駄にならずにすだわけだ。」

「私にとつては、私だけの美由先輩でいて欲しかったのです。」

「朋ちゃんは贅沢だなあ。王子様タイプのおねえ様は女の子の憧れよ。それを独占しちゃ駄目よ。」

「美由先輩がどんどん遠くに言ってしまう。」

朋は教室に着き、時間があつたので、全校集会前に、雨の学校を歩いてみたくなった。

一人で散歩に出かける。

水色に咲く紫陽花やデンデンムシを見ながら、裏庭へと来ると、突然崖の方から何かが落ちてきた。

その落ちてきたものは、朋に走りより胸に飛び込んでくる。

朋は思わず抱きしめてしまいが、濡れており制服が濡れてしまった。

それはこの前であつたブルドッグだった。

「あんだ、良い所にいたわ。」

「へ？なんですか？」

朋がそう言った瞬間、崖から大きなものが落ちてきた。

それは鬼だった。

朋のピンチ

鬼はズドーンという音を立てて崖から落ちてきて、何事も無かった様に着地する。

体は雨でずぶ濡れになっている。

朋は片手に赤い傘、片手にブルドッグを抱きながら鬼を見ていた。

『なに？』

鬼は突然、右手を大きく振り上げ、朋に走りよって来て、拳を振るった。

朋の体は飛ばされ、赤い傘と犬が転がる。

殴られる瞬間、青白い光を放って朋の体、全体を包む球体シールドが自動的に発動して何とかダメージを受けずにすんだが、完全にダメージをこらす事ができず、体が飛んだのだった。

彼女の体が宙を舞っている間に、朋の意思と関係なく魔法少女ガラミンへと変身し、無事に地面へと着地する。

「あんだ、何その格好？」

「ガラミンです。」

「なに、それ？」

「わかりません。勝手に変身したんです。」

美由は全校集会に向かうため、体育館に向かっていた。赤服の女も美由に続く。

「？」

赤服の女は、何かに気づいた。

『凄い魔法の力。すぐ近くだ……。この学校の中』

女は思わず、美由の襟首を首を掴み、強引に引っ張る。

「ちよつと、あんた着なさい。」

「え？何ですか？」

美由は首が苦しいので、抵抗はあまりせず、ずるずると引きずられる。

「凄い魔法の力が発動してるのよ。あんたの目も何か役に立つだろうからちよつと、着なさい。」

「わかりましたから、離してください。」

女は美由の襟首から手を離す。

美由は首を片手でなでる。

「ほら、急ぐよ。」

「はい。」

そういつて、二人は走りだした。

「あんた、目は良いのに、魔力探知についてはおニブなのね。ここまで強い力なのに。」

「……。」

美由がおニブなのは魔法少女独特の魔法抵抗力のせいだった。魔法への耐性が普通の姿でも強いいため、感知できる魔力が感覚に届き難いのだった。

二人は裏庭にやってくる。

そこには、鬼とガラミンとブルドックの化け物がいた。

ガラミンは鬼の前でへたりこみ、戦意を喪失している。

「ちよつと、あんた。戦わないところされるわよ。」

ブルドックがガラミンに叫ぶ。

鬼はガラミンの首を片手で掴み、首を絞めた。

「ちよつと、あの子やばいんじゃない……。」

その光景を見ていた美由はテラミルに変身し、超加速を使って鬼に向かって駆け出していった。

「な、何？あんた？その格好？」

赤服の女の言葉を無視し、そのまま走り続ける。

「ガラミン。」

テラミルはそう叫ぶ。

「テラミル・・・」

ガラミンは薄れゆく意識の中で、テラミルの姿を見た。

ガラミン

ガラミンは喉を鬼に絞められ、意識が飛びそうになっていた。既に抵抗する意思を無くしていたが、テラミルが自分を助けようと必死に近づいている姿を見て、彼女は何かしなければならぬと思っただ。

ガラミンは自分の左手を、自分の首を絞めている鬼の手に当て、精神吸収を力いっぱい発動した。

鬼のオレンジ色の肌は白に近くなり、2mを超える身長や筋肉質で太い肉体が縮んでいく。

彼はガラミンの精神吸収の強烈な不快で危険なものを感じ、力いっぱい彼女を投げ捨てる。

地面に倒れた彼女へ攻撃を加えるため、鬼はガラミンにのしかかろうとする。その時、テラミルがやってきて、鬼の背中を蹴って阻止した。

テラミルは直ぐにガラミンに駆け寄る。

「ガラミン大丈夫？」

鬼は立ち上がり、新たに現れた敵を見る。

「あんた何をしてるの？鬼はまだ生きてるてるわよ。」

赤服の女は、完全にガラミンに意識をうつしているテラミルに大声で忠告をした。

「え？」

テラミルは鬼の方をみる。その次の瞬間、テラミルの視界にあったのは鬼の腕だった。

彼女は鬼のラリアットをくらい、地面に叩きつけられる。

「いわんこつちやない。」

鬼は地面に寝転がるテラミルに拳を打ち下ろす。

その次の瞬間だった。

ガラミンが鬼にとび蹴りを食らわした。

鬼は3m程飛ばされる。

すかさず彼女は踏み込み、彼の腹に一発パンチを打ち込んだ。鬼は、くの字になった。

すかさず、二発、三発と拳を入れ、最後に相手を蹴飛ばした。

ガラミンは更に攻撃を鬼へ加えようとした瞬間だった。

テラミルはガラミンを両腕で掴み、その動きを封じた。それでもガラミンは彼女の腕を振り切ろうと力いっぱい抵抗する。

「お願いガラミン。正気に戻って。その人は人間なの。あなたを殺人犯にしたくない。」

鬼の回収

ガラミンはテラミルの言葉を聞いて抵抗をやめた。

先ほどの力強い抵抗が嘘であるかのように力が抜けていき、変身が解けて制服姿に戻ると、そのまま意識を失ってしまった。

テラミルは意識を失って崩れるように倒れる朋の体を腕でしっかりと抱き絞める。彼女は朋が息をしているのを確認した後、地面に倒れている鬼の方を見た。

鬼は生きているようだが、その場から起き上がろうしない。

「あんた、早く逃げな。その姿を他の人達に知られたくないんだろ？多分、もうすぐ、この鬼を追ってた連中等がここに来るよ。」

赤服の女が、テラミルにそう言って来た。

「でも、この鬼を助けないと。」

「そんな事言っても……。」

「このままだと、死んでしまうので、そうになったら私も朋ちゃんも後味が悪いし。」

「でも、どうするつもり？」

「見てて下さい。」

テラミルは、退魔師の女に朋をたくし、鬼の傷口に手をあてる。青白い光が鬼の傷口を包み込んでいく。傷口はみるみるふさがっていく。

「凄いねあんた。そこまでできるんだ。」

退魔師の女は、朋を抱きながら、片手で鬼の手を握る。

テラミルは彼女のその行動に不審な表情を浮かべる。

「大丈夫だって、私も回復の術ぐらい使えるのよ。あんた程じゃないけどね。」

彼女の行為に、テラミルは笑みを浮かべ、傷口を塞ぐことに全力を尽くす。

『お願い、生きて……。』

テラミルはあらかたの傷口を塞ぐ。

「後は、運を天にまかすだけね。」

赤服の女はそう言った。

「大丈夫でしょうか？」

「わかんないわね。」

テラミルは美由へ戻った。

その時だった。朋が目を覚ました。

「あら、お嬢さんおはよう。」

「ええ？何で私は、あなたに抱かれていますか？」

「気にすることはなくてよ。」

「そうだよ、朋ちゃん。朋ちゃんは鬼襲われて、気を失ってただけだから。」

朋は足元にいる鬼を見る

「ええ。この鬼なんですか。凄く弱っているのです。」

「後で説明するから。」

「あんた達、そんなこと言っている場合じゃないよ。誰か来たよ。」

「朋ちゃん、急いで存在薄めて。」

朋と美由は同時に自分達の存在を最高レベルまで薄めた。

それを見た退魔師は驚きを隠せなかった。

『何？この子達？ここまで消える事が出来るのか？てか、私の目ですら認識が出来ないくらいじゃん。』

美由は朋の手を繋ぎ、人が来た方と反対側へ逃げていった。

第7話終わり

二人が走り去った後、赤服の女と鬼に近づいてきたのは、同じく存在を薄めた、須王寺月美とその配下の者達だった。

月美は、赤服の退魔師の顔を見る。

「何？これ？あんたが、この鬼殺したの？」

「いや、私じゃないよ。それにまだ死んじやいないよ。私がここに駆けつけた時には、この有様さ。あんたら、いたぶり過ぎよ。むしろ、死なないように、治癒魔法をかけていたぐらいなのに。」

「あら、気が利くのね。感謝するわよ。」

「感謝の言葉より、謝礼が欲しいわね。あんたら、この鬼に懸賞金をかけていた連中でしょ。」

「懸賞金？それは私は知らないわね。でも、まあ良いわよ。謝礼は出してあげるわ。」

月美の部隊は鬼を結界処理した縄で縛り、タンカーで運ぶ。

「しかし、この鬼随分小さくなったわねええ。今は少し大きめの男性ぐらいしかない。」

「そうだな。昨日、山で襲われた時はもっと、でかい鬼だったのに人間に戻りかけている。」

「私達がつけた傷口も塞がっているし。」

「自己治癒能力でここまで回復したんじゃないのか？私はここまでは出来ない。」

「でしょうね。かなり高レベルの術者でなければ、この傷をここまで治すことなど不可能ですし。」

「あんた何が言いたいんだい？」

「あなた、何か隠しているでしょ？もしかしたら、鬼を倒し、殺さない様に傷を回復させた高術者が誰か知っているんじゃない？」

「まさか。」

雨が降り続けている裏庭で月見はチームの撤収の作業を見ていた。すると、ふと、気になるものが目に飛び込んできた。朋がさしていた赤い傘である。

「あら、あの赤い傘あなたの？」

赤服の女は傘の方を見る。

『あのちびっ子の方がさしてた傘だな。』

「ああ、そうだ……。いや、正確には私のじゃないが、学校の傘置き場からくすねてきた。」

そう言っつて傘の処へ向かい歩きだした。

「あら、悪い事をなさるのね。」

「なああに、一時的に拝借しただけさ。すぐに返すさ。」

そう言っつて、傘を拾い上げそのままさした。

「お金の方は、家の方で渡しますわ。一緒に来ていただけるかしら？聞きたい事もありますし。」

「そうするかな。」

美由と朋は校舎の中へと逃げ込み、薄めていた存在を元に戻した。

「ふー。ギリギリだったね。」

美由は笑顔でそう言いながら朋を見ると、彼女は泥だらけのびしょ濡れだった。美由も濡れてはいるが、彼女ほどではない。

「ああ、朋ちゃん泥だらけになっちゃたね。着替え持ってきてる？」

「うー。着替え無いです。」

「まいったな。ひとまず、私のジャージを持って来るから、そのトイレで待ってて。」

「はい。」

美由は着替えをとり教室に戻り、そのまま朋が隠れた女子トイレへと戻ってくる。

朋を個室に押し込め、タオルとジャージとズボンを渡す。

「たぶん、ズボンの方は駄目だと思うけど、一応、紐ひもがついているからきゅつとやってみて」

「はい。わかりました。」

朋は個室の扉を閉めて、カッターシャツをスカートから出す。

「朋ちゃん。脱いだ制服をこっちに渡して、洗うから。」

「つえ！。悪いです。」

「いいの、いいの。私、手持ち蓋差だし。それに、なるべく一時間目のロングホームルームが始まる前には片付けたいから。」

「わかりました。」

美由はトイレの個室の扉の下の隙間から朋の制服を受け取り手洗い場で洗濯をはじめた。

下着姿でタオルで水気を取っている朋ともの耳にも、美由が洗濯している水の音が聞こえてくる。彼女は申し訳無い気分ではいっぱいになつていた。

洗濯は洗濯機でなくては綺麗にならないと考えている人も結構多いが、実は手洗いの方が綺麗に落ちる。しかも、一人暮らし程度の洗濯量であれば手洗いの方が時間はかからなかったりする。手洗いの一番の利点は洗濯物の痛みが少なく頻繁に着用する衣服でも長く着られる点であり、女性物下着やドレス・制服に至いたっては手洗いを推奨しているくらいである。ただ、手洗いにも欠点があり、まず、拘束時間がある。洗濯機はスイッチ・ポンで後は放置ですむが、手洗いは一度洗い始めたら洗濯物を干すまで確実に終わらせる必要がある。次に最大の問題である脱水がある。手絞りは意外と水気が落ちない。自分的にちゃんと絞ったつもりでも、干せばポタポタしずくが落ちるくらいだ。だから、干しても中々乾きづらい。洗濯機で脱水すれば太陽が照っている時間帯に3時間も干せば充分に乾くの

だが、洗濯機の脱水は最も衣服の繊維を傷つけるので諸刃の剣だったりする。

「やっぱり、ズボンは無理そうです。すぐにずり落ちてきちゃいます。」

洗濯を続けている美由の耳に朋の声が聞こえていた。

美由は手を止め、少し考える。

「うーん。流石にズボンは無理か。しょうが無いから、スカートは濡れているけど、はこうか。」

「はい、そうします。」

美由は朋のスカートを絞った後、それを広げてパツフン・パツフンと扇ぎながら朋がいる個室へと移動する。

彼女がスカートを手をパツフン・パツフンと扇いでいるのは、水気をとっているのではなく、スカートのシワを少なくする作業である。この作業をしないで干すと、かなりシワシワな状態で乾く事になりアイロンで直せないぐらいのシワがよる事がある。それにシワをそれ程気にしなくて良い衣服ならアイロンがけそのをしなくていいぐらいシワが取れるのだ。

美由は朋がいるトイレの個室の扉の上にスカートをかけ、朋はそれを取った。

「あう、冷たいです。」

「がまんがまん。」

美由は自分の子供を諭す様な優しい口調でそう言うと、他の洗濯物を洗うために洗い場へと戻る。

朋はスカートを履き、美由のズボンとタオルを手にとり、扉を開けて洗濯している美由の処へ移動する。

「美由先輩ありがとうございます。」

朋のベストのシワをとるため、パツフンパツフンと扇いでいた美由は声のした方向に顔を顔を向けると、明らかにブカブカでパンツ

が隠れるぐらいサイズが合っていないジャージを着た小さな少女がそこに居た。

美由は一瞬その姿をカワイイと思ってしまったが、スカートが濡れてシワがよっているし、丸首のTシャツが自分の手元にある以上ジャージの下はブラジャーだけだろうし、それに明らかにサイズの合っていないブカブカのジャージである。朋のあまりにアンバランスな服装を見て、美由は非常に申し訳無い気分になった。

「いえいえ、こちらこそ。でも、ごめんね。こんな不格好な格好させて。」

「そんな。」

朋が戸惑った表情を見せたので、美由はやっぱり嫌な思いをしているんだなと感じた。

「あのまま学校中を歩かせるわけにいかないから、一応、応急措置のつもりだったけど、こう見るとかなり不格好だよね。」

自分はカワイイと思うというのは言わなかった。

「そんな事ないです。」

「でも、その格好じゃ風邪引くから、友達からジャージ借りなさい。」

「はい。」

8話始まり

朋は自分の教室に向かつて歩いていった。

全校集会は終わったらしく、みんな教室に戻っている最中だった。もうすぐ教室に着こうかという処で、朋は後ろから声をかけられた。

「おーい、ちびっこ。全校集会サボって何やってるんだ？」

朋は声が出た方へ振り向くと、身長が低い順に鈴木 あずさ・佐

藤 絵里・田中 佐和の三人がいた。ちなみに彼女を「ちびっ子」

と呼んだのは佐藤絵里である。

朋は三人の元に駆け寄る。

「うわ、何だその格好？そのデッカイジャージに濡れたスカート。

「やつぱり変かな？雨の学校を散歩してたら転んじやって、びしょ濡れの泥だけになったの。そしたら美由先輩がジャージ貸してくれたんだけど。」

「おお、そのジャージは憧れの桜間先輩のか。でも流石に変だなカワイイけど。他の人が見たら白い目で見られるぞ。」

「あうー。それは嫌なのです。あずさちゃんジャージもってきてない？私、持ってきて無くて。」

鈴木あずさは朋よりは大きい、クラスの中では小さい方だった。朋があずさに着替えをお願いしたのは体格的にあずさのしか合わないからで、他の二人とは身長差がありすぎて駄目だからだった。

「あるよ。部活のが。」

「じゃあお願い。」

子供がお母さんに話す様な甘い口調で朋はお願いする。

「いいよ。」

4人は教室に入る。

あずさは自分の棚に置いてある鞆を引っ張りしてジャージを朋に

渡した。

「あ、下はブルマーしかないや。」

「ええええ。何でブルマー。うちの学校の体育服は短パンなのに。」

「部活のユニフォームがブルマーなのよ。」

「あー。」

「その濡れてるスカートよりはマシじゃない？」

朋は今日一日ブルマー姿で過ごす事になった。

一時間目のロングホームルームで先生にまず、ブルマー姿と全校集会をさぼった事について追求され、ブルーな気持ちになった。

月見と赤服の女である神園は自分の飼い犬のメリーと共に、改造したキャンピングカーの中にいた。

他の男達もいるのに、月見は躊躇無く濡れた巫女服を脱ぐ。

『この女は露出狂か？男がいるのに、こんなに堂々と。』

男からタオルを受け取ると月見は体を拭きはじめる。

『この女のムネはまな板だな。まあ、この幼児体型じゃ男は欲情しないか。姉の方は結構あつた気がしたが。』

「あなたも大夫濡れてるじゃない。それ脱いだら？」

「いや、遠慮しとくよ。」

『この女、知らない人間に囲まれている状況で私にも脱げと。』

「それより、タオルを貸してくれないか？持ってきてなくてな。」

月見は同車している男にアイコンタクトを送ると、男はタオルを赤服の女に渡す。

「ありがとう。」

そう言っただけでタオルを受け取ると、パツパと服表面をぬぐい、大きな黒犬の体をタオルで包み拭いていく。

月見はいじわるそうな目でそれを見ていた。

「さて、昨日もお会いしましたよね。退魔師さん。」

『なんで、この女はこないじわるな言い方してるんだ?』

「昨日会ったのはさっきも確認したろ、それに、あんたらも退魔師だろ。」

「だって、わたくし、あなたのお名前知りませんし。他に呼び様が無いんですもの。よろしければ名前、教えていただきます?」

「神園だ。」

「そちらの大きな黒犬の名前は何て言うのかしら?」

「メリーだ。一応、退魔犬だ。」

「そうですね。中々カワイイ犬ですね。それより神園さん、昨日の夜に山で会った時、もう一人いましたよね?あの方はどちらに?」

「学校に決まってるだろ。あんたの姉の学校の友達なんだし。」

「あら、あの方、姉の友達なんですか?てつきり姉のファンかと思つてましたけど。」

『??. 何故、そうなる?』

「姉があんたの学校で友達を作るなんて。よっぽど気にいつていつてらつしやるのかしらね?。それとも、彼女がそう思いこんでいるだけなのかしら?。」

『生まれながらの勝ち組女というのはどうも感覚が違うな。』

「あんたの姉の考えなんて知るかよ。私の見た感じでは友達に見えたという話だ。」

「でしようね。」

『でしようね?つて何?』

「ところで、あなた、昨日一緒にいたあの子に何かあると思つて付け狙つてたんでしょ?。何かありました?。」

「いいや、お目目が良いだけだな。本人は隠したがっている様だが、あれだけ見えると結構苦労するだろうな。」

「どれくらい見えますの?」

「さあな。悪霊がそこそこ認識出来る程度だと思つが。」

「へええ。天然にしては凄いですね。興味が出てきましたわ。」
「そうか？本当につまらない女だぞ？こつちも何かあると思って一週間程つけていたが、学校と家で勉強して、夜になったら走って、その後また勉強して、そして寝て、走って、また学校への繰り返し。」

「本当につまらないそうですね。でも、それでもつけ回してたんでしょ？」

「いや、本当につまらないんで、今日で止めようと思ってたんだが、そしたらあの鬼が現れたわけさ。」

「姉で、その子は力の発動には気づかなかったの？」

「さああな。私は力の発動を感じて、すぐに現場に向かったらな。そしたら鬼が倒れてて、何なら本人に直接聞いたらどうだ？あいつも鬼の事も知ってるわけだし。」

「まあ、いいでしょ。それより姉とその子とはどういった感じなのかしら？」

「どういった感じと言われてもなあ。あんたの姉のオモチャって感じかな。いじられて右往左往してた記憶しかないなあ。」

「何か良くわかりませんわね。」

アイロンと生徒会

ジュー

昼休みになったた。

朋は家庭科室を借りて、友達3人と共に濡れた制服をアイロンがけしようとした。

「干していたのに、全然乾いてないね。」

朋の濡れた制服を触りながら、あずさがそう言った。

午前中の朋達の教室の窓際には朋の制服がずっと干されていたのだった。

「雨だからしかたないよ。」

「それにしても、ちびっこの制服が午前中ずっと教室に干されたいたのは、なかなか趣があつてよかつたな。」

「絵里ちゃんそれじゃあ、変態さんだよ。」

「あうー今日はずっと、恥ずかしい思いばかりしてるのです。」
そう言ったのはブルマ姿の朋だった。絵里はすかさず朋の頭をなでる。

「気にしない。気にしない。みんな可愛らしい女の子ブルマ姿を見られて、ほほえましい気分でいられたぞ。」

「うー。ブルマ姿は見る分にはカワイイと思うけど、実際着る側になると嫌なのです。アイロンの熱でスカート乾かして、おさらばするのです。」

「残念ね。せっかくカワイイのに朋ちゃんのブルマー姿。」

「あずさちゃんまでー。」

「はい？」

そう言ったのは美由だった。

教室でお昼を食べていた美由に桐野が変な依頼をしてきたのだ。

「ほら、今日、須王寺さん休みじゃん。」

「ええ。」

「さつき彼女から電話があつて、生徒会の仕事でどうしても今日終わらせないといけない仕事があつて、それを手伝って欲しいって。」

「何で、それを私たちに？」

「友達だからじゃないの？」

「むー。それでも、生徒会にも人はいるわけで、別に私達じゃなくとも。」

「単純に人手が足りないんじゃないの？そんなことより、もう引き受けたんだから、桜間さんも来る。」

そう言いながら、桐野は美由を引っ張ろうとする。

「ちよつちよ、お弁当がこぼれる。わかりましたから、ちよつとお弁当をしまわしてください。」

お弁当をしまい、桐野と共に生徒会室へと向かい歩きだした。

『そういやあ、朋ちゃんの処にいかないとなあ。鬼について説明しないといけないし、ジャージも返して貰わないと。。。』

「・・・ねえ聞いてる？」

「ごめん、考え事してた、何？」

「生徒会で何やるのかしらね？」

「さあ。須王寺さんに聞いて無いんですか？」

「全然。」

「良く中身を知らずに引き受けましたね。」

「まあ、須王寺さんの事だから、無茶な依頼はしないでしょ。」

「そういえば、桐野さんって生徒会長キャラっぽいけど、生徒会

長になった事はないの？」

「無いねええ。だって、私、人望無いし。そういった野心も無いから。」

「生徒会に入るのに野心がいるんですか？」

「そりゃ、いるでしょ。一応選挙で選ばれるわけだし、よっぽどの生徒会というステータスが欲しいという野心を抱かない限り、選挙で勝ち残る事なんて出来ないって。」

「それもそうですね。」

生徒会室に入る。

「すいませーん。須王寺さんの代理で来たんですけど。」

そう桐野が生徒会室にいる生徒に言った。

生徒会の人間に仕事の説明を受ける。どうも、全校生徒に配る6月の生徒会のしおりの作成を手伝うというものだった。あがってきた原稿のチェックが二人の仕事らしい。

桐野に原稿が渡される。彼女はその原稿をジーと見つめた後、口に指をやった。

「うーん。」

「どうかしました？」

桐野が難しい顔をしていたので、美由は聞く。すると、彼女の手握られていた原稿を渡される。

美由も読んでみる事にする。

読んですぐに、この原稿はかなり手強い相手だと気づく。何せただ読んでいるだけだと、半分くらい何が書いてあるか理解できないのだ。

書いている本人は分かっているのに、この内容でも伝わるかもしれないが、前提知識が全く無い美由や桐野は何が書いてあるかわからないのだ。

それに、難しい言葉や表現をやたら多様しており、正直、何かの暗号にしか思えない。

「うーん。」

美由は桐野と目を合わす。

「どうしましょか？」

「どうしようか？」

沈黙がしばらく続き、桐野が口を開いた

「桜間さんひとまず私の提案を聞いて貰えるかな？」

「はい」

「このままOKを出す。」

「それは良いです・・・。」

そんなとき、桐野の携帯が鳴り出す。どうもメールが来たらしい。そのメールをチェックして、すぐに美由に見せた。

「須王寺さんから」

そこには『桐野さん、桜間さん。生徒会として恥ずかしくないしおりにしてくださいね。』と、書いてあった。

メールを読んだ二人は顔を合わす。

「どうしましょ？」

「どうすると言われても。これ直すの大変よ。」

「それは分かってます。多分、放課後、遅くまで残ってやっても終わりませんよね。これ。」

「そうだよねええ。正直はじめからやり直した方が早いくらいだしねええ。」

自前で書く同人小説なら気にする必要はないが、これは全校生徒に配るチラシである。このチラシを読んで8割の人間に理解させるような文体で書かなくては意味が無い。

桐野や美由ですら読解に苦しむ様な文体で書くなど論外なのだ。

こついつた難解な文章を、わかりやすくかみ砕いて書き直すのは恐ろしい程の時間と集中力を使うのだ。

それが分かっていたので、桐野はこのままOKを出そうと言い、美由も同意しようとしてたわけだが、そこに計ったかの様に須王寺

のメールである。

二人は須王寺にハメられた気分になっていた。

甘える朋

午後の授業が終わり、帰宅のため朋が靴棚に行くと、傘が無い事に気付いた。

そういえば、鬼に襲われたせいですっかり忘れていたが、裏庭に起きっぱなしである。

朋は靴をはきかえ、裏庭にやってくるが傘は無かった。赤服の女が、魔法少女の存在を月見に隠すため、持って行ってしまったのだ。まだ、雨は降り続けている。せつかくアイロンを使って制服を乾かしたのに、傘が無いのでずぶ濡れで帰らないといけないと思うと気が落ち込むのだった。

「あう、今日はずっとついてないのです。」

朝、鬼に襲われ、そのせいで、制服がびしょ濡れになり、ブルマ姿で午前中を過ごす事になり、傘を無くす。

「こんな時は美由せんぱいになくさめて貰うのです。」

美由から借りたジャージを返すのを口実に甘えようとしていた。

桐野きしのと美由の二人は肩を落としながら廊下を歩いていた。

正直、二人ともかなり、憂鬱な気分である。

昼休みの生徒会とのやりとりは、最悪であった。

とにかく時間が無いので、前提条件が無いと理解できない部分を質問するのだが、まず、答えようとしなない。

何度も何度も同じ部分を聞き返すのだが、こちらが聞きたい答えが返って来ない。

友達となあなあでお話をするならそれで良いかもしれないが、今やっているのは、全校生徒に配る生徒会便りである。なるべく齟齬を生まない様にすべきなのに、彼等にそれを訴えても理解して貰えないのだ。

「どうしようか？」

「どうしましようか？」

「桜間さん。こういうのはどう？自分達は生徒会の人間ではなくヘルプで来てるだけだと、正直、自分たちにこの任は重すぎるの後は皆さんに任せると言うの。」

「……。それでいいじゃないですかね？」

「同意してくれてありがとう。てか、私たちの感覚がおかしいのかしら？みんなに配る資料だから読んで分かる様に書けて考え方。」

「ここまで、話を通じないとなると多分。」

「正直、前からこの学校の生徒会便りって、何書いてるかさっぱりわからなかったのよ。」

歩いていた桐野（きりの）は何かにぶつかった。

ぶつかったのは美由であった。彼女が突然止まったのだ。

「なに？突然止まって？」

「みいゆうせんぱあーい。」

そう言いながら、朋（とも）が美由に抱きついてきた。

「ど、どうしたの？朋ちゃん？」

朋（とも）は美由を見上げる。

「借りていたジャージを返しにきたのです。」

「そ、そうなんだ。」

「あら？この子って、桜間さんが持久走大会の時にお姫様抱っこした子だっけ？」

「違います。ただ、転んだから起こしてあげただけです。」

「美由せんぱいにお姫様抱っこはされてないのです。でも、あの時、美由せんぱいの柔らかい体に包まれて幸せだったのです。」

「へええ」

生徒会室でのケンカ

美由に抱きついていた朋は、鞆からジャージを取り出す。

「はい、美由せんぱい。ありがとうございます。」

「いえいえ。どういたしまして。」

そう言つて、ジャージを受け取った。

「美由せんぱい、一緒に帰りませんか？」

「ごめんね朋ちゃん。これから生徒会室に行つて、お仕事を手伝わないと行けなくなつたから。」

「あうー。じゃあ、私も手伝います。」

「駄目。」

「どうしてですか？」

「うーんと。」

美由が駄目な理由をどうやって説明するか悩んでいると、桐野まきの舞奈まいなが前に出て来て、朋の頭を撫でた。

「いい？ちびっ子、私たちは今から生徒会の仕事をしに行くというよりも、ケンカをしに行かなきゃならないの。」

「生徒会とケンカですか？何か学園ドラマみたいなのです。」

「そんな、ドラマティックなものじゃなくて、仕事の考え方に違いがあつて、その考え方に折り合いをつけないと仕事が出来ない状態なの。」

「うー。良くわかんないのです。」

「まあ、仕事を終わらせるために、どうしてもケンカしないといけないのよ。」

「ケンカを避ける方法は無いんですか？」

「ちよつと、厳しいわねえ。何せ時間が無いから。時間があれば別の手を考えるんだけど。」

「そういうわけで、かなり揉めそうだから、朋ちゃんを巻き込またくないのよ。」

会話に美由が入ってきた。

「わかりました。」

美由も朋の頭を撫でた。

「えらい。えらい。」

「えへへ。」

桐野と美由は朋と別れ、生徒会室に歩き出す。

美由は朋から受け取ったジャージを歩きながら鞆にしまい込む。

「なかなかカワイイ子じゃない。」

「でしょ。」

「それより、どうする？あのちびっ子にああいった手前、白旗あげて帰るのは心苦しいわね。」

「ひとまずは……。」

生徒会室に着いた桐野と美由は、文章を担当した二人を呼び、一

対一で話し合う事にした。

桐野 舞奈は相手に文章が書かれた紙を一緒に見ながら文を読み上げていく。

桐野はつつかえながら文章を読み上げていた。彼女が文章を読み上げるのが下手なのではなく、文章そのものがおかしいので予測ができないのだ。それに誤字脱字や文章がつながって無い処が多々あった。それに難しい専門用語のオンパレードである。

「あの？こんな事して何の意味があるんですか？」

桐野の相手が彼女の読み上げを制止してきた。

「いいから、聞いてなさい。」

そう言っつて、最後まで読み上げた。

「あなた、これで良いのね？」

相手は答えない。

「じゃあ、私もこれで良いわ。処であなたの名前何て言うの？」

「坂口 つとむですけど。」

「つとむは、努力の努でいいのかしら？それとも力の方？」

「努の方です。」

「そう」

そう言いながら、桐野は「文・坂口 努」と書き入れた。

「あと、あなたが書いた処は何処？」

「あの？何をやってるんですか？」

「決まってるじゃ無い。私はこのまま印刷をして全校生徒に配るべきじゃないと思ってるけど、あなたがせつかく書いた文を私が書き直すのがものすごく嫌みだだから、このまま出させてあげようとしているだけじゃん。ただし、あなたの責任でね。」

「それは無責任じゃないですか？自分の無能を棚にあげて。」

桐野は一瞬力チンと来たが、その怒りを収める

「はいはい、私は無能です。無能な私めでは、あなたの高尚な文を理解できません。それに私達には責任は無いから。ただ単にヘルプを頼まれたから手伝っているだけだから、正直このまま投げ出しても何の問題も無いんだけど？」

「はああ？バカですか？あなた。」

「あつそう。そこまで言うのなら、ひとつひとつ私が思っている問題をあげていくから、あなたの意見を聞かせて。」

桐野は堰を切った様に、問題をひとつひとつ具体的に挙げていく。相手は最初は色々抵抗をみせていたが、次第に黙り込む。

「だから、この部分はどどういう意味？何で必要なの？」

「ここの比喩の使い方が間違っているわよ。中学校で習うでしょ？」

「ここの『それは』は、前の文章の何にかかっているの？前の文の何処の部分にもかかってないように見えるんだけど？」

『きつついなああ。桐野さん。』

桐野の怒濤の指摘を聞いて、美由はそう思った。

美由の相手もそれを見ていた。

「あ、ごめん。えっと、一応、読み上げてみたけど、特に書き直す処はない？」

美由の相手は無言であった。

「じゃあ。あなたの名前をここに書いて。それで、この部分は終わり。」

「あ、あのー。」

「何？」

「やっぱり書き直します。」

「そうしてくれる？」

書き直すと言ってくれたのは素直にうれしかったが、全て終わらせるとなると、どう考えても2・3時間では終わらない。

『今日は9時までには帰れるかなあ……。』

ただ文章を書き直すだけなら、美由や桐野がやった方が早かったのだが、当事者でなければわからない部分が多かった。予測して自分の想像で埋めるという手もあるのだが、それでは伝えたい事にズレが出てくる。

学校生活に影響の出ないモノなら、それでも良いかもしれないが、これは全校生徒に配られる生徒会便りである。伝えたい内容にズレが出るのは致命的なのだ。

美由や桐野が昼休みに彼等に色々聞いていたのは、このズレをなるべく無くす必要があったからなのだが、その部分の情報を彼等は教えてくれないから書き直しようがなかったのだ。

放課後二人がとった方法は、彼等に書き直させるように仕向ける事だった。

一度読み直せば、誤字脱字や文章が繋がって無い部分がハッキリと出てくる。問題点が幾つか出て来た段階で、この問題の責任が誰にあるのかをちゃんと明確化させて置く。自分に責任がふりか

つてくるとなると、当然、責任感がわいてくる。

それでも、書き直しを拒む様であれば、そのまま、OKを出して帰るつもりでした。

能ある鷹は爪を隠す。

時は21時を過ぎていた。

桐野と美由は街灯の無い国道を歩いていた。

「ふうう。桜間さん、私、思った事があるの。」

「何でしょ？」

「能ある鷹は爪を隠すっていうじゃない？」

「はい」

「あれって真理ね。無能と思われてた方が余計な仕事を押しつけられずにすむし、下手に能力を発揮すると自分が痛い目を見る。」

「私は何ともいえませんが。」

「見下されていた方が楽って話よ。あえてピエロを演じ、無能のふりをする。実際、彼等がやっていた手よ。わざと沈黙を示して抵抗する。」

「うーん。何ともいえませんが。」

「彼等は責任をとる気が無いのよ。責任をとる気が無いから、無能を演じる。無能の演じ方は簡単ひたすら沈黙する。」

「それは、うがった見方では？」

「桜間さんは甘いよ。責任を明確化した時点で、あのやる気の発揮ぶりですよ。明らかに私達を見下してたのよ。」

「何とも言えないなあ。ただ、純粹に気づいて無かったただけかもしれないし。」

桐野は美由の前に出て立ち止まり、一本指を立てる。

「いい？それって、まともに小論文が書けないって事よ？推薦だったら小論文は必須でしょ？小論文で一番大事な事は『日本語としておかしくない文章を書く』事なのよ。この作品を書いている作者に聞かせてあげたいわ。この作品、誤字脱字はあたりまえ、日本語としておかしい文章が一行毎に何力所もある。これは、読み返してもせずに投稿するからよ。この作者には投稿をする前に読み返しをす

る覚悟がなさすぎるのよ。更に、たまたま読み返して、おかしな点に気づいて、それを直しても、書き直した後読み返しを行わないから、修正部分から後の文が繋がっていないのよ。それって、書き直した後読み返せば気づく事じゃん。だから、無意味に各話5回6回と書き直しをせざるを得なくなるのよ。私の台詞だっておかしい処があるでしょ？天才キャラの私にそんな仕打ちをするのよ。もう、この作者許せない……。話がそれたわね。そういうわけで、あの人達は読み返しを行っていないのよ。だからミスに気づかない。それなのに自分は有能だと思っている。自分は有能だから間違えるはずがない。だから読み返しを行わない。あの調子だと推薦とれても確実にあの人達、落ちるわね。」

「酷い事言うなあ。私もそう思っているので否定はできませんが。」

桐野は美由のとなりに移動し、歩き始める。

「後、もう一つ思ったの？」

「何をです？」

「『生徒会やクラスの役員になりたいと思わずに良かった。』って。」

「それは同意です。あの仕事は正直、もう、したくないなど。」

二人が歩いていると、歩道の行く先に街灯に照らされて何かがゴミの様なモノが落ちていた。

二人は『何だろう？』と思いながらお互い何も言わずに歩を進める。

そのゴミの手前まで来て分かった。トンビか鷹かしらないが、猛禽類らしき鳥が翼で頭を隠しながらうずくまっていた。

ハヤブサと桐野と美由

夜の歩道に頭を翼で隠しながらうずくまっている猛禽類を美由は見た。この距離まで近づかないと分からなかったが、どう見ても化け物である。赤服の退魔師的に言えばモドキの化け物だ。

しかも、かなり存在が薄い。普通の人間では感じる事すら出来ないレベルだ。

今までの経験上、道ばたにいるこの類いの化け物と関わるとロクな事が無った事を思い出す。それに、今日は隣に一般人の桐野がいる。

美由は無視を決め込む事にした。

「ねええ。桜間さんもしかして、これ見えてる？」

桐野が突然そう言ったので、美由はビククつとなった。

「え？何？」

桐野は足を止め、美由の顔をジーと見ていた。彼女の足下にはうずくまっている猛禽類がいる。見てはいけないと思うのだが、どうしても視線が彼女の足下にいるその猛禽類の方に行こうとする。

「嘘が下手ね。顔に出てるわよ。」

桐野はひざを折り、その場に座り込み、頭を隠している猛禽類を見る。そしてその鳥を指さし美由の方を見る。

「桜間さん。見えてるんでしょう？このハヤブサ。」

『ハヤブサなのか、この化け物。イヤ。そうじゃなくて、どうしようっ』

美由は頭をフル回転して、何か考える。

「ええと、そこにある何かゴミの様なものですか？」

「ゴミとは失礼な。」

突然聞いたこと無い声で、その鳥がしゃべりだした。鳥は頭を隠していた翼を下ろした後、美由をキツとにらみつけた。

「あっしは、誇り高き狩人ハヤブサでござんすよ。」

『反応してはいけない。反応してはいけない。一般の人では彼らの声すら聴く事はできないのだから。聴く事は出来ないの……。それにしても、何で古い時代劇のサンピン口調……。でなくて、反応してはいけな……。』

「あんた面白いわね。なに？そのサンピン口調。」
そう言ったのは桐野であった。

『うっ。桐野さん、あきらかに聞こえてる。』

桐野は美由の顔を見る。

「それなりには見えてる様ね。」

美由は観念する事にした。

「ええ。鳥みたいなのがいるぐらいは。」

「姉さん。あっしはハヤブサですよ。そこいらの鳥と一緒にされちゃあこまります。」

美由は聞こえなかつたふりをする。

「桐野さんも、見えるんですか？」

「ええ。私が突然、廊下で倒れて須王寺さんとあなたに介抱してもらった事があつたでしょ？多分、あの時から。」

「でも、裏庭であつた時は、そんな事は……。」

「ふーん。あの時には既にあなたも見えてたんだ。」

『しまった。余計な事を言ってしまった。』

「もの凄く微かには見えてたというか、感じる事は出来たのよ。」

でも、ほら、ここ最近、教室に赤いものが何か、ただよつてたじやん。」

『すいません。それは、私の知り合いです。』

「あれを、何とか見ようと色々がんばってたら、少しは見える様になつてたのよ。」

『うーん。まあ、確かに見られる様になる条件は整つていたんだよね。あの茶トラの猫に精神吸収を食らつた後も、その猫に餌をあげ続けて触つてわけだし。』

「その姉さん方、あっしに絡んでおいて、自分たちしか理解出

来ない話を延々と続けるって、どういう事で。」

「あ、すいません。」

そう、言ったのは美由だった。桐野は面食らった顔で、美由を見ていた。

「へええ。声も聞こえるんだ。」

『私、駄目だ。』

「お二方。あつしを無視しちゃあ、いけませんぜ。」

「ごめんなさい。ちよつとうれしかったから。」

『この嬉しかったはどんな意味を持つんだろう?』

「処で何?あなた、何でこんな処でうずくまっていたの?」

「翼を怪我しまして。」

「なんで?」

「姉さん。イヤな事をお聞きなさいますね。」

ハヤブサと猫

ハヤブサはしゃべりだした。

「今日はずっと雨だったじゃないですか。だから狩りに出られず、あつしはお腹をすかせてたんです。そしたら夜になったら、雨が止んだじゃないですか。」

「はああ……。」

「空腹と戦ってたあつしは、夜間にもかかわらず狩りに出る事にしたんです。空から獲物を探すんですが全く見つけれられず、時間だけ過ぎていったんです。」

「まあ、こんだけ暗ければねえ。」

「餌は採れずに無駄な体力を使い続けたあつしは、あまりにの空腹に一瞬、気を失いまして、そのまま墜落したんです。」

「その時、ケガをしたと。」

「はい、その通りで。」

「それで、飛べなくなつて、ここでうずくまっていたと。」

「いいえ。うずくまっていたのは別の理由があるからで、墜落してケガをしたのは確かなんです。飛ぶのに支障は無いんですよ。」

「はて？どういうこと？」

「それは、聞くも涙、語るも涙でして。私が墜落して目覚めた時に、猫の化け物に囲まれてまして。」

『ん？猫？』

「猫？良く食べられなかったわね。」

『猫……。猫の化け物……。確か、ここらへんは、あの太ちよメスの三毛猫の縄張りなはず。』

「ええ。運が良いとしか。猫の化け物達が今にも、あつしに襲いかかろうと。」

『確か、学校周辺の担当は、桐野さんが餌をあげている猫だった様な……。』

「酷い事するわねええ、その猫たち。」

『桐野さん。確証はありませんけど、多分、あなたの猫だと思います。』

「そんな折りに姉さん方が通りがかつたわけで、猫たちは一目散に逃げたわけですが、あつしはあまりの恐ろしさに、体が動かなくなり、見つからない様にゴミのふりを……。」

『ゴミのふりつて。さつき私がゴミと言ったら怒ったじゃないですか……。不条理な……。』

「災難だったのね。」

「えええ。それよりも姉さん方は命の恩人です。恩を返すために何か食べ物をとってきます。」

「あの。あなたの食べ物つて……。」

「姉さん方は結構がたいが大きいので、大物じゃないと駄目ですよ。この時期のこの時間帯なら照明の近くにいれば、ハエや蛾がいつぱいです。流石にカブトムシやクワガタカナブンは今の時期は無理ですが。」

「い・いらない……。」

「姉さん方は贅沢ですねええ。スズメの方がよろしいので。」

「それもいらない。」

「しかたがありません。ここは命を賭けてカラスを……。」

「もつといらない。」

「では、姉さん方はあつしに何を採って来いと?」

「何も採ってこなくて結構です。」

美由は猛禽類の申し出を拒絶した。

「そうよ。話を聞く限り、たまたま私達が通りかかっただけで、何もしてないのと同じだし。恩義を感じられても正直困るわよ。」

桐野は遠回しに遠慮の意思をしめした。

「それより、カラスって強いんですか? ハヤブサって確か狩りの名手ですよ?」

「そつちの大きな方の姉さん何を言っているんですか? カラスの

強さは異常何すよ？まともに戦ったら勝ち目なんてありません。なのに、なのに、あいつ等と来たら、一羽だけでも強いのに、チームを作って連携攻撃をしてくるんですよ。彼等を狩るのは命がけなんですよ。」

「命に関わるのなら、カラスを狙わなきゃいいんでは？」

「それは、猛禽類としての意地とプライドが許さないといいましようか……。それ以前に彼等が勝手に絡んでくるんで、相手をせざるを得ないというか……。」

「どう言う事？」

「カラスは悪戯好きな上に好戦的ですし、ストレス解消のためにあつし等を襲ってくるんですよ。たまに不意打ちで襲って痛い目にあわして、手を出せば痛い目を見る相手と学習させとかないと、こっちの被害が尋常じゃないというのが。」

美由は先月のいじめ事件を思い出す。

「人間も鳥もあまり違いはないんですね。」

コインランドリー

朋は市営住宅近くにあるコインランドリーの中にいた。

椅子にちょこんと座り、乾燥機の中で踊る様に回転する自分の制服をジーと見ている。

そんな時、何か暖かくフサフサで柔らかいものが自分の太ももを触ったと思ったら、それはぞもぞと移動しながら朋の太ももの上に乗ろうとしていた。

自分の太ももの上に乗ってきたモノを見た。それは、傷だらけの黒猫だった。

黒猫は朋の顔を見て「にゃあ」と口を開く。

「化け物の猫さんなのです。でも、この猫さんどこかで見た事があるような？」

「お久しぶりです。魔法少女様。」

「わあ。」

朋は驚く。

「その公園で会った以来でしょうか？」

「あうー。私が蛙さんと一緒に猫さんに襲われた時ですよね？でも、あの時会ったかは良く思い出せないのです。でも、私が魔法少女になったすぐ後に黒猫には会ったので覚えているのです。」

「それは良かった。何せどっちのシーンも作者が覚えて無かったぐらいですから。」

「それより、どうしたんですか？私を訪ねてくるなんて。」

「いや。もう一人の魔法少女様の方が、ちょっとした、やっかいごとに巻き込まれているので……。」

「ええ？そんなんですか？美由先輩の身に何があったのですか？」

「多分、あなたも関わっていると思うのですが。」

「私も？」

「ええ。多分ですが、今朝、お二人は鬼と戦いましたよね？」

「戦つたのです。美由先輩が助けてくれたのです。」

「その時の話を教えて欲しいのです。」

「ええと。話すのは別に良いんですけど、私、途中で気を失つちやっつたんで、詳しく知りたいなら美由先輩に聞いた方がいいかもです。」

「それが出来ればそうするのですが、あの方、退魔師と関わつたので今はちよつと近づけないんです。」

「あの赤服の方ですか？」

「そうと、言っておきましょう。」

黒猫はあえて含みのある言い方をした。実際は赤服の女だけではなく、須王寺家の方の関係も疑つてゐるからだつた。

朋はその事は全く気にせずしゃべりだす。

「私が今朝、学校の裏庭を歩いていたら、突然、ブルドッグが空から振つて来て、私に抱きついたのです？」

「ブルドッグが空から？」

「ええ。そうなんです。そのせいで私の制服は泥まみれに……。」

「

「いや、そうではなく。もっと分かるように説明してください。」

「うーんと、多分、ブルドッグさんが鬼さんに追われてて、崖から落ちたんじゃないかと思うんです。その後、鬼さんが私の目の前にドーンって音と共に落ちてきて、突然、私に攻撃をしてきたのです。私は魔法少女になつて戦うのですが、その途中、気を失つて、気がついたら赤服の女の人に抱かれていたのです。」

「あのブルドッグ……。またトラブルを。」

「あのブルドッグさん有名なんですか？」

「ええ。わがままで、方向音痴、あちらこちらでトラブルを起すことで有名ですな。」

「私も、酷い目にあつたのです。」

「それで、話しの続きを。」

「ええと、気がついたら、美由先輩が鬼の治療をしてて、誰か来

る気配を感じたので、そのまま存在を薄めて、学校の中に逃げたのです。」

「だいたいわかりました。ありがとうございます。」

「いえいえ、どういたしまして。」

猫はそう言つと朋の太ももから飛び降り、床に着地すると、また朋を見る。

「魔法少女様。情報のお礼として、ひとつ、忠告おきます。」

「なんですか？」

朋は首をかしげた。

「もう一人の魔法少女様とは、しばらく距離を置いた方がいいですよ?」

「ええ。せつかく、今日久しぶりにお近づきになれたのにですか?」

「はい。あの方、赤服の退魔師と長く居すぎたので、その筋の方々に目をつけられる可能性があるんですよ。あなたは嘘をつく能力が無いので、下手に彼女の周りにいると、あの方もあなたも魔法少女だと知られる可能性が高くなるんですよ。」

「あー。それは困るのです。私、嘘をすぐつくけど、すぐにはれちゃうのです。」

「理解してただけて、さいわいです……。ん?」

黒猫は、コインランドリーの出入り口の方に顔を向けた。

そこには、こちら辺を取り仕切っている、猫4人組がいた。

「これはこれはクロさん。ここは、あなたの縄張りじゃないですよ。」

「これは失礼しました。もう、用事がすんだので、すぐ、ここから出て行きます。」

「いや、それでは困るんですよ。」

「と、言つと。」

「最近、ここいらを荒らしている退魔師やら鬼やらの情報を教えて貰わないと。」

「断ると言ったら？」

「力尽くで」

「め！」

そう言っつて、黒猫と出入り口付近の4匹の猫の頭を朋は次々と叩いていく。

朋は4匹組の猫に向かい、一本指を立てる。

「ケンカは駄目ですよ。」

「はい。」

朋は黒猫の方を見る。

「黒猫さんもわかりましたか？」

「ええ。仕方ありませんね。えっと、情報については教えますので。」

「わかった。」

「ここでは何なので、よそで話しましょう。」

「そうしよう。」

5匹の猫はコインランドリーの外へ出ていった。

「さよならです。ケンカしちゃ駄目ですよー。」

月見と神園

「だから、その桐野って、姉さんと、どんな関係なの？」

そう言ったのは須王寺月見だった。

「あんたは、さつきから姉の事ばかり私に聞いて……。おたくは鬼の事が聞きたくて、私をこんな処につれてきたんじゃないのか？」

そう答えたのは、赤服の女、神園だった。

二人は3畳くらいの広さの西洋風の装飾がされた板張りの部屋に、高級そうな机を挟んで座っていた。

月見は机に置かれた手元にある紙をつかむ。

「だって、あなたの素性を調べたけど、これを見る限り、これ以上、鬼の情報聞き出せそうに無いんだもん。そんな事より、あの学園での姉さんの友達のことを聞かせてよ。」

「だから、さつきから、何で姉の話なんだよ。車の中ではそこまで前のめりじゃ無かっただろ？」

「だって、ほら、あの時は、部下がいたから。彼らに示しをつけるためにも、ミーハーに聞けないじゃん。」

「。。。。いや、わかった。処で、何でそんなに姉の事聞きたがるんだ？」

「ほら、ねえ様って、素敵じゃない。」

月見は顔を赤らめながらそういった。

「っは？」

『似たような顔立ちに、同じくらいの背丈、同じ金持ちの娘で、地位と名誉も同じくらいある人間がいったい何を……。てか、さつきまで『姉』と言っていたのに『ねえ様』と呼び方も変わっているんだけど。。。。』

月見は今まで見せたことの無い様な、明るい笑顔で話しはじめる。
「ねえ様って、服の上からでもわかるくらい、ボツ・キュ・

ボンじゃない。」

「ああ、確かに、車の中であなたの下着姿を見たが、残念な胸だったな。」

神園は月見に皮肉を言った

「そうなのよ。私たちって、顔立ちは似ているけど、私ってほら、幼児体型というより、少年の体つきじゃない。なのに、おねえ様は女性として理想な体をしているのよ。女も惚れる体っていうの？」

「それだけ聞くと、嫉妬している様に聞こえるが……。」

「嫉妬は、そりゃあしますけど。あの抱かれ心地の良い体に包まれば、そんな気持ちも吹っ飛んでしまいわすわ。」

「わ。わからん……。」

「最近、私、悩んでいますの。最近、ねえ様が私を全然抱きしめてくれなくて……。」

『何を言い出すんだ、このお嬢様は……』

「ほら、みんながいる手前、なかなか出来ないのも分かるんですけど。私としては人前でも気にせずにくゅっつと抱きしめて欲しいのよ。」

「あなたの願望なんて知るか。」

「あなたもねえ様に抱かれて見れば分かるわよ。ねえ様のあの胸の香りはとても素敵なんですよ。」

「そんな性癖を告白されても困るんだが……。」

「性癖とは失礼ね！姉を思う純粋な、妹の思いがわからないなんて。」

「いやいや、子供の時なら分からないでもないが、高校生にもなつて姉の臭いをかぎたいとは思わないだろ。」

「そんな、普通ですって。」

神園はおでこに手をあてる。

「あ、そう……。処で、何でこんな話を私にする？」

「え？だって、他にねえ様の事でこういった話が出る人いなんですもん。私はずっと誰かとねえ様の話でガールズトークを繰り返

げるのを夢見てたんですよ。」

「だからって、私にするな。このシスコン。」

「シスコン結構！！それより話を続けるわよ。」

「ふう。」

「あ、そうだ。忘れてた。ねえ様の話でガールズトークをする前に、言っておかないと。」

「なんだ？それと、あなたの姉の話をするのは既に確定なのか？」

「突然で悪いんだけど、あなた、バイトしない？」

「バイト？」

美由は家に帰り着いて自分の部屋で勉強をしていた。

「ああ。もう、何で、こんな日に限ってこんなに大量に宿題が出てるかなああ。」

思えば美由も今日はさんざんな一日であった。その締めくくりがどんだけやっても終わらない宿題の山だった。

『今日は3時には寝られるかな？』

朝

「桜間さんおはよう。ふわああ。」

桐野が美由の家の玄関前で、眠そうな顔をしながらそういった。

「おはようございます。」

全く覇気の無いだらしない顔で美由は桐野に挨拶を返した。

二人は疲れた様子で歩きはじめる。しばらく沈黙が続き、桐野が口を開いた。

「ねええ。桜間さん？」

「はい？なんでしょう？」

「宿題やった？」

「やりました。と言うより、やったから今、こんな感じです。」

「なるほど。私もそうよ。」

「……」

二人とも何か話そうと思うのだが、寝不足で思考が回らないので、なかなか言葉が出なかった。

「桐野さん。」

「なに？」

「昨日何時に宿題終わりました？」

「2時半過ぎかな？桜間さんは？」

「3時過ぎてました。」

二人は昨夜ハヤブサに絡まれたせいで、帰宅は22時だった。宿題が大量に出されていた事もあり、昨日は運動をしてないし、今朝は、起きられずにトレーニングに行ってなかった。

「私、普段7時間、寝てるから、流石にきついわね。」

桐野はぼやいた。

「私は7時間から6時間ぐらいですかね。他の人たちが良く4時間とか3時間睡眠で大丈夫って言ってますけど、私達はそんな短い睡眠時間で駄目っばいですね。」

「全くね。」

また沈黙が生まれる。二人は機械的に歩み続ける。

「ふー。」

二人はあまりのけだるさから、同時にため息をついた。

「あのハヤブサなんだったのかしらね？」

「さあ。まあ、もう会う事も無いと思いますが。」

教室までやってきた二人を須王寺麗菜が出迎えた

「昨日はごめんなさい。二人とも。」

須王寺は申し訳なさそうにそういった。

「本当に酷い目にあつたわよ。」

桐野が須王寺をちくりと刺した。

「本当にごめんなさいね。あの時お願いできる人が二人しかいないくて……。」

「私達じゃなくても、生徒会で何とかしても良かったんじゃないかと……。」

「あまり身内の事を悪く言うのはいけないんですけど、彼らはとも一生懸命やっているんですけど、その結果、難しく書きすぎる傾向があつて……。」

『やはり。彼女もそう思ってたのか……。』

桐野と美由は同時に同じ事を思った。

「処で、昨日は何で休んだの？」

「それが、良く分かりませんの。お母様が昨日はとにかく家に居て欲しいと言うものですから。」

『二日前に山で会った須王寺さんの妹さんだっけか？彼女は鬼を追つてた。そして、昨日の朝、この学校に現れた。多分、その事が関係してるんだろうな。』

そう美由は思った。美由は鬼の事件に巻き込まれた当事者なので、だいたいの裏事情をさっしてしたが、口にするわけにはいかない内容なので、ここは沈黙を守る事にした。

「そうなの？お嬢様も大変ね。それより、私達、その事で生徒会の人たちと口論をしてしまったの。殴り合いとか、誰かが仕事を放棄するとかは無かったんだけど、間違いなく彼らの心証を悪くしたと思うのよ。その事で、もしかしたら迷惑をかけるかもしれないけど。」

「それは私の責任で頼んだ事ですから。仕方が無いです。」
須王寺はにこりと笑う。

「それより、今日の放課後二人とも空いています？」

「空いていますけど。」

「ええ。」

「お礼がしたいの。今日、学校近くのファーストフードが開店なんですって。おごりますから一緒にいきませんか？」

「へええ。いいわね。」

ハンバーガーショップにて

「ふー。」

美由と桐野は同時に溜息をついた。

放課後の教室で、二人は机を並べて宿題をやっていた。

今日も昨日に引き続き、大量の宿題が出たのである。

今日は須王寺すおうじと学校の近くに出来たファーストフード店に行く約束をしたのだが、言い出しっぺの本人が生徒会と派閥のゴタゴタでかけずり回らざるを得なくなり、30分程教室で待たされる事になったのだ。

昨日、大量の宿題のために地獄をみた二人は、この空き時間を利用し、放課後の教室で宿題をこなすという行為に及んでいた。

「ねええ。桜間さん。」

「はい、桐野さん。」

「何で、放課後にイベントがある日に限って、こんなに宿題がでるのかしらね？」

「さあ。私の経験上ですが、待ち望んでいたイベントがある日に、まとめて不幸ってやってきますよね。」

「今日の数学の宿題って、あんまりじゃない？一番量が多かったのに、答えのプリント渡して、後は自分で見直す様にですって。こっちは眠たいのを我慢して無理にやってきたのに。」

「受験に必要な基本レベルの問題でしたからねええ。受験を前提にするなら触れておかないとやばいところですし。でも、結構重要な処なので、幾ら授業時間がやばそうだとはいえ、あのやり方は無いですよね。」

「てかさああ。正直、この学校、授業時間が単純に足りないと思うのよ。」

「ええ。全くです。今のペースだと、ほとんどの科目が受験前に最後まで辿りつけませんし。」

「私、思うんだけど土曜日を休日前提っていうのを止めればいいのかよ。うちより上のランクの私立は土曜は半日学校半日休みじゃない、一日授業とかやっているところもあるんだし。」

「三年でここまでツケが回ってくるとなると、正直そう思いますね。」

『まあ、セイメイ聖エルナル学院の事があるから、それは出来ないのも分かっているんだけど……』

二人は同時に同じ事を思った。

「ふう。」

また同時に溜息をつく。

「ねええ。桜間さん？今、私、数学の確立の問題やってるんだけど。」

「はい。わたしもやってます。」

「前ね新聞に小学校高学年のテスト問題ってが載ってたのよ。」

「はい。有名私立中とかの受験問題とか、小学生勉強コーナーとかにたまに載ってますよね。」

「そうそう。その小学生のテストが確立の問題でね、私、解けなかったのよ。」

「はあい？小学生に何で確立？そりゃ平均や双六の確立ぐらいはやりですけど、そのレベルですか？」

美由は手を止める。桐野は手を止めない。

「いいえ。でも、最近の小学生は習うんじゃない？新聞に出てた問題だし。でも、その問題、答えを見る限り、どう考えても高校数学の確立の基礎的知識が無いと解けないのよ。」

「問題を見てませんから、何とも言えませんが……。」

「前もね、その新聞に載ってた小学生の算数の問題でね、図形の問題だったんだけど、平行四辺形をベースに補助線と錯角を利用しないと答えが出ない問題が出てたの。」

「本当にそれって小学生の問題なんですか？中学生の間違いでいい？」

「そうかもね。」

教室の扉が開く音が聞こえた。

二人は手を止め、扉の方へ顔を向けた。

「ごめんなさい。」

そう言っに入って来たのは須王寺 麗菜れいなだった。

「私が誘っておいて、待たせてごめんなさいね。」

「良いの。良いの。宿題をやったから。」

「でも、どうします？ファーストフード店に遊びに行くには困る量の宿題がありますけど……。やめます？」

「あら、桜間さん。丁度良いと思うわよ。ファーストフード店で三人で一緒に宿題をしようじゃない。」

須王寺すおうじが満面の笑みになる。

「ああ、それって、良いですね。私、実は憧れていたんですよ。ファーストフード店で友達と一緒に宿題をしあうのって。」

「いらっしやいませ。こんにちは。お客様？何をご注文ですか？」
そう華やかな満面の笑みを作り言ったのは、赤服の退魔師である神園だった。

今の彼女は赤服ではなく、大手ハンバーガーショップの制服に身を包んでいるのだが。

『あの女……。バイトと言うから退魔師の仕事かと思っていたら、自分の家がフランチャイズ契約した店の人手が足りないからって、二日前に会ったばかりのホームレスに普通たのむか？』

「バーガーとポテトを単品で頼むより+20円でMサイズのお飲

みものが付くセットがあるので、そちらの方がお得ですが。」
神園の隣のカウンターから、華やかな店員の声が聞こえてくる。
声の主は須王寺月見であった。彼女も開店時のヘルプとして参加しているのだ。

『てか、この女。学校は良いのか？昼からずっといるけど。』
神園は客をさばきながら、そう思った。

「ふー。」

一回溜息をつき、華やかな笑顔を作って、客の方を見る

「いらっしやいませ。こんにちは……。あつ。」

彼女の目の前にいる客は美由だった。

そして、月見の前にいる客は須王寺麗菜だった。

月見は麗菜に引きつった笑顔で「お客様？何になさいますか？」
と言った。

バーガー屋

「あの？何をしてるんですか？」

美由はハンバーガー店のカウンターでレジをしている神園にそういった。

「お客様？何にしましょうか？」

神園は引きつった声でそういった。

「月見。あなたここで何をしているの？」

須王寺麗菜は目の前に立っている自分の妹に怒りをこめた大きな声でそういった。

美由も神園もその強い声がした方へ顔を向けた。

『あれ？確か、彼女、須王寺さんの妹さん……。で、こっちは退魔師の人。』

美由は突然の二人との出会いに動揺し、オロオロしていた。

「ねええ。あの須王寺さんにそっくりな顔をした店員だだろうね？妹さんかしら？」

そう好奇心でわくわくした声で桐野は言う。

「え？え？多分、そうなんじゃないですかね？会話から推測するに。」

「あの、お客様。後ろが使えますので。」

神園は美由に向かってそう言った。

「あ、はい。」

美由はカウンターにヒジをつき、メニューを見る。

「あの？ここで何を？」

美由は小声で神園に聞く。

「昨日、彼女の家に連れて行かれた後、バイトに誘われたから来ただけよ。」

「何で、ファーストフード店のバイトなんか。」

「あら？ここはファーストフード店じゃないわよ。注文を受けて

から作りはじめるから。そんな事より怪しまれるからとつと注文しなさい。」

桐野は美由と神園会話を全く気にしていなかった。同じ顔の須王寺が二人、現れて、そんな事に気がまわらなかったのだ。

「月見、学校はどうしたの？それにこんな処でバイトしてるなんて。」

「ほら、姉様。ここはウチがフランチャイズ契約で出しているお店で、今日、人手が足りないって事だったんで。ヘルプに。」

「他にもうちには人手がいるでしょう。わざわざあなたが出る必要は無いでしょ。」

月見は顔を下に向けて恥ずかしそうな顔をする。

「だって、この制服可愛いですもん。こういう機会が無いと、コスプレ出来ないから。」

「気持ちわかるけど……。確かに、私も着てみたいけど、あなたには学校があるわけだし。」

「それは大丈夫ですよ姉様。学校にはちゃんと許可をとっているから。」

「もう、仕方無いわね。今日だけは大目にみます。」

「ねえ様、優しい。」

月見は一度、美由と桐野の顔を見る。

「となりのカウンターで、興味深そうに私達を見ているそちらのお二人は、お友達ですか？」

「ええ。そうよ。今から3人で宿題をここでやろうと思って。」

桐野・麗菜・美由の3人は席に座る。

14番の注文札を机に置いた。

「ねええ。ねええ。須王寺さん。あの須王寺に似ている子だね？」

「私の妹です。」

「やっぱり。」

「あのさ。あんた何やってるの？」

そう言ったのは神園だった。

彼女がそう言いたくなるのも当然で、テレビに映し出される監視カメラを食い入る様に見ていた。

「話かけないで、ねえ様の友達が、ねえ様にふさわしい人たちなのか、チェックしてるんだから。」

月見は姉ラブ過ぎて、レジの仕事を放棄していた。

「ふう。」

『私が言うのもなんだが、私の周りは変わり者が多いな。』

別のバイトの子が、キッチンで作られた美由達のハンバーガーやポテトが入ったバケットを、席までもっていきこうとしていた。

今までモニターに釘付けになっていた月見は、そのバケットをとりある。

「悪いけど、これは私が持つて行くから。」

「え？はい。どうぞ。14番様です。」

取り上げられた女の子は月見の突然の行動にとまどいの表情をみせていた。

華やかな笑顔で、バケットを美由達の席へと運ぶ。

「14番でお待ちのお客様。商品はこちらになります。」

元気な声でそういった。

ひたすら勉強を続ける人たち

須王寺月見は、目の前で展開されている異様な光景を見て、少し引いてしまった。

目の前では、制服を着ていても華やかさが溢れ出る女子高生3人組が、鬼の形相をしつつ、無言でプリントに食らい付いている姿が、そこには、あつたからだった。

『せつかく、ねえ様に甘えられると思ったのに、何？ この暗いピリピリムード……』

満面の笑顔でバーガーが入ったバケットを持ってきた月見の表情が曇った。

『えつと……。こういう店で友達と宿題をするのって、『宿題』はあくまで言い分けのための『大義名分』であつて、実際は宿題そっちのけで、ガールズトークを展開するものよね？』

月見が姉ラブなのに関わらず、姉を追いかけずに今の学校に残ったのは、家の事情で公休を取り易い面もあるのだが、何より勉強漬けの高校生活がイヤだと思っていたからだった。

彼女の世界観からすれば異様な光景としか思えないピリピリムードであつたが、美由達3人に見れば当たり前前の状況なので、自分たちが異様な世界観を作り出しているとは思っていなかった。

高校レベルでの難しい問題というのは、大抵の場合は単純な問題が複数個組み合わさっており、それをひとつひとつ正確に処理して、はじめて解けるようになっていく。

だから単純なミスを一度でも犯したら致命的になるのだ。

そのため難しい問題を解くためには単純なミスをどれだけ減らせるかが勝負になってくる。

単純なミスを減らすため、問題に取りかかっている間は余計な情報を排除していくのが一番効率が良いのだ、

だから、この三人組はしゃべらずに宿題に集中しているのだった。

ただ、須王寺と桐野は別に会話をしながらでも、宿題をし続ける事は可能であった。

ただし、美由にはそれは出来なかった。

それはマルチタスクという能力のせいである。

マルチタスクというのは複数の事を同時に考える事ができる力だ。マルチタスク自体は特別な力ではなく、誰でも自然に持っている力だ。

例えば、TVを観て、音楽を聴き、家族と会話しながら宿題をするという様な感じだ。

須王寺はこのマルチタスクの能力が強く、桐野も高い方だった。

だから、この二人はTVを鑑賞しながら、音楽を聴き、会話をしながらでも宿題が出来る人たちだった。

だが、美由はこのマルチタスクが全く出来ない体質だった。

「あら。」

バスケットを持ってきた月見に最初に気づいたのは、姉の須王寺麗菜だった。

「月見が持つてきてくれたのね。ご苦労様。」

さっきまで鬼の表情でプリントに向かっていた麗菜は、もの凄く優しい顔で月見にそういった。

須王寺は机に置かれている番号札を取り、バスケットを受け取って、番号札を渡す。

「ねえ、須王寺さん。」

プリントから一切目を離さずに、桐野がそう言った。

「その子、私達にも紹介してよ。」

そう言った後、鉛筆を置き、須王寺姉妹を見た。

「ええ、良いわよ。こちらが私の妹、須王寺月見で、こちらの方が桐野さんで、こっちが桜間さん。」

「二人とも、はじめましてよろしく申し上げます。」

月見は慌てる様に会釈をする。

『はじめまして……？私とは二度目だけど、まあ、ようするに、そうしると……。』

「こちらこそはじめまして。月見さん。私は桐野舞奈よ。」

「はじめまして、須王寺さんに似て、凄く綺麗な妹さんですね。」

「よくよく見たら、須王寺さんより背が低いのね。それとキャシヤというか……。顔立ちは似てても結構違うのね。綺麗というより、可愛いつて感じかしら？」

「ええ？そうですか？」

月見はちよつと照れて、姉の隣に座ろうとするのだが、麗菜がすぐに止めた。

「駄目よ月見。座っては。お店に迷惑がかかるでしょ。お客様がいるテーブルの席にお店の人が座ると、風営法という法律にひかかるの。お話したいのなら、バイトが終わってから、その制服を脱いでからにして。」

「はい、ねえ様わかりました。」

そう言つて、月見はトボトボと帰って行つた。

「お客様がいる席に座ると、風営法という法律にひかかるって本当なんですか？」

「そうよ。メイド喫茶でも、結構そこらへんは厳しく指導しているみたいよ。やるんだったら警察に届けて、18歳以上立ち入り禁止の札を店の入り口に掲げなきゃいけないようになるみたいよ。」

桐野がそう言った。

「でも、前に、テレビで、ポリウム満点の女性が露出度の高い服を着て、客と同じ席に座つて会話するのがウリのファミレス特集とかしてませんでしたっけ？」

「さあ、気のせいじゃない？、私も同様の事を思つたけど。でも、この前、その店を特集してたけど、お客様の席に座つて会話するというのがやってなくて、何かショーをやっていたわよ。多分、勘違

「いじゃないかしら？」

「立ち話で、少しの間会話するのは問題無いから、そこら辺で勘違いなさったのかもね。」

うなだれる月見

月見はカウンターの奥でうなだれていた。

「ねええ。あんた、そこでそうしてると邪魔だんだけど。」

神園は月見にそう言った。

「ねええ様に怒られた。」

「はいはい、分かったから、そこで、ずっと、そうしているつもりだったら、仕事切り上げて帰ってくれない？今から忙しくなる時間だから。」

「聞いてよ。私がね、ねええ様と楽しくお話しようと席に座ろうとしたら、怒られたの。」

「そりゃ、怒られるだろ。てか、あんたがただのバイトだったら、一発でクビだぞ。」

「そういうのじゃないの。お水みたいだつて」

月見は麗菜の話をちゃんと聞いて無かった。

「何を言っているか良くわからないが、ここはお水のお店じゃないんだから、座つちや駄目だろ？そんなに、姉の横に座りたいんだつたら、仕事を切り上げて、その制服を脱げばいいんじゃないの。」

「……………」

月見は突然顔を上げ、みるみるうちに笑顔になる。

「そうよね。そうすれば良いんだわ。」

「おいおい、自分で言つてて何だが、本当にやるのかよ。正直、今から忙しくなる時間なんだが……………」

「と、言うわけありがとうね。」

「ちよ、ちよつと落ち着け。」

神園は月見の両肩に手を置く。

「いいか？お前のシフトがどうなっているかは知らないが、ひとまず、自分が請け負った仕事の責任は果たせ。多分、お前の姉が言いたかったのも、そう言う事だと思う。だから、今、姉の元にいっ

たら、また怒られるぞ。」

「……………分かったわ。ねえ様に嫌われるのは嫌ですもん。私、頑張るわ。」

「……………分かってくれて、ありがとう。」

桐野は切りが良いポイントに辿り着いたので、ポテトをつまみ始める。

残りの二人は、切りの良いポイントにまだ、辿り着けないのか必死にプリントに食らいついていた。

「ねええ。二人とも早く食べないと、冷めるわよ。この手の食べ物って20分ぐらい放置すると、クソまずくなるわよ。」

「……………わかってます。もう少ししたら手をつけます。」

マルチタスク

同時に考える力に乏しい美由は、先ほどの風営法の話で今までやってた事が飛んだために、再確認に追われていた。

麗菜は何も言わず、ひたすら膨大な量の樹形図を描いている。放課後に美由と二人でやっていた数学の確立の宿題である。問題を解くという程、難しい事をするわけではないのだが、描く量が膨大なので時間がとにかくかかる。それに量が多いのでミスを犯さない様に事務的な確認を常に求められる、時間と精神をひたすらすりつぶす作業だった。

桐野はポテトを口元でカリカリしながら、横目で二人を見る。

『確かに今は無理そうね。』

彼女はポテトを咀嚼しながら、店全体を見回した。

店には彼女達と同じ学校の生徒のグループが複数おり、中には男女混合の8人組もいた。

男女混合の8人組は置いて、他のグループの幾つかはノートやプリントをテーブルに出していた。このグループは自分たちと同じ様に宿題を大義名分にして来たのだろうが、宿題そっこのけでおしゃべりをしていた。

『こう見ると、私達って変わっているなあ。ただ、ひたすらに宿題をこなす事に何の疑問も覚えていない。』

「さて。」

そう言っつて、麗菜が鉛筆を置く、膨大な樹形図を描く仕事が終わったらしい。

麗菜は自分が頼んだハンバーガーをとり、食べ始める。

「あら、このお店結構美味しいのね。前、この手のお店で食べた時は全体的にパサパサして、味が貧弱というか、バラバラというか、そんな感じだったのに。」

「まあ、大手チェーンのバーガーはそんな感じよね。ここも大手ではあるけど。ここは安売り専攻に走らなかつたから。大手でも期間限定の高いバーガーには美味しいものもあるけど。」

「さて。」

美由も鉛筆を置き、自分のバーガーに手を伸ばす。

桐野が美由のプリントをのぞき込んだ。

「な、何ですか?」

「いいえ。随分丁寧な解法だなと思っつて。下手すると、そこら辺の参考書より丁寧かも。あ、私のも見ていいわよ。」

そう言っつて、プリントをテーブルの中央に差し出す。

「……。良く、これでわかりますね。必要最低限しか書いて無い……。」

「桜間さんのが、丁寧なだけだと思っつけど。だって、問題を解くので一番時間を喰うのっつて書く事じゃん。飛ばせる部分は飛ばさないと、時間が足りなくなるわよ。」

須王寺すおうじが二人のプリントを見比べている。

「本当に陰と陽ぐらい違いますわね。」

「どれどれ、須王寺すおうじさんのはどうかな？」
そう言いながら、桐野は須王寺すおうじのプリントをのぞき込んだ。
「うーん、これは、これで个性的ね。あちらこちらにはらついて
いて。」

桐野はポテトをカリカリ食べる。

「ねえ。私達って変わってるわよね。」

「どうしてですか？」

「だって、他の人達って、宿題を大義名分にしてるはずなのに、
全く手を動かさずに、おしゃべりしてる。」

美由と麗菜は辺りを見渡した。

確かに、おしゃべりをしている。その中にこっちを見ている女子
グループがあった。

彼女達と目が合うと、彼女達が「きゃー」と言った。

須王寺すおうじはにこやかな笑顔をその女子グループに向ける。

『須王寺すおうじさんのファンかな？』

三人は自分の持ち分を食べ終わると、また鬼の形相で宿題にとり
かかった。

「ふう。終わり。」

そう言っつて、桐野は鉛筆を置いた。

「早いですね。私は後、30分はかかりそうなんです。」

「バカ丁寧にやってるからよ。宿題なんて適当でいいのよ、適当
で。」

桐野は先ほどまで、鬼の形相で宿題と戦っていた人間とは思えな
い台詞を吐いた。

「あの一。」

3人はかけられた声の方を同時にむいた。

そこには私服姿の月見が現れた。

「席一緒にしてよろしいでしょうか？」

「あ、須王寺さんの妹さんね。月見さんだっけ？バイト終わったの？」

「ええ、はい。」

彼女がそう言った時、美由の目に必死に働く神園の姿が映った。

美由は本当にそうなのだろうか？と思ったが、あれから1時間ほど立っているし、シフトがあるからと思い割切る事にする。

『あの女、ほとぼりが冷めた頃に仕事止めやがって、まだ、後、1時間ぐらい忙しいのに。』

そう思った女がいたが、同じテーブルの4人組ではなかった。

美由達を見ていた女子グループも騒ぎだしていた。

「見てみて、あの聖エルナール学院の憧れ須王寺姉妹が並んでお座りになっているわよ。」

「本当、素敵ね。でも、あのおねえ様の地位を狙っているあの女と、派閥にかみつて来る嫌みな女というのがむかつかますわ。」

そんな声が美由の耳に入ってくる。

『私にしろ、桐野さんにしろ、須王寺さんや、この妹さんは、他の人達にいったいどう思われているのだろう・・・？』

髪の話題

須王寺月見にとって、ハンバーガー屋のバイトは完全な暇つぶしであった。

鬼の事件の調査をしている過程で、どうしても美由達が通う学校を調べる必要性が出て来ており、大人数で調査する必要があった。

幾ら彼等に消える能力があるとはいえ、昼間の学校に大人数で押しかけ調査するには問題がある。そのため、夜になるのを待って調査する事になっていた。

そんな時、調査現場近くに自分の家が出資しているハンバーガー屋が本日オープンだという。人手が足りなかった事と、この店のカワイイ制服を着たいという憧れがあったので、月見は夜までの暇つぶしにバイトをする事にしたのだった。

学校に行っても問題無かったはずなのだが、あまり勉強が好きではない月見は刺激を求めてバイトを選んだのだった。

だから、姉の隣に座ってガールズトークを繰り広げるといふ魅力的なものがあつたら、バイトを捨てて、そっちに飛びつくのに何の躊躇も無かつたのだった。

「月見さんって、ほんと、麗菜さんを中学生にしたらこんな感じだろうなって感じでカワイいわね。」

桐野がそう言った。

「えへへ。」

月見は麗菜の隣で恥ずかしそうに照れ笑いをした。

「そんな事は無いですよ。姉は中学生時代ですら、もっと大人な感じでした。それと、私達って一つ違いなんですよ？姉はこんなに大人っぽいのに、私は子供みたいで……。」

「ああ、気にしてたならごめんなさい。大人っぽい女性も良いけど、子供っぽい女性も魅力的だと思うし。」

「いいんですよ。気にしなくて。」

子供の様な態度で笑う月見を見て、美由は思う。

『二日前の夜は、あんな威圧的で高飛車な感じの人だったのに……。人ってこんなに変わるんだな……。姉パワーおそるべし。』

「姉と私って、顔は似ていると言われるんですけど、結構違うんですよ。髪とか。」

「へええ。私には同じ様に見えるのに。」

「それは、私がパーマとかかけて姉に似せているだけで、本当はもう少しストレートな感じで。」

「ええ？ そうなの？」

と、麗菜が驚いた。

「ねええ様知らなかつたんですか？」

「初耳。私、自分の髪の毛のこのウェーブが実は嫌で……。」

「何で何で？」

桐野が前のめりに聞く。

「だって、頭が大きく見えるんですもん。一生懸命ドライヤーとブラシをかけてやっとこんな感じを保ってるんですよ。」

「と、言う事は、ほっとくと、頭は大爆発してるのね。」

「そうそう、寝起きの私とか他の人には絶対見せられませんわ。」

私としては桐野さんみたいな髪が良かったわ。」

「私、そこそこボリューム感がある様に見えるんだけど、一本一本が細いから全然、髪であそべないのよねええ。逆に須王寺姉妹みたいに遊べる髪の方に憧れるわよ。」

『みんな、それなりに似合っているのに、髪への憧れってあるものなんだなあ。私は何となくこの髪型にしているけど。私の憧れか……。私は朋ちゃんみたいな長い髪がいいなあ。』

「ねええ。桜間さんって、どうしてその髪型にしているの？ やっぱ、魅惑的な女を狙ってセミロングにしているの？」

「え？私？ですか？そんなつもりは全く……。」
美由がセミロングなのは、美容師さんに適当に切り添えて下さいと言っただけの髪型にされるからなだけで、意味は全くなかった。

月見はあくまで、夜までの暇つぶしでバイトをしていたが、神園は違っていた。

最近、お金が入る事件が幾つかあり、今は金があるのだが、彼女にとっては贅沢な、アパートを借りて生活するとか、コンビニでご飯をすますとか、愛犬のご飯を缶詰にするとか、水道・ガス・電気を払うとか、バーゲンで服を買うとか、未納分の年金を払うとか、保険に入るとかというとてもない贅沢をしていれば、半年を過ぎたあたりで飯が食えなくなる。

月見が提案してきた雇用条件はフロアチーフ待遇であり、ちゃんと働いていれば、彼女の尺度的に見ればかなり贅沢な生活が出来る様になるのだ。

だから、必死で働いていた。

神園は退魔師業で食えなくなると、バイトで何とか食いつないでいたのでバイト経験は豊富で、この系列のハンバーガー屋でバイトをした事があり、チーフまでなった事がある。ただ、それは随分昔の話であり、今とはかつてが大夫違っていた。

月見は神園を調べ上げており、チーフ経験があるんだからとチーフ待遇で雇っても問題はないと言っていたが、彼女の的に問題があると感じていた。

月見の姉話につきあわされたすぐ後、オープン数時間前に接客法やレジの使い方を習いオープンを迎える事になる。我ながら良く、そこまで大きなミスを犯さずにやれてるなあと思う。

昼になり店長に呼び出され、チーフ待遇なんだからという理由で、

月見を押しつけられるハメになった。月見の指導をしながら、押し寄せる客をさばくので、途中キレそうになった。

「あら？月見？一緒に帰らないの？」

麗菜は自分の妹にそういった。

宿題があらかた片付いたので、3人は帰ろうとしていたのだ。

「ええ。ねえ様。今日は、他にも別の用事がありまして・・・」

「そう、せつかく車の中で楽しくおしゃべりをしながら帰れると思っていたのに。」

「ねえ様。ごめんなさい。私もそうしたいのだけど。」

客が引く時間帯になったので、神園はテーブルの掃除を一生懸命していた。その瞬間、何者かが神園の襟首をつかんだ。

「な、なに？」

「ほら行くわよ。」

そう言ったのは月見だった。彼女の襟首をちからいっぱい引っ張り、神園の体を引きずる。

「ちよ、ちよっと、まって、まだ、私仕事中・・・。」

「そんなのは、いいの。こっちの仕事の方が重要だから。」

「ま、まって、店長に説明する時間と、タイムカードを押させて。」

デイノニクス

月見はバイトで暇を潰していたものの、須王寺家の部隊は、遊んでいたわけでは無かった。

彼らは「魔法石」と呼ばれる石を探していた。

月見には知らされてないが、じつは鬼であった人間は意識を取り戻していた。

目覚めたその人物を尋問した結果、「魔法石」という石の力を使って、強制的に鬼になった事が分かった。鬼になった時、彼は、その「魔法石」を全て使い切っておらず、三分の一ほど、余っていたという。鬼になってからも、首にその魔法石をぶら下げていて、ずっと持っていたはずなのだが、人間として目覚めた時はすでに無かったという。

この紛失した魔法石を放置して問題が無いのであれば、彼らも必死に探さないのだが、下手に放置すると非常に困る機能があるので、放置する訳にもいかず、必死の探索を続けているのだった。

そのため、彼らは鬼の逃走ルートをしらみつぶしに、あたっていたのだ。

月見が「魔法石」の探索に関わっていないのは、部隊長代理が意図的に情報を端折って、彼女に勘違いさせたからだった。だから、今回の調査が「魔法石」の探索である事を月見は知らない。彼女は美由達の学校で夜に大規模な調査があるとしか思っていなかった。

ちなみに、彼が、何故、「副隊長」という呼び方ではなく、部隊長代理なのかというと、「月見」自体は今の処、御輿みこしに過ぎないからだった。実質的な部隊長は彼で、本来なら隊長と呼ばれるべきなのだが、大型組織ならではの都合で、彼は部隊長代理となっていた。月見との待ち合わせの時間が近づき、学校付近まで探索を終えていたが、魔法石は発見出来なかった。

隊長代理は学校の裏庭が見渡せる崖の上のガードレールに手を置

き、待ち合わせ場所の学校の裏庭を見ながら、色々思案していた。そんな姿を、隊員達が見ている。

「隊長代理うなだれいるな。」

「なんせ、月見様にちゃんと『魔法石』の事を伝えてないからな。」

「昨日の昼には鬼が目覚めているのに、それも伝えてないらしいし。」

「責任問題か？」

「多分、そうなるんじゃないか？」

「嫌だなああ。連帯責任で俺たちにも、とばっちりがくるんだろ？」

「てか、直線距離で40Kmはある、この広範囲を一日で探せると判断したんだか・・・。」

「いつもの口車で解決するんじゃないか？」

「月見様はそれで納得するのか？」

「今の処、魔法石に関して発動した報告は入ってないから、月見様さえ抑えれば何とかなるんじゃないか？」

隊員達は好き勝手な事を言っていた。

『こいつら、俺の苦労も知らないで・・・。』

隊長代理は怒りでガードレールを握りしめた。

そんなときだった。崖に何かが光るモノがあるのが見えた。

日が落ち、暗がりになったから気付ける輝きであった。

隊長代理はその輝きに、よく目をこらす、対象が小さいし、距離が離れすぎていて、良くわからなかった。

そんな時だった。

彼の視界に黒い塊が、その光るものに向かい飛んできた。

その光るモノに黒い塊が触れた瞬間、青白い光を放つ。

そして、その黒い塊は崖を飛び跳ねる様に登り、隊長代理にどんどん近づいてきて、彼のいる道路へとジャンプする。

「うわあああ。」

おもわず、隊長代理は大声を張り上げ、腰を抜かした。

彼の前に立っているのは、人間の背丈ぐらいの恐竜であった。

「ヴェロキラプトル……。」

隊長代理の後ろで待機していた隊員達の一人がそうつぶやいた。

「違う。某映画で意図的に名前を変更されているがデイノニクスだ。」

隊員の中に明らかな恐竜マニアがいた。

「それに見ろ。あの腕についたあの羽。あれを作ったやつはかなりの恐竜マニアだぞ。」

腰を抜かしている隊長に、その恐竜は近づき、羽で覆われた手を頭に置いてしゃべりはじめる。

「すいません、旦那方、あっしが見えるんで？あっしはさすらいの狩人ハヤブサでござんすが、何か巨大化してしまつて……。」

恐竜との追いかっこ

月見と神園と大きな黒犬は学校の裏庭近くまで来ていた。

神園は月見に腕首を強くつかまれ、強引に引つ張られる様に付いてきた。月見の手には木で作られた槍が握られている。

「ねええ。思っただけど、私、いらなくない？」

ハンバーガー屋の制服まま引つ張り出された神園がそう言った。

「文句を言わないの。」

「だって、私が来た時には既に鬼は倒れていたんだしさ。」

「私だって、良く分からないけど、部隊長代理が、この学校の調査がどうしても必要だって言うから、それだったら、少しでも現場が分かる人間がいた方が都合がいいでしょ？」

隊長代理の考えでは、むしろ神園の存在は不都合であったが、月見に提示されている材料で判断するのであれば神園はどうしても必要な存在であった。

「確かにそうかもしれないけどさあ。別にこんなに急いでなくてもいいじゃん。私が着替える時間を確保してくれたっていいじゃん。」

「あんな、半世紀前でもクラシック扱いされる服より、そっちの方が良いわよ。」

「失礼ね。あれは100年前にパリで造られた立派な魔法防具よ・・・。つて。」

神園は何か不可思議な感覚に駆られた。

「あんなボロで普通に着て恥ずかしい服なんか、誰も、盗まないわよ。あの店は24時間営業だからから後で取りにいけば、問題ないで・・・。つて、何？」

月見が掴んでいる神園の手が少し抵抗している様に感じた月見は、彼女を見た。

神園は普通感覚では予測できない不思議な方向に指を指し、月

見はその先へと顔を向けた。

「ねええ。あの大きな青白い光、何かしら？」

その先には確かに、青い球体が輝いていた。その球体はすぐに光りを失い、その光から飛び出した微かな光を放つものが、徐々に上に上がっていく。

「UFO・・・？」

「それにしても、高度が低すぎないか？そこにある崖を這い上がっている様にしかみえないが・・・。」

「う、五月蠅いわね。あ、あなたに、言われるまでもありませんわ！」

月見は恥ずかしそうにそう言った。

「議論は良いから、急いだ方が良くないか？」

「わ、わかっているわよ・・・。」

二人は走り出す。彼女らがその物体を見上げられる位置に来た時、その物体は崖から飛び降りて来て、彼女達の目の前に着地する。

「そこに居るのは月見様でしょうか？とにかく、それを捕まえて下さい。」

隊長代理らしき声が聞こえた。

神園は状況が飲み込めず、オロオロしていた。

月見は片手に持っていた木の棒に念を込める。

「うひゃ、こんな処にも怖い方々が・・・。」

微かな輝きを放つ『それ』から声が聞こえてくる。

『ん？声？』

神園はそう思った。

次の瞬間、月見は微かな光を放つモノに対して、木の棒を振るう。微かな光を放つモノは、ダチヨウの様に翼らしきものを羽ばたかせ、逆方向へ逃げていった。

「ほら、あんたも追うわよ。」

「ええ。金も発生してないのに、何で私が。」

「五月蠅いわね。正規料金程度は払うわよ。」

「それでも、相手にしたくないぐらいのデカさなんだけど。」
「文句は言わない。」

バス停にて

「ねええ。この街って田舎よね。バスは一時間に一本だし、最終のバスは8時30分だし。」

バス停の椅子に座りながら、桐野はそう言った。

「そうですね。もう少し本数があると便利なんですけど。」

「まあ、ウチの学校の登下校時間以外はガラガラだから、贅沢は言えないんだぞさ。むしろ廃線にならないのが不思議ね。」

「この県道は幹線道ですからね。県の中心都市や空港に行くには必要な路線ですし。そうそうは廃線にならないとは思いますが、TVで市との補助金や労働組合と揉めているを見ると、便数は減らされそうですよね。」

「便数がこれ以上減るのはイヤだなあ。今ですら、こんなに待っているのに。」

「だから、歩いて帰った方が早いって言ったじゃないですか。」

「桜間さんは普段から歩いて通学しているから、当たり前でしょうけど、バスに頼りっきりの私としては心が自然に折れるくらいの距離なのよ。」

「昨日は歩いて帰ったじゃないですか。」

「だって、昨日は既にバスは無かったんだもん。そっだ。この機会にバイクの免許取るうかしら？」

「うちは、原付の免許はOKでも、バイクは禁止ですよ。それに私達の家の距離では通学許可は下りないと思いますよ。」

「むー。そうだったわね。バイクの免許とって謹慎食らった人もいたし……。車の免許は認められているのに。バイク単独は駄目で、車とセットだと問題無いか、正直、どうかとも思うけど。それに、よくよく考えると、バイクの免許をとるには一月ぐらい自動車学校に通う必要があるのよね。それだったら、自動車とセットでとった方が効率的だし、一ヶ月も放課後3時間ぐらいを拘束される

となると、間違いなく受験に支障がでるわよね。そう考えると、原付か。原付だと試験場に行く必要があるのよね。でも、遠いのよねええ、試験場。それを思うと心が折れるというか。」

「バイクでも車でも、最後の筆記試験は試験場だと思いますが・・。」

「まあ、それはそうなんだけどね。車とかバイクなら、そのモチベーションもわき上がると思うんだけど、原付となると、そこまでじゃないというか。」

「桐野さんは勉強は積極的なのに、そういうのは駄目なんですね。」

「まあねええ。そだ、自転車通学にすればいいのかしら？でも、3年になって今更、自転車通学の許可を職員室に貰いに行く事を考えると、それもどうかと思えてくるわねええ。そういえば桜間さんは何で歩きの？自転車じゃなくてさ。」

美由はテラミルになってから、魔法少女のリスクを減らす事と、パワーアップをはかるために体力作りの一環としてやっていた。

「えっと、ほら、人間一日一万歩歩かないと駄目というじゃないですか。」

「健康のため？ご苦労な事ね。でも、桜間さんの魅惑的な体つきはそうして保たれているのかもね。」

「そんな・・。??？」

どこから、ともなく、足音が聞こえてくる。

「そこにおられるのは、姉さん方じゃないですか。」

足音が聞こえてくる方向から、大声でそんな声が聞こえていた。

『姉さん？私達を姉さんって呼ぶのは昨日のハヤブサ？』

声の方向に二人は顔を向けると、暗闇の中から人ぐらいの大きさの恐竜が現れる。

二人はあまりに現実離れた光景に、状況が飲み込めずに、ぽかんとしていた。

恐竜が二人の前まで、やってくる。

「姉さん方、助けてくださいまし。」

彼女達の目の前には全身を羽で覆われた恐竜の姿がそこにあつた。全身の色合いは昨日のハヤブサなのだが、姿や大きさが明らかに違う。

「姉さん方、あつしがわからないので？昨日の夜、姉さん方に助け貰ったハヤブサでござんすよ。」

「あの、姿や大きさが昨日と全然違うんですけど……。」

「あつしも良くわからないでやんす。餌だと思って白く光る小さな石をくわえた瞬間こうなつたんで……。あ、あつし、怖い方に追われてるんで、これで失礼します。」

そう言つて、恐竜は走り去つて行く。

それと入れ違いに棒を持った月見とハンバーガー屋の制服を着たままの神園が通り過ぎた。

二人とも存在を薄めていたが、二人には丸見えだった。

「ねええ。あれつて月見さんと、さっきの店の店員さんぽくなかつた？姿がばやけてハッキリとはみえなかつたけど、あのシルエツトからみるに。」

「き、気のせいでは……。」

桐野は美由をジッとみる。

「また、嘘をついているわね。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6195p/>

魔法少女ガラミン

2011年12月19日01時46分発行